

きみにとどくまでシリーズ

田村くんの

うるわしきスクールデイズ

— 2 —

— 笹竹颯夜

1 再びうるわしき春...!

春のうららの隅田川。

小鳥のさえずりと菜の花の薫り。

柔らかな陽射しと、鬼のような....

「.....くんっ！」

鬼のような....

「...田村くんっ！！」

...鬼のようなキツイ声で俺の名を呼ぶのは――。

「田村くんってば！！！」

投げ出していた足を ガツン と踏みつけられた。

うららかな昼下がりのひとときをこんな形でぶち壊すヤツなんてこの世でひとりしかいない。

「いってえな、小早川っ！何すんだよっ！？」

とは言いながらも、小早川の最初の第一声でぼんやりした頭の中でもこうなることはある程度予想はできていたんでそれほど驚きもしなかった。ただ踏まれた足は痛い...

「何すんだよ、って寝ぼけてる場合じゃないでしょ？委員会がはじまっちゃうよ？」

「...委員会？」

ああ.....。

そういえば.....。

やなこと思い出しちゃった。

高校2年になってクラス替えがあり、ブックキャスルのメンバーたちは当然のごとくバラバラに振り分けられた。俺はA、松山弟がB、兄がEで風間と柏木がF。

んで俺にくっついてきたのが小早川。おまけに俺たちは前期の中央委員を押し付けられた。

中央委員だぜ？

クラスの代表だぜ？

「田村がいい！」

「田村しかいない！」

「田村を推薦しますっ！」

――ってクラスの連中が揃って熱く俺を推薦しやがって、小早川は同じようにして女子に推薦されて俺たち仲良くこんなことになっちゃった。

「田村が中央委員！？A組は終わったな！」

大笑いしやがったのは風間たち。

俺だって田村が俺じゃなかったら笑いたいぜ……。

「ほら、行くよ？お願いだからあたしに面倒はかけないでね？」

なんて相変わらず可愛くない言葉を吐いて小早川はまだ机を半分抱きしめてた俺の腕を引っ張った。

「……面倒くせえなあ」

何だって貴重な昼休みに委員会なんかやるんだよ…。

小早川に引っ張られるようにして生徒会議室に行くと、どうやら俺たちは最後だったようで中央に座る3年の委員長とその補佐たちにならまれた。ついでにその睨みを俺のせいにして受け止めた小早川からも思いっきりの肘鉄を食らった。

早く席についてくださいという委員長の言葉に従い仕方なくあいてる場所に座ってぐるっと周りを見回してみた。

入学してまだ一週間しか経ってない1年生たちは緊張した様子でコチコチになってた。窓からサラッとカーテンを揺らして入ってくる春の風と1年生たちの折り目正しい制服がなんとも言えない初々しい雰囲気醸し出してる。

打って変わって2年の知った顔たちはみんな俺と同じ経緯でこの場所にいるような奴らばかり。やつらは、

お前、委員決めるときに居眠りでもしてたのかよ？

お前も押し付けられたの？

まあ適当にやっとうござい？

なんて不真面目なことをコソコソ言い合っていたんで俺だけ場違いってわけでもないようだしちょっと安心した。

で、今日の集まりはただの顔合わせと前年度後期の委員たちがまとめ、昨日刷り上ったばかりだという各委員会と部活を紹介した小冊子を受け取り、クラスの奴らに配れと言われただけだった。来週には新入生勧誘の部活のオリエンテーションがあるからだ。薄っぺらいけどしっかりと製本してあるその冊子をパラパラっと開いてみると、一応俺たちの軽音楽部も紹介されていた。

けど、

軽音楽部——部長 風間響（2F）

とあるだけ。他の部は活動内容や活動日、勧誘にふさわしいような素敵なアピールを並べた紹介文が載ってる。そういえば3月のはじめごろに生徒会から一枚の紙切れを預かって部活の紹介文を書けと言われた。

「ダラダラした説明文を考えるのは超苦手……」

と頭を抱えたウチの風間部長が、せめてふりがなぐらいふれば？と言うまもなく部長である自分の名前だけを書いてさっさと提出しちまったのがこれだ。他の部と比較してみてもこれじゃ誰も入部したいなんて思わねえよな。

まあ…やってることはバンドだし去年の派手な活動でお堅いセンセたちからはいい印象を持たれてないよなんていつ廃部になってもおかしくない軽音楽部だ。みんなで仲良く音楽をやろう！なんて夢を見てる新生生に來られても逆に申し訳ないってのもあるからこれはこれでいいのかもしれない――。

なんてことを考えながらぼ～っとしてる間にいつの間にか委員会は終了してた。

先に生徒会議室を出る3年2年を待ってる1年生たちはやっぱり緊張した顔で周囲をきよろきよろと見回している。俺たちも去年はあんなだったのかな～、ってチラッと思ったけどその思考はすぐに取り下げた。俺に風間に松山兄弟はどう見てもこんな初々しく可愛い1年生じゃなかったよな。特に風間なんて入学式から校則違反かましてオレンジ色のシャツ着てたしな…。

「部活かぁ。何入ろうかなぁ？テニスもいいしバスケもいいなぁ！」

配られた小冊子を一冊開きながら1年生の女の子が言った。

「伊藤くんはもう決まってる？」

「僕は中学の時から剣道をやってるんだ」

「剣道かぁ。凛々しいね！」

「浅倉は？」

「私はやりたいことがたくさんあるからゆっくり検討してみる！」

歯切れがよく気持ちのいい話し方をする女の子だった。他の緊張した1年生たちからは多少浮いた感じがした。うちの小早川もかなりハキハキしてるけど、浅倉って呼ばれたその女の子はそれにプラスされる笑顔がいい。見てるこっちまで思わず顔がほころんでくるような笑顔だ。一緒にいる男子も白い歯を光らせた爽やかな少年で、そのふたりがいる場所が妙に明るく見えたのが印象的だった。それに女の子は素朴な可愛さがある。

これはちょいと狙ってみる価値あるかもなぁ？

面倒な中央委員も楽しみかもしれないなあ？

わからないことがあったら何でも俺に聞いてきなさいよ、浅倉ちゃん！

なーんて思ってた時、

「...何ひとりでにやついてるの？行くよ？」

小早川が俺の顔をのぞきこんできた。

「に、にやついてなんかねえよ？」

「鏡見てみたら？」

小早川が指差した廊下の水のみ場にある鏡の中に写ってた顔は、確かにしまりのない顔だった

。

「...これ持って！」

小早川は俺にクラス40名分の小冊子を全部押し付けてさっさと先を歩き出した。

「おい、待てよ！」

ポニーテールを揺らしながらしゃきしゃきと廊下を去っていく小早川を追いかけ、生徒会議室を出る直前にもういちど振り返ってさっきの1年生女子を見ると彼女はまだ小冊子を目を輝かせながら見つめていた。一緒にいる剣道男子がその横で覗き込み、ふたりは楽しそうにお話をしている。眩しいぐらいに爽やかなその光景は青春ドラマのワンシーンを切り取ったようでいつまでも脳裏に残った。

40冊の小冊子を抱えて廊下を歩いていると、水飲み場の前で風間と柏木に会った。

「何、これ？」

風間が一番上の冊子を手に取って開いた。そして、

「げっ！軽音楽部の紹介これだけかよ！？」

と、すっとなきょうな声を上げた。

これだけかよ？ってこれを書いたのはキミでしょう....

「これを見て入部したいって新入生はまずいないねえ...。人数が揃わないと部は同好会に格下げで予算が取れないんじゃ...」

と、柏木も呆れる。

そうだった！その問題があったってことをすっかり忘れてた。本城高校の部活動は最低人数7名を確保しなければ部として認めてもらえないし予算も取れないし、そうすると音楽室も使わせてもらえない。

「風間くん、これを提出する前にちょっと俺に相談してくればよかったのに...」

確かに柏木なら素敵な勧誘文句を考えてくれたかもしれない、と俺も風間を見る。

「...人数はまあ...大丈夫でしょ。里中先輩たちにしばらく残留しててもらえばいいんだし」

風間はややバツが悪そうに言った。

「残留ったって去年一年は本当に幽霊部員だった先輩たちだからなあ…。今年もそれが通用するかって言ったらわからないよ？それでなくても軽音はセンセたちの心証よくないし…」

「し、心証が悪いのは俺だけのせいじゃないだろ？」

風間は思い切りオレンジなシャツの裾を引っ張り、無意味にスタイルを整える。

「まあそうだけど…」

柏木は俺の赤メッシュな頭髪に視線を注ぎながら言う。

風間と俺は同時に顔を見合わせた。

「ま、まあ…来週のオリエンテーションで頑張れば実働部員若干名ぐらいは確保できるだろう。な？田村あ？」

風間は小冊子をパタンと閉じ元の一番上に戻しながら言った。

「お、おう！がんばろーぜえ、な、風間！」

何で俺が風間と同じように焦んなきゃならないのかちょっと疑問に思ったけど、とりあえずオリエンテーションです。ようはこれで部員を確保できればいいわけだ。そんでもって去年一年間無しで来たピアノ奏者が見つかれば言うことなし！これは断然張り切るしかないでしょ！

がしかし――。

世の中そんなに甘くはない。

俺たちはそれなりに趣向をこらし、生ギター持ち出してストリートライブもどきな梅の木の下ライブをやりながら、松山兄弟が勧誘に走るというすばらしい演出でもって挑んだけれど、なぜか新入生たちは俺たち5人を見た途端に逃げ出してくれちゃって、一人の入部希望者も得られずに時間切れと相成った。

「何でなんだ？顔見ただけで逃げられるなんて…」

ガックリ肩を落としたのは風間だ。

「俺はこんな非モテじゃなかったはずだぜ。誰かの非モテ病が感染したとしか思えない…」

半ばマジに言うところが憎たらしい。

誰かって言ったら過去の実績から見たって俺しかないじゃん！

「あんたたちは目立ちすぎなのよ…」

梅の木の下で背中を丸めて沈んでる俺たちの前に、いつの間にかいたのは小早川。

「あんまり目立ってるとかえって引かれちゃうよ。特に風間くんと田村くん！」

「俺っ！？なんで！？」

風間は心底心外って顔で小早川をにらんだ。

小早川は、はぁ…とため息をひとつ吐き、

「見た目怖いよ？あんたたちふたり。こういう時はオレンジじゃなく白いシャツを着るとか田村くんは髪の毛の色を直すとか考えればよかったじゃない。1年生は怖い先輩は避けたいって思うのが普通でしょ？」

確かにごもっともなご意見…。

「オレンジのシャツってそんなにマズイか？」

って真面目にいう風間もすげえけど。

まあオリエンテーションでは惨敗だったけど、新入部員の受付は今日だけじゃないからあとから…も期待出来ないんだったよな、あの紹介文じゃ…。

「で、田村くん、中央委員は明日からは生徒会と絡んで予算委員会の準備をしなきゃならないんだって聞いた？」

「聞いてない！」

クラスの代表がそんなことまですんの？！

生徒会と絡んで予算委員会だあ？そーゆーの一番苦手だしつまんねえっ！

「1年生は来週からHR合宿があるからこれは2年と3年だけでやるんだって」

ますますつまんねえ！

…そういや浅倉ちゃん、結局どの部に入ったんだろう？あの時冊子を見ながらバスケとかテニスとか言ってたよな？どっちにしても活動的な印象の女の子だったから運動部に入ってるよな。間違っても軽音楽部になんて来ねえよな…。

「あたしだって面倒なのはおんなじなんだからね！お願いだから責任を持った行動してよね、田村くん！」

最後にしっかりと釘をさして小早川はしゃきしゃきと歩いて校舎に向かって行った。

「委員会頑張ってるね、田村くん！」

と、悪ノリの風間が小早川の口真似をしながら俺の肩をポンと叩いた。

その時、

「あっ！」

体育館の方から走ってきた浅倉ちゃんが髪の毛の長いお友達の手を引いて目の前をサーッと通り過ぎて行った。

――あ…？

身体のどこかがむずっと来て、全身がぶるっと震えた。

――なんだろ、今の感覚は？

二人の1年生はスカートを翻して校舎に向かって駆けて行った。

俺はバカみたいにずっとその後姿を見つめていた。

2 新入部員

昨日行われた予算委員会では俺の立場は一応運営側だった。

別に何をやるわけでもないのに口の字に並んだ机の一番前に生徒会長、予算委員長たちと並んでみなさんに向かった格好で座り、今年度の活動予定を喋り希望予算を訴える各部長の熱弁を聞いてるだけだった。1年生の浅倉ちゃんはいないし眺めも居心地も悪いしいたくつで生あくびばかり出ちまって、そのたびに隣の小早川には肘でつつかれた。

軽音楽部からは代表者として部長の風間が出席し、風間は今年の予算を去年の2千円から希望額2万円になんとか格上げしてもらうために前年度のすばらしい活動と実績について熱く語った。

けど、

「部員数が規定に満たない軽音楽部は今年は部活として認められませんので同好会として登録してください」

生徒会長にあっさり却下された。

同好会には予算は1円も出ないのが本城高校生徒会だ。

「ちょっと待てよ！去年の予算委員会の時、実績作れば予算を上げるって言われたから俺たち必死にやって来たんだぜ！？」

風間は生徒会長に異議を申し立てた。

「それは部としての条件が揃った時の話じゃないですか？」

「部員はちゃんと7人以上いるぜ?!」

「3年の里中くん以下たちは去年一年間一度も部活動に参加してないので、頭数に数えることは出来ません」

「そりゃないぜ〜！」

風間はさらに異議を申し立てた。

けど、生徒会長は知らん顔をして次の部の予算決めに入ってしまった。

「ちっとタンマ！」

……ってここで立ちあがっちゃった中央委員田村くんです。

んでここからは完璧に自分の立場を忘れて軽音楽部副部長として生徒会長と言論バトルをやりちまって……、

「勘弁してよっ！」

――と、今小早川に怒られてます。

昼休みだっなのに。

俺まだ飯食ってないっなのに――。

「田村くんがやらかした後始末はあたしがつけなきゃならないんだからね?!昨日だってあれから3年生たちにすんごい怒られちゃったんだから！」

小早川はキンキンした怒鳴り声を発しマジで怒ってる。

生徒会長とやりあっちゃった俺と風間はその場を退場させられもちろん予算は1円も取れなかった。軽音楽部は同好会に格下げになり音楽室の使用は出来なくなり、俺たちブックキャスルは活動する場所を奪われた。

それだけでずんどこだっただのに小早川の説教が長い。

ああ...あと10分で予鈴が鳴っちゃうよ.....。

と、壁の時計を見た時だ。

「田村！」

廊下で俺を呼んだのは風間だった。

小早川がすかさず風間を睨んだ。その顔の怖いこと怖いこと。

風間の背筋が凍ったのが俺にまで伝わって来るほどヤツもすくんだようだ。

「あの...俺、行ってもいい？」

恐る恐る小早川にお伺いを立てると、小早川はメモ帳にサラサラと何かを書きながら、

「ご勝手に！」

と、俺の机にそのメモをバンッ！と叩きつけてようやく解放してくれた。

「...こわ」

とりあえず小早川が俺から離れたんでここまでやって来た風間がつぶやいた。

「なに怒られてんだよ、田村.....」

風間の声を聴きながら小早川が置いてったメモを開いて思わず笑っちゃった。

「昨日の予算委員会のことに決まってるだろ？あの後小早川はずいぶんなフォローをしてくれたみたいでさ...」

そのメモを風間に見せると、ヤツも、

「はっ！」

と、笑った。

「頑張れ、田村！」

「しゃーないよな。これぐらいやってやんねえと...」

メモには、

――明日ハムカツパンおごりなさいよねっ！！

と、怒った文字で書かれていた。

明日の3時間目の休み時間は久々にハムカツパン争奪戦に参戦しなきゃならないようだ。まあ、こんなペナルティーならいくらでも受けてやるぜ。

「そうそう、軽音同好会はまた部に復活できるかもしれないぜ？しかもピアニストを迎えての復活」

風間が思い出したように言った。

「は？」

こんなときに何夢みたいなことを言ってるんだよ、この部長…。

今さらそんなうまい話が……、

「今さっき入部希望者が俺のところにやってきた。1年生の女の子がふたりだ」

「またまたあ…」

1年生の女の子がこんな時期に入部希望だなんて……、

「本当なんだって。軽音楽部の活動を見学させてくださいってさ」

「それ、マジな話？」

「マジ」

「ピアニストなわけ？」

「ひとりの子はね。あかねちゃん、とか言ってたな。確認したわけじゃないけどあの指は絶対にピアノを弾く指だった。しかもかなり上手いと見た」

風間は嬉しそうに笑って言う。

「放課後音楽室に呼んでおいたから次郎にも言っといて。俺は柏木と太郎に言っとくから」

「ああ。わかった。けど一気にふたりもこの時期に？」

どうも信じがたい話だ。

「なんだか知らねえけどとにかくふたり！もうひとは…変なヤツだったけどな」

風間は目を細めて天井を見上げた。その目がやたらニヤケてていつもの風間らしくない。

「俺の名前、思いっきり読み間違えてるし…」

「あかねちゃんが？」

「いや、もうひとりのヤツ…。ちょいとからかってやったらムキになっちゃってさ。ま、とにかくそういうことだから放課後頼んだぜ！」

そう言って風間は軽やかに去って行った。

しかし――。

1年生の女の子ふたりかあ～。

風間じゃないけどにやけちまうぜ。

しかもひとはどうやらピアノを弾く子らしい。風間が言うんだからその辺はきっと間違いないだろう。あいつはあれで音楽に関しちゃう天才的な感覚を持っている。どうやら指を見ただけで何かを感じ取る能力があるらしい。以前ピアニストを探してた時はヤツのインスピレーションが

来なくてブックキャスルは一年間ピアニストなしの活動をしてきたけど、そんなヤツのインスピレーションを呼んだあかねちゃんってどんな子だろう。

で、放課後音楽室に行くと、

「マジでその1年生たち来るのかよ？」

「からかわれてるんじゃないの？」

松山兄も弟もまるで信じてない様子だった。

昨日、部が同好会に格下げになり、予算も取れず音楽室も明け渡し...って話をこいつらにはしたばかり。

あの紹介文がいけなかったんだ、

いや、オリエンテーションの失敗が痛かった、

風間のオレンジシャツのせいだ、

田村の赤メッシュが悪いんだ、

と、俺と風間はさんざん責められてちっちゃーくなってるしかなかった。

けど、ここでその1年生たちがふたり揃って入部してくれたら軽音同好会は部員数確保でまた部に復活できるし、音楽室も使わせてもらえる。

「お前ら爽やかにしろよ？間違っても寒いギャグ飛ばすんじゃないぞ」

風間が松山兄に向かって言い、

「どこが寒いギャグなんだよ！」

松山兄がわめいた時、

「失礼しま〜す！」

扉を勢いよく開けたのは...

「あっ！？」

——浅倉ちゃんっ！？

間違いない。

浅倉ちゃんだよ！

ってことは、浅倉あかねちゃん？

ピアニスト？！

マジかいや〜？

「よお！来たなあ！」

まず最初に声をかけたのは風間だ。

「待ってたぜ〜！」

次に松山兄。

今までわめいてたのにサラッと爽やかに変化（へんげ）して。

「どうしたの？入っただいよ」

さすが柏木は紳士的に言う。

「そうそう。遠慮なんかしないで」

負けじの松山弟も。

けど――、

笑顔が可愛いはずの浅倉ちゃんの顔はどこか硬く険しく俺たちを見回している。

まるで……、

「そんな殴りこみに来たような顔すんなよ！」

と、風間が言うように、本当に殴りこみに来たような顔で。

そして、浅倉ちゃんも後ろに隠れたもうひとりの子もそこから動かない。

こりゃ…、俺たちを見て驚いているのかもしれない。

突然だったから風間はオレンジシャツのままだし俺もメッシュ直してねえし、オリエンテーションのあとに小早川から言われたことが脳裏によぎった。

――見た目、怖いよあんたたち。

何て部に来ちゃったのかしら…、

なんて思われてたら悲しいから、俺はドアのどこまで行き、

「どうしたの？入りなよ？」

と、誘（いざな）った。

その時、浅倉ちゃんの後ろに隠れていた女の子がそーっと顔を向け、頼りなさそうな怯えたような目で俺を見た。

――あれ…？

この間と同じ、身体のどこかがむずっと来て全身がぶるっと震えた。
何なんだよ、この感覚は…。

「…私たち、軽音楽部の活動を見せて欲しいんですけど！」

やたらと構えながら鼻を膨らませて言う浅倉ちゃん。

その態度が初々しくて可愛くて顔がほにゃ…っとはころんだとき、松山兄弟たちも同じだった
ようでケラケラと笑い出した。

「…何がおかしいんですか!？」

浅倉ちゃんがムツとしたように言うと、

「そんなに怒るなって、チャウチャウ！」

と、風間。

いつの間にそんなあだ名をつけたんだよ…。

なんかやな予感。

風間とまた恋敵ってか？

はぁ…とひとつため息を吐いてからヤツを見ると、風間はいつになく微笑んだ優しい目で浅
倉ちゃんを見ていた。

3 ピアニスト

浅倉あかねちゃんを見る風間の目は明らかに面白がってる目だ。

ヤツはあかねちゃんのことを「チャウチャウ、ってあだ名で呼び、そう呼ばれるたびにあかねちゃんはむきになってはむかって、風間はまたそれが面白そうにさらにからかう。

こんなに楽しそうに女の子をかまう風間ってのも初めて見たけど、待ちに待ったピアニストを目の前にしてテンションが高くなっちゃう気持ちもわからないでもない。

「ほら、また鼻が膨らんだ！おっ、今度はほっぺたも膨らんだ！風船みたいだねえ？」

「チャウチャウとか風船とか、どーして丸いものばかりなんですか！？」

「だって、キミの顔まん丸なんだもん...」

「...なっ！」

「あははっ！！」

と、こんな調子で。

あかねちゃんを怒らせて笑ってる風間の顔はマジで楽しそう。

ふとマドンナ先輩の顔が浮かび、同時にちょっとした胸の痛みってのを感じたけどさっさと打ち消した。もうあの人は過去の人だ。

けど、いいかげんにしないとあかねちゃんはマジで怒ってるみたいで目を潤ませながら鼻を思いっきり膨らませている。

.....確かにチャウチャウかも....

またそれが可愛いんだけど。

で、あかねちゃんの後ろに隠れたままのもうひとりの1年生は顔をあかねちゃんの背中に押し付けたままさっきからじっとしている。

.....やべーよ、やべえ。

あかねちゃんよりこっちの子の方が怯えた感じだぜ。

足なんかガクガク震えちゃってるし、か細い肩もぷるぷるしてる。

「おいおい風間、あんまり苛めるなよ...。1年生たち怯えてるぜ？」

風間をたしなめると、風間は態度デカく座っていた机からストーンと飛び降り、あかねちゃんの側まで行ってその顔を覗き込んで大声で言った。

「怯えてなんかないよなあ?!チャウチャウ！」

ますます鼻が膨らんだあかねちゃんは思いきり風間から、ふんっ顔を背けた。

おお！風間に対してのこの態度！なかなか爽快ってやつだぜ！

モテ男の風間は思いきり顔を背けられちゃったもんだから調子狂ったような顔をして俺を見た

。

「参ったなあ。そんな怖い顔すんなって。別に苛めてるわけじゃないんだぜ？」

「...苛められてるとしか思えない」

俺もど一見ても苛めてるとしか見えない。っていうか遊んでるよな。

あかねちゃんは真っ赤な顔をして風間を睨んでいる。

そろそろマジで雰囲気気まズくなりそうだった。

...ったく、部長なんだからもうちょっと気を使えっての。

さっき松山兄に爽やかにしろよ、なんて言ってたのはどこの誰だったか...

「あ〜あ、すねちゃったよ。風間のせいだ！」

「俺？」

「そう、お前」

風間は異議ありげな目を俺に向けた。

けど、その視線はとりあえず無視して俺はあかねちゃんの前に立ち、

「あー、俺は2Aの田村優作。この部の副部長...ってところかな」

と、`爽やかに、自己紹介をした。

風間を睨んでいた勢いが余ってたのか、俺まであかねちゃんに睨まれちゃったぜ。

けど、あかねちゃんは俺の顔をじっと見てから小さく、あ...、と声を出した。

「...ん？」

「中央委員会...で...？」

「そうそう！！会ったよねえ！」

うほっ！あかねちゃん、俺のこと覚えててくれたんじゃない！

「やっぱり...。髪の色だけ覚えてました」

は...、髪の色だけね...

「で、この部ってちゃんと活動しているんですか？」

あかねちゃんは風間をもう一度キッと睨み、潤んでいた目を何回かぱちぱちとやってから、そのまま後ろの方でこのやりとりを黙って見守ってる松山兄弟や柏木を睨んだあとに疑わしそうな目を俺に向けた。

「...部長さんは不真面目だし、見たところ部員も少ないみたいだし、どんな活動してるんだか教えてください」

あかねちゃんは後ろで震えてる子を気にしながら歯切れのいい口調で喋る。

「まあ...表向きはちゃんと活動してるよ...」

昨日同好会に格下げになりましたってことはとりあえず言わないでおくことにした。これ以上印象を悪くして「やっぱり入るのやめます」なんて言われちゃったらせつなすぎるし。

「表向きってどういうことですか？」

あかねちゃんは俺たちをひとりひとり見回す。

「それは色々と...」

けっこうツッコミが厳しい。

バンドの話をここでやっちまっていいもんだろうか...、と俺は風間部長を見た。

が、さっきまであかねちゃんをからかって遊んでいた部長は真剣な顔つきで天井を見上げ、今は別のことを考えている様子。そのうちに楽譜を開いてサラサラと書き始めちゃった。頭の中に浮かんだメロディーを紙の上に一気に放出している。これは風間のいつものやり方だけど今やんなくなっちゃっていいじゃんか...。ヤツは大真面目なんだろうけど、はたからみりゃ落書きでもしてるように見えちゃう。

そしてそんな部長の様子を怪訝な顔をして見つめるあかねちゃんは、はあ...と小さくため息をもらした。

まずい...。

何とかフォローしないとこのまま回れ右されちまいそうだ。

やっぱ目の前にいるピアニストはどうしてもゲットしたい。だからぜひとも印象よく爽やかに軽音楽部をアピールしたい。

けど、どっかの誰かさんのせいで、今音楽室に漂ってる空気はあんまりいい感じじゃない。あかねちゃんの後ろにいる子はまだ顔を上げずにさっきと同じ体勢で固まっている。昼休みに風間が言ってた「変なヤツ、ってこういう意味だったのね、きっと...」。

どうすっかー？

一年間待ちに待った夢にまで見たピアニストだけ...？

ブックキャスルにピアニストが加わればもう言うことなしで音楽の幅がうんと広がるし、『光の城』のアレンジだって奥行きが出る。しかもそのピアニストは...

浅倉あかねちゃんー。

この子がピアノを弾くなんてちょっと信じられない。けど風間が感じたんだから間違いはないん

だろう。きっと見かけによらず滑らかに軽やかに鍵盤の上で指を滑らしてくれるに違いない。

中央委員会で会ったときはバスケかテニスか、なんて言ってたしどう見ても活動的な女の子だからってきり運動部に入っただろうって思った。

それが、こんな偏狭の地までわざわざあかねちゃんの方からやってきてくれたんだ。

ふと、後ろの子の腕をしっかりと握ってあげているあかねちゃんの指に目が行った。この指が風間が惚れこんだ指なんだよなあ。

.....まあ、俺にはちっともわかんねえな。

このぷににっとした指のどこに風間はピピピと来たんだろう？

「...あのさ？後ろの子、大丈夫？」

これまで黙って見守ってた柏木が言った。

あかねちゃんの後ろにいる子、さっきからずっと隠れてるからまともに顔を見ていない。柔らかそうな長い髪が背中ですらさらさらと揺れている。きっと震えているからだ。

「俺たちってそんなに怖いのか...？」

爽やかにする自信がなかったのか、珍しく口を出さずに我慢してた松山兄が呟いた。

「.....べつに怖くはないけどチカチカするんです...。ね？」

あかねちゃんが後ろの子を振り返って言うと、後ろの子はコクンと首を振った。

「チカチカって...」

...どーゆーことだろう？と思ってる、

「カチカチ山？俺たちサルかいっ！」

松山兄が例によってつまんねえギャグを飛ばした。しかも自信を持ってサルって言い切ってるけどカチカチ山は....、

「タヌキだよ...？」

と、柏木が訂正。

「カチカチ山はサルだろーがあ！カチカチ山に住んでるサルが柿食って腹こわす話だったろ？」

こいつ、ギャグじゃなくてマジだぜ。

ま、いまだに『アンナ・カレーニナ』を『あんなバレリーナ』だと本気で思いこんでるヤツだから松山兄のカチカチ山はサルが柿食って腹をこわす話であってるんだろう。

「ばっかじゃねえの～？お前は桃太郎も金太郎もはなさかじいさんもみーんなさるかに合戦だと思ってんだからな！」

と、弟。

「...太郎くん。もう一回児童文学を読み直した方がいいよ～？じゃなかったら教育テレビ見るとかさあ...？」

「けっ！」

と、兄は吐き捨て、
「で、カチカチ山がどーしたって？」
話をあかねちゃんに戻した。

そうだった！
この話はあかねちゃんが言ったチカチカって言葉から始まったんだ。

そーっとあかねちゃんを見ると、呆けた顔で俺たちを見てる。そればかりか、後ろに隠れてた子まで顔を上げて呆然としたように俺たちを見つめて固まっていた。その背筋から冷たいものが下に滴り落ちる雰囲気がかっちまで伝わってきた。

爽やかにアピールするつもりが、思いっきりバカさらしちまったじゃん！

「……あ、で、軽音楽部だけどね？」

とにかく軌道修正するしかない！
隠れてた子もやっとその姿を現してくれたようだし、とりあえずカチカチ山は置いて俺は話を軽音楽部に戻した。

ひとり自分の世界に入り込んで楽譜に集中していた風間もようやくその作業が終わったようだ。こっちのバカ話はちっとも耳に入ってなかったようで涼しい顔をしてる。

あかねちゃんはバカな先輩たちと無責任な部長を交互に見比べ、やや呆れたように言った。
「…中央委員の田村優作副部長さんの方が風間ヒビク部長さんよりも話がわかりそうですね…」

ん…？

一瞬すごい違和感を感じた。
なんだろ？

「私たち、軽音楽部の活動内容が知りたくて来たんです。部活に表向きとか裏向きとかあるんですか？」

というあかねちゃんの真横に立ち、
「…ほらな、こんな呼び方するんだぜ？からかってやりたくもなるでしょう？」

風間がニヤリとした。

「こんな呼び方…？」

ああ、そうか。

今、あかねちゃんは風間ヒビクって言ったな？

ヤツの名が聞いたことのない発音の名に変わっていたもんだから違和感を感じたんだ。

でも、これはやっぱり風間の怠慢。あん時、小冊子にちゃんと....、
「ふり仮名ふっておけばよかったんだよ」
「え？ふり仮名？」
「あのね、この部長さんの名前、ヒビクじゃなくてキョウって読むの。カザマキョウ」
　　そうそう、と横で風間が大きくなずく。
「へえ、そうなんですか～。変わった読み方ですね～」
「変わってるか？！普通、響ってあれば素直にキョウって発音するだろう、名前なんだから。ヒビク...なんて、クウ...と鼻から息が出て行きそうな間抜けた名前ないでしょうが」

なるほどね。
名前を読み間違えられたんでそのお返しにチャウチャウだったわけか。
　　そういや、昼休みにそんなようなこと言ってたな。名前を思い切り読み間違えられたって。
けど、そんなことでむきになっちまったりして、
　　...ったく、風間もやっぱりまだお子様ランチだぜ。

ん...？待てよ？

「別に間違った読み方じゃないんだからそういう名前の人だっていると思いますよ！第一、ヒビクって鼻から息なんて出て行きませんか？クッ！とちゃんとスッキリ閉まってるじゃないですか。先輩の鼻の穴が大きすぎるんじゃないですか！」
「何？！チャウチャウの鼻のくせにそういうこと言うのか？！」
「誰がチャウチャウなんですか！」
「おまえ」

風間の名前を読み間違えてた子って確か.....、

「それより早く表向きと裏向きの説明をしてください」
「...ったく、生意気な1年生だなあ！...ま、いいか。あかねちゃんだったよね。ちょっと来て」
　　風間が手を握った相手は....、

「え？ええ？！」
「あ？ああ！？」

俺と `あかねちゃん、の後ろに隠れてた子が同時に叫んだ。
「ん？どうした、田村？」
　　俺のすっとんきょうな声を聞いた風間が言った。
「いや...、あかねちゃんって.....」

後ろの子だったのか！？

んじゃ、ピアニストのあかねちゃんってのも後ろの子で、浅倉ちゃんは風間の名前を読み間違えた変なヤツ……。

「ちょっと先輩っ！！」

本物のあかねちゃんの手を愛しげに撫でている風間に浅倉ちゃんが大声で抗議した。けど風間はそんな浅倉ちゃんの怒りを無視し、

「これこれ、この手なんだよ～～～！！」

あかねちゃんの手を高く持ち上げた。
あかねちゃんはスラリと長い綺麗な指をしていた。

風間のインスピレーションを呼んだ指――。

全身がぶるっと震えた。
また、あの感覚。

「あかねちゃん、ピアノ弾くでしょう？」
やたらとハイテンションな風間が言うと、
「は、はい…」

あかねちゃんは怯えたようにか細い声で答えてうつむいた。

「やっぱりな！俺の目に狂いはないんだ。あかねちゃん、ちょっとこの曲弾いてみてくれる？」
風間が渡したのは、今までサラサラと書いていたその楽譜だった。

4 音痴と不良

風間から手渡された楽譜を本物のあかねちゃんはじっと見つめた。

浅倉ちゃんが横からそれを覗き込み、

「...おたまじゃくしが泳いでる...」

と、呟いた。

はっきり言って風間は字がきたねえ。

ミミズが這う、とはよく言うけどそんなもんじゃない。

ヘビがのたうちまわるようなスチャラカでかっ跳んだ文字を書く風間で、それは音符も同じ。自分中心に書いてくれちゃうから五線譜のどこに音符が乗っかってるのがわからない時があり、俺たちはその解読にいつも苦労している。

まして、今サラサラと走り書きした楽譜だ。いつもの10倍は解読不可能だろう。

おたまじゃくしが泳いでる、という表現はまさにピッタリ。きっと浅倉ちゃんも呆れ、思わず口から出ちまったってところだな。

あかねちゃんは真剣な顔でじっと楽譜を見つめている。

いきなり楽譜を渡されて弾いてくれと言われても困るよなあ？

しかもこの、おたまじゃくしが泳いでる、音符だし...。

「...これ、テンポが書いてませんけど...」

あかねちゃんは透き通ったか細い声で言った。

風間は嬉しそうにニヤッと笑い、

「テンポの指示、気になる？」

と訊いた。

するとあかねちゃんは、

「はい...。曲を見るとスローでもアップでも両方でいけそうだから...」

と、答えた。

ごくごく当たり前のように。

「...すげっ！」

松山兄が呟いてポーゼンとした。

いや、兄だけじゃなく弟も柏木も俺も。

あかねちゃんはこんなスチャラカナ音符を見ただけで曲をイメージできちゃうほど音感があるってことだ。

「そうだなあ、じゃあミディアムで弾いてみってくれる？」

風間が満足そうな笑みを浮かべて言うと、あかねちゃんは素直に応じ、ピアノの前に座った。

これがさっきまで浅倉ちゃんの後ろに隠れてた子か？と思うぐらいに堂々と背筋を伸ばし、

スーッと息をひとつ吐いたあかねちゃんが、鍵盤の上になやかな指を置いた時、また俺のどこかがむずっと来た。今度はそれだけじゃなくぞわっともきた。

いったいこの感覚は何なんだ？

そして――。

――ああ！

ピアノってこんなキレイな音色だったのか...っ！！

生まれて初めてピアノの音を聴いたような感動が全身を駆け巡った。

あかねちゃんが弾いてる曲は俺たちブックキャスルのテーマ曲『光の城』。

今までピアノなしでやってきたこの曲がこんなにも華麗な、優雅な、壮大なピアノの音色で表現されている！

――歩き出せばたちまち闇に
呑まれてしまう 未知の道

果てしなく遠く 遙かな場所
そこに行けば必ず見える

いつか目指そう光の城を
右も左も闇の中でも
微かな輝きひとつを頼りにしながら
そこに繋がる道を歩こう――

あかねちゃんのピアノに合わせて誰からともなく歌いだした。

もう完璧だい。

俺たちは誰も楽器は持っていなかったけれど、自分たちのイメージする演奏とあかねちゃんのピアノはピッタリと重なっていた。

――ピアノはさ、かなりデリケートなフィーリングってやつが大事だと思うんだよ、俺。

――楽譜見て完璧に弾くよりも、感覚で弾けるっていうか。言葉じゃ上手く言えないけど、ピアノにはそういうもんが欲しいんだ。

前に風間が言ったのはこのことだったのか、と俺は今体中で理解できた。
演奏が終わったあと、俺たち一同はしばらくの間放心状態。
両手を揃えてひざの上に置いたあかねちゃん一点にみんなが集中し、やがて、

「最高～～！待っていた甲斐があったぜ～～！！」

風間が叫んだと同時に大拍手が沸いた。
俺も飛び上がってた。
なんだかわからないけど無性に嬉しくて！

そーやって盛り上がってる俺たちを見て、今まで凜としてピアノに向かっていたあかねちゃんは再び怯えてしまったようだ。口を半開きにして呆気にとられてる浅倉ちゃんの側にそろそろ移動してまたピタッとはりついちまった。

「あかねちゃん！そんなに怖がらないでよ！」
そう言うと、あかねちゃんはゆっくりと俺に顔を向けた。

完全に怖がってる目...。
心のどこかがキンと痛んだ。

「軽音楽部っていうのは実はカムフラージュ。本当はバンドやっててピアノを弾ける子を探していたの。さっきあかねちゃんの指を見た時、ピンときたんだよ。絶対に上手い！って」

歓喜が冷めないままの風間が言うと、

「どうしてわかったんですか？」

浅倉ちゃんが首を傾げた。

それは俺も訊きたい。

どうして風間は指を見ただけであかねちゃんの才能を見抜けたんだろう？

「ピアノを弾く指をしているからさ。ピアノを弾く奴はこの関節がしっかりしている。そして、爪が短い」

「はあ?! それだけでですか?!」

マジ、それだけ？

「そう。あとはインスピレーション。ビビッときちゃったんだよね～あかねちゃんの指に！」

やっぱ最後はそこに来るか...。

あかねちゃんのピアノも凄かったけど、風間も凄いわ...。

「インスピレーションだって...」

浅倉ちゃんとあかねちゃんも顔を見合わせている。

けど....

「軽音楽部の実態がバンドっていうことは...、」

浅倉ちゃんは俺たちひとりひとりをぐるりと見回しながら、
「...実際には普通の軽音楽部としての活動はしてないってことですか？」
と言って顔をしかめた。

ちよいとヤバイ空気が復活か——？と、俺の中で微かな警報が鳴った。

なのに風間ときたら、

「う～ん微妙なところだね～。一応、部、って名前がついていれば予算がもらえるしな。体育祭、文化祭のイベントにはちゃんと`軽音楽部発表会、として参加してるけど、まあ、やってることがバンドだから学校はいい顔してないわな～。このままいったらいつかはきっと廃部だろーなあ～」

なんてことをペラペラといい加減に言いやがって。

もちっとマジメな物言いができねえのかよ、この部長はっ！

「なら私の出番はやっぱりなさそうですのでこれにて失礼いたします！」

ほら見てみろっ！

浅倉ちゃんはクルッと回れ右をしちまった。

「おいおい、待てよ！」

風間は慌てて引き止めた。

「出番はなさそうってどういうこと！」

「私、楽器ができないんです。ギターもピアノもドラムも駄目！」

と、浅倉ちゃんは怒ったように言う。

「普通の活動だったら何とかかなるかなーって思ったけど、バンドじゃどーにもならないもん！」

「歌は？」

と、風間が訊くと、浅倉ちゃんは、ふう...と小さくため息を吐いた後にいきなり、

「あああああ～」

と、発声した。

そして――、

～すーみだーがーわあ～ そのかわべにい～ さーくらーがわあ～はゆるう～

と、元気に歌いだした歌は…、

——いったい何の歌？

「お、おい…？」

俺と風間は思わず顔を見合わせちまった。

浅倉ちゃんが今一生懸命歌ってる歌、どっかで聴いたことのある歌詞なんだけどなんだったか思い出せない。

じっと目を瞑って思い出そうとしてた時、

「…もしかして校歌…？」

と、柏木がつぶやいたんでようやくわかった。

こりゃ間違いなく校歌の歌詞だ。

けど、曲はまったく聴いたことがない曲に変わってる。

——ってというか、これってもしかして本当の…、

「——ね？音痴なんです」

と、浅倉ちゃん。

「すげー納得っ！」

風間は感心しきったように言って頷いた。

柏木も頷き、呆然とした松山兄弟は固まったまま動かない。

浅倉ちゃん…。

笑顔もアップレだけど音痴もアップレなり！

ここまで音程を堂々と外して…、というか原曲を改ざんして歌を歌う人間を俺はたぶん他に知らない。さっきの「おたまじゃくしが泳いでる」は、言葉通りの意味だったってことなのね…。

「…だからあたしが軽音楽部に入ったところで何もできません。あかねちゃんだけよろしく願います」

浅倉ちゃんはそのまま音楽室の出入り口に向かって歩き出した。

その時、

「私だってバンドなんてやだ...」

それまで黙って立っていたあかねちゃんが意を決したような口調で言った。
肩がまたふるふると震えている。

「ちょっと待った！そりゃないぜ！」

風間は出入り口に向かった浅倉ちゃんここでうつむいて立っているあかねちゃんを交互に見比べながら、

「チャウチャウ、そこを動くな！あかねちゃん、どうしてバンドがいやなの？」

と、ややうろたえながら言った。

そこを動くな、と言われたチャウチャウ...じゃなくて浅倉ちゃんは、おもいきりムツとして膨れた顔を風間に向けた。

「...だって、バンドとかロックなんて...ふ、ふ、不良みたいだもんっ！！」

あかねちゃんは一気に叫んで駆け出して、もう出口の一步手前まで行ってた浅倉ちゃんの後ろに再び隠れた。

俺たちは全員口あんぐり状態。

不良...不良...不良...って言葉が頭の中でぐるぐると旋回する。

「ぶはっ！」

風間が吹き出したと同時に柏木も松山兄弟も大爆笑。

悪いけど俺も笑っちゃった。

あまりにも...可愛くてっ！

「あかねちゃんさあ？バンドイコールロックってわけじゃないし、バンドイコール不良ってわけじゃないんだぜ〜？」

風間が出入り口まで行きふたりの前に立って言った。

「だって...」

あかねちゃんは浅倉ちゃんの影からこっそりと顔を覗かせて呟いた。

「さっきの曲ね、あれは俺たちのテーマ曲でオリジナルなんだけど不良っぽかった？」

しばらく考えてたあかねちゃんは首を横に振った。

「.....ったく、風間と田村がそんな派手ななりしてっから不良だって言われちまうんだよ！」

と、松山兄。

「こないだ小早川にも言われただろーが...」

弟まで俺たちを責める。

「なりは関係ないでしょ？中身の問題！」

風間は言い切った。

「俺たちは不良なんかじゃないぜ？音楽だってマジメにやってる。アコースティック系の音楽をね！」

言って、風間は決まりすぎのウィンクを飛ばした。

浅倉ちゃんがう...っと詰まって固まった。

そのあと、思い切り顔をゆがめ、

「目がチカチカする...」

と、呟いたんで今度は風間がう...っとつまり、俺たちはまた爆笑した。

「チャウチャウ」

「私の名前は浅倉ヒカルです。チャウチャウって呼ばないでください、ヒビク先輩！」

浅倉ちゃんは`ヒビク先輩、を強調して言い返した。

風間はニヤッと笑い、

「んじゃ、ヒカル」

と、なれなれしく呼んだ。

せめてヒカルちゃんとか浅倉ちゃんとか言えないのか、この部長！

「お前のキャラクターは捨てがたい。マラカスぐらいならできるだろ？お前も一緒にやれよな！」

やれよな、ってそれ命令してるぜ...

「で、あかねちゃん」

「はい...」

「ピアノ、弾いてくれるよね？」

.....おいおい風間あ。態度露骨過ぎやしねえか？

って思ってたら案の定、浅倉ちゃんの鼻がまたおもいきり膨らんでる。

「あかねちゃん、いいよね？」

風間がやさし〜く顔を覗き込むと、あかねちゃんは恥ずかしそうに顔を隠して、

「ヒカルちゃんと一緒になら...」

と、呟いた。

「...ってことでよろしくな、ヒカルッ！」

風間は浅倉ちゃんの肩を当然のようにポンッと叩いた。

浅倉ちゃんの鼻はますます膨らむ。

それを見て風間は指をさして笑う。

で、浅倉ちゃんは真っ赤になって怒る...

「風間くん、楽しそうだね？」

いつの間にか横に立ってた柏木が言った。

確かにさっきからやたらとテンションが高い風間だ。

でも、風間と浅倉ちゃんのテンポ...妙に合ってるぜ....。

「...でも...、あの子の歌には驚いたなあ」

喧嘩してるんだかじゃれてるんだか...の風間と浅倉ちゃんを見ながら柏木が呟いた。

「不良にも参ったけどなあ...？」

やたら音痴な浅倉ちゃんと、不良嫌いのあかねちゃん。

そして妙にテンションが上がった風間部長。

どーなるんだ今年のブックキャスルは...?!

5 ハムカツパン争奪戦

――明日ハムカツパンおごりなさいよねっ！！

小早川が俺に科したペナルティー。

ハムカツパンは3時間目の休み時間に即効で走んなきゃ買えない本城高校一のレアアイテム。1年の時はレアアイテムってキーワードに血が騒ぎ、お宝ゲットのために裏技使ったりして熱くなった時もあった。

けど、ハムカツパン自体がみんなが騒ぐほど俺の趣味にかなってなかったんで、それ以来3時間目の休み時間に購買部に行くという無謀はやってなかった。

なんせもう、もみくちゃにされるは足は踏まれるは時々パンチは飛んでくるはですさまじいったらありゃしない時間帯。

けど今日は再びそこに乗り込んで行かなきゃならない田村くんです。

終業チャイムが鳴ったあとに普通に行ったんじゃ絶対には買えない。

チャイムが鳴る前に教室を抜け出して走らなきゃ手にすることは出来ないお宝がハムカツパン。

で、3時間目――。

これが運悪く権田の英語。

終業チャイムが鳴る前にコッソリ抜け出すなんて普通なら不可能だし、チャイムが鳴ってもガラガラと喋ってるのが権田だ。

けどしょーがない。

環ちゃんのためにまた裏技使って走るしかないでしょ…。

あと、2分でチャイムが鳴るって頃、

「腹痛えっ！！」

……と、俺は挙手して立ち上がった。

まだまだあと一時間は続きそうな長話をしていた権田は、

「ああ？」

思いきり顔をゆがめて俺を睨んだ。

「便所行っていいっすか？！このままだとヤバイっすっ！！」

も～やあだあ～、田村くんたら～

なんて女子が言いやがる。

俺だって、やあだあ～ですよ、こんな松山兄が言いそうなみっともねえことみんなの前で言うのは。

けど、しょーがないじゃん！他に方法がないんだから！

ナナメ前の席にいる小早川が振り返って目が合った。

「田村くん？」

ニヤッと笑ってやったら、俺がちゃーんとハムカツパンをゲットしに行ってやるってことが小早川にはわかったようだ。らしくもなくニコッと笑ってくれちゃって。

待ってるよ、今、ゲットしてきてやっからな！

「...ったく。早く出して来い！」

権田の許可がおりたんで俺は弾かれるようにして教室を出た。教室の中じゃケラケラと笑ってるクラスメートの声がした。

冗談じゃねえぜ。

田村くんの本当の心意気を知らないヤツラめ。

廊下を左に行けば便所だ。けどマジで腹が痛かったわけじゃねえし、俺は当然右の東階段に向かって走った。目的地まではこの階段を一旦くんだり渡り廊下を中庭の向こう側まで行ってからまた二階に上らなきゃたどり着けない。1年の時よりは若干近くはなったけれど、まだまだ遠い購買部なのだ。

チャイムは鳴り終わってたけど、購買部に飛び込んだときはまだほんの少しの熱いやつらがいただけでハムカツパンはそこに並んでた。

けど、くるわくるわ。

あっという間に前から後ろからと生徒たちがなだれ込んできてたちまち売り台が見えなくなった。

けどそーなる前に俺の手にはすでにしっかりとハムカツパンが握られてた。

ま、俺だって本気になりゃこんなもんよ。

走り出すタイミングってヤツさえつかんでりゃ、そんなに苦労するもんでもねえんだよな。実際風間なんていつも悠々とこいつを握り締めてるし。

とりあえず俺に科せられたペナルティーはこれでクリア。

早いとこ環ちゃんにコイツを渡して無罪放免ってことでオツケーだな。

おばちゃんに80円を払って群がってるやつらをおしのけて人だかりから解放されたところで、

「はい、ハムカツパンは売り切れだよ～！」

と、おばちゃんが叫んだ。

買えなかったヤツらは一斉に落胆の声をあげ、売り台の前の人だかりも徐々に散開されたところに....

「また買えなかったよ...」

しょぼんとうつむく見覚えのある長い髪の後姿があった。

「しょーがないよあかね。あんたどんくさいもん...」

一緒にいる女の子が言う声が聞こえた。

あかねちゃんもハムカツパン争奪戦に参戦してたのかぁ。

おとなしそうだけど結構根性あるじゃない、こんな激しいバトルに挑むなんてさ。

「あかねちゃん」

と、声をかけると、ふたりはクルッと振り返って俺を見た。

今日は浅倉ちゃんと一緒じゃないみたいだ。あかねちゃんの隣には色白で真っ黒な髪が印象的なものすごく整った顔をした女の子がいた。完璧なシンメトリー（左右対称）の顔はまるで芸能人のようなキレイな子。

「あ...田村...先輩...」

あかねちゃんはふんわりとした口調で言った。

昨日、怯えきった目で俺を見ていたあかねちゃんが初めて田村先輩って呼んでくれて、足元からほにやらら〜んと萎えていきそうな、背中にむずむずと何かが這ってるようななんとも言えない感覚が全身に走った。

「ど...、どしたの...?や、やっぱ、ハ、ハムカツパン...?」

口からちゃんと言葉が出てこない。

バカみたいにどもりながら、ようやくそう言うと、

「はい...。今日で二週間通い詰めてるんですけど...まだ一回も買えたことがないんです...」

と、あかねちゃん。

.....二週間も通いつめて買えないなんて...あかねちゃんってかなりの....

「...どんくさいから、あかね」

黒髪少女がシビアに言った。

顔に似合わずずいぶんキツイ女の子のようだ。

「もういいかげんあきらめたら?毎日付き合うのも疲れるし」

「だって...みんなが騒ぐハムカツパン...食べてみたいんだもん...」

あかねちゃんはしゅんとうつむいて言った。

みんなが騒ぐハムカツパンは別に普通の調理パンなんだよな。

俺にしてみりゃそこに大量に売れ残ってるチョコデニッシュの方がはるかにうまい。

けど、

あかねちゃんのうつむく仕草に、しばらく眠っていた田村くんの弱いところが目覚めてしまった

。

どんくさくてもなんでも、こーやって二週間も挑戦してるってところが健気じゃないか。

もみくちゃんにされ、足を踏まれ、髪の毛を引っ張られながらも必死にハムカツパンを求めて耐えるあかねちゃんを想像しただけでうるうるきちまった。

んで、今、俺の手の中にはゲットしたばかりのハムカツパンがある！

「これ、やるよ」

と、あかねちゃんの手の上にハムカツパンを乗せてやると、

「...えっ？いいんですか...？」

あかねちゃんは俺を見上げた。

「どーぞ！」

「...だって、田村先輩も一生懸命買いに来たんじゃないんですか...？」

一生懸命買いに来た、なんて...、可愛いこと言うなあ...！

確かに裏技つかって一生懸命買いに来たさ。

けど、あかねちゃんがこれをもらってくれたらその苦労も報われるってもんだ。

「いいよ、あかねちゃんにあげる、それ」

「あ...りがとうございます...！」

ふんわりと笑うあかねちゃんを見て、また足元からほにゃらん...っと萎えちまいそうになった時、

「あかねちゃん、買えた〜？」

売り台周りの人だかりの中から、はあはあ言いながらやって来たのは浅倉ちゃんだった。

「あ？！ハムカツパン持ってるっ！！あかねちゃん買えたんだっ！！」

浅倉ちゃんはそう言ってあかねちゃんの手にあるそれを指差した。

それから俺に気が付いて、

「あ、田村先輩、こんにちは！」

と、元気よく言ってニッコリ笑った。

萎えそうになってた足がシャキッと引き締まった。昨日は鼻が膨らんでた浅倉ちゃんだけど今日はいつもと同じハツラツとした笑顔だ。

「これは...田村先輩がくれたの...」

「二週間通い詰めてるって聞いたからさ」

「いいなあっ！あたしもまだ全戦全敗なんですよ〜！あかねちゃんはラッキーだったね！」

浅倉ちゃんは爽やかに叫んだ。

こーなったら今度は浅倉ちゃんにもゲットしてやんなきゃ、と気合が入った時、

「なーに騒いでるんだ、お前ら？」

片手にあるハムカツパンをぽんぽんと空に投げながらやって来たのは風間部長。

「おっ、あかねちゃんもゲット出来たんだね〜？」

風間はあかねちゃんの手にあるパンを見て大声で言い、そのあともみくちゃんになった名残がや

や乱れた髪に現れている浅倉ちゃんを見て、

「はっ！お前はスカッたわけね」

と、鼻で笑った。

さっきまで爽やかモードだった浅倉ちゃんの鼻はまた膨らんでいった。

「...これは田村先輩がくれたんです...」

と、あかねちゃんが言うと、

「田村先輩はどこかの先輩と違って優しいからっ！」

と、浅倉ちゃん。

風間はふんっと鼻を鳴らし、あかねちゃんの手にあったハムカツパンを浅倉ちゃんに「ほらよっ、とぶっきらぼうに渡した。

浅倉ちゃんがきょとんとしている間に、空いたあかねちゃんの手の上に自分が持っていたハムカツパンをポンッと乗せた風間は、

「これ、あかねちゃんにあげるね？」

と言ってにこっと笑った。

「...あの、あの...」

おろおろするあかねちゃんの横で、浅倉ちゃんの鼻とほっぺが見事に膨らんでいた。

「じゃあね、あかねちゃん！」

風間は爽やかに言って歩き出し、思い出したように立ち止まり、

「じゃーな、チャウチャウ！その鼻の穴早く閉じろよ！」

捨て台詞を吐いて購買部を出て行っちゃった。

「鼻の穴...ほんと開いてるよ、ヒカルちゃん...」

黒髪少女がポツリとつぶやいた。

鼻が膨らんだ浅倉ちゃんとなだめる黒髪少女、そしてふんわりたたずむあかねちゃんと購買で分かれ風間を追っていくと、

「...知らねえよ、田村あ。あのハムカツパンは小早川のためにゲットしに来たもんじゃなかったのかあ？」

と、突っ込まれ、そこに後ろからやって来たのは大島で、

「風間先輩に田村先輩、ずいぶん1年生に優しい先輩たちだこと！」

やけにトゲのある言い方で喋ったと思ったら、そのまま妙にツンツンした歩き方で俺たちを追い越して行っちゃった。

見られてたってわけね...。

で.....。

「あたしのハムカツパン、1年生の女の子にあげちゃったんだってね...。べつにいーけど...」

「わりい！また明日行ってくるからさあ...！」

「...いーよ、もう...」

「小早川さーん？」

「ふんっ！」

環ちゃんは一ぜん不機嫌モード全開。

おまけに、

「権田先生があとで職員室に来いって！」

便所に行かず購買に走ったのがバレてたらしい。

そしてさらに、

「田村くん、お腹治った〜？」

「トイレ間に合った〜？」

クラスの女子たちにくすくすと笑われて...

ペナルティーで走った購買部だったのに、小早川の機嫌はもとより悪化、権田の長い説教を食らい、女子には笑われ、罰則は浅倉ちゃんの鼻のようにさらに大きく膨らんじまった。

――でも、

あかねちゃんは初めて食べられたハムカツパンに満足してくれたことだろう。

ふんわりと笑ってるあかねちゃんがいるなら、こんなペナルティーなんてへでもクソでもねーぜ。

.....と、マジで思ってる自分がちょっと不思議だった。

6 特訓！マラカス

新入部員が2名入ったことで同好会に格下げされてた軽音楽部はとりあえず再び部活動として認められ音楽室は今までどおり使用できる許可が下りた。

けど、予算委員会は今すでに終結していて今年度の振り分けが決定しちゃってたため軽音楽部に配当される予算は0。厳しいけどしょーがない。部に復活出来て音楽室が使えるだけでもありがたいと思わなきゃいけない。新入部員のふたりには感謝感謝でございます。

けど、浅倉ちゃんとあかねちゃんは先に演劇部にも入部していたらしく今年の軽音部はふたりの日程に合わせて活動することになり、新パートが加わった新たな出発はいろんな意味で0からのスタートになった。

その新体制の第一日目。

新パートはもちろんあかねちゃんが弾くピアノ。

今日はこの前のおたまじゃくしが泳いだ楽譜じゃなく、ちゃんとピアノパートを追加した『光の城』のバンドスコアをあかねちゃんに渡し、これからギターや歌と合わせてやってみる予定。

そしてもうひとつは――。

「これ、どーやるんですかぁ？」

音痴の浅倉ちゃん改めヒカルちゃんに風間部長が与えたパートはマラカス。

マラカスを手にしたヒカルちゃんはそれを新体操のこん棒のようにぶるんぶるんと振り回して暴れた。

またまたアツパレなそのアクションに俺たちは全員口あんぐり。

ただただ、ヒカルちゃんの妙ちきりんなこん棒ダンスを見守っていた。

さすがの風間部長もポーズン状態。いつものようなからかいの言葉も忘れてヒカルちゃんを見つめてる。

そして、突然ハッと気が付いたように、

「ストップ！ストップ！！」

ヒカルちゃんのこん棒ダンスを止めた。

「お前、マラカス持ったことねえのかよ？！」

「ないですよ～」

あっさりと答えるヒカルちゃんに風間のテンポが少々狂ったようだ。

「このスコアの意味わかるか？お前がわかりやすいようにマラカスが入るところには★マーク書いていたんだぜ？」

と、いつになくやさしく説明したりして。

ヒカルちゃんはきょとんと首を傾げ、
「...だってあたし、楽譜読めないもん」
と、言った。

「★マークは見えるけど、それが曲のどこだってこと、楽譜見ただけじゃわからないし」
そりゃごもつとも！
...と、俺は風間を見る。

風間は頭を抱え込み叫んだ。

「お前、正真正銘天然記念物級の音痴ってわけ？小学校中学校の音楽とか合奏コンクールとか何してたわけ？！」

「合奏ではいつも鈴を任されてましたよ〜！」

ヒカルちゃんは胸を張って答えた。

「それは任されてたんじゃなくて、他に与える楽器がなかったからだろな...」

風間がぼそっと呟くと、

「ヒビク先輩！！」

ヒカルちゃんは両手を腰に当てて叫んだ。その声で風間の背筋が一瞬ピン！と伸びたのが妙に可笑しかった。

「確かにあたしは天然記念物級の音痴ですよ？それは自分でも認めます。でも、小学校の時も中学校の時も音楽の時間は楽しんでやってきました。先生は楽しんでやれば歌が下手でも楽器が出来なくてもいいんだって教えてくれました！だからあたしなりにみんなの迷惑にならない程度にちゃんと頑張ってきたんです！」

ヒカルちゃんは一生懸命訴える。

その姿もアツパレなり。

なんとって風間がヒカルちゃんの気迫に押されてるし。

「マラカスだってちゃんと教えてもらったら頑張りますよ！これでも音楽の成績5段階でいつもちゃーんと3をもらってたんですからっ！」

「...そりゃ奇跡だ...」

風間はほとんど呆然としたまま呟き、

「た、田村〜」

と、やや裏返った声で俺を呼ぶ。

「なに？」

「悪いんだけど、お前今からヒカル番ね！」

「はっ！？」

俺がヒカルちゃん番！？

.....ってことは...？

「こいつのマラカスをバンドと合わせられるまでに特訓してやって！」

「俺がっ！？」

「お前しかいないっ！！」

言い切る風間部長。

フツの状態でのヒカルちゃん番っていうんなら別にかまわない。

っていうか、願ったり叶ったりのポジションかもしれない。

けど、バンド単位となるとはっきり言って自信なし。俺だってマラカスなんて振ったことねーもんっ！この天然記念物級な音痴のヒカルちゃんをバンドと合わせられるぐらいのマラカス奏者に育てなきゃならないってことだろ、この俺が！

「う...」

とつまると、ヒカルちゃんは申し訳なさそうな目で俺を見てペロッと舌を出した。

スコアの意味がわからないとなると、身体に覚えこまずしかないよな？

マラカスってのはリズムと乗りだぜ。

ってことは...、

「柏木、ヘルプミ〜！」

「りょーかい！」

柏木は間髪を入れずに返してくれた。

このあ、うんの呼吸最高だぜ！

「んじゃ、田村と柏木よろしく頼むっ！」

風間はヒカルちゃん番の指令を俺たちに下し、自分はさっさとあかねちゃんがいるピアノの側に移動した。ヒカルちゃんのこん棒ダンスから身動きひとつしないで呆然と突っ立っていた松山兄弟も弾かれたように安全なそっち側に移動した。

「んじゃ、こっちはピアノと合わせてはじめるからそっちは後ろの方でやって！」

風間部長の指令がまた下る。

けど、そう言いながらも、マラカスを上にやったり下に構えたりしながらじっくりと観察しているヒカルちゃんを心配そうな目で見ています。その視線がそーっと俺の方に移動してきて目が合ったとき、ニヤッと笑った風間の笑顔は悪くなかった。

部長に後ろの方でやれ、って言われちゃった俺たちはその通りにピアノの位置からずいぶん離れた音楽室のすみっこ〜の方に移動した。

「田村先輩、柏木先輩、よろしくお願ひします！」

ヒカルちゃんはニッコリと笑う。

この笑顔見ちゃイヤとは言えねえよな！

「おお！がんばろーな、ヒカル！」

なーんて風間の真似して先輩ぶっちゃったりして。

「ヒカル、って名の響きいいよなあ。

呼びやすいしなんかこう、身体に芯が通るっていうか引き締まるっていうか妙に気分が明るくなるぜ。

「んじゃ、まず音の出し方から練習してみっか！」

「はい！よろしくお願ひしま〜す」

ヒカルちゃんは元気に言うと、マラカスをシャカシャカと振った。

「ただこーやって振ってればいいんですよ〜？」

「ヒカルちゃん、マラカスをあなどっちゃいけないよ？コミカルで地味な楽器だけどラテン・パーカッションでは大事な楽器なんだよ？」

さすが柏木はマラカスって楽器の位置から教授する。

しかしマラカスってラテン・パーカッションってサークルにいる楽器だったのね。知らなかったぜ。

「ラテン・パーカッションって太鼓が何個も繋がってるヤツとかひょうたんみたいな楽器とかでポコポコギイギイと陽気にやるヤツですか？」

と、ヒカルちゃん。

「コンガとギロね…。そうだよ」

と、柏木は苦笑した。

「バンドよりそっちの方がちゃんとした軽音楽部っぽいですね？先輩たちのバンドとマラカスって合うんですか〜？」

ヒカルちゃんはもっともなことを言う。

風間部長がヒカルちゃんにマラカスを与えたのは、とっさに思いついたのがたまたまそれだったからだろうと俺は睨んでた。でも、ラテンの明るさとヒカルちゃんのキャラは抜群に合ってるだろう。

もしかしてこれも風間のインスピレーションだったんじゃないだろうか――。

「奏者がヒカルちゃんなら絶対合うね！」

と、柏木。

上手いこと言う男だ。

ヒカルちゃんは安心したようにニッコリと笑い、

「じゃ、あたしなりにがんばりま〜す！」

と、派手にマラカスを振った。

マラカスはじゃらっ、じゃらっ、と拡散された音がしてどうもまとまんない。

「中の玉を一個にまとめる気持ちで振ってみ？気持ちをぎゅっと集中して」

「まとめる気持ちですね…。わかりました！」

ヒカルちゃんは顔をキリッと引き締めてもう一度振る。

けど音は、じゃらっ、じゃらっ、のままだ。

思わず柏木と顔を見合わせた。

「ひたすら練習を積むしかないね！そのうち感覚でわかるようになるよ。とりあえず田村くんのギターに合わせてやってみようよ」

そーだよな。

すぐに出来たら音痴じゃねえんだから。

「んじゃ俺がリードとるからヒカルちゃんは柏木の合図に合わせて振ってみ？」

はじめた曲は『光の城』。

柏木がヒカルちゃんの真横についてスコアを見て拍子をとりながら合図を出す。

マラカスの音はじゃらじゃらとまとまらない、身体のどこかがむずむずと痒くなるような違和感を感じるぐらいだけど、まあ、リズムはさほど狂ってないのが救い。

ただ、やっぱりこん棒を振り回すダンスのようにあちこち飛び跳ねてるヒカルちゃんだ。

——見えるものを信じるのはたやすいこと

見えない輝き信じられたら

それは何かが始まる合図

柏木は歌詞を口ずさみながら机を叩いて拍子を取り動き回るヒカルちゃんを目で追い、ヒカルちゃんは一応柏木の拍子に合わせてマラカスを振っている。

ただ、ちょろちょろとしながら……。

——いつか目指そう光の城を

右も左も闇の中でも

微かな輝きひとつを頼りにしながら

そこに繋がる道を歩こう——

とりあえずワンコーラスが終わったとき、

「これって誰が作ったオリジナルなんですか？」

ピタッと動きを止めたヒカルちゃんが言った。

「風間部長。『光の城』ってタイトルで俺たちのテーマソングなんだ」

「ヒビク先輩が作ったんですかぁ…」

ヒカルちゃんはある方で同じ曲をピアノに合わせて歌ってる風間を見た。

「あのさ、こないだも言ったけどあいつ名はヒビクじゃなくてキョウ。わかってるよね？」

ヒカルちゃんはあるからずっとヤツのことを「ヒビク先輩」と呼んでいる。

それが妙にはまって心地いい響きだけど、ヒカルちゃんのことだからたぶん間違っただけで覚えちゃったんじゃないか…。

「知ってますよ～！でも、何かもうヒビク先輩としか呼べなくて…」

ヒカルちゃんはまた舌を出した。

ヒビク先輩としか呼べない——か。

「この曲いい曲ですよ。初めて聴いたときから思ってた。テーマ曲なんだぁ」

「そ。ブックキャッスルのね」

と、柏木。

「ブックキャッスルって...？」

そっか。まだバンドの詳しいこと何も話してなかったよな。

「バンドの名前。学校じゃ軽音楽部ってことで活動してるけど一応こーゆー名前がついたバンドなんだよ、俺たち」

「...ブックキャッスル」

と、ヒカルちゃんは眩き、

「.....本城...ですか？」

と、俺と柏木を見上げた。

「変かい？」

名づけ親の柏木が訊いた。

「――あ、あの...、じゃあもう一回『光の城』をやってください！」

柏木の`変かい？`には答えずにヒカルちゃんは練習の再開を促す。

「やっぱ変なのかな...」

ぽつりと眩いた柏木がやや衰れに見えた。

「い、いえ～。本城高校の軽音楽部らしくて...いいですよ！ブックキャッスルに『光の城』、チカチカの先輩たちには合ってます！」

と、ヒカルちゃん。

キミだって十分なチカチカだと思います...

いや、チカチカというよりはピカピカだな。

「じゃ、もう一回合わせてみようぜ？それでさ、ヒカルちゃん」

「はい？」

「リズムを取って動くのはいいんだけどあんまり派手に動き回らないでやってみてくんない？」

バンドの前を行ったり来たりされてはちょっと滑稽だし...

「どれぐらいまでなら動いてもいいですか？」

「直径1メートル範囲内で」

「わかりましたーっ！！」

.....って元気に手を上げたヒカルちゃんなのに....。

「ヒカルちゃんの直径1メートルってずいぶん長いんだねえ～？」

と、柏木はのん気に言う。

「...あたし、さっきからどうも田村先輩のギターに合わせられないんですよねえ...」

俺のギターが悪いんかい！

「いつか～目指そう光の城を～右も左も～闇の中でも～」

ヒカルちゃんは自分で拍子をとりながら俺が弾くメロディーとはまったく違う音程で『光の城』らしき歌を歌い始めた。

あっちで合わせてたピアノとギターと歌がピタッと止んでこっちに視線が集まった。

「微かな～輝きひとつを～～～頼りにしながら～」

あちゃーと松山兄が床にうずくまった。

「田村あ～頼むぜ…」

と、松山弟。

風間は、

「あれ…もしかして俺が作った歌…？」

と、凍結。

アッパレなんて言われてられねえな、こりゃ…。

「ヒカルちゃん…、ちょっとタンマ…」

止めてみたけど止まらない。

「あのさ、ヒカルちゃん、さっき直径1メートル以内って…」

と、言った時はヒカルちゃんは『光の城』もどきを歌いながらもうあっちの方までステップを踏みながら行っちゃってた。

「ヒカル…、ヒカルう～～～ッとまれ～～っ！！」

思わず叫んじまったら、

「え？なんか言いました？田村先輩？」

ヒカルちゃんはこの棒ダンスをしたまま無邪気に笑った。

――浅倉ヒカル、最強なり！

……田村優作、前途多難なり…っ！

7 スイートチョコデニッシュ

2年になってありがたくもクラスがバラバラになった俺たちブックキャスルズ。

当然昼メシもバラバラに食ってる毎日だけど、今日は久々に天気もいいってことで珍しく一同揃って屋上でランチ。

唯一彼女持ちの柏木には小春ちゃんっていうオマケがついてきたけど、小春ちゃんは俺たちといても話に口を挟んできたりしないし、ただニコニコ笑ってるだけの害がない子なんでそこいっても気にならない。

「で、マラカスの方はどーよ？ちっとはマシになった？」

今日もスマートにゲットしたハムカツパンをかじってる `ヒビク、が俺と柏木に訊いてきた。

「ぜ～んぜんダメ」

答えた声が柏木と揃っちゃった。

あれから一週間、毎日ヒカルのマラカス特訓をやっている。

あんまりにもあんまりなヒカルなんで特訓は狭い音楽準備室を使ってやってる。狭けりゃちょろちょろ動き回るスペースも少なくてもいいだろって思ってたけど、確かにスペースは少なくても動く量は同じだから、ヒカルが目の前を行ったり来たり通過する回数がやたらと増えて目障り度も全開。音楽やってるんだか運動会の練習してんだかわかんないほどで一曲終わると全員へとへとで汗までかいてる始末。動くなよ、と何度注意してもヒカルには通用せず、俺も柏木も `ど～すりゃいいの～？、な状態なのだ。

「...全然ダメなのか」

と、ヒビク。

「どーやって教えたらいいんだ～って言ったら、どーやって教わればいいのよ～だもん、ヒカル...。俺のギターとも合わないしお手上げって感じだぜ...」

「あれ、本当に使うのか？」

とは松山兄だ。

「あかねのピアノだけでオッケーじゃん。無理してパートに加えなくてもいいんじゃないの？」

「それはダメ」

ヒビクは即座に言った。

「あいつだって軽音楽部の部員なんだからはじくことはできねえよ。ちっとばかり音痴ってだけだろ？何とかなるさ」

ちっとばかりじゃないってことはヒビクも十分わかってるでしょうに。

「何とかならないから田村と柏木が苦労してるんじゃないか」

確かに苦労してる。

田村くん、音楽をやり始めて以来の苦労をしています。

人に何かを教えるってことがこれほど大変なものだったとは、17年間生きてきた今までの人生の中では実感したことなかったのも確か。それはやっぱりヒカルを何とか使えるマラカス奏者にしなきゃっていう責任を感じてるからだ。

――けど、何かそれって違うよな？

と、今、この瞬間にチラッとよぎった。

「で、ヒカルはどーなわけ？もう私マラカスなんてイヤ～ってな状態？」

ヒビクは二個目のポテトサラダパンの包みを破りながら言った。

「いや？ヒカルはもう毎日楽しそ～に踊りまくってます…」

横で柏木がうんうんと首を振った。

その横では小春ちゃんがくすっと笑い、`ヒカルちゃんって子可愛い…、と小声で呟いた。

「ならそのままでもいいよ」

と、ヒビク。

「ちょろちょろしててもおっけー？」

「それがあいつの音楽なんだったらそれでいいんじゃない？」

サラッと言うヒビク。

でも、何かガストンと心の中に落っこちてきた気がした。

ポテトサラダパンにかじりつきながら、ヒビクの顔には穏やかな笑みが浮かんでいる。

いつもヒカルをからかっていぢめてるくせに、だ。

「あかねちゃんの方はまったく問題なし。今すぐステージに立てと言っても大丈夫なくらいだぜ？」

弁当が終わった松山弟が、ごろんと寝転がりながら言った。

「俺たちを見てあんなに怯えてたくせにさ、ピアノの前に座ったら度胸が違うんだよな。太郎なんかこないだギャグが寒いって怒られてやんの」

「あかねちゃんに？」

ちょっと驚いた。

兄は、けっ！と毒を吐いてそのままふてくされたように寝転がる。

「でもまあ、こっちはなかなかいい感じだぜ？あかねちゃんも慣れてきたみたいだし、あとはヒカルのマラカスが何とかなればそろそろみんなで合わせてみてもいいんじゃないねえの？」

と、弟。

「…だな。今日の練習からはそうすっか」

言いながらヒビクが最後の一口を口に放り込んだ時、

「田村先輩、ここにいたんですね！」

明るく歯切れのいい声に振り向くと、今話題の渦中にあった本人が立っていた。

寝転がっていた松山兄弟は反射的に起き上がり、ヒビクは今口に入れたばかりのパンをゴクリと飲み込んだ。

「みなさんもお揃いで、いつもみんなでお昼食べてるんですか？」

青空を背にして笑う笑顔はやっぱり底抜けに明るく爽やかだ。

「いや？今日はたまたま。天気もいいしね」

「ミーティングってとこだ」

と、松山兄。

その横ではヒビクがげほげほと咳き込む。

とっさにパンを飲み込んだから変なところに入ってしまったようだ。

「ヒビク先輩、風邪ですか～？」

「ち、ちが...っ！パ、パンが...喉に...げほっ！」

ヒビクは苦しそうに咳を出す。

ヒカルはヒビクの横に置いてあった珈琲牛乳のビンを、はい、と言ってヤツに差し出した。

「さ、さんきゅう...」

ヒビクはヒカルから珈琲牛乳を受け取り、一気に喉の奥に流し込んだ。

「大丈夫ですかあ～。慌てて飲み込むからですよ～」

ヒカルはヒビクの背中をポンポン叩きながら言う。

「う、うるせーなあ。べつに慌ててなんかねーよ」

と、ヒビク。

何故か真っ赤な顔をして。

「で、俺に用？」

ヒカルが俺を探してこんな屋上までやってきてくれたことがちと嬉しかったりした田村くんです。

今日は梅雨の晴れ間の青空が広がった爽やかな午後だし！ってのはあんまり関係ないけど。

「あ、そうだった！今日の部活なんですけど演劇部が臨時活動をすることになったのでそっちに出なきゃならなくて、今日の特訓はお休みします」

「ありや...」

そんなことだったの...。

少々ガッカリした。

「久々のお天気だし、青空発声練習の強化なんだそうです」

「青空発声練習？」

「ここでやるんですよ～。なまむぎなまごめなまたまご～！って」

ヒカルは突然フェンスの向こうに向かって大声で発声した。

「その発声じゃまだダメだな。腹の底から声が出てないぜ？」

ヒビクがチェックを入れると、

「そーなんですよ〜。先輩たちにいつも注意されてるんですけど、なかなかお腹から声を出さずってわからないんですよねえ〜」

ヒカルは自分の腹を押さえながら言う。

「ケツの穴をキュッと閉めて腹筋を使うんだよ」

と、ヒビク。

「ケ、ケツの穴あ...？」

「ああ。ケツの穴を閉めれば自然に腹に力が入るだろ。その腹筋を使って声を出すんだよ！」

「そうなんですかあ...」

「ま、お前の場合はついでに鼻の穴もキュッと閉めた方がいいかもな！」

言ってヒビクあははと笑った。

「なっ!？」

ヒカルは当然鼻を膨らます。もうこれはいつものことだ。

「もう！嘘だったんですね?!今ちょっとやってみちゃいましたよ！」

「嘘じゃねえって！今言ったのは発声の基本だぜ？鼻の穴もっ！」

言いながらヒビクはヒカルの膨らんだ鼻を指でキュッとつまんで笑った。

松山兄弟も柏木も小春ちゃんまでも、そんなヒビクのハイテンションを無言で見守っている。

田村先輩に用事があって来たヒカルだったのに、これじゃヒビクとじゃれに来たようなもんだ

。ってというか、ヒビクが勝手にかまって遊んでるんだけどー。

今日は特訓無しかあ。

なんかちょっと寂しかったりする。

けど、軽音は演劇部の活動に合わせるって最初に約束しちまったから仕方ないよな。

——なんてことを、じゃれてるふたりを見つめながらぼーっと考えてるうちに予鈴が鳴っちゃまった。

「...ということで、田村先輩、今日は失礼しますね！」

ヒカルは鼻をつまんでるヒビクの手をえいっと振り払い、予鈴に耳を傾けながら言った。

「おお。本当は今日から全パートで合わせてやってみるつもりだったけど、しゃーねえな！」

「すみませんっ！じゃ！」

と、ヒカルは校舎に戻ろうとして、

「あっ！そう言えばさっきあかねちゃんも田村先輩のこと探してました」

「あかねちゃんが？」

「あたしたち、手分けして先輩のこと探してたんです。あかねちゃんは体育館の方に行きました。それじゃ、また！」

ヒカルは校舎に戻って行った。

「田村先輩モテモテじゃ〜ん？」

松山兄が明らかにひがんだような口調で言った。

けど、あかねちゃんが俺に何の用だろう？

まあ、さっきのヒカルと同じ、今日の部活のことかな。

.....っていうか、それしかないじゃん。

一同そろそろと屋上からの階段を二階の2年の回廊まで下りてきた時、廊下を走ってきたあかねちゃんとばったり出会った。

「あ、田村先輩！」

「あかねちゃん、俺を探してたって？」

既に予鈴が鳴り終わっていて、あと3分もすりゃ5時間目が始まっちゃう。

あかねちゃんはほっと安堵したように肩を落として笑った。

ヒカルの笑顔が鮮やかな太陽だとしたら、あかねちゃんの笑顔はほわんと優しい陽だまりだ。

「これ、田村先輩に」

そう言ってあかねちゃんが俺によこしたのは購買で売ってるチョコデニッシュだった。

「へ...？」

何で？

「この間のハムカツパンのお礼です...。ハムカツパン、あれからも頑張って挑戦してるんですけどやっぱり買えないからチョコデニッシュで悪いんですけど...」

渡されたチョコデニッシュを手にしたまま、しばしば一ぜんとしてしまった。

ハムカツパンのお礼なんて...、そんなこと...

「...べつに気にしなくていいのに」

「だって...憧れのハムカツパンが食べられてすごく嬉しかったから。でも...、」

あかねちゃんはうつむいた。

「やっぱり私はチョコデニッシュの方が好きかも...。田村先輩には悪いけど...」

それは俺もそうだけど...。

「...あかねちゃん、もしかしてあれから俺のためにハムカツパンゲットしようとしてたわけ？」

「はい。先輩にお返ししようと思ってたけど、やっぱりどんくさい私には無理でした」

あかねちゃん。

あかねちゃん。

キミって子は.....。

「ちょい待ちっ！」

じわじわと感動に浸ってた俺の横でヒビクが叫んだ。

「あの時あかねちゃんにハムカツパンをあげたのは俺だけ？俺にはお礼はないわけ？」

「...だってあれは間接的にヒカルちゃんに...」

あかねちゃんは少し困った風に首を傾げ、

「風間先輩にはたぶんヒカルちゃんからあると思いますよ？」

と、言った。

「いやっ！さっきヒカルには会ったけど、あいつはお礼のおの字もなかったぜ？」

「うーん...。風間先輩、いつもヒカルちゃんを苛めてるからかも？」

「苛めてる！？俺があいつを?!」

ヒビクは心底心外、というような顔をして叫んだ。

そして俺たちを見回す。

「あれはどう見てもいちめて遊んでるよなあ...？」

と、松山弟。

うんうん、そうだね、と柏木。

そんなこと、どーでもいい今の俺。

あかねちゃんからもらったチョコデニッシュ...。

まだ一口もかじらないうちから、心の中がとろろんととろけそうで。

「じゃ、本鈴が鳴っちゃうから私はこれで」

あかねちゃんはぺこりとお辞儀をすると、そのまま階段を下りて行ってしまった。

長い髪からふわりとフローラルの甘い香りがして、またまた足元から萎えちまいそうな感覚に加えて全身がむずっ、ぶるっと震えた。

「健気な子...」

小春ちゃんがぼつっと呟いた。

その一言が俺のどこかに食い込んだ気がした時本鈴が鳴った。

8 コラボレーション

――で、その日は今までと変わらない、もともとのメンバー5人で部活。変わらないはずなんだけど違和感ビシバシ。足りない足りない。

何が足りないかって…、

「この曲こんな曲だったか？」

自分で作った『光の城』を歌いながらヒビクも言う。

今まではこれが当たり前でやってきたけど、もうピアノがない『光の城』は福神漬けのないカレーライス、にんにくのない餃子みたいな……、

「――クルトンがないコーンスープって感じだね、風間くん」

……そういうおしゃれな比喻もあるけど、とにかくそんな感じで俺たちのノリもいまひとつ。今頃ヒカルとあかねちゃんは屋上で、なまむぎなまごめなまたまご～ってな青空発声強化をやってるだろう。

ヒカルはまあいいとして、あかねちゃんが演劇部っていうのがピンとこなかったりする。あんなに儂い子が屋上発声強化とか舞台上で台詞言ったりだとか出来るのだろうか…。

おもいきり想像できてしまう、あかねちゃんの発声練習。

向かいの墨中の悪ガキどもに野次なんか飛ばされて、ヒカルの袖でもつまんでうるうるしてそうだ。

でも、そういう半面で人知れず頑張っていたりするのもあかねちゃんだ。

あかねちゃんがくれたチョコデニッシュー。

あのもみくちゃんな購買部で買ってきてくれたあかねちゃんの健気な心の結晶。

何たって、`田村先輩、にハムカツパンのお返しをしようってあれから毎日あの闘いに挑んでたっていうんだから。

チョコデニッシュはその闘いに敗れた代替品かもしれないけど、俺にしてみりゃ最初からこっちの方が数倍、いや数十倍の価値がある。それにあかねちゃんの健気な想いが加わって、その価値は数百倍にせりあがってる。こんなレアもの、もったいなくて食べやしないぜ。

「それ、食わないの？俺が食ってやろうか？」

ギターケースの上に置いといたチョコデニッシュを勝手につかんでヒビクが言った。

「ダメッ！」

すかさず取り返した。

いつかも柏木が小春ちゃんからもらったビターなチョコを勝手につまんで口に入れちゃったし、ぼんやりしてたらマジで食われちまいそうだ。

「大事にとっついてカビでも生やしちまったらそれこそもったいないぜ〜？そうなる前に俺によこしなさい」

「いやだね。これはあとでひとりになったときにじ〜っくり味わって食うの」

横取りされないうちにさっさとカバンの中にしまっちゃった。

「`風間先輩にはヒカルちゃんからお礼があると思いますよ？、」

さっきのあかねちゃんの真似をして言うと、ヒビクはコホンと咳払いをひとつして、

「あいつはそんな気が利いたタマじゃないだろ...」

と呟いた。

「ヒカルが俺にくれるものがあるとしたらやっかいごとぐらいだぜ...」

「お礼の強要はいけないねえ〜？ま、風間先輩がもうちょっとヒカルちゃんに優しくしてやればあいつの態度も変わるかもよ？」

なんて、ずいぶん余裕ぶっこいて喋ってる自分にちょっと驚いたり。

ついさっきまでヒビクとヒカルのじゃれ合いを、やっかみ半分で見ってたのはどこの誰だったか

。

「や、優しくしてやってるだろーが、十分に...」

ヒビクが口を尖らせながら呟いたときだ。

廊下をバタバタと走ってくる足音が聞こえ、それが音楽室の前で止んだと同時に扉が勢いよく開いた。

「ヒビク先輩っ！！」

「はいっ！？」

ドアの前で叫んだのはヒカル。

とっさに背筋を伸ばして返事をしたのはヒビク。

その絶妙なテンポとリズムは`あ、うん、の呼吸以上かもしれない。

その後ろからあかねちゃんもパタパタとやってきた。

「ふたりともどうしたの？演劇部は終わったの？」

柏木が扉の前で仁王立ちしてるヒカルとその後ろではあはあ息をしてるあかねちゃんところで硬直したまま突っ立ってるヒビクを順番に見回しながら言った。

「今年の文化祭は演劇部と軽音楽部、合同制作をすることになりましたっ！！」

「はあ！？」

俺たち5人、全員声が揃っちゃった。

「それ、どーゆこと！」

硬直が解けたヒビクが叫んだ。

「演劇部のお芝居に先輩たちが音楽をつけて演奏するんです」

「するんです、って、誰がそれ決めたわけ!？」

あかねちゃんがこっそり後ろでヒカルを指さしながら俺を見た。

ま、訊くまでもなく予想はできることだけど、そのあかねちゃんの仕草が妙に印象的だった。

「演劇部の小夜子先輩たちが童話をモチーフに台本を作りますので、出来上がったら先輩たちが音楽を作ってください」

「カチカチ山かいっ！」

と、松山兄。

「ヒカルのサルってのは似合いそうだなあ！」

...だから、カチカチ山はタヌキだっの!

「サルでもタヌキでも何でもやりますよ!でも、たぶんアンデルセンで決まると思います。構想を思いついたって小夜子先輩言ってたから!」

ヒカルは嬉しそうにニッコリ笑う。

ヒビクはぼかんとした顔をヒカルに向けたまま再び固まってる。

けど演劇部と合同制作?

なぜにそーゆー展開に?

「あのさヒカル、最初から説明してくんない?話が見えないんだけど...」

「だからあ、文化祭の出し物を演劇軽音の二部で合同制作するんですよ」

ヒカルはまた結論を話す。

どーして演劇部と合同で文化祭をやるんだか、そこんところが知りたいのに。

「あの...」

控えめに申し訳なさそうに話し始めたのはあかねちゃんだった。

実働部員数が5名の演劇部は廃部寸前。

しかも1年生のふたりは大根役者。

部長の鳥海小夜子以下ふたりの2年たちは大根1年を含む5人の少人数でやれる台本作りに頭を悩ませていたらしい。

そこへヒカルが思いついたのが音楽劇。

一一劇の途中途中に音楽を入れるんです。そうすれば登場人物が少なくても私たちが大根でも少しはメリハリがついて内容が充実するんじゃないですか?

っていう理由と、

——我が演劇部は廃部寸前なわけだし、形にこだわらずにちょっとはめをはずしてみてもいいんじゃないですか？

という押し切りと、

——音楽担当は軽音部の先輩たちです。ヒビク先輩、田村先輩、歌って演奏できる人たちはたくさんいますよ！

っていう素敵な紹介文句によって決定したってことを、あかねちゃんはわかりやすく説明してくれた。

「迷惑なことを考え出す奴だなあ」

即座に言ったのは風間部長。

「俺たちだって暇なわけじゃないんだぜ？体育祭の後夜祭や他にだってステージが控えてるんだから」

まあそうだ。

体育祭は9月の終わり、その後は公民館の秋ライブがある。

今やってるマラカスト訓はまさにそのためのものだし、これに加えて新曲を作ったり挿入曲考えたりってのはちょっと厳しい。

「でも、ただでさえ先輩たちのなりは校則違反もいいところで先生たちの心証が悪いというのに、このままバンドの態勢で活動を続けていたら軽音部は間違いなく廃部になりますよ。先輩たちはそれでいいかもしれないけれど、まじめにやっている私とあかねちゃんはそれでは困るんです。だから、ちゃんとした活動をしている軽音部も示さないといけないでしょう」

——確かにそうだ...

演劇部と共同制作をマジメにやれば健全な部活動として認めてもらえるだろう。

でもそれってかなり都合よく...

「こじつけすぎじゃん...？」

って気はしないでもないけど...

「先輩、いつか言いましたよ。軽音楽部は演劇部に合わせるって」

ヒカルの目が怪しく輝いた。

確かに言ってたよな、風間部長。

だから今日だって臨時活動を優先させてやったわけだし。

でも、それは...

「こういう意味じゃなくて...、」

ヒビクに最後まで言わせずヒカルはすかさず、

「男が一度自分の言ったことに言い訳するんですかぁ〜?!」

と、つつこんだ。

もうアツパレもいいとこ。

こうまで鮮やかに切り返されると何も言えないだろ。

この勝負、

「ヒビク、お前の負けだな」

「俺の負け!？」

ヒビクは目ん玉を丸くし、ヒカルはニンマリと笑う。

このテンポも絶妙なり。

「俺は別にやってもいいぜ?ヒカルの言うことにも一理あるし。な?」

松山兄弟や柏木にふると、兄は言った。

「演劇部とカチカチ山ってのも面白そうだよなぁ?ラブラブレーションだぜっ!」

「ラブラブレーション?!」

全員また声が揃っちゃった。

「そう。仲良く一緒に共同制作するって意味!お前ら知らないの?」

兄は、へへん、と自信持って言うけど、

「それ、コラボレーション...」

柏木がこっそりと訂正する。

「ラブラブでもコラボでもなんでもいいけど、演劇部と共同?アンデルセン?俺たちがかぁ〜?

」

ヒビクはブックキャスルの面々を見回す。

確かにみんなアンデルセンってタマじゃない。どっちかって言えばカチカチ山のがあってるかもしれない。

「いいじゃないですか、ラブラブレーション!それいただきっ!」

と叫んだのはヒカル。

お目目が輝いちゃってます。

ふとあかねちゃんを見ると、不安げな目でヒカルを見つめていた。

「廃部寸前の両部をみんなで盛り上げましょう〜。愛情を込めてっ!」

「よっしゃあ、乗ったあ!カチカチ山だあ!」

こいつら揃ってお祭り好きだ。
ここでもう盛り上がっちゃってる。

「...ったく、ヒカルだよなあ...。やっぱお礼どころかやっかいごとしか持って来ねえ」
ヒビクが呟いた。

「お礼？なんの？」

「.....まあいいか！かわいいあかねちゃんの頼みだし！」

突然ふられたあかねちゃんは、え？という顔をしてヒビクを見た。

まるで、私、別に頼んでません...と言いたげに。

ヒビクはそんなあかねちゃんの頭をよしよし撫でたりしてやがる。

「あ、あの...？」

あかねちゃんは頭の上のヒビクの手を見上げておどおど。隣のヒカルはこっそり鼻を膨らませてる。

どーでもいいけど俺のあかねちゃんにあんまり慣れ慣れしくすんなよなあ！

——ん？俺のあかねちゃん...？

「？」

あかねちゃんがふと俺を見た。

「.....」

突然こっぴどかしくなった。

あっちの方では兄が柏木を相手にしてまだラブラブレーションがどーのこーのと騒いでる。

ラブラブレーション、か——。

.....ちょっといいんじゃないの？このコラボ。

どこかで何かが始まりそうな予感がした——。

9 微熱症候群

降水確率60%っていう天気予報があたって午後から雨になった。

梅雨の曇天から雨っていう、こーゆー天気が一番ダメ。今日は朝から頭がボーッとしちまって何やっても集中できない。

窓辺の席で灰色の空から落っこちてくる無数の透明な`線、を頭の中空っぽになってる状態で見てると、

「田村くん、掃除の邪魔だからそこどいて！」

と、背中をグイッと押された。

気が付きゃ6時間目がいつの間にか終わっていて清掃時間になっていた。

俺をむげに押したのはもちろん小早川環ちゃん。

あっという間に頬杖をついてた机を移動されちまったんで、そのままぶざまにズッコケちまった。

で、まだ俺がそこにいるってのに小早川は、どいてどいて、とモップで攻めてくる。居場所がなくなっちまったんで仕方なく廊下に出た。

昨日は軽音演劇両部の合同制作について、あっちの鳥海部長がこっちの風間部長に正式に申し入れに来た。

出来たばかりの台本を手渡されて俺たちは音楽全般を任された。鳥海部長は音楽は別にオリジナルじゃなくてもいいと言い、ライブも抱えてる俺たちにしてみればそれはとってもありがたいお言葉だったのだが、

「え〜っ？せっかく合同でやるんだし台本がオリジナルなんだから、音楽もオリジナルで行きましょうよ！」

.....と、この時は軽音楽部員の立場に立ったヒカルが言った。

当然ヒビクは異を唱えるだろうと思いきや、

「...まあ、そうだよな」

珍しくヒカルに同調した。

「おい、ヒビク、作曲大丈夫なのか？」

俺たちの中で曲作りが出来るのはヒビクしかいない。

音楽全てオリジナルっていうと一曲二曲じゃすまないだろう。

「まあ...、この台本を見る限りテーマ曲一曲、あとは小曲が四、五曲あればよさそうだから何とかなるだろ...」

ヒビクは台本に目を通しながら言った。目がマジだった。

合同制作には最後までゴネてたくせに、やるとなったら完璧主義なウチの風間部長だ。

「ヒビク先輩はそう言ってくれるだろうと思ってました！」

と、ヒカル。

案外、人を持ち上げるのが上手いやツかもしれない、って思ったら、
「ヒビク先輩は音楽にはこだわりがありますもんね！」
ヒカルはさらりと言って笑った。

――あ？

俺たち5人とあかねちゃんの目が一斉に点になってヒカルを見た。

確かにヒビクは音楽に関しちゃ細やかなこだわりを持ってる男だ。ピアニスト無しで一年やって来たのだからヤツのこだわりからだし。

けど、そーゆーヒビクの繊細な感性を、極致的音痴のヒカルが見抜いてるなんて信じがたくて。

全員に半ば呆然と見つめられて、

「...なんか違います？」

ヒカルが俺たちを見回しながら呟くと、

「いや、違わない」

ヒビクはニヤリと笑った。

「あ、それから先輩たちはわかってると思いますが、あたしとあかねちゃんは合同制作においては演劇部の方に入りますから、ピアノパートがない曲を作ってくださいね」

「ああ、そりゃわかってる」

と、ヒビク。

「それからマラカスパートもぬかしてくださいよ？」

松山兄が後ろで、そんなのあたりめえだろ、ヒカルのマラカスだし...、と呟いた。

この時にふとあかねちゃんを見ると、ヒカルの隣で大きなため息をついていた。

ヒカルは松山兄の発言に抗議してる最中であかねちゃんの様子に気がとまってなかったみたいだけど、あかねちゃんは何だかひどく憂鬱そうな顔をしていた。

どうしたんだろ――？

何か心配事でもあるんだろうか...

俺が見てることに気が付いたあかねちゃんは、焦ったように慌てて笑った。

けど、笑顔は引きつってたし目もどこか頼りなくて。

俺もバカみたいにじっと見てたんだろう。そのうちあかねちゃんは困ったように俺から視線を外しちゃった。

それからあかねちゃんとヒカルは鳥海部長に言われて演劇部の活動に行っちゃった。ハツラツと跳ねるようにして音楽室を出て行ったヒカルとは対照的に、肩が沈んだあかねちゃんが無性に気になった。

はい、そうです。

どうもこれが気になっちゃまっていけない。

天気うんぬんかんぬんじゃなくて、気が付くと昨日のあかねちゃんの顔を思い出してる今日の田村くんってわけなのです。

「田村く～ん？」

って名前を呼ばれ、目の前で灰色の何かが行ったり来たりした。

どこを見てたんだかわからない視点をその灰色のものに合わせると、

「げっ！雑巾じゃんっ！」

親指と人差し指でつまんだ雑巾を、小早川が俺の鼻先スレスレのところでゆらゆら揺らしてた。

「……雑巾だよ？」

小早川は当たり前でしょ？というように言った。

「これ、洗っといてね？」

素敵にねずみ色にこきたなく汚れた雑巾を、小早川は俺の手にしっかり握らせてくれた。

「堂々と掃除サボって何やってんのかと思ったら、こんな廊下でぼ～っとしてるだけ？どうしたの？」

「いや～？べつにどーも…？」

「熱でもあるんじゃない？」

——熱…あるかしんない。

ここんとこ、突然むずっとしたりぶるっときたりするし。

なんかヤバイ病気かもしれねえ。

恋の病…とか。

——ってというか、誰に恋してるってんだよ、俺！

「ちょっと田村くん大丈夫？顔が赤いよ？そして、それ雑巾だよ…？」

うげっ！！

おもいきり顔ふいちまってるし、俺！

「...だ、大丈夫じゃないかもお...」

わけわかんないこの身体の火照りはいったい何だ？

「じゃ、早くそれ洗って帰りなよ？ついでに顔も」

——これ洗うのね、やっぱ。しゃあねえな。気を取り直してやるか。

けど、雑巾をゴシゴシこすりながらも頭に浮かぶのは、やっぱりあかねちゃんの顔だった。

◇

放課後、いつものメンバーでぞろぞろ昇降口にやってくると、あかねちゃんがいつか購買部で会ったシンメトリーな美少女と一緒にいた。

「あ、田村先輩」

あかねちゃんは目を山型にしてふんわり笑った。

ほわんとしたマシュマロのような雰囲気にもどうしても全身が痒くなって、無意味に顔も火照る。

今の俺の顔を鏡に映したらきっとおもいきりニヤケてるだろう。

やべやべ...。ヒビクたちに悟られちまう。

ここは冷静に落ち着いて...

「おう、あかね」

なーんてスマートに先輩ぶって返事してみた。

「雨、降ってきちゃいましたね」

透明な声で言ったあかねちゃんはいつものあかねちゃんだ。

昨日の深いため息はいったいなんだったんだろう——？

にこにこしてるあかねちゃんの顔を見ると、余計にそのことが気になって、

「あかね、元気か？」

って訊くと、あかねちゃんは一瞬すくんだように見えた。

「...元気ですよ？どうしてですか？」

どうしてって訊かれると何て答えたらいいのかわかんねえ。俺が勝手に気になってるだけだし

。

まさか今日一日中、あかねちゃんの顔が浮かんじゃってぼ~っとしてた、なんてことは言えないわけで。

「いや...、何となくその...、」

って、しどろもどろな言葉を繋げようとしてたら、

「あ、群竹くん...」

あかねちゃんは視線を、俺から別のところに持って行っちゃった。

俺の目の前に `そいつ、はいた。

「群竹くん、また明日ね」

あかねちゃんが優しくふんわりと声をかけた。

――ってのに、群竹くんはチラッとあかねちゃんを見ただけで返事も返さず、突っ立ってる俺をじっと睨んでる。

どうやら俺が群竹くんの下駄箱を塞いじまっていたようだ。ココ？と下駄箱を指差すと、群竹くんは無言で頷いた。目つきがやたらと鋭い。

とりあえずその場所をどいてやると、群竹くんはまた無言で靴を取り出し、軽く俺に会釈して行っちゃった。

「...なんだ？あいつ？愛想ねえなあ...」

「同じクラスの群竹くんです...」

あかねちゃんは雨の中に行く群竹くんの背中をじっと見つめちゃったりして。

――ったく、なんだよあいつ...。

妙に胃のあたりが落ち着かない気がしてる間に、あかねちゃんはシンメトリー美少女と一緒に帰っちゃった。

どこかで虚しい風がひゅう〜っと吹いた。

「参ったなあ。かなり降ってるよ.....」

虚しい声で呟いたのはヒビクだ。

玄関から外の雨を眺め、ヤツはため息をついた。

「傘ねえの？」

「持ってこなかった」

「降水確率60%だって言ってたじゃん」

ヒビクの横で傘を開いたのは松山兄。

「だって邪魔じゃないか。朝降ってなきゃ持って来ねえよ、普通」

「持って来るでしょ、普通...。梅雨だし...」

柏木がさり気なく突っ込む。

「自業ジゴクだね～」

松山弟はあっさりと言い、傘を開いて先を行った。兄と柏木もその後に行く。

「チッ、しゃあない…。濡れて帰るか…」

弟の意見には同感だけど、この雨じゃ駅に着くころには制服は絞れるくらいに濡れちまうだろう。男がふたりで相合傘ってのもカッコつかないけど、しょうがねえよな。

「入れてってやるよ」

俺はヤツの上に傘を差し出してやった。

「…優しいなあ、田村くん」

ふたりで雨の中を歩き出したはいいけど狭いんだよなこれが。ヤツの右肩、俺の左肩は傘から飛び出て雨に打たれる。隙間がないくらいに密着すればいいのかもしれないけど、さすがに気持ち悪いだろ…。

ヒビクは、やっぱ濡れて行く、と腹をくくったようで傘から出た。

その時、

「ヒビク先輩！」

後ろから声をかけて来たのは合羽を着て自転車を転がしたヒカルだった。

雨が降ってるのにヒカルがいる場所だけ妙に明るい。

「先輩、濡れてますよ？傘ないんですか？」

「まあね…」

ヒビクは濡れた肩や髪の毛の雨粒をパッパと手で払いながら言った。

「風邪引いちゃいますよ！これ、貸してあげます」

ヒカルの場所が明るかった訳がこの時にわかった。

ヒカルが、貸してあげます、とヒビクに差し出した傘は…、

「……えっ?!」

と言ったままヒビクが絶句して立ちすくむほどに鮮やかな黄色の……、

「おもいきりひまわりだし、これ……」

ヒビクに自分が差していた傘を半ば無理やり押し付けてヒカルが行っちゃってからしばらくしてから、ヤツは呟いた。

大きな黄色いひまわりがいっぱい咲き誇っている傘を、それでもヒビクはしっかりと差している。

「……なんか、めまいがしてきた俺…」

耳まで赤くしたヒビクが言った。

「熱でもあるんじゃないの？」

ヒビクは自分の額に掌を当て、

「……あるかも」

と、呟いた。

「よかったじゃん。ヒカルにお礼してもらってさあ」

「…お礼かぁ？これ差して帰るのかよ、俺が…」

と、言いながらもヤツは顔のニヤケを隠せない様子だ。

こいつも熱あるぜ。

「濡れるよりはマシだが。熱が上がっちゃったら大変だしな！」

という、ヤツは、ハッ！と笑った。

松山ブラザーズと柏木はずいぶん先のほうまで行っちゃってた。

黄色いひまわりの傘を差したヒビクは、いつものヒカルみたく跳ねるような足取りでやつらに追いついていく。

雨の中で鮮やかに映えるひまわりの陰に、何故かまた昨日のあかねちゃんのため息が浮かんできて、むずっとしてぶるっとして、身体の中がじわっ…と熱くなった。

10 ナイシヨの特訓

来週から期末試験が始まる。

そろそろ内申ってコトバが重たくなってきた今日この頃、成績優秀な柏木を除いた俺たちブックキャスルズはくら一い毎日を送ってる。特に松山ブラザーズなんかは補習補習で、ここ最近では部活も満足にできない状態。柏木に言わせると、試験の前に補習をやってくれるってのはずいぶん親切なんだそうだ。けど、松山兄弟にとっちゃ、放課後の貴重な時間を補習と権田のイヤミにとられちまうのは、

「けっ！」

.....なんだそうで、だったら補習を受けなくてもいいぐらいな学習能力を身に着ける、と英語パーフェクトなヒビクに突っ込まれてまた、

「けっ！」

と毒を吐く。

まあ、補習こそ受けてないけど、俺もあんまり呑気はしてられねえ立場ってのは松山兄弟と同じ。1年1学期みたく単位を落とすわけにもいかないからそれなりにマジメに試験勉強ってのはやってる。あくまでも、それなりに、だけど。

演劇部との共同制作は夏休みになってから本格的にはじまるらしく、烏海部長は今台本の調整をしてるみたいだし、ヒビクはメイン曲を外したその他の小曲を作ってる。俺たちがやることは、自分たちのパートを自分らでアレンジするってこと。これも夏休みに入ってからじっくり取り組もうと思ってる。とりあえず今は期末をクリアしねーとなんねえから！

そーゆーわけで、今日が今学期最後の部活。

演劇部は昨日で終わったみたいだから、あかねちゃんやヒカルも久々に集まった音楽室。

けど松山ブラザーズは補習で欠席。

情けねえなあ...

「しばらくマラカスやってなかったから勘が鈍ってそう」

って、ヒカルがもっともな顔をしながら言ったときはぶっ飛んだ。

確かにヒカルがマラカスを握るのはずいぶん久しぶりだ。けど、勘が鈍る何て言えるほど鋭く仕上がってなかったような気がするのはあたくしだけでしょうか？

ニヤついたヒビクが、

「じゃ、鈍った勘を取り戻そうぜ？俺の歌に合わせて振ってみろよ？」

と、言うと、ヒカルは元気よく、はい！と返事をし、アカペラで歌い始めたヒビクの声に合わ

せてシャカシャカとマラカスを振った。

「今日はヒカルちゃん、どこまで行くかなあ？」

柏木が俺の横でぼそっと呟いた。俺も久々に見るヒカルのこん棒ダンスを密かに期待してたけど、なんでしょ、まったく…。今日はちゃんとしびくの隣でリズムを取りながら軽やかに振ってるじゃないですか…。

俺のギターには合わせられないけどしびくの歌にはちゃんと合わせられるんじゃない。

「あれれ、面白くない…」

と、柏木。

ほんと、面白くない。

特訓してやった俺たちのあの苦労はいったい何だったってわけ？最初からしびくがヒカル番やりゃあよかったんじゃない。なんだかんだ言ってこいつらしい雰囲気だぜ。本人同士はそう思っちゃいないんだろーけどさ。

半ば呆気にとられ、半ば憮然としながらふたりのセッションを見てる俺たちの横で、ピアノの前に座ったあかねちゃんもふたりを見ていた。

今日のあかねちゃんはさくら色の頬を輝かせニコニコ笑ってる。身体で軽くリズムを取りながら、ピアノを挿し込むタイミングを見ているようだ。俺はそーゆーあかねちゃんがみよ〜に嬉しくて、つつい顔が、ほにゃらん…とほころんじまう。

「…ん？」

バカみたいにじーっと見惚れてる視線を感じてなのか、あかねちゃんは首をかしげて俺を見た。

「あ、あかね、嬉しそうだな？」

「はい。ここでピアノ弾くの久しぶりだから！私はやっぱり…、」

と、言いかけてあかねちゃんは、

「…あ、いえ、何でもありません」

少し慌てたように言い直し、そのうちしびくたちのセッションに参加した。その後に俺も続き、柏木も続き、ありゃりゃん、見事な『光の城』が出来上がっちゃったぜ。

ヒカルはどーゆーわけか、こん棒ダンスからマラカスダンスに昇格してるし、何よりもあかねちゃんが生き生きして嬉しそう。

ほんと、音楽が好きなんだな。

ピアノを弾いてる時のあかねちゃんは、いつか松山弟も言ってたけど度胸が違うように見える。透明で鮮やかなピアノの音色はしっかりと俺たちをリードしてくれてるし、鍵盤を叩くあかねちゃんからは芯の強さを感じられる。

ふわふわしてて頼りなくて手を差し伸べてあげたくなっちゃうんだけど、たぶんそれだけじゃない…な、あかねちゃんは。

下校チャイムが鳴って補習ブラザーズもやっと補習から解放され、これから俺たちはいつものように牛乳屋でいっづく...ってな予定。

「夏休みはまたヒカルちゃんたちは演劇部専念？」

帰り支度をしながら柏木が言った。

「少し目途が立つまではきっとそうなっちゃいますね。役も決まったから台詞を合わせたり演出を考えたり、5人しかいないからみんなでそーゆーのやるんです」

ヒカルは目を輝かす。

きっと頭の中では演出の色々なイメージが浮かんでるんだろう。ちょっと覗いてみたい気がする。

腹減った、と騒ぎまくる松山ブラザーズは先に音楽室を出、柏木とヒカルもそのまま喋りながら廊下に出た。ヒビクは教室にカバンを取りに戻るって言うんで俺は音楽室の鍵を預かり、鍵盤を掃除して丁寧にピアノをしまっているあかねちゃんを待つ。

みんなが行っちまって静かになった音楽室――。

閉じたピアノのトップをぼんやりと磨いていたあかねちゃんは、張ってた弦が緩んだようにまた深いため息をついた。たぶん、無意識に出ちまったため息なんだろうと思った。そのあとあかねちゃんは気を取り直したように背筋を伸ばして、

「田村先輩、お待たせしてすみませんでした！」

と、笑ったからだ。

この間から気になってたけど、何か無理してるよな、あかねちゃん。

「あのさ、あかね？俺の勘違いだったらごめんな？」

一応先に断ってから俺は、

「...なんかあった？」

と、訊いてみた。

ただ気になったから普通に何気なくナチュラルに訊いただけだった。なのに俺を見上げたあかねちゃんは突然今にも泣き出しそうに顔を歪めた。けど、それを一生懸命隠そうとしてる。

ピピピ！注意報発令！

田村くん、ただでさえこーゆーシチュエーションにはめっちゃめっちゃ弱いのに、相手はあかねちゃんだぜ？注意報どころじゃない、レッドゾーンに入っちゃいそうだ。

「あかね～？どーした～？」

わざとおちゃらけてあっけらかんと言った。

じゃないとマジでヤバイから。

何がヤバイって、俺がヤバイ。

どーヤバイのかわかんないくらいにヤバイ。

「べつに...、何もどーも...しません...ですよ...？」

って変な言葉遣いであかねちゃんは平然を装いながら答えた。

何もどーもしてないわけねえな...

けど、あんまりツッコんで訊くのも何だから、

「...じゃ、行こうぜ？ヒカルたちも待ってるし」

あかねちゃんを促そうとした時、子羊のように頼りない目と俺の目が合っちゃった。

そしたらもう、黙ってらんなくて、

「あ〜、あのさ？俺でよければ話してみろよ？」

って言ってた。

あかねちゃんは、う...っと詰まって、こりゃ泣かれちまうかなと思ったけど、それは必死に我慢してくれたようだ。もしもここで泣かれちゃったらどーしていいかわかんなかったからあかねちゃんの頑張りに感謝した。

あかねちゃんはスーッとひとつ深呼吸をしてから、

「.....演劇部のことなんです」

言葉をひとつひとつ選ぶようにして話してくれた。

合同制作の台本はアンデルセンの『みにくいあひるの子』を脚色した物語で、あかねちゃんに与えられた役は、本当は白鳥だけであひるの子どもとして育てられる主人公をいじめる兄弟の弟らしい。ちなみにヒカルがその兄の役。

5人しかいない部員だから、ひとつひとつの役が重要だし台詞も多いんだそうだ。

けどあかねちゃんは、一年だし大根役者だから台詞もひとつかふたつあるぐらいだろうと思っていたらしくて、台本をもらって配役が決まった時は目の前が真っ暗になっちゃったそうだ。

「私...、こんな大事な役をやれる自信がないんです。発声も私ひとりだけがまだちゃんとできなくて...」

あかねちゃんはうつむいた。

「.....私、最近ちょっと情緒不安定で、これに限らず全部に自信が持てないんです。だから今言ったこと、あんまり気にしないでください。そして、ヒカルちゃんには言わないで」

そう言ってあかねちゃんは笑おうとしたけど上手く笑えなかった。

情緒不安定.....。

——って、女の子にはよくあることなんだろう。

ウチのクラスにもひとり、いつもいつも不安定で機嫌の悪い人がいるし...

「ヒカルにはもちろん言わないさ」

「すみません...。とにかく夏休みの間に頑張っ、こーゆー自分を克服しようって思ってます。みんなの足は引っ張りたくないから...」

あかねちゃんにとっちゃ、演劇部の活動はきっとどこかで負担になってるんだろう。役とか発声とか色々あるだろうけど、あかねちゃんが一番やりたいのは音楽なんじゃないだろうか。さっきピアノを弾いてた時のあかねちゃんを思い出してそう思う。

けど、頑張ってるんだよな、あかねちゃんは。

ヒカルがマラカス頑張ってるのと一緒にだ。

あっちはあっけらかーんと苦手を苦手と認めながらも周りまで巻き込んで楽しんでるけど、あかねちゃんにそれはきっと出来ないだろうし。

真面目なんだな。

あかねちゃんのそーゆーところ、凄くわかる気がする。

俺も似たようなところあるかもしれない...

「ここでちょっと大きな声出してみ？発声練習」

と、言う、あかねちゃんは目を丸くして、

「恥ずかしいですう...」

と、うつむいた。

「俺しかいないんだからいいじゃん？発声のコツは....、」

「お尻...をキュッ...としめて腹筋...ですよ？ヒカルちゃんに教えてもらいました」
なるほど。

ヒカルはヒビクが言った発声方法でコツを掴んだようだ。

「とりあえず、あかねのまんまで発声してみ？」

「私の、まんま...」

あかねちゃんは、スッと息を吸ってお腹を押さえ、

「なまむぎなまごめなまたまご〜」

と、発声した。

その可愛いこと可愛いこと…。

ひたむきで働くて、ほんと、なまたまごがそこにコロソと転がってそうで…。

確かにこれじゃ、発声にはなってない…な。

俺が惚れるだけで。

——え？

「……ダメですよ、私の発声…」

いや、決してダメじゃないって。

ただ、俺が惚れるだけで。

——いや、そーじゃなくって！！

やべ。

俺こそ情緒不安定だぜ。

「あいうえおあお～っ！かきくけこかこ～っ！」

あかねちゃんはまたお腹を押さえて、さっきよりは少し大きな声を出した。

そして続けて叫んだ。

「このやろ～！よくもやったな～！」

——はいっ、すみませんっ！？

たぶん、俺は目ん玉まんまるくしてあかねちゃんを見てたんだろう。

「…あ！これ、台詞なんです！」

あかねちゃんは真っ赤になって言った。

「……台詞？ `このやろう～！、って、あかねちゃんが……？」

こくと頷いて、あかねちゃんはまたため息。

「私がこのやろ～って叫んでも全然このやろ～の意味に聴こえないですよ、ね…」

「……………」

この台詞ひとつにしても、本当に気が重いんだろーな。

でも…、

「…いや？今の `このやろう～、はなかなか良かったぜ？俺、心の中で謝っちまったから！」

「す、すみません…っ！」

――応援してやりてえ。

あかねちゃんに自信持ってもらいてえ。

君は俺にもヒカルにも弾けないあんなにすばらしいピアノを弾ける子なんだぜ？

誰だって得意不得意はある。

その不得意なことを、悩んでも頑張ろうとしてるあかねちゃんだもんな…。

「明日から期末が始まる来週までの間、俺が発声の特訓してやるよ」

「…田村先輩が？」

ヒカルのマラカスト訓で多少は俺だって人に教える根性ついたし、ヒカル番はヒビクに返上して…

「……今度はあかね番ってことで！」

「…田村せんぱあい…」

あかねちゃんはこくと頷いた。

「けど明日からはもう部活はないから昼休みにここでどう？ほんの20分ほどの特訓になっちゃうけど…」

「それでいいです！よろしくお願いします！……あ、でも田村先輩…」

「ん？」

「恥ずかしいから…みんなにはナイショにしてくださいね…」

――ちょっとドキッとしちまった。

あかねちゃんと俺のナイショの特訓――。

「了解…」

頭ぼりぼり…だぜ。

やっと本当の笑顔になってくれたあかねちゃん。

この笑顔のためならボクはなんだってやっちゃいます――。

11 白と黒の闘い

今日から期末が始まるまでの3日間、昼休みを使ってあかねちゃんの発声を見てやるんで音楽室に来た。

あかねちゃんはまだ来てなくて、音楽室には当然誰もいなかった。

とりあえずいつも練習してる時の自分のポジションに居場所を決め、そこであかねちゃんが来るのを待つ。

けど、どうも落ち着かない。

部活の時だってだいたい一番に来て同じ場所でみんなを待ってるのに、今日はギターの代わりに手に持っているのは台本だ。

よく考えたら変だよな？

特訓するのは音楽じゃなくて演劇の発声で本当なら俺の出る幕じゃねえことだし。

——明日から期末が始まる来週までの間、俺が発声の特訓してやるよ。

あんな風にカッコつけて言っちゃったけど、歌ならともかく、演劇部でもない俺が台詞の発声なんて教えられるのか？と、今頃になって自分に突っ込みを入れてる。

で、さっきから俺の頭の中をぐるぐる回ってるコトバは、

下心....

否っ！

そんなもん、ないっないっないっ！

俺はただ、本当に純粋にあかねちゃんの力になりたいだけ！.....だった。

なのに、あかねちゃんが言った『みんなにはナイショ』って言葉から、どーも変な意識しちゃまってイケナイ。一生懸命なあかねちゃんを応援してやりたいっていう先輩としての純粋なキモチがいつの間にか、あかねちゃんとふたりっきりでうふふ、なんてゆう一男子としてのスケベ根性に塗りかえられちまいそうで、今、俺の中で良心の白と下心の黒が戦ってる。

発声、発声、発声！

キモチを発声に集中させなきゃいかんよ、田村優作。

ふたりになったら間違っても、あかねちゃん可愛いとか、あかねちゃん好きだ、何て考えたらダメだ！

——あかねちゃん好きだあ...！？

...ったく、何考えてんだよ、俺！
やたらとキモチが暴走しちまう。
集中しろ、集中！発声だぜ、発声！
...と、演劇部からもらった台本に目を落としたとき、

「田村先輩！遅くなってすみません！」

あかねちゃんが飛び込んできて心臓が どきんっ！ と鳴った。

「お、おう...」

まともにあかねちゃんの顔が見らんなくて言葉だけ返した。
黒に負けてる、今の俺。頑張れ、白！

「お弁当を食べた後、ヒカルちゃんと麻耶ちゃんに『どこ行くの？』って訊かれちゃって誤魔化すのに時間がかかっちゃって。私、ナイショごと苦手だから...」

ナイショごと.....。
ダメ、その響き。
優勢黒...。白～、出てこーい。

「...じゃ、時間もないから始めようぜ？」

「はい！よろしくお願いします！」

「んじゃまず、かるーく発声してみ？いつも演劇部でやってる感じでいいからさ」

「はい...。では...、」

あかねちゃんは背筋を伸ばしてスーッと深呼吸をした。

けど、リラックスするどころか余計にコチコチに固まっちゃったみたいだ。そんな調子で、

「なまむぎなまごめなまたまごお～～」

って叫んだもんだからもちろん声に張りはなくやたら可愛いし真っ赤な顔したあかねちゃんめちゃくちゃ可愛いしとにかくほんとに可愛くて俺は、

ほにゃらら～～～ん....、

っていつものように腰から足から全身から崩れるようにして萎えちゃった。

そーゆー俺を見てあかねちゃんは、
「...田村先輩、こんにやくみたいになっちゃった...」
と、呟いた。

ダメ、それ反則。
どこまでも可愛すぎて黒、黒、黒！白、頑張れ、コラッ！

「あ、あのさ、あかね？ `なまむぎなまごめなまたまご、はやめない？」
どうも頭の中がなまたまごになっちゃう。
「...じゃあ違うフレーズで言ってみます」
あかねちゃんは首をちょっと傾けて別の発声フレーズを頭の中で探し、
「あめんぼあかいなあいうえお～」
と、叫んだ。そして、
「う...。先輩またこんにやく...」
と、うつむいた。

――だって今度はあかねちゃんが言ったあめんぼって響きがどーにもこーにもくすぐったくて
頭があめんぼになっちゃって...、
って黒が囁いた時、
――あかねちゃんは一生懸命なんだぜ？
ヒカルや麻耶ちゃんにナイショにして、貴重な昼休みの時間を割いてまで発声強化をしようって
頑張ってるのに俺がこんなんでするよ？あかねちゃんに失礼だろーが。マジメに考えろ、
田村優作！
ってようやく白が頑張りだした。
よしっ！

「あかね、発声フレーズだと構えちまわない？関係ない言葉で腹から声を出してみようぜ？」
「関係ないことば...ですか...」
と言いながらあかねちゃんは考え込んだ。
まあ、そうだよな。
いきなり関係ない言葉ってのも思いつかないだろう。
かと言って普通に台本読むんじゃつまんねえし同じだし、ここはちょっと田村くん風発声特訓
をやってみっか。
「しりとりしようぜ？俺も一緒に発声しながら言うから」
「.....しりとり!？」
あかねちゃんは目を丸くして固まった。
「そ。ゲーム感覚でリラックスしながら出来るんじゃないかな？とにかく今のあかねには発声そ

のものもそうだけど、その前に緊張しないで大きな声を出す訓練が大事って気がするからさ」

あかねちゃんは普段あんまり大声を出すこともないだろう。人前で大きな声を出すってのは結構勇気のいることだ。ヒカルみたいにいつでもどこでもにぎやかに大声出して文句言ったり笑ったりしてる子はそれだけで発声も半分出来てるって気がする。あかねちゃんはまずは声を出すってことに慣れないといけない。

「ピアノを弾いてる時は人前だって緊張しないだろ？」

「はい。全然...」

「それは何回も練習して慣れてるからだよな？」

それと、自信だよな。

あの度胸があかねちゃんの中にはもともとあるんだ。

「そうか...。わかりました。私はそこからなんです...」

あかねちゃんは素直に頷いた。

よっしゃ！我ながら完璧な白の勝利！黒め一生引っ込んでろっ！

俺はやっぱ頑張るあかねちゃんを応援したいのさ！

「発声方法は出来ればやって、出来なければ今はやんなくてもいいからとにかく大きな声を出してみ？じゃ、俺から言うから...、」

...って偉そうに講釈したくせに、いざとなったら最初の言葉が浮かばねえ。

えーっと...、んーっと...

「田村先輩...？」

っていう声で頭に浮かんで口から出た言葉は、

「あかねちゃん...、！」

...だったけど、これじゃマズイ！

最後に『ん』がついたらしりとりは負けなんだよな。

だから続く言葉は、

「...あかねちゃん...、は...可愛いぜ！」

...は！？

何ぬかしてんだよ、俺！

最初の言葉がこれかよ！

しかも大音量で叫んでるし...。

「...あの...？」

ほれ見ろ。

あかねちゃんが思いっきり警戒してるじゃんかあ。
けど、ここで引いたらただのスケベバカ。
もう、勢いつけてこのままいくしかねえじゃん…。

「ほら、最初の言葉言ったぜ？あかねちゃんは可愛いぜ、の『ぜ』。『せ』でもいいぜ？」

知らん顔で極力爽やかに笑ってみた。
きっと引きつってただろーけど…。

「えーっと…、ゝ『せ』んばい、ありがとう。嬉しいです、の『す』です」

あかねちゃんがニッコリ笑ってくれたんで救われた。
しょっぱなからいきなり黒が大逆転しちまうなんて思わなかったぜ。
焦った焦った。
よし、このまま爽やかに続けて行こう。

「ゝ『す』てきなその台詞はもっと大きな声で言いましょう、！の『う』」

あかねちゃんは、あ、そうか、と呟いて、

「ゝ『う』れしいです！田村せんばい、！の『い』」

今度は大きな声で言った。

「ゝ『い』ーえ、どういたしまして、！の『て』」

『て』ですかあ…？とあかねちゃんは考え、

「あ…、ゝ『て』スト、いやですね～、！の『ね』」

と、笑った。

そーだよ、来週から嫌な期末テストなんだよな…。

「ゝ『ね』（寝）ないで勉強しないと単位落としそうだ、の『だ』か『た』」

「ゝ『た』んい（単位）落としたらたーいへん！…あ、『ん』になっちゃった…。たーいへんだから、寝ないで勉強しましょうね、の『ね』」

あかねちゃんは、ふうと息をついてチラッと俺を見た。

「あかね、今ズルしなかった？」

「いえ、しませんよ…？」

そーやって楽しそうに笑いながらちゃん大声を出す練習にもなってるしー石二鳥じゃん！ずるされたってなんだっていいすよ、ボクわ！こんなしりとり発声トレーニング、ヒビクや松山ブラザーズたちに見られたら超バカにされそうだけど。

「『ね』ないと身体によくないからやっぱり寝る！の『る』」

「ええ～？！『る』ですかあ？！」

あかねちゃんは今までで一番大きな声を出した。

それが、発声を無意識に意識してたのか、ちゃんと腹の底から声が出ていていい感じだった。

「あかね、だんだん声を通るようになってるぜ？」

「ほんとですか！？夢中でわからなかった...」

「この調子でどんどん大声出してみ？今度はちゃんと発声を意識して」

「わかりました！頑張ります！『る』からですよ？」

っていう声もちゃんと大きく出てるし、マジいい感じ。

「そ。『る』。頑張れ、あかね！」

あかねちゃんの顔は桜色に輝いていた。

昨日ピアノを弾いてた時と同じ顔。俺はそれがとてつもなく嬉しい。

こんな特訓で、ちょっとでも役に立てたなら本望。白と黒の闘いはやっぱり純粋な白が勝利だぜ

。

る、る、とあかねちゃんはずいぶん考えて、

「『ル』ビーは私の誕生石～！じゃありません～！本当は～！の『は』！」

と、苦し紛れに叫んだんで、思わずぶはっ！と笑っちゃった。

「なんだ、それ?!」

「...だって、『る』が思いつかなかったんですもん...」

あかねちゃんは首をすくめて笑う。

う...。可愛い...。やっぱりダメ...

——って、おいこら、白っ！どーしたんだよっ！

...ったく、気を抜くとすぐこれだよ、だらしねえ！可愛いとか好きだとかってコトバはこの場で考えるなっつての。いたいけなあかねちゃんが下心の餌食になっちゃうのは俺がゆるさねえ！

...さっきからこればっか。

俺は自分の中のもうひとりの俺と必死にバトってる。

どっちも俺なのにバカみてえだ。

けど、『あかねちゃんは可愛い』って最初の言葉から誕生石まで出ちまった。普通なら絶対に話題にしないような話題だよな、これ。

そう言えばあかねちゃんって何月生まれなんだろう？

「次俺は『わ』？『は』？」

「どっちでもいいですよ？」

「じゃあ...、『は』ち（8）月17日は俺の誕生日！あかねは？の『は』か『わ』」

「『わ』たしの誕生日は2月3日です。田村先輩、プレゼント期待してますよ！の『よ』」

と言ってあかねちゃんはちゃっかり笑った。

「『よ』ーし、まかせとけ！あかねの誕生日は俺が祝ってあげちゃうぞっ！の『ぞ』か『そ』！」

って、俺はまた大音量で叫んでた。

しりとりトレーニングじゃなく普通にこんな話をしたらどうなるんだろう？

誕生日を教えて聞いて俺が祝ってやるなんて、ただの先輩後輩がする会話じゃねえよな…。

やっぱダメだわ、白…。

けど決して完全下心の黒ってわけでもない。

ーだって俺、やっぱあかねちゃんに惚れてるもん。

いくら白と黒が必死に闘ったってそこんところは変わらない。

あかねちゃんを応援したいってのはマジな話。

けど、あかねちゃんと仲良くしたいってのも純粹で自然な望み。

来年の2月3日は先輩後輩じゃなく、カレカノとして一緒に過ごしてえな、何て考えちまってるし。いや、2月なんて遠すぎる。その前には俺の誕生日があるんだ。

8月17日、あかねちゃんが俺の隣にいてくれてたら…。

8月は夏休みだけど、夏休みも一緒に過ごせるような俺とあかねちゃんになれたら…。

「…田村先輩が祝ってくれるなんて嬉しいなあ。楽しみにしてますね！」

あかねちゃんはそう言って邪気なく笑った。

そうだよな。

これは発声練習なんだし、俺がマジで叫んだなんてこれっぽっちも思っちゃいねえよな。

けど、夏休みは目前。

ぐずぐずしてたら俺の誕生日もあつと言う間に過ぎちまう。

「あ、あかね…、あのさあ…」

こーゆーのって勢いが大事だ。

今、こーやって俺の腹が決まっちゃったわけだから…、

「あ！すみません！関係ないこと言っちゃった！私の次は『ぞ』か『そ』でしたよね！」

あかねちゃんは思い出したように手を叩いた。

「いや…、それはもう…」

しどろもどろな俺の言葉はあかねちゃんには届かずに、

「えーっと…、あ、『そ』ろそろ予鈴が鳴っちゃいますね！とっても楽しい特訓でした！田村先輩、今日は本当にありがとう！」

と、あかねちゃんはお辞儀をもって締めくくっちゃった。

――田村優作、告白の機会を逃しました…。

まあ、しょうがない。

考えてみればいきなり過ぎるしな。

それこそ特訓を餌にして下心まるだして思われちまうかもしれねえし。

何も焦ることはないよな。

もっとじっくりあかねちゃんに俺って人間を知ってもらってからでもさ。

「『う』ん！」

とりあえず『ん』で締めると、あかねちゃんは、「田村先輩の負け～！」と笑った。

わざとだったんだけど…。

「明日もよろしくお願いします。この発声練習凄く楽しいです」

「おお！」

あかねちゃんが自信をつけて、演劇部も軽音楽部も楽しくできればオッケー！

特訓は限りなく白に近い灰色ってことで。

丁度のタイミングで予鈴も鳴り、俺たちは一緒に音楽室を出た。

で、階段の踊り場でまたアイツに会った。

目つきの悪い、アイツ。

「あれ？群竹くんどこに行くの…？予鈴鳴ったよ…？」

階段を下から上がってきた群竹クンにあかねちゃんは声をかけた。

たった今までの発声をすっかり忘れたような小さな小さな震えるような声で。

うつむき加減にいた群竹クンは顔を上げてあかねちゃんを見、それから一緒にいる俺のことを相変わらずの鋭い目つきで見た。

「…どこって、5時間目は物理室だろ…」

群竹クンは、はあ…とため息をついてからぼそっと呟いてそのまま三階に上がって行っちゃった。

ほんと、無愛想なヤツ。もっと爽やかに笑えないのかねえ。こんなに可愛いあかねちゃんが声をかけてるってのに。

あかねちゃんは群竹くんが行っちゃった上を見上げながら小さなため息を吐いていた。どーゆー意味のため息なんだろう...とちと気になったけど、すぐに、「そっか物理室...、私も急がなきゃ...！先輩、またね！」と、慌てたように階段を駆け下りて行った。

群竹くんと話すあかねちゃんの声が小さく震えてただとか、俺を見る群竹くんの目つきがやたらと鋭いとか、別にそんなことどーってことないことだ。

けど、胸のここいら辺がぎゅーっと締め付けられるのは何でだろう...？

次の日もその次の日もあかねちゃんとふたりの特訓をやり、俺はますますあかねちゃんへの自分の想いを知った。

それは毎日少しずつじわじわと膨らんでいく想い。

あかねちゃんを知れば知るほど募る想い。

「田村先輩、って俺を頼りながらも、その中に芯の強さと根性が隠れてる。

頼りなくてめっちゃめっちゃ可愛いんだけどどこかで気高いー。

期末試験は密かに頑張った。

俺にしちゃ珍しく、ほんと寝ないで勉強したぜ。

あかねちゃんに恥じない自分でいたいなんて思ってさ。

明日からは夏休み。

もう、あかねちゃんとのナイショの特訓はないけれど俺は決めた。

8月17日、俺の誕生日。

この日までに、俺はあかねちゃんに伝える。

田村優作の熱い夏！

今年こそ実現してやる...、ぜ.....っ！

12 チャンス

8月17日までにあかねちゃんに告白するって決めて、その8月17日まであと三週間ちょい。夏休みに入ったって部活があるから告白のチャンスはいくらだってあるだろうと思ってた。

がしかし、よく考えたらあかねちゃんは演劇部の活動に専念で、それがまたご丁寧に軽音部の活動日とバッチリ重なっちゃってるもんだから、一緒に部活ってな時間はほとんど皆無な夏休みのスケジュールだった。

他の部のヤツらは夏の合宿がある。

けど、予算0で同好会並な扱いの軽音部にそんな洒落たイベントはないし、8月17日までどころか下手すりゃ夏休みの間ずっと、あかねちゃんとコミュニケーションがとれる時間なんてなさそうだ。

——つまんねえ…。

こんなことならやっぱ、ナイショの特訓をやったあの3日のうちに決めときゃよかったぜ。

毎日たった20分の特訓だったけど、俺がここにいるあかねちゃんがそこにいる、誰にも邪魔されずに大きな声を出し合ってた。

最初は多少違和感もあったしりとりな発声も、二日目、三日目は俺とあかねちゃんにしかできねえスペシャルな特訓のようにじっくり馴染んでたぜ。

ああ…、あのふたりだけの時間が恋しい。

ここで笑ってた笑顔と声が恋しい。

目の前に見える顔がこんなヤツラの顔じゃイヤだっ。

「田村、音外れてるぜ？」

目の前の松山弟に言われてハッとした。

「…あ？」

「あ？じゃねえよ。さっきからボーッとしゃがって、夏バテにはまだ早いぜ？」

「…わりい」

演劇部との共同制作『みにくいあひるの子』の劇中に挿入する小曲をさっきヒビクは一曲完成させた。

譜面にのたうち回ってるおたまじゃくしを解釈しながら、今俺たちは自分の担当するパートのアレンジをやってる。

俺と松山弟は共にギターなんで、ベースの兄と合わせて3人で音を鳴らしてたわけだけど、どうやら俺のリードがおもいきり外れてたらしい。

――頭の中、あかねちゃんだらけだったから。

けど、そんなことコイツらにちょっとでも悟られちゃったら、俺のうるわしい学園生活はそこからチャカされまくりなおちゃらけコメディにされちゃうから、このことはトップシークレットを守っていかなきゃ、だ。

「...ちょっと考え事してた」

「田村がボーッとするほどの考え事なんて、惚れた女のことしかねーだろ」

うげっ。

おもいきりバレてるし...

ふたりの俺を見る目が怪い輝きを発してて、このままだと余計なツッコミをされそうだったから、

「...ちょ、ちょっと便所」

と、廊下に逃げた。

けど、ちょっとボーッとしてただけでどうしてこうもすぐバレちゃうのか。

仲間内の呼吸が合いすぎるってのも考えもんだよなあ...、なんてことを何気なく思いながら水飲み場まで来ると、

「このやろ～！よくもやったな～！」

聞き覚えのある台詞がどこからか聞こえてきた。

続いて、

「一番チビのくせに、なんてことしやがるんだっ！」

「おかーさんにいつけてあげる！」

「お母さんはきっとひどく怒って、お前なんか夜ご飯抜きだっ！」

知ってる台詞が次々と追いかけてきた。

これはまさしく演劇部！

声がる方向に引き寄せられるように移動して、その場所の窓から下の中庭を覗くと、いました。演劇部の5人が中庭の石段の上で、台本を手にしながら台詞の読み合わせをしていた。

「あいつったらこんなにバカにされていじめられているのにヘラヘラ笑ってるんだ。いったいどういふ神経しているんだ？あんなふうにされていると、何だかボクたちの方がみじめになってこないか？」

ヒカルの台詞は棒読み。

でも、それもまた初々しくていい。

「ねえ、ボクたちはどうしてエミーをいじめんの？お母さんはどうしてエミーが嫌いなの？」

あかねちゃんの透明な声もしっかり伸びてて二階のここまでちゃんと届いてくる。

あの特訓は確実に役に立ったようだ。

中庭ってのは校舎に囲まれてるから風の通りが悪い。

きっと暑くて死にそうになってるだろうに、あかねちゃんの声は張りがあって生き生きとしていた。

こーやって汗だくになりながら同じ作品を頑張ってるあかねちゃんを見て、さっきまでくだらないこと考えてボーッとしてた自分がちと恥ずかしくなった。

コラボレーションってのはそれぞれが最高の仕事をやってこそその共同制作だ。あのナイショの特訓は俺の下心のためじゃなく、あかねちゃんの発声の為にやったんだから。

一緒に部活が出来なくてもつまなくても、やっぱ俺は俺で、今やるべきこと、ちゃんとやらなきゃじゃん…。

ボーッとしてる場合じゃねえよな。

でも今はもうちょっとだけ、久々のあかねちゃんを見てたいなあって思ったけど、

「田村おせーなあ！クソでもしてんのかよっ！？」

っていう、お下品な兄の喚き声が聞こえたんで、俺は仕方なく音楽室に戻った。

◇

その帰り、いつものように牛乳屋に寄ると、

「今時、中学生だって夏休みにクラブ合宿をする時代だよっ！部活に入っている以上、そういった一般的な醍醐味を味わいたいよ～」

大声で喚いているヒカルがいた。

「どこにいても元気がいいなあ、ヒカルは」

声をかけたのはヒビクで、

「あ、田村先輩」

ニッコリ笑ってくれたのはあかねちゃん。

ほにやらん…と顔がほころぶのは俺。

けど、トップシークレット！と、心を戒めて慌てて態勢を立て直す。

ヒカルの周りには1年生のお友達が群がっていた。

いつもあかねちゃんと一緒にいるシンメトリーな麻耶ちゃん、中央委員会で会った剣道少年、初めて会う髪がツンツンと逆立った少年は空手の胴着を肩から提げ、そして同じく空手胴着を提げてる目つきの悪い群竹クンまでいやがる。この目で「とりゃあ〜っ!」、ってやられたら超怖えぞ、と密かに思ったり。まあ、とにかくコイツらは1年F組の仲良し組らしい。

「――ったく、うじゃうじゃ群がりやがって暑苦しいなあ。買い終わったヤツはとっとと出た出たあ!」

松山兄が歩くスペースを塞いでるヒカルたちを手でパッパと拡散させると、一番に歩道に出たのはコーラを手にした群竹クン。歩道のベンチにスッと腰掛けて無言で缶コーラを開けた。

あかねちゃんの視線がそういう群竹クンの行動を最初から最後まで追っていった。

けど、

「ヒビク先輩、私たち今、合宿の話をしていたんです」

ヒカルが言うとあかねちゃんの視線は歩道の群竹クンから牛乳屋のヒカルに戻った。

きゅっ、としてほっ、とした一瞬だった。

あかねちゃんがアイツを見てると、どういうわけか俺の胸はいつもざわざわと騒ぐから。

「ああそう...」

ヒビクはヒカルにそっけなく言い返した。

「ああそうって、先輩!それ冷たすぎやしませんか!?!」

当然ヒカルは鼻を膨らませて抗議をする。

するとヒビクは、「おっ!久々のチャウチャウ〜、とか言ってヒカルをからかう。そうなるところからはいつもの展開。怒るヒカルとからかって笑うヒビク。いつもと違うのはヒカルの横で口を開けてふたりのやりとりを見ているクラスメートたちがいるってことだ。

どうもヒカルは合宿に憧れているらしい。他の部活動のように合宿に行きたいと風間部長に訴えてる。

それに対して部長は冷たく言い放つ。

「あのねえ、俺たちは廃部寸前の身分なんだぜ。予算もなければ行く場所もないの!」

これが現実。

「演劇部と合同で行けばいいじゃないですか〜」

「ば〜か!演劇部だって同じ立場だろうが」

「タロジロ先輩はどうですか?行きたいでしょ?合同合宿?」

ヒカルはくるっと回れ右して、後ろでアイスキャンディーをペロペロやってたブラザーズにい

きなり振った。

「そりゃなあ〜？素敵な出逢いがあるかしんねえし」

本来の目的以外のことに先に頭が行っちゃうのは兄の方。

弟はというと、ぼんやりとアイスをなめながらうつろな目をして別の場所を見てる。

「ジロ先輩、聞いてますか！？」

ヒカルが突っ込むと、弟は視線をヒカルに戻し、

「美人だ...」

まったく関係ないことを口走った。

「そりゃ、あたしは美人です！けど、今はそーゆー話をしてるんじゃないんです！」

何か勘違いしてる風のヒカルだけど、まあいい。

松山ブラザーズの頭の中は出逢いとか美人とか、ようするにそういうことのみで反応してるってこと。

――まあ、俺も同類なんだけど...

って、あかねちゃんをこそっと見たら、タイミングよくその口が、

「田村先輩は？合同合宿どう思いますか？」

と言った。

「俺は...」

合宿、行きてえよ。あかねちゃんと...

――じゃなくて、強化だよ強化！

やっば合宿で集中してやればアレンジのまとまりも早いし内容も充実しそうだし！

「そりゃ...出来れば理想だけど、現実問題としてなあ...」

予算はない、受け入れてもらえる施設もなければ無理ってヤツだ。

「やっぱりそうですか...」

あかねちゃんがうつむいたとき、

「本気になれば出来ないことなんてないですよ！」

叫んだのはヒカルだ。

「...本気になってるの、お前だけ...」

ヒビクがぼそっと突っ込んだけど、そんなことヒカルは聞いちゃいない。

「柏木先輩！おなじものを一緒に制作するのに、みんなの心をひとつにするって大事なことですよね〜？合宿ってそういうのに凄くいいチャンスだと思うんですよ〜」

ヒビクの横で微笑みを携えながら、口を挟まずにことの展開を見守っていた柏木抱き込み作戦に移った。

「.....ったく、ヒカルだよなあ」

ヒビクは小さなため息を吐きつつも、

「あかねちゃんも行きたい？」

と、言うところをみると、ヒカルの演説に心は相当動いている模様だ。

あかねちゃんはチラッと俺の顔を確認するように見た。

この、確認するように、ってというのがみそ。

あかねちゃんはヒカルのように、自分の意見や希望を人に押し付けたり言い切ったりする自信がないんだろう。だから、何かの判断をするときに無意識にどこかで誰かの後押しを求めてしまう。

その誰かってのが俺。

あかねちゃんにとって、俺は頼れる先輩ってとこだろな。

軽く頷いてやると、あかねちゃんは、

「行きたいです！」

と、言い切った。

「そっか…。あかねちゃんが行きたいって言うんなら、顧問に交渉してみっか！」

と、言いながらヒビクはあかねちゃんの頭を撫で撫でしちゃって。

――こら、ヒビク！その役目、本当は俺なんだぜ～？！

けど、ナイショの特訓以来の俺とあかねちゃんに、今まで以上の信頼関係が出来てるなんて、コイツらは誰一人として知らねえんだからな。

「絶対差別っ！」

膨れながらヒカルは歩道に飛び出して行った。

そりゃそうだ。

この扱いの差はヒカルじゃなくたってむくれる。

「ヒカルちゃんにはかなわないね、風間くん」

柏木に突っ込まれたヒビクはバツが悪そうに目を泳がせる。

あかねちゃんの頭を撫でながら、ヤツの心はきっとヒカルをよしよししてるんだろう。

「じゃ、早いとこ交渉しねえと間に合わないぜ？もう夏休みに入っちゃってるし」

「…だな。まったく、やっかいなヤツだぜ…」

とか言いながら顔がニヤついているのはどーゆーわけなんでしょうねえ？

まったく、いつまでたってもお子様ランチだぜ。

その時、背中から刺されるような視線を感じて思わず振り返った。

歩道のベンチに群竹とヒカルがいた。

その、群竹の視線が真っ直ぐ届いている場所はヒビク。

群竹の視線はヒビクを鋭く貫いていた。

俺の目に気がついたのか、群竹はスクッと立ち上がってそのまま歩道を歩いて行っちゃった。

「...あ」

あかねちゃんは一瞬小さな声を出した。

それが、帰っちゃった群竹を見てたからなのか、別のことでだったのか、この時にあかねちゃんを見てなかった俺にはわからなかったけど...

「おーい、ヒカル！」

ヒビクが歩道のヒカルを呼び寄せ、演劇部の鳥海部長たちと顧問に合宿の交渉をしに行くから一緒に来い、と命令した。

ヒカルは「なんであたしなんですかあ〜？、と文句を言ってたけど、ヒビクはヒカルにそれ以上の有無を言わず強引に手を引き、俺たちにはここで待つように言って学校に戻って行った。

「思い立ったが吉日だな...」

一旦肚が決まったあとのヒビクの行動の素早さはいつものこと。

思わず口に出したら、あかねちゃんがくすっと笑った。

「合宿、実現できたらいいですね？」

「アイツがあーやって動いたってことは、もう98%は実現ってことだぜ？おまけにヒカルつきだ。100%決まりでしょう」

「そうですね」

あかねちゃんは嬉しそうに目をニコニコマーク型にして笑った。

ふと気がつくと、松山ブラザーズと柏木は麻耶ちゃんや他の1年生たちと意気投合したらしく、いつの間にか歩道に出て盛り上がってて、今、あかねちゃんと俺はツーショットだ。

——いきなりのチャンス...！

「あかね、明日何か予定ある？」

考えてる間にチャンスが逃げちまいそうだったから、とにかく一瞬で思いついた言葉を言った

けど、

「明日はピアノのレッスンがあるんです...。来月発表会があるので...」

って返事が返って来て一気に脱力しちゃった。

「...あ。田村先輩、またこんにやく...？何か用事ありました？部活のことですか？」

——ええ。素敵にこんにやくです。

「いや！あかねちゃん誘ってデートしたいなあって思ったけどしょーがねえっ！」

本心。

本気になれば出来ないことなんてないですよ！って叫んだヒカルという言葉が頭の中を駆け巡った。

さて、あかねちゃんのリアクションはいかに！

「『え』～？それは残念！今度また誘ってください、の『い』！」

——...おいおい。

これはしりとり発声じゃねえんだってば...

全然本気にしてねえってことなのね、あかねちゃん...

せつないというか、哀しいというか、ほっとしたっていうか——。

「『い』やーだねっ！`今度、はもうないぜ？あ～もったいないことしたねえ～？」

って、乗る俺も俺だけど。

でも、今の俺たちはこの状態がベストってことなのかもな...

しばらくすると、満面の笑みを携えたヒカルと、ややニヤケたヒビクが戻って来た。

夏の合宿が実現することになったっていう知らせを持って。

13 告白前夜 その1

8月7日。

軽音楽部と演劇部は、各部から援助金一切なしの実費オンリーで電車を乗り継いで路線バスでいろは坂登って、ここ、奥日光中禅寺湖畔に合同合宿にやってきた。

「うげーっ！！」

バスを降りた途端、蒼白な顔をした松山ブラザーズは便所に駆け込んで行った。

「タロジロ先輩、大丈夫かなあ...」

優しいあかねちゃんが心配気にヤツラを目で追った。

そんな心配してやんなくたってへっちゃらだぜ...、と、ちょっとジェラシーってのを感じながらも、ヤツラが便所に駆け込みたくなる気持ちもわかった。

路線バスでの峠道はとにかくキツかった。

遊園地のコーヒーカップに乗ったあとみてえに頭はぐるぐる回っちまうし、脳内酸欠状態っていうかも...、深呼吸して身体に新鮮な空気を入れないとムカムカして俺もダメ...

「.....ったく、誰だよ、こんなくねくね坂の上で合宿やろうなんて決めたヤツはあ...。平地にしとけよ、平地にっ！」

便所から帰ってきた松山兄が憔悴しきった顔を「誰だよ、のヒカルに向けて文句をたれた。

合宿だ、合宿だ～、とはしゃいで大騒ぎしてたヒカルが、

「だって、本城高校が毎年利用してる合宿施設、ここしかあいてなかったんだも～ん」

と、口を尖がらせた。

学校が利用できる合宿施設は何箇所か決まってるけど、那須とか山中湖とか清里っていうちょいとばかりお洒落な場所は、前々から手をつけとかねえと借りられない。

合宿に行きたいと言いだしっぺしたヒカルが、風間、鳥海両部長の命令で手配しをし、空いた施設がくねくね坂の上のここだったってわけだ。

「.....けど、合宿シーズンにここが空いてただけでもラッキーだと思うぜ？」

俺はさり気なくフォローした。

「そうですよお！ここ、いいじゃないですか～！目の前、湖ですよ？ね？あかねちゃん！」

「うんっ！」

あかねちゃんもヒカルもあの坂道は全然平気だったようで、ヒカルはもう、真夏の太陽そのものように顔も目も輝かせ、ついでに黒髪には天使の輪まで出来ちゃってとにかく明るいし、あかねちゃんの頬も健康的なピンク色。

げろげろブラザーズの死神のような顔とは対照的なふたりの顔だ。

制服じゃないあかねちゃん。

薄いピンク色のキャミソールから細い腕を出して、長い髪を真っ白なりボンで留めて、太陽の光が反射しちまうぐらいの白い肌でそこに立ってる姿見てるだけでいつもの5倍ぐらいほにゃらん...な田村くんです。

こないだ意を決して誘ったデートは天然にかわされちゃったけど、俺の誕生日まであと10日。

この合宿が終わるまでには告白するぞ、と決めてきた。

いや、もちろんやんなきゃいけない本来のことはマジメにやるさ。

けど、好きな女の子と5日間も同じ屋根の下で合宿だぜ？

ここで決めなきゃいつ決めるんだよ？ってなチャンスだし、マジメに恋もしてえしさ。

だから、実のところヒカルには感謝感謝の田村くんなのだ。

松山兄弟たちだけでなく、ヒビクや柏木、鳥海たちもややげっそりしてる中、

「小夜子先輩、これから何をやるんですか？」

目を輝かせたままのヒカルが鳥海に詰め寄った。

「何って...いつもと同じよ。発声と台本の読み合いと...」

やや困ったように鳥海が答えてる側から今度はあかねちゃんが、

「軽音楽部は？」

と、ヒビクに訊く。

ヒビクは目を空に泳がせながら、

「俺たちは挿入曲作りだろ？ヒカルはマラカス、あかねちゃんはピアノ...。あれ？お前らは演劇部の立場で参加してるんだっけか...？」

と、適当に答える。

もともと軽音楽部と演劇部はまだ絡んでやるところまで行ってないわけだから、鳥海やヒビクが曖昧になっちゃうのもしよーがねえんだけど...

「それじゃ、わざわざ合宿に来なくて学校でやってる部活と同じじゃないですか〜！」

ヒカルの鼻は見事に膨らんだ。

「だから俺たちに合宿の予定はなかったんじゃないか。それをどうしても行きたいってお前たちが言い出したんだろ？」

「そうよ」

両部長がやれやれ、といった感じでヒカルの不満をあしらった。

「ヒビク先輩、小夜子先輩！今は夏！そしてここは日光中禅寺湖！そしてそして、あれに見えるはボート乗り場じゃないですか！」

ヒカルが元気よくボート乗り場を指差すと、

「それ、合宿とは全然関係ない...」

鳥海がシビアに呟いた。

けど、そんな呟きをヒカルは全く聞いちゃいないようで、

「ボートに乗りましょうよ、先輩たち～」

心は湖の上のあひるボートに行っちまってる。

松山兄が、

「ボートと言えば、昔湖に飛び込んだヤツがいたなあ？誰だったろーねえ？」

古傷に触るようなことを言いやがった。

「あ、その話知ってる！1年の時のホームルーム合宿でだよな？美紀が言ってた」

触った古傷をさらにほじくり返すような名前を出したのは鳥海部長。

その名を言っちゃ、松山弟がへこむぞお…。

「ボート乗りてえなあ…あの人と…」

ほれ見ろ。

青白い顔のままの松山弟が、遠くの湖をうつろな目をして見つめちまった。はあ…ってため息
なんかついちゃって。

俺だって乗りたいさ、あかねちゃんとボート…。

で、キラキラ光る湖面の上でゆらゆらボートに揺られながら愛の告白。

それ、最高の演出じゃん？

はあ……………。

——ってというか、乗れるじゃんっ！

今は夏！

そしてここは日光中禅寺湖。

そしてそして、あれに見えるはボート乗り場です！

このシチュエーションで、あかねちゃんをボートに誘ったっておかしくないだろ！

またまたいきなりのチャンス到来！

おおはしゃぎなヒカル大先生に感謝10倍！あなたの顔が天使に見えますっ！

「あかね、あのさ…、」

「はい？」

ボートに乗ろうぜ？って続きを言おうとした時、

「あかねちゃん、行こう！」

——ヒカルがあかねちゃんの腕を引っ張って行っちまった…。

「もう！はねっ返りなんだから！付き合ってもらえないわ！」
と、鳥海部長。

ほんと、ヒカルちゃんっつらはねっ返りなんだからっ！
俺のささやかなチャンスをなんてことしやがるんだあ〜。
天使撤回！悪魔だ悪魔っ！

「まあいいじゃないか」
と、のん気に言うヒビクに、
「よかないっ！！」
反射的に言っちゃまった。

――やべっ！

ヒビクは少し目を丸くして俺を見たが、すぐに、
「...あいつらは少し遊ばしておけよ。俺たちはミーティングをしようぜ」
と、湖畔のテーブルを指差した。
「...お、おお。そうだな...」
本来のこと、マジメにやんなきゃ...だよな、とりあえず。

しかし、残念無念...！
絶好のチャンスを逃した感じ...

「先輩たち〜！」

あかねちゃんとヒカルがあひるボートに乗りながら手を振っている。
軽く手を振り返したヒビクは眩しそうな眼差しで湖のボートを見つめてる。
ヤツのその様子が、何だかいつもと違って見えた。

14 告白前夜 その2

「俺たちは曲を作る。鳥海たちは劇の演出を考える。それを融合させるのはあいつにまかせてみればいいんじゃないか？」

そう言って、ヒビクは湖上のヒカルに目を向けた。

俺たち2年生8人は、あひるボートをキコキコやってるはねっ返りの1年生ふたりを見守りながら湖畔でのミーティング。ほんとは俺があそこであかねちゃんに愛の告白...、のはずだったのに...なんてことはとりあえず考えないようにして。

互いの部の進捗状況を出し合ったまではいいものの、軽音楽部はまだ音楽制作の途中だし演劇部だってやっと台詞を読み合いはじめたばかりらしく、ふたつの部がどんな風にして一個の舞台に立つかってことが想像もつかなかった。

舞台上で演技するのは演劇部。

んじゃ俺たちはどこでどーやって演奏すりゃいいんだ？ってこととか。

裏方だから表舞台には出ないほうがいいだろ？って言うと、鳥海は最後の文化祭なのにそれじゃ悪い、みたいに言って。

結局そこから話が進まなくて、それ以前に両部が合宿までして何やりゃいいんだ？って、さっきヒカルとあかねちゃんが両部長に訊ねたことをそのまま自分たちでも首をかしげ、みんなではてな？な状態になったときに。

「もともと、この企画の言いだしっぺはあいつなんだし」

ヒビクは湖上の人を顎で指す。

「そうね。浅倉さんの頭の中ではきっと何かが形になっているんでしょうね」

鳥海たちも納得して頷く。

「んじゃ、俺たちはいつもとおんなじようにアレンジやってりゃいいってことね？」

と、松山兄が言うと、

「風間、テーマ曲は出来そう？」

と、弟。

ヒビクは視線は湖上に向けたまま、

「テーマ曲ねえ...」

と、呟いた。

しかし、ヒカルってほんっと明るい。

ここからボートまではかなり距離があるってのにヒカルの笑い声が届く。

漫画なんかでよく描かれてるように、あひるボートの上には太い縦棒がちょんちょんちょんって5本ぐらい乗っかって、あひるちゃんがそのまま笑ってるみたいだ。

キラキラしててにぎやかで炭酸飲料の弾けて飛ぶ泡みたいなヒカルと、ふわふわなマシュマロのようなあかねちゃん。

――ふたりともやたら眩しいぜ。

ヒビクと同じ場所に視線を向けながら、俺はそんなこと考えてた。

ふたりがあひるボートから帰ってきて、それぞれの部は早速活動を開始することにした。

演劇部はホールで、俺たちは宿舍の研修室を借りて。

あかねちゃんとヒカルは鳥海たちについて先に宿舍に向かい、顔面蒼白が落ち着いた松山兄弟や柏木も次々と動き出した。

ヒビクはさっきからずっと湖を見つめたままだ。視線は湖上にあるけれど頭の中では何かを一生懸命考えている。

たぶん、テーマ曲だろう。

ヒビクが頭の中でメロディーを繋いでいるときはいつもこんなふうに目はどこか遠くを見つめてる。

けど、このごろのヒビクはいつもとどこか違う。何が違うって言葉じゃわかんねえけど感覚でわかるもんがあって、

「苦戦？」

後ろから声をかけるとヒビクはくるっと振り返り、

「苦戦…。でもまあ、台本見たときから苦戦は覚悟してたけど」

と呟きニヤッと笑った。

俺たちが合同制作する『みにくいあひるの子』はアンデルセンの童話をそのまま脚色したものだ。ひとりだけみんなとは違った姿で生まれた主人公のエミーが母親や兄弟たちに苛められながら成長していく物語。

最初は『こんちくしょう、いつか返ししてやるぜっ』ぐらいな恨みつらみの気持ちでいたエミーが、成長するにつれて自分を苛める家族たちを慈しむ大きな懐を持ったヤツに変わっていき、それが自分に自信と誇りを抱く原動にもなっていくっていうストーリー。もろ童話進行だけど、テーマとしちゃけっこう重たい台本だ。

ヒビクが台本を見た時から苦戦覚悟って言った気持ちが俺にはよくわかる。何たってこの主人公の歩みは中学時代、いや、それ以前からのヤツの歩みと同じだからだ。

ふと、中学時代のやたら陰のあった頃のヒビクの顔が浮かんだ。

このテーマ曲をマジメに書くとすれば、ヤツは過去から現在の己をそのまま表現しなきゃなんないってことだ。

そして、音に関しちゃ完璧主義のヤツのことだからいいかげんに作るわけがない。

演劇部から台本を受け取った時から今日までずっと、ヤツは己と向き合いながらテーマ曲作りに苦戦してたってわけだ。そして、そういうことを全部承知の上で引き受けたコラボレーションだったってことだ。

「脱皮が必要だな、俺もさ」

とヒビク。

一瞬全身がビリッときた。

「ま、合宿の間には仕上げられるように頑張ってみるさ」

「できそう？」

「ああ。予感はあるだな。今は全然浮かんじゃいないけど...ね！」

ヒビクはいつものように決まりすぎのウィンクを飛ばしてくれた。

◇

――で、今ここにはヒビクが書いて捨てた五線譜が散乱してる。

合宿二日目の今日、俺たちは朝から宿舎の研修室で音楽制作をしてるわけだけど、ヒビクは先に出来てる曲のアレンジを俺たちとやりながら、同時にテーマ曲を考え、思いついた音符を書いちゃ投げ、また書いては捨ててを繰り返してる。

「苦労してるな、風間...」

殺気立ってるヒビクを横目で見守る松山兄が呟いた。

けど、俺たちにできることは何もない。

ヤツのメロディーが繋がることをひたすら祈り待つことしか出来ない。

「ヒカルちゃんたち、ホールで練習してたよ？今日は演技もついてたし見てくれば？」

便所に行って今戻ってきた柏木が、散乱してる五線譜を拾い集めながらヒビクに言った。

ヒビクはうつろな目を柏木に向け、

「あ？」

と、間抜けに訊き返した。

「ここでじっと考えてるより、台詞を聞いたりヒカルちゃん見たりしてる方が浮かびやすいんじゃないかと思って」

「...ヒカル見たって別になぁ...」

ヒビクはブツブツ言いながらも、

「ま、刺激にはなるかな」

と、のっそり立ち上がった。

――刺激。

かなりなるんじゃないだろうか。

「んじゃ、ちょっと気分転換してくる。田村、付き合えよ」

ヒビクが言うんで俺も一緒に演劇部見学。

あかねちゃん見られるしちょっとラッキーかも...って、こっそり思ったりして。

こんな不純考えてちゃヒビクに申しわけねえよなぁ。

ホールのドアを開けると、

「ヒビク先輩っ！」

ヒカルの明るい声が響いた。

「おう...」

ヒビクは軽く手を上げヒカルの声に答える。

演劇部の5人は真ん中に集まって台本を広げながら打ち合わせのようなことをしているところだった。ヒカルはちょうどドアに向かった位置に立ってたんで、ホールに入った俺たちを真正面に見つけたわけだ。背を向けて立っていたあかねちゃんがふわりと振り向いて笑った。

「ちょっと見学させてくれない？ここで適当に見させてもらえばいいから」

鳥海たち3人は顔を見合わせてから、どうぞ、と許可してくれた。

「ええ...？先輩たち、見てるんですかぁ？」

あかねちゃんは困惑したように言った。

それがまた可愛くて、ほにやら...――、

――やべやべ。

こんなこと言ってる場合じゃないんだっての。

「じゃ、今のことに注意してさっきのそこから！」

鳥海部長の号令がかかり、ヒカルたちはパッと自分たちの立ち位置に移動した。

場面は主人公が兄弟たちにしこたま苛められるシーン。

3人の姉弟あひるに取り囲まれ、主人公は小さく小さくなっている。

けど、仕返しを実行した直後から、主人公は変わっていく。

まだ全然仕上がっちゃいない演技は見てるとハラハラする。

あかねちゃんもヒカルも台詞はトチるしつかえてるし。

それでも、今の状態から前進しようとしてる心意気はちゃんと伝わってくる。

ヒカルやあかねちゃんの意地悪兄弟は全然意地悪には見えないんだけど、そういう実力的なこととは無視して台詞と全体の演技を見てみると、今俺たちが作ってる音楽が微妙にここに被ってきて確かにイメージも沸く。

柏木が言ったことが頷けた。

そして、ヒビクの目は汗を滲ませながら、全身で演技している人一点に注がれている。

どこか遠くを見ているようなヤツの眼差しから、頭の中じゃたくさんのメロディーが駆け巡ってるんだらうってことがわかった。

「やりにくかったな...」

最後まで通し終わったあと、あかねちゃんは言った。

そして、

「あの発声練習、生きてました？」

と、俺の横に来て小声でこっそり呟いた。

「おお。バッチリ。ちゃんと腹から声が出てたぜ？」

俺も小声で答えた。

こんなところで、ナイショごとをあかねちゃんと共有してるってことがたまらなく嬉しい田村くんです。

「よかったあ...」

ホッと肩を下げて笑うあかねちゃんにまた、ほにゃ...、になりそうだったところに、

「誰かに見ててもらおうと張り合いがありますね！」

という、ヒカルのハツラツした声で体勢が直った。

「...じゃ、これから毎日見ててもらって、早くその棒読みを克服しなきゃだね...」

鳥海部長がぼそっと呟いたがヒカルは当然聞いちゃいない。

そんなやり取りも、ヒビクはさっきと同じ眼差しで見つめてる。

ヤツの頭にあるメロディーはさっぱりわからないけれど、眼差しの意味はわかるような気がした。たぶん、これら全て出来上がるテーマ曲の中に現れてくるんだらう。

「こんなんでも風間くんたちの役に立てた？」

申し訳なさそうな鳥海の言葉に、ヒビクは、

「ああ。かなりね」

と、笑った。

――そっか。

「また、見に来てくださいね～！」

と、いうヒカルのリクエストには無言で頷いて答えたヒビクだ。

その目はもう、メロディーを繋いでる目。

「脱皮する、ってヤツは言った。

だったら俺はそいつを側で見守ってやらなきゃ。

あかねちゃんへの告白は、ヒビクのメロディーが全部繋がってから、だな。

――早く繋げろよ、ヒビク。

15 告白前夜 その3

——ところがどっこい！！

合宿は今日で三日目をむかえたってのに....

「ふわあああ〜〜〜っ」

のん気に大あくびをかましたのはヒビク。

研修室の片隅で、アコースティックギターを時々ぼろんぼろんと鳴らしてはいるけれど五線譜は昨日から白紙のまま。ヒビクの周りはいつものようにボツったメロディーも散乱してずにキレイなもんだ。

——あの....、ヒビクさん。

確か昨日演劇部の練習を見て曲作りにずいぶん役立った、みたいなこと言ってませんでしたっけ？

じいっと見つめてた俺の視線に気づいたのか、ヒビクがこっちに顔を向け、
「なに？」

と、呆けた声を出した。

「いや...？」

「...変な田村。マジメに仕事しろよ」

——そうきたかいっ！

あん時のヒビクの目は力が入ってた。

俺はてっきり、直後から怒涛のごとく五線譜に音符を流し込むとばかり思ってたけど、ヤツの五線譜には一個の音符も書き込まれずに今に至ってる。

そしてヒビク以外の俺たちは合宿前から今日までマジメに仕事したおかげでアレンジ作業も終わっちゃったし、今はテーマ曲待ち態勢で暇。

顧問が睨んでるから宿舍の外に出るわけにもいかず、松山兄弟は菓子を食いながらオセロで遊んでるし、柏木は風がそよぐ窓辺に座り優雅な読書タイムを楽しんでる。

ハタから見りゃ軽音楽部の合宿だとは絶対に見えないだろう。

「あああああっっ、きたねえっ！角ばっか取りやがってっ！」

「どこがきたねえんだよっ！真っ当な勝負してんだろーがっ！」

——こんな合宿でいいんだろーか…。

演劇部はきっとマジメに練習してる頃だろうに、俺たちときたらオセロ勝負で兄弟げんかを始めた松山ブラザーズと、それをサラッと一瞥してまた本の世界に戻る柏木。そして、ぽっかりしたままのヒビクとそわそわ落ち着かない俺…。

「お前ら声がかいって…。ヒビクはあれでも一応曲作りやってんだし…」

…と、喚き合ってるブラザーズをたしなめた。

兄弟はとりあえず言い合いを終わらせ、

「あれでかぁ？」

と、隅っこのヒビクを指差した。

——あぁっ！？

いつの間にか、ヤツはテーブルに突っ伏して居眠りしてやがる。

しかも、完全に寝息まで立てちゃって。

「風間の曲作りってすげーなぁ？」

「あんな状態で作曲してんのかぁ～」

と、ブラザーズ。

——ヒビクちゃん。早いとこ脱皮をお願いします…。

ヤツの寝顔を見たまま松山兄弟がつまんでた菓子袋に手を伸ばしたら、それはマシュマロだった。

その真っ白でふわっとした感触から一瞬でイメージしたのはもちろんあかねちゃんだ。

——合宿はあと二日。

ヒビクの脱皮を見届けてやんなきゃって、変な責任感と義務感に支配されてる俺だけど、本人がこれじゃなぁ…。

すうーっ、っていう気持ちよさそうなヤツの寝息にため息が出たとき、

「そういや、今夜その湖で花火大会があるらしいぜ？」

ステキな台詞を吐いたのは弟だった。

「…花火大会！？いつ、どこで?!」

「だから、今夜その湖だって言ってるじゃんか…。ロビーにポスターが貼ってあったぜ？」

花火大会！

夏の風物詩の代表。

んでもって、デートに誘うにはもってこいのシチュエーション！

それが、俺の誕生日一週間前の、合同合宿の、告白するぞと決めてるこの時に目の前に用意されてるってわけですか！

言われてみればロビーに花火のポスターが貼ってあった記憶がある。夏はどこ行ったって黒地に花火の写真があるポスターは目にするから特に気にしてなかったぜ。

「花火大会かぁ！どーせ暇だし今からナンパ大会の計画でも立てるか！」

負けたままお預けになってるオセロをぐちゃぐちゃっ、とやりながらお約束の台詞を吐いたのはもちろん松山兄だ。

せっかく勝ってた弟は、見事に拡散されたオセロ盤を見て、`何てことすんだ、てめえ！、と抗議の言葉を吐いてから、

「成長しないヤツ！」

と、言い放った。

「ここは日光だぜ？華厳の滝だぜ？じーさんばーさんしかいねえよ、どうせ」

と、小ばかにしたように付け加えて。

「いや！テニスサークルの女子大生があっち側の`レイクサイド、で合宿してるのを確認済み！」

「はっ…。いつの間に…」

心底呆れる弟に俺は激しく同意しながら、

「…俺はパス。ナンパ大会はもう勘弁」

と、さっさと身を引いた。

一年前の猪苗代ナンパ大会の、あの寒さと猪苗代湖の冷たさは忘れちゃいない。

あれは俺の人生の中でも不覚中の不覚。湖があったらもうぐりたいぐらいな過去の汚点だ。

「一度の失敗が何だって一の？そんなおとなしいこと言ってっからいつまでたっても非モテライフから脱皮できないんだぜ？」

何とでも言ってなさい。

俺にはナンパ大会以上にステキな計画があるのさっ！

「非モテで結構！とにかくパス！」

自分の意思表示をバッチリやってからロビーのポスターを確認するために俺は研修室を出た。

◇

「あ。田村先輩！」

ロビーに下りた途端、まだポスターも確認する前に声をかけてきたのはあかねちゃんだった。
「軽音楽部、はかどってますか？」

ひとつに結わいた髪がパサパサと乱れ、真っ赤に火照った顔は汗で滲んだあかねちゃんは、きっと今までマジメに演劇の練習をしてたんだろう。

「...まあ、何とか...」

オセロで遊んでるヤツとか読書してるヤツとか居眠りしてるヤツがいるなんてことは言えないから曖昧に答え、

「演劇部はどうだ？」

と、話をあかねちゃんに戻した。

「うちも何とか...。先輩たちにしごかれてますう...」

可愛く言いながらあかねちゃんは自動販売機から次々とジュースを出す。まだ練習の途中で、飲み物の調達係をやってるらしい。

その、自動販売機の横に花火大会のポスターは貼ってあった。

そしてそれは間違いなく今夜で、目の前の湖で午後7時から、と書いてある。

で、今ここにはあかねちゃんがいる。

で、都合よく俺たちは今ここでふたりっきり。

「あかね、今夜の花火大会、俺と一緒に行かねえ？」

またまた考える前に言葉に出した。

今度こそ、ちゃんと答えてもらうぞ、あかねちゃん！

「ああ、花火大会ですよねえ。ヒカルちゃんと一緒に見に行こうって話してたんです」

ああ、そうか...

花火大会なんていうステキなイベントをヒカルが見逃してるわけねえな。

あかねちゃんの言い方は、とっくに約束しちまってるという感じだった。

「田村先輩が誘ってくれたってヒカルちゃんにも話してみますね？」

——俺はあかねちゃんとふたりがいいんだけど.....。

じゃねえと告白できねえし。

けど——、

「ああ。ヒカルにも言うておいて！」

ヒカル番はヒビクに任せよう。

脱皮はまだなようだし、お膳立てしてやればヒカルに対してお子様ランチなヤツも少しは自分に素直になれるかもしれねえし。

んで、俺は花火を見上げながらあかねちゃんに告白！

これぞすばらしき一石二鳥！

・
・
・

——ところがどっこい……っ！

「ああ?! 行かねえの!？」

せっかく誘ってやった花火大会に、ヒビクは行かないとぬかした。

「田村は行って来いよ」

そりゃ行きますとも！

あかねちゃんと約束してるし！

告白するし！

「俺はこれから仕事すっから」

「仕事？」

「ああ。今夜中に仕上げねえと明日で合宿も終わりだしさ」

ヒビクは手にした五線譜を指でパチンと弾いた。

だったら昼間、居眠りぶっこいてねえでやりゃあよかったじゃん！

何も、こんなステキな夜にやんなくたって！

「別に俺が行かなくたってヒカルとあかねぐらい面倒見られるだろ？」

見られません！

俺はあかねちゃんひとりで精一杯です！

「ヒカルもヒビクが行けば喜ぶんじゃねえかと思うぜ...？」

自分の下心の隠れ蓑にヒカルを使っちゃってちょっと悪いような気もしたけど、間違っちゃいない発言だとは思う。

ヒビクは、ハッ、と笑い、

「そりゃそーだろ！」

と、認めやがった。

それから、

「今ようやくメロディーが流れ出したから書いておかないとまた逃げられる」

そう言ったヒビクの目は昼間とは違い力が蘇っていた。

背筋を伸ばして堂々と立つヒビクに、俺のどこかがまたビリッと刺激された。

ヒビクからは何でもない話をしてたり冗談を飛ばしてる最中に、突然こんな感覚を受ける瞬間がある。

そういう信号がヤツから発せられた時は、もう絶対。

そんな時の俺は100%ヤツを信じてる。そして、それを裏切られたことは今までにない。

「逃がしたくないのに逃げられて、出たり入ったりしてるんだよ、俺の中でいろんなものが」

「いろんなもの、か...」

「認めたくないものと認めなきゃなんないものがごちゃごちゃしてて...わけわかんねえぐらいキツイ状態だけどこれを形にすることが出来たら何かが変わる気がする」

脱皮の前のさなぎ――。

さっきまでのヒビクはこれだったんだな。

ぽっかりしてるように見えてたけど、ヤツの中じゃ大革命が起こってたってことだ。

「わけわかんねえぐらいキツイ、なんて自分の弱さを表すような言葉、今までヤツから聞いたことないし、もう既に何かが変わりつつある。」

「わかった」

と、一言だけ。

ニヤッと笑うと、ヒビクも笑った。

◇

「田村先輩、おそーい！」

ロビーに下りていくと、ほっぺたを膨らましたあかねちゃんとヒカルに文句を言われた。

「あれ？ヒビク先輩は？」

「ヤツはこれから仕事するらしい」

「仕事？」

ヒカルはあかねちゃんと顔を見合わせて首をかしげ、
「ヒビク先輩が来ないのは残念だけど、早く行きましょう！もう花火上がっちゃってますよ～！」

ぴよんぴよん跳ねながらロビーの外を指差す。

ヒビクの中で革命され現れてくるものはどんな形をしてるのか――？と、ヒカルの笑顔を見てふと思った時、

「田村先輩、行こう！」

と、あかねちゃんは俺の左腕を取ってくれた。

夜空に次々と咲く花は恋の花。

俺の左腕につかまって空を見上げるあかねちゃん。

その感触とあかねちゃんのふんわりとしたいい匂いで、俺は花火と一緒に打ち上げられてるように舞い上がっちゃって。

ああ、あかねちゃん。

その腕、一生離さないで――。

「好きだぜ、あかね」

言っちゃいました。田村優作。

この、最高のシチュエーションの中で！心の中で…！

――だって、右腕はヒカルがつかまってるんだもんっ。

夜空と両手に花が咲いてる今夜の田村くんです。

こんな美味しいシチュエーションは生まれてハジメテだぜ。とほほ…。

「ヒビク先輩の仕事、はかどってるかなあ……」

空を見上げたままヒカルが呟いた。

「たぶん、な」

はかどってもらわねえと困っちゃう。

明日は合宿最後の夜だしさ。

明日こそ、左腕の人に心の中じゃなく言葉に出して告げるぞ。

今夜はその前夜祭ってことで！

16 4日目の朝

俺たち軽音部5人は、部屋の両壁に二段ベッドが設置されてる狭い部屋にまとめて押し込められてる。

ベッドは4つしかないからひとりはベッドとベッドの間の通路に布団を敷いて寝てる。

そのひとりが俺ってのは哀しいんだけど、4日目の朝ともなれば、かた一い床の上での目覚めにも慣れた。

何となく目が覚めちまった午前5時50分――。

右側ではベッドの下段で松山兄が半ケツ出して、上段では弟が上掛けを全部下に落としてとんでもない寝相で寝てる。

こいつらは昨夜、女子大生ナンパ大会を決行したらしく門限9時をずいぶん過ぎてから帰って来やがった。

兄いわく、`素敵なお姉さまと知り合いになれて電話番号交換した、らしいけど、ほらふき太郎の言うことなんか100%信じちゃいねえ。

世の中そんなに甘かあねえよ。

で、左側。

ここ三日ほど、毎日のように見ていたベッドの柵から飛び出してる足の裏が見えない、と思ったら、そこで寝てるはずのヒビクがいない。

便所にでも行ったか、と思ったけど布団はキレイにたたまれたままで寝た形跡がない。

――おいおい。徹夜かよ…。

昨夜、花火大会が終わったあと部屋に戻って来るとヒビクの姿がなかった。

俺はてっきりみんながいなくなった部屋で仕事してるんだと思ってたけど、ヤツは廊下の先の狭い談話室で楽譜とにらめっこしてた。

わざわざ場所を変えてやってるってことは邪魔されたくないってことだろーから、干渉しないまま俺たちは先に寝ちまったけど、徹夜ってことはヤツの革命は簡単にはいってないようだ。わけわかんないぐらいにキツイって言ってたからそれも当たり前だろう。きっと今頃、お目目充血させながら阿修羅みたいになってんじゃねーだろうか。

ブラザーズたちはこのまま放っておいたら明日まで寝てるだろうってぐらい爆睡モード全開中だし、俺も朝メシまでもう一眠りしようかと思ってた。

けど、ヒビクひとりに苦労させてそりゃねえよな、やっぱ。

「てめーら！起きやがれっ！！」

半ケツにビンタをくれ鼻をつまみ脇をくすぐって、ありがたいベッドの上で寝てるにも関わらず揃いも揃って寝起きの悪いお気楽ブラザーズ+柏木の目を十分覚まさせてやってから俺は談話室に行ってみた。

けど、談話室は空っぽでヒビクの姿はなくテーブルの上には散乱したゴミと一緒に、楽譜がぽんっ と置いてあった。

そいつを開いてみると音符がびっしり書かれてた。最後にちゃんと終止線が引いてあるからこれは完成品のようだ。

――出来上がったんじゃない…。

なんだかじ〜んときちまった。

まだタイトルも書いてなければ詞もついてないけれど、目で追うメロディーを頭の中でイメージしながら、苦戦を闘いコイツを仕上げたヤツの根性を感じちまって。

なのに、ヤツはこんな大事な努力の結晶をゴミの間に置きっぱなしにしたまま何処行っちゃったんだろう？途中の便所にはいなかったみたいだし、部屋にはもちろん戻ってねえし。

ヒビクが散らかしたであろう紙コップや空き缶を始末してやってから、俺は楽譜を持ってロビーに降りてみた。

昨日、あかねちゃんがジュースを買ってた自動販売機の前まで来たとき、宿舎の外から帰ってきたヒビクに会った。

「何やってんの？こんな朝っぱらから」

「田村こそ、こんな朝っぱらから何やってんの？」

徹夜明けの声はさすがにやや掠れてる。

けど、顔は何かをそぎ落としたようにサッパリとした表情のヒビクだった。

「お前の様子を見に談話室に行ったらいねーし。探しに来てやったんじゃない」

「そりゃ、どうも」

ヒビクはそう言ってニカッと笑った。

それが、何ですか、その爽やかな顔は？と突っ込みたくなるぐらいな青春ドラマの主人公のような笑顔だったんで少々面食らっちゃった。

「散歩して来た。ヒカルと…」

ヒビクは鼻の頭をぽりぽりとやりながら俺を見る。

「ヒカル？」

「談話室にいたの、たまたまヒカルに見つかってさ」

「たまたま、って言葉を強調してヒビクは言った。

「ヒカルもずいぶん早起きのねえ...」

何がどーしてヒカルと早朝湖畔デートしてきたんだか知らねえけど、ヒビクにとっちゃずいぶん充実した時間だったってのはヤツの顔を見りゃわかる。

ふ～ん。

いっすねえ～。

キミの脱皮を待って、あかねちゃんへの告白をお預けにしてた田村くんだったのに。

「曲出来たのね。これ、談話室に置きっぱなしだったぜ？」

楽譜を渡すとヒビクは、

「メロディーだけ何とかね...。詞はこれからつける」

自分で書いた音符を追う目がなんだか妙に嬉しそうだ。

――まったく。にまにましやがって！

いったいヒカルと何がそんなにいーことあったの？

と、つっこんでやろうとして気がついた。一緒に散歩してたはずのヒカルがいないじゃん。

「で、ヒカルはどこ行っちゃったの？」

「あいつなら空手部のオトモダチと走ってる」

「...は？」

空手部のオトモダチ？

走ってる？

なんだ、それ？

「意味不明...」

「ウチの空手部が別の合宿所に来てるみたいで、さっきランニングしてるオトモダチにそこで会ったんだよ。ヒカルはそいつらにくっついて走ってる」

――わけわかんねえ。

一緒に走るか？普通。

やっぱヒカルだ。

けど、空手部――。

どうしてだか、胸がざわざわと騒ぎ出した。

俺のどこかで何か引っかかっている。

それが何だか思い出せなくて気持ち悪くてどうにもこうにもわけわかんねえ。

「ヒビクもヒカルと一緒に走ってくりゃよかったじゃん！」

喋った勢いで意味不明な胸騒ぎを無理やり静めた。

「ば～か。走るかよ。俺、徹夜明け」

ヒビクは顔にチラチラと散らばってる金色の点々髭を手で撫でながら爽やかに笑いやがった。

まあいいさ。

テーマ曲も無事に出来上がったことだし、ヒビクの革命も成功したようだし、これで俺も気兼ねなく恋愛街道進めるってもんだ。

◇

朝メシはだいたいいつも演劇部の方が早く終わる。

彼女たちは、くだらないこと喋りながらのんびり食ってる俺たちを待ってることもなく、

「お先に」

と、先に食堂を出て行く。

今日の俺はさっさと自分のメシを終わらせて、演劇部と一緒に立ち上がった。

女子大生がどーのこーのの話に夢中になってた松山兄弟や、そろそろ小春ちゃんが恋しくなった様子の柏木や、ナチュハイぎみのヒビクの膳にはまだ焼き魚とか温泉たまごとか味噌汁なんかが残ってる。

「先に部屋に行ってるぜ？」

きょとんと俺を見上げてるヤツらにそう言ってから演劇部に一步遅れて食堂を出、

「あかね、ちょっといい？」

後ろからあかねちゃんを呼び止めた。

「はい？」

あかねちゃんは立ち止まってふんわりと振り向いた。

もう、合宿は今日で終わり。

あかねちゃんと同じ屋根の下で過ごす夜も今日が最後。

「あかねちゃん、先に行ってるね～」

と、言ってヒカルが消えてくれたのも何かの助け。

「今夜、ちょっと話したいことがあるんだけど、ミーティングの後でいいから時間作ってくれな

いかな？」

今夜こそ、しっかり俺の気持ち伝えたい。
あかねちゃんが好きだってこと。
付き合っ欲しいって希望。

「わかりました...」

あかねちゃんはどうつむきながら小さな声で言った。

「.....私も田村先輩に聞いてもらいたいことがあるんです」

は...?!

俺に聞いてもらいたいこと...?

「そ、そうか」

自分の声が裏返っちまってるのがよーくわかった。

「じゃあ、ミーティングが終わったら一階のロビーで待ってっから」

「はい。行きます...」

ちょっとちょっとちょっと！

行きます、だぜ？

田村くん、期待しちゃいますぜ？

「じゃ...！」

と、あかねちゃんはヒカルたちを追いかけて廊下を走って行った。

——ああ、いよいよ今夜。

田村優作、決戦なりっ！

いよいよ今夜。

もう、意を決したアプローチを天然にかわされたり、今誘おうと思った矢先にさらわれちゃったり、誰かさんの脱皮を待ってたり、お邪魔虫が横にいたりなんてことに憂うことなく、

ー好きだぜ、あかね。俺と付き合ってくれよ。

って、直球ストレートボールをあかねちゃんにスパッと投げ込める。

何たって、あかねちゃんも俺に話したいことあるみたいだし。

これはもう半分勝利は見えてるって感じですかね？

いやしかし長かった。ほんっと、長かった。

俺の中で純愛の白と下心の黒が壮絶なバトルを展開し、限りなく純愛に近いちょっぴり下心もありな灰色に目覚めて8月17日の俺の誕生日までに告白するぞ、と心に決めたあのナイショの特訓から1ヶ月が経ってやっと...、やっと今夜の約束にたどり着いた。

もうここからは灰色パワー全開にして、あかねちゃんゲットに向けて一気に突き進むのみの田村くんです！

「たむらく〜ん？おーい？耳あるか〜い？」

右耳をおもいっきり引っ張られたと思ったら、いきなりでかい声が体中に響いた。

「イテーしうるせーし！なんだよ！？」

顔を右側に向けるとそこにあったのは松山弟のむさ苦しい顔。

「なんだよ?!じゃねーだろ〜?ニヤニヤしやがって、何かいいことあったのかなあ〜？」

「な、ななな、ないないないっ！」

マズイ。

今夜見事あかねちゃんをゲットできた暁には、当然おもいっきり自慢させてもらっちゃうつもりではいるけど、まだこいつらに余計な詮索されたくねえから、

「...きょ、今日で合宿も終わりだなあ〜と思って、ちょっとマジメに考え事なんかしちゃってたのさ」

と誤魔化した。

明日はまた、いろはくねくね坂を下って東京に帰るだけだから、研修室での作業は今日が最後。オセロやったり読書したりぼけーっとしてたりの4日間だったけど、最終日の今日は全員でアレンジの見直しをしている。今夜は合宿総仕上げの合同のミーティングがあり、音楽と演劇の融合

を具体的に建設的に話し合う予定になっている。

そしてその後、俺はあかねちゃんと、うふふのふ...なのだ。

「田村がマジメに考え事だとお？ど一せ惚れてる女のことでも考えてたんだろーよ？」

だから、何でそんなに鋭いのよ、松山兄めっ！

否定も肯定も出来ないから聞こえなかったふりをして、

「――で、出来たてのテーマ曲は？」

徹夜がたたって大あくびをかましてるヒビクに話を振った。

「ああ...、まだ詞を書いてないの。ミーティングまでには仕上げるからもうちょっと待って」

充血した目を潤ませたヒビクはさすがに辛そうで、見てるこっちまであくびが伝染した。

「ちょっと寝てくれば？夜までまだ長いぜ？」

って優しい言葉をかけてやると、

「大丈夫。俺、ヤングだしっ！」

と、ヤツは笑いやがった。

体は疲れてても気持ちは晴れやか、ってところのようだ。

まあ、何はともあれ合宿最終日は5人揃ってまともな合宿らしいことが出来た、と言ってもいいだろう。

若干2名、生あくびを連発してたり、気持ちがミーティングの後に行っちまっていたりしてるヤツがいたけれど。

◇

晩メシの後はすぐにミーティングが始まるんだろうと思ってたのに、鳥海たち2年女子3人はさっき外に出かけちまい、最後の夜だからパーッと行こうぜ！って張り切ってる松山兄の提案で俺たちも外に出ることになった。俺としては、さっさとやることを済ませて決戦にのぞみたいところだけど仕方ない。

あかねちゃんを探してみたけど見当たらず、ヒカルもいないってことはふたりで出かけたか鳥海たちと合流しているか、どっちにしても宿舎にはもういないようだった。

――どこかで何かやな感じ...

何がどこでやな感じなのか説明できないけど、今朝感じた胸騒ぎが蘇った。

いったいどこからやってくる胸騒ぎなんだか意味不明で不気味だ。

晩メシの時のあかねちゃんが、ほとんど箸をつけずにメシを終わらせちゃったのも気になっている。

「あかねちゃんたち、何処に行っちゃったんだろうね？最後の夜だから一緒に出かけたかったのに」

と、柏木が残念そうに言った。

そしてその後、松山兄が似合わない先輩ぶった顔をしてぬかした言葉が、俺の心臓にチクリと突き刺さった。

「ナンパなんかされてねーだろうなあ？」

やたらありうる、それ。

あかねちゃん可愛いし…。

どっかのバカなヤツらがウチのバカなヤツらのようなナンパ大会をやってないとも限らねえ。

ザワザワ騒いでた胸騒ぎはこのことだったのかもしれない。

「…探しに行くか？」

内心はもう、このまますぐにでもその玄関から飛び出して行きたかったけれど、極力平静を装いながら言うと、

「大丈夫だろ。相手はヒカルだけ？ナンパされてたとしても撃退してるんじゃないの？」

弟があっさりと言った。

刹那、頭に浮かんだ漫画チックな図は、群がるゴキブリに容赦なく殺虫剤を振りまくヒカルとその後ろに隠れて震えているあかねちゃんだ。

いつかどこかで実際に見た風景。

あの時の俺は `ヒカルちゃん可愛い、で、まさか後ろに隠れた子にこれほど惚れちまうなんて思ってもいなかったんだから人生どう転がっていくかわかんねえよな。

「ところで風間くんはどこに行ったのかな？」

柏木がロビーを見回しながら言った。

そういやメシの後からヒビクの姿を見てない。外出の準備を万端に整え終わってる兄が、誰か探して来いよ、と言うんで俺がその役をかって出た。

部屋で寝てるんだろうという予想は外れ、ヤツはひとりで談話室にいた。

「ここにいたの？みんな出かけるって言ってるけど、お前どうする？」

顔を上げたヒビクの口元がニンマリと緩んでる。俺が突然声をかけちゃったから、ニヤケた顔を直す暇がなかったって感じだ。テーブルの上には開いた楽譜があって、ヒビクはたった今まで何かを書き込んでいたようだ。

「俺はいいや。お前たちは行って来いよ」

ヤツの返事を聞きながら楽譜を手にとって見ると、五線譜の下の空白部分に音符にあわせた詞が書き込まれていた。

「出来たの？」

「ああ。たった今完成したところ」

ヒビクは頷いて満足気にニヤケる。

夜が明けたよ 長い長い夜が
朝もや立ちこむ緑の湖面に 生まれたばかりの光が踊る
いっぱいの幸せこめられた 朝の空気を吸い込もう
ひとつもこぼさないように 力いっぱい吸い込もう
今日（いま）この瞬間（とき）から 僕が僕で在るために
ライジング・サン やつときた夜明けだから
ライジング・サン 昇ってゆこう どこまでも
Fly the sky Believe in tomorrow
飛んでゆこう 明日を信じて

こんな詞が目に付いてちょっとばかし驚いた。

はっきり言ってヒビクらしくない詞だ。

そりゃ、これは童話劇のテーマ曲として作ったんだろうけど、それにしてもこんなに素直でストレートな言葉を詞にするなんてこと、いままでのヤツからしたらちょっと考えられない。

「……これ、お前の詞？」

思わず口に出ちまった。

「そうだよ？可笑的いか？」

素直な言葉が優しい微笑とともに返ってきてまたまた驚いた。

「いいや、おかしくないけど、らしくない詞じゃねえ？ずいぶん素直だし」

「まあな」

と、ヒビクは鼻の頭をぽりぽりとかく。

いやはや…、すげえ革命をしたもんだ。

この4日間の合宿で、いったいヒビクに何が起こったっていうんだろう？

考えられることって言えば、やっぱヒカルしかないよな。

演劇部の練習を見たり、夜明けの湖畔を散歩したりの時間の中に、ヒビクの中身をこんなに可愛く変えちまう何かがあったに決まってる。

「何かあったな？教えろよっ」

「やーだね！教えねえよっ！」

バカみたいにじゃれ合いながら、今まで知らなかった素のヒビクを見たようで妙に嬉しかった

。昨夜からちっとも寝てないのに、そんなことも忘れたかのように笑ってるヤツの顔を見て、ふとマドンナ先輩と付き合ってた去年までのヒビクが俺の頭によぎった。

——コイツ、こんな顔で笑ったりしてなかったよな。

ヒビクの顔を見ちゃハラハラしまくってた俺だったし、あん時のヒビクはあれで精一杯な恋愛してたんだろーけど、どこかでいつも綱渡りをしてるみたいに緊張の糸がピリッと張ってた。

マドンナ先輩にだけじゃなく、俺たちとだって腹割ってるつもりでいて、いつも一緒にバカやりながらも、どこかで自分に殻被ってガードしていたっていうの？

一皮むけたな、ヒビク。

お子様ランチから日替わりランチにランクアップしたって感じだぜ？

で、ヒビクを調理したシェフはヒカル、だよなきっと。

っていうか、絶対。

——分かりやすいぜ、まったく…。

「俺、こんなことしている場合じゃねえんだよ。ロビーでタロジロたちが待ってっから」
突然思い出してジャレるのを止めた。

田村、おせーよ！と喚いてる兄の声が聞こえてきそうだ。

「ほんとに行かねえの？ヒカルとあかねも出かけたみたいだぜ？宿舎の中にはいねえし」

「ヒカルたちなら空手部のオトモダチと行ったぜ？さっき下で会った」

——は？空手部のオトモダチ…？

いきなり胸騒ぎが復活した。

そう言えばウチの空手部が別の合宿所に来てるって今朝ヒビクは言った。

あかねちゃんたちはそいつらと出かけたってことらしい。

空手部のオトモダチ…。

空手部……。

俺の中に引っかかったキーを手元に手繰り寄せたときに目に浮かんだのは、目つきの悪いアイツ、の顔だった。

「げっ！」

思わず声に出しまった。

アイツを見るあかねちゃんの目とか、アイツと喋るあかねちゃんの声とか、あえて考えないようにしてどっかに追いやってた `やな感じ、のものが一気にぐるぐると駆け巡った。

「例の1年F組のオトモダチと一緒に？」

「ああ。やたらにぎやかなヤツとやたら目つきの悪いヤツ。さっき下にヒカルとあかねを迎えに来てた」

――迎えに来てたあ...?!俺のあかねちゃんを!?

「...な、仲いいなあ、ヤツら...」

仲がいいのは別にいいさ。

いいんだけど、やっぱダメ。

絶対ダメ!

「なあ、田村。俺はもしかしたら凄いお宝を目の前にしているのかもなあ...」

こんな時にヒビクは素直にのん気に言いやがる。

キミはもうオッケーでしょう。

「輝き...、ダイヤモンドみたいな...さ」

「...まあ、目の前にしているのであれば見ているだけじゃつまらないでしょ。ゲットしなさい!」

そう。

お宝は誰かに奪られちゃう前に自分でゲットしなくちゃいけません。

「ゲットかあ...。できっかなあ...?」

ヤツがぽつっと呟いた、できっかなあ...、の言葉にキュッと胸が痛んだ。

できない、ってことを今の今まで考えるの忘れてたぜ。

けど、ここまで来たら当たって砕け...たくはねえけど、行動したもん勝ちだ。

誰かに奪られちまわないうちに。

アイツに奪られちまわないうちに。

「んじゃ、俺たちは行ってくるぜ?ミーティングまでゆっくり休んでろよな!」

自分の殻を破ってひとつの革命を果たし、徹夜で魂の一曲を仕上げたヒビクにねぎらいの意を込めたプレゼント、自動販売機から出したコーラを投げてやった。

—次は俺の番だぜ、ヒビク！

・
・
・

けれど—。

1時間後、外から帰ったばかりのロビーで見ちまった。

俺たちに一步遅れてたった今宿舎に戻ってきたあかねちゃんと、あかねちゃんをここまで送ってきたアイツ。

ふたりの手がしっかりと繋がれてたのを。

あかねちゃんとアイツー群竹...の手が繋がってるのを見た時は、全身が棒線状態になっちゃったけど、とりあえずそれは俺の悲観で、群竹はただあかねちゃんの手を引いてきた、というのが正しいようだった。玄関の前にいたヒカルにヤツはあかねちゃんを差し出すと、そのまま回れ右してさっさと帰っちまい、もうひとりのにぎやかな空手部1年が慌ててその後を追いかけて行った。`お手手繋いで、と`手を引かれ、ってのじゃ意味合いとしちゃ全然違うわけで、全身棒線はとりあえず半身ぐらいまでに立ち直ったけど、ふたりの手が接触ーあえて繋がるという言葉は使わぬ。ーしてたのは事実だし目の前で見ちまったものを記憶から消去することは出来ない。

何があってアイツに手を引かれて帰ってきたのかはわかんねえけど、玄関のガラスドアの向こうで、あかねちゃんはヤツが消えた闇の向こうをじっと見送ってる。そんなあかねちゃんを、俺はロビーからじっと見守った。

「田村先輩たち！」

ヒカルが俺たちに気がついてバタバタ走ってきた。あかねちゃんはその後ろをうつむいたまま歩いてくる。胸に当てた右手を大事そうに左手で包んでるのは、その手がアイツに握られてたからなのかただの偶然なのか、俺は後者だと願いたい。

「...これからミーティングをやるって鳥海たちが言ってたぜ？」

ヒカルの後ろでぼんやりと立っているあかねちゃんに向かって言うと、

「あ。ミーティング...ですね」

顔を上げ俺を見たあかねちゃんの目がちょっと潤んでるように見えた。

いつもだったらこんなあかねちゃんを見ちゃ、ほにゃらん...と全身が萎えちまうところだけど、今は別の意味で萎えちまいそうだ。

ーその右手、そんな風に抱きしめるのヤメテ...

あかねちゃんは迷える子羊のような頼りない顔のまま、

「...田村先輩」

と、俺の名を呼んで笑った。

どういう意味の笑顔なんだか俺にはわかんなかったけど、あかねちゃんの肩に入ってた力がたちまち抜けていくのが目に見えてわかった。相当な力が入ってたのか一気にそれを抜きすぎちまったのか、ほにゃらん...と足元から萎えちまったのはあかねちゃんだった。

「おいおい、大丈夫か？」

「あかねちゃん、大丈夫?!」

ロビーの床にペタンと座り込んだあかねちゃんに手を差し伸べたのは松山弟とヒカルだ

「うん。大丈夫…。何だか急に力が抜けちゃって…」

ヒカルと松山弟に両腕を支えられて立ち上がりながら、あかねちゃんは俺を見てまた笑った。その頬がピンク色に染まっているのは暑いからなのか、それとも…。

——俺…？

アイツ——？

「…とりあえずミーティングに行こうぜ？鳥海たちはもう先に行って待ってるし」

あかねちゃんの笑顔を真っ直ぐに受け止めるやり方を、どうしてだかとっさに思い出せなくて代わりに言葉を出した。この位置からとりあえず脱却しねえと頭がちゃんとまわんねえ。一旦冷静に態勢を立て直さねえと、このあとの決戦に差し障る。

「はい。そうですね」

あかねちゃんはいつもと同じようにふんわりと言ってから、

「あの…、田村先輩…？」

と、首を傾げた。

きっと、この後の約束のことを気にかけてくれてるんだろうと思ったから、

「…後で、な」

と、隅にあるソファをこっそりと指差した。

横にいた柏木が一瞬何か言いたそうな顔を俺に向けたからツッコンでくるかと思った。そうなったらそんな時はもう白状してやれ、とも思ったけど、柏木は何も言わずに先を歩き出した。

「はい」

あかねちゃんはその場所を目で確認してから、ミーティングをやる食堂ホールに向かって歩き出したけど、足はどこかふわふわと浮いたように震えていた。

◇

長髪をステキに乱し目の周りにクマを作ったヒビクがギターを持って現れて、軽音楽部演劇部の合同ミーティングは始まった。

話し合いは俺たちの曲作りの進み具合と演劇部の演出なんかについての報告から始まって、最終的に両部の持ち物をどう融合させたらいいか、という核心に及んだ。

完全裏方でいって言う俺たちと、それじゃ申し訳ないって言う鳥海たちとの意見がまとまらなくて互いが互いに気を使う、痒いところに手が届かないような話し合いが延々と続いた。

俺は話し合いに参加しながらも、この後に起こる自分の何かのことに半分気持ちが行っちゃまって、いつもだったらこーゆーダラダラもスパッとまとめちゃうのに今日はどうもキレが悪い。正面に座ってるあかねちゃんに何度もチラチラと目をやりながら、早くまとまんねえかな、と時計ばかりを気にしてた。

そこにポンッとアイデアの石を投げ込んだのはヒカルだった。

ヒカルは、俺たちに葉っぱの衣装を着て顔にペイントした舞台の上のセットになれ、と言う。同じ舞台に立ったセットが演奏して歌えば両部円満に融合した『みにくいあひるの子』が出来る、というのだ。

俺、松山兄弟、柏木はその滑稽な自分たちの姿を想像して口あんぐり状態だったけど、一番異議を唱えるだろうと思ってたヒビクが、

「それ、グッドアイデア！」

と、叫んだから目ん玉飛び出そうになっちゃった。

だって、葉っぱの衣装を着て顔を塗りたくって森に化けたブックキャスルなんて恥ずかしすぎるぜ？まだ表には出ず、裏幕の後ろで音楽だけならしてた方がいい。カッコつけのヒビクのくせに、まさか俺たちにだけそーゆー格好をさせて自分は涼しげに歌う気にいるんじゃないやろな？

「ヒビク、正気か！？」

「正気！」

「葉っぱになるんだぜ？いいの？」

「全然オッケー！」

もう、目がマジ。

こうなっちゃ誰も止められない。

渋々ヒカルのアイデアを呑み、文化祭での俺たちは、ハッパキャスル、でいくことになっちゃった。

「じゃ、まとまったところで出来立てのテーマ曲を…」

ヒビクがボロン、とギターの弦を撫でアルペジオの弾き語りを始めた。合宿の4日間を全てつぎ込んだテーマ曲は、Eコード進行の明るいバラード曲に仕上がっていた。それをヤツはどこまでも優しく歌いやがる。革命を成し遂げた後に広がった新しいヒビクの世界が目の前に見えたような気がした。

「ヒビク先輩、この曲のタイトルは何ていうんですか？」

演奏が終わったあと、半分涙目になって訊いたヒカルにヒビクは、

「ライジングサン！」

と、力強く言い切ってニカッと笑った。

そのふたりのやりとりが妙に印象的であり感動的でもあった。

◇

部屋に帰るとヒビクはすかさずベッドになだれ込み、そのままおやすみ3秒で寝ちゃった。

松山兄弟と柏木は、ミーティングの前に外のコンビニで買って来た、えっちい本を広げて載っ

てる女の子を、`この子はセーフ、こっちはアウト、とかって言いながら怪しい品評会を始めたようだ。

俺は小銭だけをジーンズのポケットにツッコんで、ヤツらの楽しみを邪魔しないようにそっと部屋を出た。

さっき、ミーティングが終わって食堂ホールを出るとき、

「あの...田村せんばい...」

あかねちゃんがこそと俺のTシャツの裾をつまんで言った。

その仕草、もしもこのあとに俺の彼女になってくれたあかねちゃんがやってくれたとしたら、俺はもうその場であっちの世界に行っちまうんじゃないかってぐらい、全身がぶるっときてぞわっとした一瞬だったけど、今までのように舞い上がってちゃいけねえと、俺のどこかが俺に教えてた。

「一旦部屋に帰って10分後にロビーに下りるから、あかねはその後来てくれるか？」

一応周りを気にして小声で囁くと、あかねちゃんは安心したように頷いた。

俺から誘った約束を忘れてたりすっぽかしたりするはずなんてないのに、さっきから何度も確認してくるあたり、やっぱりどこか頼りないあかねちゃんだ。

あかねちゃんは、俺がこれから言うであろうことを少しは予感しているのか、それとも全然考えてもいないのか、俺は前者を願いたい。でも、これもたぶん後者だな...

――おいおい、田村優作。そんな弱気でどうするよ?! 長かったんだろ? 決戦なんだろ? しっかりしろよ!

たかがアイツに手を引かれてただけじゃねえの。

そんなの、俺だってしょっちゅうヒカルとか小早川とかあかねちゃんにだってやってるぜ。

そんなに気にすることじゃねえよ! 行け行けっ! ダダッって行きやがれっ!

...と、もうひとりの俺は激励をしてくれる。

わかっちゃいるのに、何かを察してる本能がブレーキをかけやがる。

けど、だからってもう止まらないぜ。

見たくねえからって隅っこによけてたことも全部現実だってこと、それをすっ飛ばして思い通りになんてなるわけねえってことにも気がついたから、現実を見て知った上で、俺は俺のままあかねちゃんに告白しよう――。

そう、覚悟を新たにロビーのソファに到着した。

あかねちゃんはまだ来てないから飲み物でも買って待ってるか...と、ポケットに手を入れた時、階段を慌てたようにパタパタと下りてくる足音がした。

そんなに急がなくてもいいのに...、って内心想っていたら、

「田村先輩...！ああ...！いてくれてよかったあ...！」

俺を見るなりあかねちゃんはそう言って心の底からの安堵のため息を吐いた。

「どうしたの？はあはあしちゃって...？」

「廊下も階段も電気が消されてて静まり返ってるから...怖かった...！」

「...は？」

真顔で言うあかねちゃんに、ぶはっ！と、笑っちまった。

そして突然、ぎゅーっと抱きしめたくなくなって思わず両腕に力が入ったけど、まだそんなことできるわけねえし、

「...あ、あかねは何飲む？」

自動販売機を指差して熱くなった想いを誤魔化した。

「私はいいです。さっきから飲んでばかりでお腹ががばがば...」

「そっか...」

俺は自分のコーラだけを出して隅のソファーに移動した。

あかねちゃんはスリッパをパタパタ言わせながら俺の後ろをついてくる。

先にソファーに座らせて、そのあと自分もあかねちゃんの隣りに――ちょっと離れて――座った。

玄関灯が灯っているだけの薄暗いロビーであかねちゃんとふたり。

やっとこんな時間を持てたのに、悶々してちゃもったいねえぜ、田村くん。

あかねちゃんも俺に話があるって言ったけど、俺の話から先にしちまおうと思った。じゃないといけねえって、やっぱり俺のどこかが感じてて。

「話ってのは...」

「すみません...」

隣同士に座った互いを見合わせて、俺たちは同時に言った。

「すみませんって...」

どうしたことよ？

まだ何も言う前から謝られちまうわけ？

告白もさせてくれねえで、すみませんなのかよ、あかね！

「...私のワガママで先輩にこんな話...」

――は...？

あかねちゃんが言う意味が俺にはサッパリ理解できなかった。今夜、話があると誘ったのは俺なのに、私のワガママってどういうこと？

「私、中学の時からちょっとしたことですぐ泣く弱虫なんです...」

あかねちゃんはまたワケのわかんないことを喋り始めた。でも、きっとこれがあかねちゃんが俺に話したかったことなんだと思ったから突っ込まずにそのまま聞く事にした。

「高校に入るまでは、そういう自分をイヤだとか変えたいとかって別に思っていなかった。けど、ヒカルちゃんに出会ってから、ヒカルちゃんみたいな強くて優しい女の子になりたいって思うようになって、それまで自分には出来ないって思ってたこともヒカルちゃんがやることは何でも一緒にやってみることを目標にしたんです」

ホームルーム合宿の実行委員や軽音楽部と演劇部を掛けもちすること、ハムカツパンを諦めないことなどがそれだ、とあかねちゃんは言った。

「でも、やっぱりどこかでムリをしているからなのか、このところずっと情緒不安定で...私、おかしくて...」

「おかしいってのは？」

「私...、ヒカルちゃんに恋してたみたいなんです...」

——なんですと！？

言葉には出さなかったけど心で叫んだ。思いっきり叫んだ。

だってヒカルに恋してるって、それって...、

——アイツにじゃねえんだろ！？

おかしいのは俺のほうで、さっきまでの半身棒線ちびまる子が、思いっきり気分晴れちまったぜ。どっちにしたってあかねちゃんが恋してるのは俺じゃねえってことなんだけど、それでも！

「ヒカルちゃんが風間先輩とか田村先輩と仲良くしてるのを見るのが辛かったんです。こんな自分、変だ変だってずっと思っていました。でも、ヒカルちゃんに呆れられないように、嫌われないように演劇部の練習も私なりに頑張っ、この合宿の間で私ずいぶん度胸もついた気がします」

「おお！あかねはかなり強くなったと思うぜ？」

「田村先輩のおかげです。先輩がこんな私に協力してくれたから。あんな楽しい特訓してくれて、本当に先輩には感謝してます」

「...そ、そうか」

あんな灰色の特訓でもマジであかねちゃんの役に立てたってことだ。

そしてあかねちゃんが恋してる相手がヒカルだったとしても、その気持ちは分からないわけじゃない。ヒカルは男にとっても女にとっても憧れるぐらいの輝きを放ってるヤツだ。この俺だっ

て最初はアイツのその輝きにやられちゃってたんだし。ヒカルには性を感じさせない魅力ってのがあるだろ。うんうん。

「でも...、もうひとりとっても気になる人がいて、その人はヒカルちゃんとは違って優しくないし冷たいし...、近くにいるだけで緊張してドキドキしてしまうような人で...」

――え...？

「ヒカルちゃんとその人、全然違うのに同じような想いが日に日に募っていくんです。私、自分の気持ちがわからなくなっちゃって、コントロールできなくて、一学期はよく貧血起こして保健室に行きました...」

――やな予感...。

「こんなことヒカルちゃんにはもちろん、麻耶ちゃんにも言えなくて...、いつか音楽室で田村先輩とふたりになった時、先輩は私に何かあったか？って訊いてくれて、私全部話しちゃおうって思ったけど、何をどう話したらいいのかさえもわからなくて演劇部のことしか言えなかったんです」

――あんな前から...。

「でも、合宿に来てからの4日間で私、何となく自分の気持ちもわかって来た気がして、心の中がまとまってきたように思えて。ヒカルちゃんと毎日一緒にいてわかったことと、一緒にいられない人のことで気がついたことと...」

――ああ...、あかねちゃん...。

「そのことを自分の中で整理するためにも、唯一話せると思った田村先輩に聞いてもらいたいと思ってました、今朝までは...」

――今朝、アイツがここにいるって分かるまで...、ってことだよな。

もう、その先は言わねえでいいよ、わかってっから...と、喉の奥まで出かかったしマジで言葉にしちまおうと思ったけど、一步のところまでそれを止めた。

現実を見て知った上で、俺は俺のままあかねちゃんに告白しよう、さっきそう覚悟したばかりだったから。

「さっき私、その人に傍にいたいって言っちゃいました。そんなこと言うつもり全然なかった

のに。その人は何も言ってくれなかったけど、私の手を引いてここまで連れてきてくれた」

――全身棒線復活…。

「優しくないし何も言ってくれないし一緒にいると緊張しちゃうその人のことが、私は最初からずっと好きだったんです。そういう自分の気持ちに気がつくことが出来て、言えないと思っていたことをその人にぶつけて、今もこうやって田村先輩に全部話してるのは、ヒカルちゃんや先輩が私の傍にいてくれるからだって思います。さっき、田村先輩の顔を見たら心の底から安心しちゃって、力が抜けちゃったんです」

――あの笑顔の意味、か…。

「その人のことをこれからも想っていきながら、少しずつかもしれないけど、私は強くなりたいしヒカルちゃんのような女の子になれるようにがんばりたいと思う気持ちは変わりません。とりとめもない話を聞いてくれてありがとうございました。こんなに夜遅くまで…」

……と、あかねちゃんは長い話を終えた。

俺が最初に誘った今夜の約束だったのに、あかねちゃんはそれをすっかり忘れちゃうほどに、今聞いた俺に話したかったことが溜まってたんだろう。

あかねちゃんが精一杯だってことはよくわかった。

ここまで来るまで、あかねちゃんはいくつもの壁を破って来たってのもわかった。

でも、まだそれが完全じゃなくどこか不安定だから、あかねちゃんにとって唯一頼れる先輩ってところにいる俺に全て話してくれたってことも。

けど、俺はあかねちゃんにとって頼れる先輩でしかいられねえのか？

まだアイツへの気持ちに気がついたばかりのあかねちゃんだよな？

今ならまだ、あかねちゃんのことを俺に、頼れる先輩から好きな相手に変えることは出来るかもしれない。

俺は先輩ってだけじゃイヤだぜ。

あかねちゃんが一番近くにいて当たり前、いつも傍にいて当たり前、抱きしめて当たりの唯一の男になりてえよ。

――だから、今ならまだ…！

「あかね…」

俺はお前が好きだ。

そうひとこと言っちゃえばいいのに、言いたくて言いたくてたまんねえのに、田村優作にブレーキがかかっちゃまって動かねえ。

もう、当たって砕けちゃってもいいって思ってるのに、どうして動けないのかわけわかんねえ。

——ほんっと、わっかんねえっ！

「...あかね、俺が最初にあかねを誘ったんだぜ...？忘れてるだろ...？」

自分の話を終えて完結しちゃってるあかねちゃんにやっとそれだけ言うと、

「...忘れてませんよ？でも、私の話を先に聞いてもらいたかったんです。少しでも早く聞いてもらって壁を打ち破りたくて...」

そう言ってあかねちゃんは微笑んだ。

——参ったね...。ヒカルの後ろに隠れて震えてた女の子が強くなったぜ、あかね。

でも、この革命には俺の功績もちっとはあるんだよな...。

「先輩の話、これから聞きます。すみません、私のワガママで...」

「いや？いって...。俺があかねに話したかったことはごくごく短い話だから」

「なんですか？」

現実を見て知った上で、俺は俺のままあかねちゃんに....、

「好きだぜ、あかね」

え...？と言ったままあかねちゃんは凍結しちゃった。

ほんと、思ってもいなかった俺の告白だったのね....。

「...あかねの、そういう一生懸命なところが俺は好きだぜ？だから、自分に自信持て？」

「田村先輩...」

...と、あかねちゃんはほっと息を吐く。

俺の心が凍結する——。

「確かにヒカルは魅力的な女の子だと思う。でも、あかねはあかねのままで全然オッケーだって俺は思うぜ？」

——ほんと、そうだぜ。俺はあかねちゃんのままが好きなんだから。

「――そう、ひとこと励ましてやりてえなって思ったの！」

「...それだけですか？それだけのために...？」

「ああ、そう。あかね頑張ってるからさ...！」

「せんばあい...」

あかねちゃんはぼろぼろと涙をこぼした。

泣き虫だって言ってたけど、俺は初めて見たあかねちゃんの涙だ。薄暗い空間の中にキラキラ光るその涙はものすごく綺麗だった。

◇

怖がりのあかねちゃんを部屋の前まで送ってから自分の部屋に戻った。

さすがに意気消沈。

しばらく立ち直れねえだろ、俺...

非モテはやっばいつまでも非モテってことだ。こんちくしょう！

ヒビクはさっき俺が部屋を出た時と変わらない体勢のまま爆睡してる。

松山ブラザーズは風呂にでも行ったのか、部屋の中にはいねえ。

んで、いつも俺が寝てる通路の上の布団で転がってた柏木が、

「田村くん、おかえり」

と、体を起こして言った。

「おお...」

ひとりでこっそり部屋を出た俺がどこで何をしてたのか訊かれると思ったけど、柏木はそのことについては何も言わず、

「明日はまたあの坂道下るんだねえ...」

と、言った。

「...だな」

こんな精神状態じゃ来たときの松山ブラザーズみたいになっちまいそうだぜ...

「田村くんずっと床の上だったしさ、今夜はベッドで寝ていいよ。俺がここで寝るから」

「...は？」

初日にジャンケンで負けて以来4日間、誰一人としてそんな優しい言葉をかけてくれたことねえってのに、いったいどうしちまったわけよ？

「...顔、洗ってサッパリしなよ？俺にはそんなことしか言えないけど、さ...」

「...柏木？」

こいつ、わかってやがるのか？

俺が今何してきたかってことも、俺が惚れてる相手も、その相手とどうなったってことも。

「...ってことで、おやすみ。太郎さんと次郎くんはお風呂に行ってるよ」

柏木はそう言って寝ちまった。

誰にも言えねえって思ってたけど、わかってくれてるヤツがいるってことがこんなにも心の支えになるってこと、今初めて実感した。

あかねちゃんが、ヒカルにも麻耶ちゃんにも言えないことを俺に話したかった思いと、それを最後まで聞いてやれた俺は間違いなくあかねちゃんの心の支えになれたはずだってことも。

「柏木め...」

やべ。

泣けてきた...

柏木のヤツ、寝たふりしてるに決まってる。

俺の涙、こっそり見てるかもしれねえ。

けど、いっか。柏木だから。

ふと、窓から夜空を見上げると、青白い月がぼやけた空気の中で霞んでいた。

合宿最後の夜。

――田村優作、誕生日を目前にして華麗に玉砕す。

19 ライジングサン

月はどこまでも青く霞んでる。

頭の中で流れてるBGMは『涙のBirthday』。

そして、心の中はどしゃぶりの雨。

けど、こんなシリアスに浸る田村優作ってのもたまにはいいだろ。

あかねちゃんはもう寝ただろうか？

アイツの夢を見ながら、さー。

安らかなあかねちゃんの寝顔が夜空に映し出されて見えたような気がした。

あかねちゃんが幸せなら俺はどうなったってー、全然よくない。

全身棒線ちびまる子どころじゃない、砕けたあとのガラスの欠片を踏んづけたみてえに痛い。

時間が経つに連れてそれは血管の中を通過してじわじわと心臓に近づいてくる感じだ。

けど、いつまでもメソメソしててもしょーがねえから、風呂行って垢と一緒に心の中のどしゃぶりも洗い流しまおう。さっき、柏木も顔洗ってサッパリしろって言ってくれたし。

で、風呂に行く用意をしようとしたら松山ブラザーズが帰って来た。

「あれ田村、これから風呂？」

洗い髪をタオルでゴシゴシやりながらひとりが言った。

「ああ」

「お前、さっきからどこ行ってたの？」

もうひとりが突っ込んで来た。同じスタイルに髪を濡らしてる風呂上りのブラザーズはどっちがどっちだか見分けがつかねえ。こいつら、顔も同じだけど声も同じってことをたった今知ってちょっとへんな感動したり。けど、だからって別にどーってことねえから、

「ちょっとな...」

とだけ答えてお風呂グッズの用意をはじめた。

柏木にはバレしまったけどこいつらふたりには知られたくねえ。田村くんの胸のうちをわかっててくれてんのは柏木だけでいい。

「何か暗くねえ？女にでも振られたか？」

ーだから、どーしてそう察するわけよ！？

確かに暗いかもしれないぜ？いや、絶対に暗いに決まってるさ。だって、ロストラブしちゃったばっかなんだから！

けど、なんにも知らねえコイツらが、俺が暗いってのをそこんどこドンピシャに結びつけるこたあねーだろ。「まだ葉っぱ衣装に納得できねえの？」とか「テーマ曲のアレンジ思いつかないの？」とかに考えが行くのが自然じゃねーか？俺たちは仮にも軽音楽部の合宿に来てんだぜ！

...ってのは心の中で叫んで、ヤツらのツッコミは無視したまま、

「...んじゃ、ちょっと行ってくっから！」

と、お風呂グッズを脇に抱えてブラザーズの間を通り抜けようとする、

「凶星だな、こりゃ...」

ダメ押ししたのは兄の方、だろう。

「誰に振られたのよ？ヒカルか？あかねか？それとも鳥海たちのどれかか？まさか小早川ってんじゃねーだろな？」

「なんでそこで小早川が出てくんの！いねーだろ、ここに！」

「ってことは、やっぱ演劇部の誰かだな？」

——やべ。墓穴を掘っちまった...

どーして俺ってこうもバカ正直な体質してんだか。

でも、ここでコイツらに暴露しちまったら俺の繊細なロストラブはおちゃらけコメディー化されちまう。これ以上泥沼に沈まねえためにも、ここはポーカーフェイスで誤魔化し続けるしかねえ。

「振られてなんかいねーし暗くもねーって。ヒビクも柏木もお休みしてっから静かにしてただけじゃん」

疲れる。

早く風呂入りたい.....。

「あれ？柏木も寝ちゃったの？」

さっきから俺に厳しいツッコミをいれてたのはもちろん兄の方だ。弟が、本来俺が寝るべき場所でスヤスヤ寝息を立ててる柏木の顔を覗き込んで言った。

「何だよなあ。最後の夜だったのに風間も柏木もマジメに寝ちまって。田村は暗いし...」

「だから暗くねえっての！とにかく行ってくる！」

いつまで付き合ってもしよーがない。とにかく今は風呂！

「風呂はもう終わりじゃねえか？なあ、次郎？」

「は?!」

「そういや、俺たちが出たあと、清掃のオッサンがデッキブラシでゴシゴシやってたなあ」

「それを早く言いなさいなっ！」

お前ら帰って来てから何分たってんだよ！

っていうか、俺、今日風呂無し?!

垢も涙も明日まで繰り越しなさいってか?!

「そりゃねえぜ...！」

田村優作。

どこまでタイミングの悪い男なんだ。

俺が田村優作じゃなかったら、ケツ叩いて笑ってやりてえくらいだぜ……。

「別に一日ぐらい風呂に入らなくて死にはしねーよ！」

「そりゃそーだろ。死にはしねーよ、死にはな！」

俺の心にどしゃぶりの雨が降り続くだけで！

「さっきからごちゃごちゃ何騒いでんだよ…？」

冷めた声ができる方に顔を向けると、ベッドの上で体育座りをしたヒビクが、ぼんやりとした目を俺たちに向けていた。

「起きてたの…？」

「起こされたの、お前らに…」

そしてこっちでは、

「あれ？田村くん、まだ風呂行ってなかったの…？」

布団の上にお行儀よくお母さん座りをしてる柏木が目をこすりながら言った。

あらら…、

「ふたりとも起きちゃったの…」

「起こされたの！」

ヒビクと柏木は声を揃えた。

ベッドから這い出たヒビクはぼーとしたままの調子で壁際に行き、空調のつまみを「強」に切り替えた。狭い部屋に5人の男が揃った瞬間、気温も湿度も上がった気がするの確かだ。

暑いと言いながらも汗ひとつかいてないヒビクは、

「振られたから死ぬって言ってたの田村？」

涼しげな顔をしていいやがった。

どうでもいいけど、それ、とんでもないでしょ！どーしてそうなるか。

「誰も振られてねーし、誰も死なねーよ！」

なんかもうすでにおちゃらけコメディー化されちゃってる俺のロストラブ…。

青い月を見上げながら、頭の中で『涙のBirthday』のBGMを流しシリアスに浸ってたのは100万年も昔のような気がする。

もういい。

こいつらと一緒にだと傷心にも浸ってらんねえってことだ。

風呂には入れねえし、暑いし、月はやになるぐらいに青いし！！

風呂グッズを投げて座ったところに、さっきブラザーズたちが見てたえっちい本が無造作に置い

てあった。

「どの子がセーフでどの子がアウトなわけ？」

本を開いて兄に見せると、たちまち顔の筋肉を緩ませて、

「たむどんのえろ...！」

と、笑いやがった。

ええ、ええ、えろですとも！俺だって男の子だしえっちい本大好きよ！もうあかねちゃんに操を立てる必要もねえし.....別に今までも立ててたわけじゃねーけど.....とにかく解禁！

「んじゃ、田村、このたわわちゃんはどう？」

って、兄が指差したおねーさんは、そりゃもう思いっきりたわわな.....を見せてくれちゃってます。

「アウト！」

「何でえ！？こんなにぼよよ～んなんだぜ？」

「俺はぼよよーんより、ほにゃと華奢な.....」

「あかねみたいのが好みってわけか...」

――なっ？！

兄は、へ？ってな顔で俺を見た。別に真意をついたってわけじゃないようだ。

けど、こーゆー本のおねーさんと可愛いあかねちゃんを並べて考えるなよ、太郎め！

「どれどれ、どんなたわわちゃん？」

背後から覗き込んで来たのはヒビクで、

「うお！こりゃすごいねえ～！俺はセーフかな、このおねーさん！」

と、たわわを手ですりすりする。

「だろ？だろ？田村の感覚変だぜ！」

「.....俺もたわわがいいなあ...」

「俺はほどほどがいいかなあ...」

眠そうにしてた柏木もムツリの弟も集まってきて、気がつきゃ真夜中も過ぎた暑苦しい狭い部屋で、一冊のえっちい本に5人の男子が群がってたわわだとかぼよよんだとかムラムラほにゃほにゃと、えろな言葉を連発してる。たわわなおねーさんは、みんなに触られまくったからか、いつの間にか顔もたわわもしわしわになっちまって可哀想だ。

なんだかなあ...だよな。

――ってことを、みんなが一斉に我に返って感じたらしい。

えっちい本はポツン、とみんなが丸く取り囲んだ真ん中に放り出された。

「...非モテクラブでも結成する...？」

何の気なしに言うと、

「田村会長！」

と、ヒビクがチャカしやがる。

はいはい、会長でも何でもやりますよ。

どうせ俺は過去も現在も未来までもずっと非モテの元祖永遠非モテ男だし。

「んじゃ副会長は太郎...、」

と言いかけたら、

「冗談じゃねえ！俺は入会しないぜ？非モテじゃねーもん！」

と、ぬかしやがった。

「非モテじゃねえ？！どこがだよ！」

「言わなかったっけ？テニスサークルの女子大生と電話番号交換したって。帰ったら連絡することになってんだぜ？」

兄は女子大生が書いてよこしたという花模様のメモ帳を自慢げに見せてくれた。

電話番号と名前がキレイな女文字でしっかりと書いてある。

「マ、マジ...？」

フカシじゃなかったのかよ。花火大会でナンパしたっていう女子大生の話。

「ま、あつ〜い夏になりそうだぜ！いひひっ！」

「俺が必死に曲作りやってた時に、お前たちってそーゆーお楽しみをしてたんだ...」

ヒビクは恨めしそうな目で兄を睨む。

「...悪いけど俺も非モテクラブには入会できないかな〜。ごめんね、田村くん」

爽やかに言いやがったのは柏木だ。

でも、ヤツはしょーがない。本当に非モテじゃねーんだから。毎晩9時過ぎになると小春ちゃんに電話かけてたし、テレホンカードを4枚も使い切るほどのラブラブカップルやってるもんな。それに、柏木は唯一俺の心のうちをわかってくれてるヤツだから、それだけでも許してやる。

「ま、柏木は小春ちゃんと仲良くしてろ」

「うん、合宿が終わったらふたりで旅行に行くことになってんだ」

「なんですとっ!？」

全員が声を揃えて叫んでた。

ふたりで旅行って...あんた!？」

「こ、こ、高校生がふたりで旅行かよっ!？」

ツバを飛ばしながら鼻息荒くしてるのは兄。

けど、弟もヒビクも俺も大差ない状態で柏木に詰め寄ってた。

「...やっぱり、そう？マズイかなあ？でも、もう決めちゃってるんだよね」

柏木は頭をかきながら言った。

——柏木くんって大人なのね…。

「俺も非モテクラブにはちょっとなあ…」

と、ステキに乱れた金髪をササッと手櫛で整えながらヒビクが言った。

「お前は現在非モテだろ!？」

「失礼な！俺は今まで非モテだったことはないはずだぜ？それに…、まあいいや。とにかく非モテクラブの会員にはならねえよ！」

う…。裏切り者め。それでも親友かよ。

「会員は俺と次郎だけかよ…」

「ちょっと待った！どーして俺が無条件で入ってるわけ？」

「違うのかよ!？」

「……とりあえず今は違ってねえけど…、」

「んじゃ立派な会員でしょ！」

松山次郎のくせに非モテじゃねえなんて100年早いぜ！

「…非モテじゃなくなる予定ありなのっ！俺も！いずれ！」

は…？

みんなの目が真ん丸くなって松山弟に注目した。

「……予定だよ、予定！まだあたってみねえとわかんねえけどっ！」

あたるっ!？弟が!？

「誰に!？」

またみんなで声が揃っちゃった。

「…それはナイショ。けど非モテクラブはパス！あたる前から砕けんのはイヤだから」

と、弟は不気味にニヤリと笑いやがった。

兄は女子大生、柏木は小春ちゃんと旅行、ヒビクは入会拒否、そして弟は誰かにあたるつもりでいるらしい。

ってことはまた、

「…俺ひとり？」

ヤツらみんなして顔きやがる。

——もういい。ひとりで非モテクラブの会長も副会長も書記も会員もやってやる。

また墓穴を掘った。

もう、こればっかだ、俺——。

◇

合宿最後の夜は、まるで中学生の修学旅行みたくくだらねえネタで盛り上がり、そのうちひとりふたりと寝ちまった。みんなそれぞれの近い未来に想いを馳せ、いい夢見てんだろーな。ちきしょーめ。

けど、俺はやっぱ眠れない。

どうしたって眠れやしない。

目を瞑るとあかねちゃんが出てきちゃう。

あの、キラキラしてた涙が浮かんじまう。

中学の時に好きだった涼子ちゃん。

去年一目惚れしたマドンナ先輩。

そして、あかねちゃん。

みんな想いを伝えられずに終わっちまった田村くんの恋。

好きだって気がついたときは、みんな他の誰かを想っててさ。

それでも `好きだ、って言っちゃえば、違った結果になったのかも知れねえな。

もしかして俺は臆病なのか...？

だとしたら何を恐れてるんだろう？

——わかんねえ...

今はただ、胸が痛いだけ。

.....ってなことをうつらうつらしながら考えてる間に、いつの間にか外が明るくなっちまった。

柏木が譲ってくれた二段ベッドの上段は景色の見晴らしがいい。

ベッドの上に起き上がって外の湖を見た。

昇りはじめた太陽が湖の上に新しい光を生み落としている。今まで床の上に縮こまって寝てた俺にとっちゃ贅沢なロケーションだった。

ふと、昨日ヒビクが歌ったテーマ曲が頭に浮かんだ。
詞は確か、こんな朝の情景を描いてなかったか？

夜が明けたよ 長い長い夜が
朝もや立ちこむ緑の湖面に 生まれたばかりの光が踊る

湖面は緑。
その上で生まれたばかりの光が踊ってるぜ。
そして、太陽はぐんぐん昇っていく。
後戻りしないで上だけを見てまっすぐに。

ヒビクが描きたかったのはこの太陽なんだな。
飾る必要のない、そのままの情景だけ。
だから、あの詞だったのか…。

——ライジングサン、か。

いい歌じゃん。
ほんと、いい歌じゃん……。

「田村、いつまで寝てんだ、起きやがれっ！！」
抱きしめてた毛布を引っ張られて体がクルッと回転した。
ようやく寝付いたばかりだったのに、意地悪なことしやがるのは松山兄だ。ほんの30分ぐらいしか眠ってねーよ、俺…。
けど、もう合宿はおしまい。
今日はまた、あのくねくね坂道を下って東京に帰る。

「あかね、おはよ！」
食堂で会ったあかねちゃんに声をかけると、
「あ。田村先輩、おはようございます」
あかねちゃんは清々しく笑った。いい笑顔だと思った。
「……いろいろがんばろーな！」
いつものように先輩ぶってポンと肩を叩いて。
「はい…！」

あかねちゃんのいつものふんわりした笑顔の中に、少しだけ芯の強さが垣間見えた。きっとこ

れからはこんなふうには笑うんだらう。

たぶんもう、ほにゃらん...と萎えることはないな。

「先輩、目が赤い...。ちゃんと寝ました？」

「あ？ああ、昨夜は遅くまでヤツらとくだらねえ話で盛り上がりすぎちゃったからね！」

いろは坂を下ったバスの発着所で、寝不足へろへろの軽音楽部男子一同は全員で便所に駆け込んだ。

新学期が始まって3日目。

昨日から普通通り6時間の授業と部活も始まっているけど、俺たちの身体はまだ夏休みモード全開。

初日はヒビクが寝坊、昨日は松山ブラザーズが遅刻、今日はブックキャスル全員が滑り込みアウト、。

「たかが1分だけ、センセ！オマケしてちょーだいよ！」

って懇願が権田に通用するわけもなく、

「甘い！1分だろーが1秒だろーが遅刻は遅刻！」

と、生徒手帳を取り上げられちまった。これはあとで遅刻の▲マークと権田のハンコが押されて返ってくる。今日の校門当番が千田センセだったらきっと目を瞑ってくれただろうに。

「権田のケチ…」

と、呟いたのは松山兄だ。

「田村あ、今なんか言ったか？！」

「お、俺は何も言ってねえって！」

「嘘こくでねえっ！」

「嘘なんかこいてねーよ！」

何で俺かな、まったく！

言った張本人は知らん顔してさっさと昇降口に行っちまたし！

「文句があるならあとでゆっくり聞いてやるから俺んどこ来るか？！」

冗談じゃねえよ。

新学期そうそう、権田の長い説教聞いてらんねえぜ！

……ってなことを、校門の前でごにゃごにゃやっていると、ふらふらとチャリンコこいでやってきたのは、

「…また遅刻か、群竹え」

…クンだった。

「ども…すみません…」

口では言ってるけど身体はちっとも目覚めてないって調子で、髪は思いっきり寝癖が立ってるし制服のボタンは左右付け違えてるし、大丈夫か？って言いたくなるぐらいにボケている。いつもの切れるほどの鋭い目つきはどこへやら、ちゃんと押してやったらふらふら～と倒れちまいそうな冴えない群竹クンだ。実際、

「生徒手帳出せや！」

と、権田に突付かれてよろけてるし、その弾みで生徒手帳を道に落としてるし。

俺の足元に落っこちたそれを拾ってやった時、ちょうど開いてたページは欠席x、遅刻▲、早退○なんたら…を書くページだった。

「…すげっ！」

思わず声に出ってしまったのは、遅刻の▲でずらずら〜っと上から下まで、開いた2ページ分が埋まってたからだ。

「あ、どうも...」

群竹クンは俺の手から生徒手帳を取り、それを素直に権田に渡してそのまま昇降口に向かって歩き出した。

「おい、チャリンコ忘れてるぜ？」

と、ヒビクが声をかけると、

「あ.....」

自分の周りをキョロキョロ見回してから、やっとここにいたのが俺たちだと認識できたようで、目ん玉をくりくりとこすってから、

「あ...、風間先輩...。ども...」

と、ヒビクにだけ頭を下げやがる。

「お互い、まだ学校モードになってねえな！」

ヒビクが妙に慣れた様子で群竹クンのトンチンカンな制服のボタンを指でつつくと、群竹クンはさっきの権田の時みたく一瞬ふら〜っとよろめいて、

「...ですね」

置き去りにしそうになってたチャリンコを転がして大あくびをかましながら校門の中に消えて行った。

――何なの、アイツ。

あの髪、まるで魔法使いサリーちゃんのパパだ。

超ダセー....。

あかねはヤツのどこに惚れてるんだか....。

っていうのは、素で思っちゃった本音だ。

「ヒビク、アイツとオトモダチになったわけ？」

「一昨日、ちょっとな」

ヒビクの話によると、寝坊で遅刻した一昨日の始業式、同じく遅刻してきたヤツと一緒に体育館脇の木陰でばっくれてたところをヒカルのせいで権田に見つかり、ふたり仲良く40分の説教を食らったらしい。

「あいつがどうしてヒカルたちのにぎやか組に入ってるのかワケわかんねーよな」

と、ヒビクは笑うけど、俺はそっちよりもあかねが何でアイツに惚れてるのかワケわかんねえ

。アイツの存在によって田村くんの恋は砕けちまったわけだし、そのおかげで17才の誕生日はいつも以上のお盆モードで過ごさなきゃならなかった。ただでさえ8月17日って日は巷じゃ盆休みの真っ最中で線香くさいってのに。

——優しくないし何も言ってくれないし一緒にいると緊張しちゃうその人のことが、私は最初からずっと好きだったんです。

好きだったんです。

好きだったんです——。

いきなり、あかねの声が耳の中でこだました。

あの群竹くんには、緊張感のカケラもないんですけど……。

「お前らいつまでそこにいるつもりだ?! ホームルーム始まるぞ!」

「やべっ!」

権田に怒鳴られて俺たちは慌てて校舎に駆け込んだ。

で、昇降口から階段を昇ろうとしたところでもた群竹くんに会った。

ヤツはチャリンコ置き場からちんたらとやってきて、もうホームルームが始まり廊下に出てる生徒もいないってのにさして慌てる様子もなく、サリーちゃんのパパ化した髪を手櫛で直そうとしながら——全然なおらね——で押さえたそばからまた、ぴょん、とおっ立ちまうけど——廊下の突き当たりの1年F組目指して歩いて行った。ちなみに制服のボタンはそのままだった。

——なんか、妙にへこむ田村くんです…。

ま、しょーがねえことだけど。

・
・
・

「田村くん、新学期から妙に暗くない? 失恋でもしちゃった?」

と、妙に明るく言いやがったのは我が天敵小早川環ちゃん。

どうして俺の周りにはいるヤツラって、[田村くん暗い=失恋]に結び付けたがるんだ?

しかもそいつらみんな、明るく楽しげに『失恋』の言葉を出しやがる。

第一、俺は別に暗くなんかない。

ロストラブから半月以上も経ってんだから、いつまでも引きずったりしてねえし。

ただ、今日はちょっと腑に落ちないっていうか、ワケわかんねえっていうか、変に悔しいっていうか、とにかくそういう気分浸ってるだけだ。

「そりゃ見間違いだぜ、小早川。100万ボルトの明るさに目がくらんじまったんじゃないの?」

「あっそう？安心した！じゃあ、放課後の中央委員会はバッチリ仕切ってもらえるね！」

「おお、まかせとけ！」

と、胸を叩いてみたものの...

「あぁっ！？中央委員会？！あんの？！」

「あれ？聞いてない？2年生だけ集まって今度の校外学習についての話し合い」

――聞いてないっす...

現2年の中央委員っていい加減なヤツらばっかだから、ほとんど横の繋がりがあってのがない。小早川が教えてくれなきゃ何もわかんねえし、屁の役にも立ってない中央委員が俺だ。

「うちの学年、中心になって話を進める人がいないから、今回もあたしが憎まれ役やんなきゃかなあって思ったけど、田村さんに任せちゃっていい？」

あらら、小早川さん。

肩なんか下げちゃって、らしくもねーぜ。

けど、言われてみれば2年の中央委員会で中心になってるのは小早川で、いい加減な俺たちをまとめるためにいつもキーキーしてた。

一応くじ引きで決めた委員長にはE組の奥田ってヤツがなっている。けどコイツは部活バカでほとんど委員会に出て来やしない。

ま、俺もおっかない小早川さんと同じクラスじゃなかったらその口だったろうから、偉そうなこと言えねえけど。

「校外学習ねえ...。どこ行くんだっけ？」

校外学習は2年生だけの行事でようするに遠足みたいなもんだ。

ガキの頃は遠足っていったら、一カ月も前からウキウキワクワクで前の日なんて眠れないぐらいに興奮した行事だけど、さすがにもうそういった少年の心は忘れちゃった。今、小早川に言われるまでそんな行事があったこともすっかり忘れてたぐらいだし。

「高尾山。登山するらしいよ？」

「山登りかよ。ダル...」

「確かにね...。あたしもあんまり行きたくないけどしょうがないじゃない...」

小早川の運痴はヒカルの音痴に匹敵する。

「わかる、わかる...」

妙に納得して頷くと、

「...それ、どーゆー意味よ？」

と、睨まれた。

でも、いつものように勇ましい睨みでもなく、どことなく儂げだっるのが気になった。

「高尾山って山頂まで6コースあるらしい。それを調べてみんなに割り振って管理して...、今度の仕事は結構大変なのよね...。その大変な仕事についての話し合いをあのメンバーでするわけだから...、あたしの憂鬱わかるでしょ？」

小早川は深いため息を吐いた。

きっと小早川も疲れちまってんだな。

何だかんだ言たって、小早川がいなくちゃ中央委員会は回っていかねえし、いつもおんぶしてもらってる方はおんぶさせられてる方の重たさなんてわかんねえから。

——中央委員会、ハッキリ言って俺のガラじゃねえ。

校外学習で山登りってのもめんどくせえ。

けど、大事な体育祭文化祭を前にして今の憂鬱状態から心機一転するにはちょうどいいかもしれねえな。いつも世話になってる環ちゃんを助けてやってもバチはあたんねーだろーし。

「んじゃ、今日の委員会は...、」

「うんうん！田村くんが？」

「...——奥田に仕切らせる...！」

「は？田村くんじゃないの？」

——俺じゃないっす...。

だって一応委員長って名のつくヤツがいるんだもん...。

「...ま、どっちにしても小早川は安心しててオッケー！何とかするから」

ってわけで、放課後の委員会。

ど一せ部活バカ、もとい、空手バカの奥田委員長は格技場に直行してるんだらうから、小早川には先に委員会に行かせて、俺は奥田を呼びに行った。

しかし、格技場ってのはムサイ。

狭い道場の中、あっちでは柔道部が投げ合いをやりーの、こっちでは空手部が殴り合いしーのでやたら怖いし、やわな田村くんにはちよいと場違いな場所だ。

ハッ！トウッ！おりゃっ！と掛け声をかけながら組み手練習をしてる空手部員たちの真ん中にいる部長の奥田委員長を見つけ、

「おい、奥田あ！」

と、声をかけたとき、ふと見た視線の先に群竹クンがいた。

群竹クンは黒帯を締めた1年生——確かにぎやか組の一員で大久保ってヤツ——と組み手練習をしていた。

その動きの速いこと！

大声を上げながら突きあり蹴りあり受身ありで、まるでカンフー映画。それがまた悔しいぐらいにキマってる。朝見たサリーちゃんのパパは夢だったんじゃないかと思うぐらいの気迫と鋭さに、思わず息を飲み込んだぐらいだ。

「おお、田村！どうした？」

と、呑気に顔を向けた奥田を、

「ちょっとこっち来いって！」

"おいでおいで"で呼びつけて、側にやってきた奥田にすかさず訊いたのは、

「アイツ...、群竹って...どんなヤツ？」

.....だった。

奥田は怪訝な顔して、

「何で？」

と、訊き返して来た。

何で？と訊かれりゃ答えはひとつ。

あかねが惚れてる相手だから――。これしかない。

トンチンカンなサリーちゃんのパパだったり、愛想なかったり、鋭いカミソリだったり、ジャッキーチェンだったり...のアイツが実際のところはどんなヤツなのか知りたいだけ。

けど、そんなこと奥田に言えるはずもねえから、

「...いや？何となく...」

と、濁すと奥田は、ふふん、と意味深に笑い、

「タダじゃ教えねえよ？」

と、言いやがる。

「タダじゃないって...？」

「情報交換といこうぜ？」

奥田はニヤリと笑いながら言った。

「情報交換...？」

奥田が知りたい、俺が持ってる情報なんてねーだろ。空手バカとは普段はほとんど接点がないし。

奥田は俺を格技場の隅っこに引っ張って行き、

「軽音楽部の浅倉ヒカルちゃんってどんな子？」

と、小声で訊いてきた。

「ヒカル？何で？」

「何で？って訊かれりゃ答えはひとつ」

と、奥田はまたニヤリと笑う。

――まさか...？

にひひ、と奥田は不気味に頷いた。

「かわいーなーって思ってさ」

あらら。

この空手バカも隅に置けない。いつの間にそーゆーの？

ニヤケた奥田の向こう側に浮かんだ涼しげなヒビクの顔を打ち消し、俺はこの交換条件を飲んで音痴だとかにぎやかだとか今んとこ付き合ってるヤツはいない（ヒビク、すまん）...ってことを多少良心の呵責を感じながら教えてやり、群竹クンの情報を聞き出した。

――キレがあって鋭い。空手も上手いしセンスは抜群。

根性はあるけど、人と関わるのは超苦手。

孤独をこよなく愛し、愛想はちっともなく優しくもない。

ハッキリ言って付き合いにくいヤツ。オトモダチにはなれないタイプ。

ってのが、奥田から見た群竹クンだった。

俺が思ったアイツの印象に、さらに硬派なマイナスイメージをプラスした感じ。

今朝の"サリーちゃんのパパ"はバグった群竹クンってところか...

奥田が言う群竹クンであってるとしたら、あかねは――。

いやーな感じに全身を覆われそうになった時、群竹クンがこっちを見た。

鋭く、切れるような眼差しで。

その視線のナイフに刺され、とてつもなく胸が痛んだ。

――おい、群竹！そのナイフであかねを刺すなよ、泣かすなよ...！

.....と、心の中でしか叫べない自分にへこむ。

「で、田村の用はそれだけ？」

「...やべっ！忘れてたっ！！」

奥田を引っ張って委員会に行った時は、もう既に小早川が話のほとんどをまとめてしまっていた。

しかも、いきなり連れてこられた奥田委員長はただの浦島太郎で使い物にならなくて。

「悪い...、小早川」

「いいよ。こうなるんじゃないかって最初から思ってたし」

――だよな。

委員会に出たこともない奥田に仕切らせようなんて。

最初から期待されてなかったってことに今さら気づいてまたへこむ。

素直に俺がやっときゃ格技場に行くとも、群竹クンを気にすることも、失った恋に再び想いを馳せることもなかったわけだし。

あとそれから、小早川も、な…。

——なさけねえ男だぜ、田村優作。

心機一転、

——じて再び憂鬱の底に沈んだ。

21 青天の霹靂 その1

青空広がる秋晴れの...っていうか、やたらと残暑が厳しい9月のとある日、本城高校2年一同は高尾山にやってきた。校外学習って名目だけどようするに山登りの遠足だ。

学校ジャージ着てかーちゃん弁当が入ったリュックしょって水筒持ってルンルン、なんて浮かれてるヤツはひとりもなくて、バスから降りたやつらみんな、だるそうにチンタラと集合広場に歩いていく。俺も例外じゃないけど中央委員って立場上クラスをまとめなきゃなんない。いかげんにやっていると、また小早川に怒られちまう。

—いや。怒られるんだっいたらいつものことだからいい。

けど、このところの小早川はどうも様子がおかしい。今日の日を迎えるまでに中央委員はクラスのヤツらを班分けしたり登山コースを決めさせたり計画立てさせたり、それらをまとめて把握しなきゃならなかったりと下準備があったわけだけど、そのほとんど全部を小早川が手際よく仕切ってやった。クラスの連中も登山コースの確認ぐらい自分らで調べりゃいいのに、そーゆーことまで小早川にまかせっきり。俺はっていうと、てんてこまいしてる小早川を横目で見つつもどこに手を出してやればいいのかつかめねえから、ほけ〜っ、としてただけだ。こういうとき、いつもの小早川ならすかさず、`楽しんでないで田村くんも何かやってよ！、って頼んでもいない指示を出してくるはずなのにそういう威勢もなしで、

「いいよ、あたしがやっつくから」

なんて許してくれちゃったりして。

—だから余計に怖い。

何か、悪いもんでも食ったか？

それとも暑さで霍乱してるか？

それとも、見放されちまったのか、俺？

田村くんに頼んでる間に自分で動いちゃった方が早い、ってさ。

たぶんこれだな.....。

心機一転して、いつも世話になってる環ちゃんを助けてやろうなんてちょっと張り切ってはみたものの、結局は未だにため一のことから抜け出せないでいるしさ。

「とりあえず山頂まではもうやることないよ」

みんなを整列させたあと、小早川が言った。

中央委員が大変だったのはここまでで、こっからは自分たちが決めたコースを勝手に登っていただくだけだ。あとは山頂でまたクラスの連中を集合させて写真撮って下山してバス乗せて終わり。

まあ...、大変だったのは小早川だけで、俺は今みんなをここに集合させるのに号令かけたのが

初仕事って言ってもいいぐらいだけど。

「じゃ、あたしはみんなと行くよ？」

「おお。山頂でな」

山頂までの道が六コースある中、途中までケーブルカーを使うコースは最初から外されて俺たちが分かれて登るのは三コース。どれも約3キロの道で普通に登って1時間ちょいらしい。小早川は自分の班の女子たちと登山口に向かって行った。

「マジかよっ!？」

「シッ!!」

ごによごによやりながら後ろから歩いて来たのはヒビクたち一同だ。

こいつらにとっちゃクラスも班も関係ない。松山兄弟に柏木とヒビク、いつものメンバーでつるんで仲良く登山するつもりらしい。

中央委員の仕事もとりあえず山頂までないし、その中に俺も混ざろうとした時、

「そーゆーわけだから、俺はここでばっくれね」

松山兄はいきなり回れ右しやがった。

「は?どーゆーこと？」

こんな山のふもとでばっくっていていったいこの男は何をするつもりなんだか意味不明だ。そうっつこむとー。

「マジかよっ!？」

「だから大声だすなってばっ!センセにばれちまうだろが!」

そりゃ無理だ。

だって、こいつがばっくれる理由ってのが女子大生とデートだってんだから!

「驚いた?驚いちゃった?そうか驚いたかあ~、そうかあ~」

兄はさらに騒ぎ出そうとバタついてる俺とヒビクを押さえながら、満足気にニヤニヤ笑いながら言った。

「例の`華厳の滝の君、らしいぜ?」

ヒビクは兄の手を振り解きながら言った。

「ばーさんじゃねえんだから華厳の滝の君はねーだろ。`レイクサイドの君、って言うてくんないかなあ?」

「どっちにしたって年増じゃん」

「お前がそれを言うなよ、風間」

ヒビクの暴言に兄はムツとして反論する。

ーそんなことはどうでもいいとして、校外学習ばっくれてデートって、兄はずいぶん思い切ったことを計画したもんだ。

ってというか、合宿でナンパした女子大生と電話番号を交換したって話は聞いてたけど、こうも発展してるとは思わなかった。あれから女子大生の話は何も聞かされてなかったし、会うとか会わないとかぬかしてたのも、どうせ非モテのフカシだろうというのが俺たちの見解だった。

それがどうよ？ばっくれデートだぜ？

松山太郎のくせに！

お天道様もぶったまげて、ピーカンな青空にヒビでも入るんじゃねーの？

「バスが出るまでに帰ってくりゃ問題ないだろ？」

兄は早く立ち去りたいらしく、時計を見ながらそわそわしてる。どうやらマジらしい。

「記念撮影があるよ？点呼だってあるしどうするの？」

柏木がもっともなことを言うと、

「次郎、頼むっ！」

「はあっ！？」

突然振られた弟が素っ頓狂な声を上げた。

「いやあ～次郎くんがいてくれてこんなにありがたいって思ったことはないよ～！頼んだぜ、弟よ！」

「ちょっ、ちょっと待てよ、コラッ！！」

弟の制止も聞かず、今度こそ兄はそそくさと行っちまった。

ボーゼンと佇む弟以下俺たち一一。

◇

「この近くに住んでるんだって、その女子大生。太郎くんがここで校外学習があるって言ったら会いたって言ってきたのは彼女の方らしいよ？」

山道をえっさこいさと登りながら柏木が言った。

「彼女って...、その女子大生と付き合ってるのかよ？」

俺と柏木の後ろからふてくされながら登ってくる弟を振り返って確認すると、

「知らねえよ。俺だってさっき初めて聞いた話だぜ」

弟はますますふてくされた。

弟にひとり二役やらせて自分はデートってんだから、しかも、今の今までお付き合いの事実を聞かされてなかったときちゃ、弟にしちゃ文句の10も言いたいだろう。

学校ジャージでデートかよ、バカめ。

補導されて終わりだタコ。

バス乗り遅れて歩いて帰ってくりゃいいんだ、ボケ。

一一と、後ろで弟は独り言のようにブツブツと呪文を唱える。

その横ではヒビクがくっくつと笑いをこらえてた。

しかし。

去年の吉岡といい、華巖の滝の君といい信じられねえことは続くもんだ。

あいつにこうも簡単に彼女が出来て、俺が万年非モテってのはどーゆーワケよ？心機一転どころかさらに追い討ちかけられた気分だぜ。

「太郎くんも大胆なこと実行したよねえ〜」

柏木は呑気に感心してるけど、

「彼女と旅行しちゃうってのもかなり大胆だと思うけどねえ……」

こいつだって夏休みに彼女と一泊旅行に行ってるやがる。

「そうだ、柏木！お前小春ちゃんとの旅行はどうだったんだよ？」

ヒビクが柏木を背後から羽交い絞めにした。

「どうって…何が？」

「とぼけるんじゃないーいっ！あーんなこととかこーんなこととかあったんだろーが！」

「ああ…そーゆーことかぁ……」

「コイツ、にやけやがって！色男めっ！」

そうだそうだこのドスケベが！と弟も便乗して、クソ暑い中、3人は絡み合う。

――どいつもこいつも幸せ一杯で羨ましい限りだぜ。

けど、去年よりはマシか。

去年の今頃は、ひとりぼっちの一人身田村くんだったからな。

去年よりも、心の中は数倍痛えんだけど……。

「――だぁぁぁっ！！」

だんごのように絡み合ってる3人に覆いかぶさるようにして俺も便乗した。

一瞬、遠くの青空が俺の、`だぁぁぁ！！`に共鳴した気がした。

次の瞬間――。

ドドピカッゴロゴロッ！！！！

「な、何だよ、いきなりっ！」

突然バカでかい音と共に青空に稲妻が走り、マジで空が割れやがった。

「ヤバイぜ？急がねえとドシャーッと降って来るんじゃないやねえの？！」

団子虫になって遊んでた俺たちは、他のヤツラよりもずいぶん遅れちゃってた。空はまだ青い

けど、遠くの方から灰色の雲が勢いをつけて近づいてくる。

「濡れるのはごめんだぜ！」

真っ先に登山を再開したのはヒビクだ。

周到にウィンドブレーカーを着込んだのは柏木。

松山兄のせいなのか、俺のだあああ！！が悪いのか、ただ単に山の天気が変わりやすいだけなのか、何にしても青天の霹靂とはまさにこのこと。こんなところでどしゃぶりに打たれて濡れ鼠になるのはまっぴらゴメンだ。

俺たちはもくもくと山を駆け登り、間一髪で山頂に到着した。俺たちが茶屋に入った途端、もういいかい？ってな具合でドシャーッと来た。他のコースから登って来たヤツラも次々と駆け込んで来て、本城高校生で一杯になった茶屋の中を、各クラスの中央委員たちが自分らのクラスメートをまとめている。こーゆー状況でひとり二役を演じなきゃならない弟の身を案じながらも、俺も自分の仕事をするためヒビクたちと分かれてA組の連中が集まっている場所へと移動した。きつともう小早川が大半まとめてくれちゃってると思うけど。

――がしかし。

A組の連中はだいたい一箇所にまとまってはいたけど、小早川の姿が見えない。どこ見てもいない。

「小早川は？」

同じ班の女子たちが固まってたんで訊いてみた。

「お前たち、小早川と一緒にだったよな？」

ちっとも濡れてねえとこ見ると、こいつらは雨が降ってくる前に到着してたようだ。

「環ちゃんとは途中で分かれちゃったよ」

――はっ！？

「環ちゃん、登るの遅いからあたしたちに先に行ってって言うから……」

「ちょい待ちっ！じゃ、お前ら小早川を置いて先に登って来ちゃったってわけ？！」

女子たちはうん、と頷いた。

「――ってことは、小早川はまだ外？！」

冗談じゃねーぜ！どうして待っててやらねーの！

そりゃ、小早川は運痴だしあいつのペースに合わせるのはしんどかったのかもしれないけど、お前らいつもさんざん世話になってるだろーが。

女子たちに登ってきたコースを聞いて茶屋の外に出ようとする、

「田村くん、どこ行くの？」

柏木が俺を呼び止めた。小早川を探してくると言う、柏木は自分が着てたウィンドブレーカーを脱いで貸してくれた。

「先生には俺が言うておく」

「おお、頼む！」

外はもちろんどしゃぶり。跳ね上がる水しぶきで前がよく見えねえ。

——とんだ校外学習だぜ…。

この雨の中、ひとりですぶ濡れになってる小早川の姿が目に浮かんでやたらとせつなくなった

。

22 青天の霹靂 その2

足場の悪い山道を小早川を探しながら山頂からもう随分下ってきたのにあいつはどこにもいない。名前を呼んでも雨の音でかき消されちまって自分で出してる声も聞こえねえってヤツだ。柏木が貸してくれたウィンドブレーカーも役にたたねえほど、雨は容赦なく打ち付けやがる。

急いで上を目指していく登山者たちに、ジャージ着た女の子見かけなかったかと訊いても誰もまともに答えちゃくれない。途中には雨宿りできるような茶屋も小屋もなかったから、小早川はまだこの山道のどっかにいるはずだ。

あいつ、よりによって一番面倒くせえコース選びやがった。道はゴツゴツしてるし、木はうっそうとしてて、どしゃぶりでただでさえ暗い道が日が落ちたみたいになっ暗だ。足元取られてここまで来るのにもう2回もスッ転んでる。

――泣いてるだろうな…。

鈍いくせにカッコつけて先に行けだなんて言ってんじゃねーよ。

前も後ろもよく見えない、こんな暗いところにひとり取り残されたら俺だって泣くぜ？お化けが出てきたらどーすんのよ。

中央委員会からロングホームルームから全部ひとりで背負ってやったってのに、こんな目に遭うんじゃわりに合わねーよなあ、小早川。

ちきしょう。

どこにいやがんだ……っ！

「小早川～っ！！」

出せるだけの声で叫んだら、

「た、田村くん！」

すごい近く…っていうかほとんど耳元で声がして飛び上がるぐらいにビビった。

「…はっ?!どこ?!」

自分の360度を見回すと、ちょうど真後ろの茂みの下に人影が見えた。雨と暗いので視界が塞がれてて気がつかなかったけど、

「小早川？」

「うん、あたし！」

――いた…。

小早川は茂みの下に立っていた。

木がいい塩梅に傘の役目を果たしてて、ちゃんとウィンドブレーカーを着てフードを被ってる

小早川は思ったよりも濡れてない。

「ずっとここにいたのか？」

「うん。みんなに先に行ってもらった後、急に雷鳴りだして真っ暗になっちゃったから雨降ってくるなーって思って」

——無理に先を急ぐのをやめたらしい。

「ここでじっとしてた方が安全だと思って」

……そりゃ言えてる。

どんくさーの環ちゃんの足で今俺が降って来た道を登ってたら2回スッ転ぶぐらいじゃすまなかっただろう。

さすが小早川。ナイスな判断でした。

無事で元気な小早川を見て一気に力が抜けちゃった。

「はあ…」

息をついて小早川の足元に座り込んだ。ここまで濡れちゃってたらケツが濡れようが汚れようがもう関係ねえ。

「大丈夫……？」

小早川は雫がしたたる俺の髪の上に乾いたタオルを乗せてくれたけど——

「ああ…」

——それ、ほんとは俺が言う台詞だよな…？

まあ、いいか。環ちゃんは濡れてないし元気だったから。

とりあえずひと安心。

あとはここで雨が上がるのを待ってればいい。

◇

けど。

小早川ってやっぱ強いわ。

こんなところでひとりでいたにも関わらず、ちっともビビっちゃいねえ。

ベソかきながら田村くんの広い温かいぐしょ濡れの胸に飛び込んで来りゃ可愛いものを、——実際飛び込んでこられても困るんだけど、漫画やドラマじゃそういうのがだいたいのオチだろ？

けどこいつは、自分が置かれてた状況のことなんか屁でもない様子で、ずぶ濡れになった俺の体操着を絞ってくれたり髪や身体を拭くのを手伝ってくれたりケツのドロをぬぐってくれたり…と、俺のことばっか気にかけてやがる。まるで自分がやらなきゃいけねえんだって感じで。

いや、小早川が本当に俺の為にしてくれてんのはわかる。わかるんだけど、これじゃ俺の立場ねーだろ。ここに来て俺、小早川に何も言葉かけてねーし。

「あ、あのさ、小早川。自分のことは自分でできっからもういいよ」

絞ったタオルをまた俺の頭に乗せてくれようとした小早川の手を掴んで言った。

「あ、うん。わかった」

小早川は素直に手を離した。その反応の早さにも違和感を感じた。

ふたりで茂みの下に立ってしばらく無言のまま雨の様子を見守ってた。

小早川は空を見上げて、

「雨、やまないねえ...」

と、ため息をついた。

俺が来なかったら、こいつはこうやっていつ止むかもわかんね一雨空をひとりで見上げてたわけだろ。こんな真っ暗って言ってもいいぐらいなところで、通る人もいね一場所でバサバサと葉っぱを打つ雨の音を聞きながらさ。

「何で班のヤツら先に行かせたりしたんだよ？」

小早川は ん？と俺を見て、

「だって、あたし登るの遅いし、みんな早く山頂に行きたいみたいだったから」

と、言った。

「あいつらがそう言ったのか？早く山頂に行きてえんだけどって、お前に言ったのか？」

「言っていないよ？でも、一緒にいればわかるもん」

そういう空気ってのは確かにあるのかもしれないけど結論を先回りすることはないだろ。

「先に行ってもらって正解。あたしと一緒にいたら今頃みんながここにいるハメになってたもん」

「いーじゃねーか、それで。ひとりでいるよりみんないた方がいいじゃねーの」

「やだよ。みんなに迷惑かけたくないもん」

小早川はキッパリ言い切ってからキュッと口を一文字に結んだ。

――迷惑...、か...

どこか寂しい気分になっちゃった。

何でなのか、うまく言い表せねえけど感じたことから導き出された思いを口にしたら、

「んじゃ、俺がお前を探してここに来たのも迷惑かけたって思ってんの？だから俺のことばっか気にしてんの？」

ってな言葉になってた。

え...？と小早川は俺を見た。

「迷惑かけたって別にいいじゃん。俺なんかいつもお前に迷惑かけてるし」

.....まあ、それで落ち込んだりもするからこいつの気持ちがわからないわけでもねーなのは、言うてから思ったことだ。

「...うん。迷惑かけられてる。ずっと」

ほれ、やっぱり...

「でも、イヤじゃないよ？田村くんに迷惑かけられるのイヤじゃない」

――は？

「田村くんのこと好きだから、いくら迷惑かけられてもイヤじゃないんだ、あたし」

――ほいっ！？

田村くんのこと好きですと！？

「...何、その顔？あたし、変なこと言った？」

.....言った。

いや、もちろん好きの好きは惚れたはれたの意味じゃねえってのはわかるさ。

けど、小早川の口から憎まれ口じゃねえ俺のことが言葉になって飛び出したことは、松山兄のばっくれデートやピーカン空に稲妻が走ったことよりも、俺にとっちゃいちばんの....

――青天の霹靂。

.....ほら。

今度は雨止んじまったし....

「あ。雨止んだね。よかったあ.....」

小早川は心の底からほっとしたように息をついた。

こいつ。

本当は不安でしょーがなかったんだろ。

俺が来るまで、やっぱり泣いてたんじゃねーだろか、と、ふと思った。

「でもね。みんなはあたしのこと好きじゃないから」

空を見上げたまま小早川は呟いた。

「委員会の人みんなも、クラスの人みんなもあたしのこと、小早川怖い、って煙たがってる。だから迷惑はかけたくないの。悔しいもん」

そう言って、小早川はまたさっきと同じように口を結んだ。

確かに言ってたよ、みんなも、俺も。

「おっかない、小早川、ってさ。」

でもそれは....

「頼りにされねえのは哀しいぜ？」

え？と小早川はまた俺の顔を見た。

「委員会は12人、クラスは40人、2年生は250人もいるんだぜ？そいつらみんながお前のこと煙たがってるかよ？」

中にはいるだろ、そーゆーヤツも。

でも、違うヤツだっているだろ。

勝手に先回りして完結してんじゃねえよ。

俺は、

俺はさ....

「...俺はおっかない小早川じゃねーと調子出ないの。ここのところの物憂げな小早川さんじゃかえって変な気分だぜ」

「物憂げ？あたしが？」

小早川は素っ頓狂な顔をした。

まるで、俺がすごい変なことを言った、みたいな顔だ。

「他のヤツらにどーとは言わねえけど、俺に気を使うなよ。俺は小早川に迷惑かけられたってちっともイヤじゃねーぜ？」

迷惑かけられたこともねーけど、俺だって小早川キライじゃねえ...いや、好きだって意味で。

「田村くんに気なんか全然使ってないよ？何でそんなこと言うの？」

「何でって....、ここのところの自分を考えてみ？文句は言わねえし仕事俺にふりもしねえし変だったぜ？」

「そうだったかな？自覚ないんだけど...」

と、小早川は首をかしげた。

「田村くんこそ、新学期から変だったよ？ポーッとして元気なくて。全然田村くんらしくなかった。あたしだってこれでもちょっとは心配してたんだから」

「...あ？」

そうだったかなあ...？

いや、そうだったんだろう。

——確かに、そうだった。

「あたしが変だったんじゃなくて田村くんが変だったんだよ。あたしは物憂げになる理由なんて何もないもん」

——それも言えてるかもしれねーな。確かに物憂げだったのは俺の方だぜ。

でも、やっぱそれだけじゃねえだろ。いまさっき言ってたことはずっと小早川のどっかにあってどっかで傷ついてたんだろ。小早川環は無敵なんかじゃねえってことだろ。

でもそんなの当たり前。無敵な人間なんていやしねえんだから。

「...ま、何にしても、ちょっとぐらいの迷惑はかけて生きるもんだって思ってたいいんじゃないの？相手がどう思うかなんてことは先回りしねえでいいよ。だいたい誰にも迷惑かけないで生きるヤツなんかいないぜ？」

「それって開き直りでしょ？あたし、そんなに図々しく生きられないよ」

「いいの！人間貸し借り！持ちつ持たれつよ？」

もう何を言ってんだか自分でもわかんなくなっちゃった。

けど、小早川は、

「...わかったよ」

と、納得したようなしねーような顔をして笑った。

雨上がりの山道を山頂に向かって歩いていくと、

「いたいた、田村と小早川！」

ヒビクと柏木が上から走ってきた。その後ろから体育の戸島センセと大島、小早川の班の連中がぞろぞろ降りてくる。みんなずぶ濡れで髪の毛をべったり顔に貼り付けて。

「田村～、小早川～大丈夫かあ～」

戸島の呼びかけに、

「大丈夫...です...」

と、小早川は申し訳なさそうに呟いた。だって一番濡れてねーの、小早川だ。

こいつらには迷惑かけちゃったけど、たぶんこいつらはそれがイヤだとは思ってないだろ。それぞれの仲間のことを心配してくれただけだ。

大島たちは小早川のもとに集まり、俺のそこにはヒビクと柏木がやって来た。

「柏木サンキュー！悪いなあヒビク。濡れるのは勘弁だったはずなのにさ！」

いい男も台無しなほど、びしょ濡れになっちゃってるヒビクは、

「まあ、いいさ」

と濡れた長髪をキュッと絞りながら笑った。ちなみにここに松山弟はいない。

「あいつはひとり二役やんなきゃなんないから上に残った」

實際上での弟は自分のクラスで点呼をやり、兄のE組にもぐりこんで松山太郎になりきり、あっち行ったりこっち行ったりとマジメにひとり二役を演じてたらしい。

「わかんねえもんかなあ？と思うけど、センセはマジで騙されてるぜ？」

と、ヒビク。

まあ、いつも一緒にいる生徒たちにはバレてるんだろうけどさ。

戸島は、みんなもすぐに下山してくるから俺たちにはこのまま降っていいと言った。

気がつくと空は再びピーカン。

ほんと、山の天気は変わりやすい。

・
・
「あれ？お前らなんでそんなにびしょ濡れなん？」

麓の茶屋で待ってた松山兄が爽やかなまま言いやがった。雨が降ったのは上の方だけだったらしい。楽しいデートをしてきたんだか、ニヤついた笑いを始終顔に貼り付けたままだ。

弟はあの混乱の中で兄貴のためにひとり二役やってるってのに、こいつはデートしーの雨にもあたらねーの、ほんと脳天気でいい。こいつこそ、人に迷惑かけまくってる上でのてめえの幸せだってことをかみしめやがれ。

みんなが降りてくると、上の混乱がそのままここでも引き継がれた。

ずぶ濡れになっちまってるヤツもそうでないヤツも、さんざんだった校外学習登山の文句を言い合い集合広場は収集がつかない状態だ。俺も小早川もA組連中をまとめるのに声が枯れちゃうんじゃないかと思うぐらいデカイ声で叫ばにやならなかった。

けど、やっぱり小早川はちゃかちゃかとひとりで動く。

気が利かねえ俺も俺なんだけどさ。

ま、しょーがねえな。

人間ってのは山の天気みたいにいきなり変わりやしねーしな、フツーは…。

◇

バスが校門の前に着いたのはちょうど部活が終わり下校のチャイムが鳴った頃だった。

このまま校門解散だけど、ドロだらけ濡れ鼠のジャージで電車乗るのはためらうものがあったんで俺とヒビク、柏木の濡れ組は校舎に残ってた見知らぬ1年生に頼み込んでジャージを借りた。

で、着替えて昇降口に戻ると、

「田村先輩。お帰りなさい」

と、声をかけてくれたのはあかねだった。

「おお、あか…ね…」

あかねは下駄箱の前に群竹と一緒にいた。群竹は俺を見て無言で頭だけを下げ、あかねに、

「…自転車取ってくるから」

と、呟くように言った。

——そっか。こいつら一緒に帰るところなのね。

チクッと胸が痛んだけど、

「あかねを頼んだぜ！」

と、ヤツに声をかけると行きかけた足を止めた群竹は一瞬何かを言おうとして振り返ったけど

結局何も言わねえで行っちゃった。たぶん、どんなリアクションを返せばいいのかわからなかったんだろう。そーゆー群竹を、あかねは儂げに心配気にいつまでも見つめてる。

そんなふたりを見て、せつなくねえって言ったらそりゃ嘘だ。

でもたった今、俺の気持ちの中でアイツにあかねを託したような決着みたいなのはついた気がする。

昇降口を出ると、校門の前に小早川がいた。

「帰らねーの？」

校外学習帰りの2年生はもうとっくに帰っちゃってる。

「あたし...すっかり忘れちゃってて。田村くんにお礼言ってなかったから待ってた」

「お礼？」

いっての、そんなの。

それに、素直な小早川はやっぱ妙だ。

でも....

「そっか。わざわざどーも！」

と、答えると、

「おかげで助かった。ありがとね！」

小早川はおもいきり早口で言いやがった。

「ああ？聞き取れなかったんですけど？」

「...まだ耳の中に雨水入ってるんじゃないの？おんなじことは言わないよ」

—やっぱ可愛くねえ。

でも、それがいいぜ。小早川はよ！

「田村くんのこと好きだから、なんて素直に言うんじゃないよ。俺だってそんなこと口に出しては言えねえんだからさ！」

「...なによ？」

いつものこわーい睨みを受け、明日からは俺も、いつもの田村優作に戻れそーだ、と思った。

23 挙動不審なヤツら

校外学習のあとは体育祭。

俺たちブックキャスルは、去年同様に後夜祭でライブをやることになってる。

文化祭でやる演劇部とのコラボはとりあえずこのライブが終わるまでは一時休業で、あかねとヒカルも軽音楽部の練習を優先してくれてる。

――が。

「ヒカルさあ、マラカス振りながらどうして踊るかなあ?!」

マラカスを振りながらステップを踏むのはヒカルの最初からの特徴だからしよーがねえ。

けど、最近じゃそのステップに加えて踊りやがる。それもスマートなダンスってんならまだいいが、ヒカルのそれはどう見ても...

「俺たちのステージ、また紅白垂れ幕な盆踊りやぐらじゃねーだろうなあ...？」

ヒカルのダンスを見てたヒビクが思い出したように言った。

「え？盆踊りやぐらって倉庫にしまってあるアレのことですか？だったらそうですよ？」

体育祭実行委員のヒカルがすまして答えると、ヒビク一同俺たちは一斉に、

「あちゃあ...」

と、頭を抱えた。

盆踊りやぐらで盆踊りなマラカスダンス――。

おもいっきり素敵なステージが出来そうだ.....。

「ヒカルのオンステージだな、こりゃ...」

口ではそう言いながらも、ヒビクは楽しそうにニヤニヤ笑ってる。

「バンドと合わせたら案外いい感じになるかもよ？」

なんて、とんでもないこと言い出しやがって。

「目の前をチョロチョロされたら邪魔でしょうがねーっての」

しかも盆踊り。

ヒビクの感性、どうかしちまったんじゃねーの？俺たちの音楽はポップスなのよ？

「すみませんね～。あっ！！演劇部に行く時間だ！それじゃ！あたしはこれで～！」

みんなの視線が自分に集まってバツが悪くなったのか、ヒカルはそう言うのと逃げるようにして音楽室を飛び出して行った。

「あ、おい！ヒカルッ！」

ヒビクが途中まで後を追いかけたけど、ヒカルの姿は既に無し。

やれやれ...、とちいさなため息を吐いてヒビクは真ん中に戻ってきた。

「ステップ踏むか踊るか、どっちかってんならまだいいんだけどなあ...」

ヒカルは何度注意しても器用に両方やりやがる。

「いっそのことあいつに衣装着せて躍らせてやったらどうだ？」

ヒビクはバタバタと校庭に躍り出たヒカルを窓から見下ろしながら言った。

「衣装ねえ…」

どうせ舞台は盆踊りやぐらなんだし、ヒカルはじっとしてねーだろうし、だったらちよいと小奇麗に衣装着せて好きにやらせるのも一興かもしれねえな。

「そうだな。文化祭のときはアイツ、俺たちにとんでもねえ衣装着せるつもりみたいだし、逆襲の意味もこめて素敵な演出を考えてやるか！」

夏からの憂いをすっ飛ばすってわけじゃねーけど、ここはヒカルちゃんに遊ばせてもらっちゃまおう！

…と、考えてた時、

「田村先輩、あんまりヒカルちゃんをいじめないでくださいね…」

あかねが俺の横にやってきて言った。

ふんわりとした匂いに無意味に鼻をくすぐられてなのか、わけもわからずちょっとだけ胸がちくっと痛んだ。

「い、いじめはしないさ…。演出だよ」

「ヒカルちゃん、本当は凄く疲れているはずなんです。今日の午後の授業中も調子が悪かったみたいだし…」

心配気に言うあかねの言葉に、

「調子が悪かったって…？」

すばやく反応したのはヒビク。

あかねの話によると、ついさっきの6時間目、指されて立ち上がってほんの一瞬倒れそうになったらしい。

体育祭の実行委員はやってるは、俺たちと後夜祭の練習はあるは、文化祭の衣装は作ってるはで、ヒカルはずいぶん忙しいらしい。今飛び出していったのも、演劇部の部室で衣装作りをするためだとか。もう下校チャイムも鳴るだろうっていうこの時間からだ。

「ヒカルは一人しかいないのに何足もワラジを履いているからなあ…」

ヒビクは校庭のヒカルを見た。

「先輩たちが着る衣装を作るのがヒカルちゃんのノルマなんです」

演劇部は仕事を分担して準備を進めてるそう。ちなみにあかねは大道具係らしい。

脳天気には盆踊りをやってるだけってわけじゃねーんだな、と、ちょっと反省した。

「ヒカルちゃん、走ってるねえ…」

ヒビクの隣に立った柏木が呟いた。

部室に向かったはずが校庭で誰かに捕まったらしく、ヒカルは用具室と倉庫の間を行ったりきたり走ってた。

毎日バタバタしてるのはあいつの専売特許だけど、確かにありゃ忙しそうだし実際のところはかなり疲れてるのかもしれないな。

「弱音吐かないもんな、ヒカルちゃんはさ」

ヒビクの肩を叩いて柏木がポツリと言った言葉が妙に印象に残った。

「あかね～、終わった～？」

廊下からひょいと顔を出したのは麻耶ちゃんだ。

その瞬間、

ガタンッ！

デカイ音がしたと思ったら、松山弟が椅子から転げ落ちていた。

「何やってんの、お前...？」

兄が床に尻餅をついてる弟を冷めた目で見下ろしてる。

「す...、滑っただけだよ...」

弟はケツをさすりながらドタバタと立ち上がる。

何故か真っ赤な顔をして。

「ジロ先輩、大丈夫ですか～？」

麻耶ちゃんが目を丸くして騒がしい弟に声をかけた。

「だだだだだ大丈夫よ？」

無駄な`だ、を6回も言ってから弟は焦ったように答え、まるで尻尾を振って跳ね回る犬みたい
に同じ場所をくるくる回ってる。

頭、イカレたかー？

「...じゃ、私はお先に失礼しますね？」

ちょうど下校のチャイムが鳴り、あかねがピアノをしまいながら言った。

「今日はアイツと一緒にじゃねーんだ...？」

何気なく言ったつもりだった。

こないだは仲良くチャリの二人乗りして帰って行ったからさ、群竹と.....。

「...違います」

目を伏せて呟いてあかねはふう...とちいさな息をついた。

そして、そのあと俺を見た目は妙に鋭くつりあがったりしてて。

何なの、いったいー？

ちょっとすねちまったようなあかねが麻耶ちゃんと連れ立って音楽室を出て行くと、

「お、俺、今日はちょいと用事があつから先にかかかか帰るわ...っ」

弟が後を追うようにして出ていきやがった。

何でしょ、まったくー。

「あいつ、何の用事だべ？」

と、兄はおもいきり首を傾げる。

でもその直後、

「やっぱいい…。何でもねえ」

と、言いながら弟は帰ってきた。

意味、不明だー。

あかねが帰ってからも、俺たちは小一時間ほど音楽室に残ってさっきヒビクが提案したヒカルに衣装を着せるって話を煮詰めた。

去年は衣装のことなど全然考えてなく、学校ジャージのままのステージか？って本番の直前になって青くなったのを思い出し、どうせヒカルを飾るんなら俺たちも衣装を着ようぜ、ってことになった。

「で、ヒカルには何を着せりゃいいんだ？それによって俺たちの衣装も決まるだろ？」

と、ヤツらに振ると、

「浴衣ってのはどう？メイクしてさ、いいんじゃない？」

と、言ったのは柏木だ。

「…それじゃ盆踊りそのまんまじゃん」

しかもバカ殿に出てくるバカ姫みたいになりそうだし。

「却下っ！」

「じゃ、レゲエファッションとか。マラカスだしさ」

って案を出したのは松山弟。

でも、これもやたら浮きそうなんで却下。

「ハワイアン！」

っていう、ヒビクの案は問題外。

「どこで調達してくんだよ、そんな衣装！だったら水着のがいいぜ！」

と、のたまった兄を、間髪を入れずにヒビクが肘鉄と共に撃沈した。

柏木も松山ブラザーズもまったくもってセンスねえし、ヒビクに関しちゃとんでもねえ感覚してる。さすがオレンジシャツを愛用してるだけある。

「もっとお洒落で粹で鮮やかで目立ちすぎないクールなのないかよ？」

「鮮やかでクールってのは矛盾してねえ？」

「田村、考えろよ！」

「…うーん…」

ヒカルに着せる衣装だろ？

制服が一番似合ってるって気もする。

けど、それじゃ演出にも何もならねーしつまんねえ。

何にしても、体育祭まで時間もないから早急に考え、調達しなきゃならない。鮮やかでクールな衣装を！

センセがそろそろ帰れと言いに来たのが午後7時ちょい前。

気がついたら外はもう真っ暗だ。

校門を出ると、前を歩いてたヒビクが急に立ち止まり、

「俺、ちょっと用を思い出したから先に帰ってくれないか...？」

と、そわそわする。

ヒビクが学校に思い出す用なんかねーだろ...ってのはあえてつっこまずに、

「わかった」

素直に飲んで俺たちはヒビクを追い越した。ちょうど頭の上、部舎の一室に明かりが灯ってる。

「悪い！じゃあなっ！」

妙に急いだ様子でヒビクは長い金髪をなびかせながら回れ右をして、校門の中に取り返して行った。

——まったく、どいつもこいつも挙動不審だぜ、今日はさ。

ま、ヤツの回れ右のわけはわかるさ。

明かりのついた部舎の窓。

その奥にあるのは夏の合宿でヤツが言ってた `お宝、だろ。ダイヤモンドみたいな...さ。

今日はちょっと調子が悪かったっていうそのお宝が、気になって心配でしょーがねーんだよな。

——俺の分までバシッと決めろよ、ヒビクめ。お宝、ちゃんとゲットしやがれっ。

今、ふと思いついたイメージがあった。

鮮やかでお洒落で気取ってて、それでいてクールでイヤミのない演出。

「ビリヤード場に寄っていこうぜ？」

俺たちはそのままビリヤード場に直行した。

◇

ビリヤード場のマスターと従業員は黒服を着ている。

スラックスにベストに蝶ネクタイ。かなりシックにキマってる。

これを借りてヒビクとヒカル、ふたりに同じ衣装を着せたらどうだろうってのが俺が思いついたイメージだった。で、俺たちは無地を着る。そうすりゃふたりが粋に引き立つ。どうだ、完璧だろ！

「...センスねえの...」

と、呟いた松山兄の意見は無視。

俺の頭の中ではもう既にふたりの「絵」が出来上がっちまってる。これ以上のものはねえってぐらいに！

「ヒカルちゃん、案外似合うかもね？女の子の子してない方が風間くんと並んだときに鮮やかさが増すような気がするし」

そうなのだ。

一見クールに見せて、実はものすごくきらびやか。

ふたりとも、もとがもとだしさ。何たって一方はダイヤモンドなんだぜ？

そのもとを後夜祭のステージの上でふたり揃って最大限に引き出してやりてえなっただのが、田村くんが考えた演出ってわけだ。美的センスのない松山兄には一生わかるまい。

「けっ！どうせ盆踊りやぐらなんだぜ？」

あ。

「手近なところで手を打ちやがったな」

う。

まあ、それはそれだ。

とりあえず俺のアイデアを納得させてマスターに頼み込み、後夜祭の一日だけ揃いの衣装を二着借りる約束をつけて外に出ると、

「田村先輩たち！」

目の前にいたのはあかねと麻耶ちゃんだった。

ふたりはナナメ前のパーラーからたった今出てきたところらしい。

ガラガラッ！！

バカでかい音をたて、ドアの脇にあったゴミ箱とか傘立てとかを次々に蹴飛ばしてケツ躓いたのは松山弟だ。

「な、何やってんだよ、お前...」

兄が弟が倒したものを元に戻しながら呆れたように言う。

「つつつつ躓いただけじゃん。さささささ先に行くぞっ」

弟はそのままぜんまい仕掛けの人形のようにギクシャクと歩きながら駅の構内にさっさと入っ

ちまった。

「ジロ先輩、どうしたんだろ...？」

麻耶ちゃんが首を傾げた。

「さっきからアイツ変だよな？」

「変、ですね...？」

さらに不思議そうに首をかしげた麻耶ちゃんは、もう駅の中に消えちまった弟を探すかのよう
に遠くを見つめながら言った。

「ちょっと見てきてやってくんない？病気かもしんねえから」

何気なく言っただけなのに、

「あ、あたしが!？」

麻耶ちゃんは30センチほどマジで飛び上がる。

「...マズイ？」

「マズイかも...っ！」

——何で...？

「じゃ、俺が先に行ってみてくるよ」

と、柏木が行こうとすると、

「か、柏木先輩がいくならあたしも...っ」

麻耶ちゃんは柏木のあとをパタパタとついて行った。

やっぱ意味、不明だ——。

「行こか...」

「はい...」

松山兄も一緒にヤツらを追い、麻耶ちゃんに先に行かれちまったあかねとふたり並んで、駅ま
でのほんのわずかな道のりを歩きながら、たった今決めてきたヒビクたちの衣装の話をする

「私も衣装着ちゃおうかな...」

あかねは恥ずかしそうにうつむいた。

「ヒカルちゃんたちが黒なら私は白で...。どう思いますか？」

「いいんじゃない？どんなの？」

「発表会で着たレースのワンピースがあるんです。ウェディングドレスみたいな...」

おお！！

これぞまさしくふわふわのマシュマロ.....！

見なきゃ損でしょ、田村くん！むふふ....。

――なーんて、ひとりで想像してにやけてる俺も立派な挙動不審じゃんか～。ほほ～。

...って幸せなことを考えてたけど、後ろから来たチャリンコが鳴らすちりんちりんっていうベルの音で哀しく我に返った。

レースのワンピース、あかねが見せたいのは俺にじゃねーってこと。

チャリの後ろに乗っけてもらうアイツに見てもらいたいんだってこと。

――だよな。

後夜祭は全校生徒が盛り上がる晴れ舞台だもんな、一応。

盆踊りなステージってのがガンだけど、それはそれ....。

ま、しょーがねえ！

「...さーて。あいつらどうしたかな？」

挙動不審な松山弟と麻耶ちゃんたちはその辺には見当たらなかった。

並んで歩いてた位置を一步分あかねよりも前に出て、俺は駅の改札をくぐった。

24 ある昼休みの徒然

「はっ！？風間がリレーの選手だぁ？！」

と、身体ごと右隣の柏木に顔を向けた松山兄。

「あ。やべっ。上履きに引っかかっちゃった...っ」

「真っ直ぐしろよ！汚ねえなぁ！！」

左隣の弟がすかさずツッコミを入れる。

昼休みの便所一。

ヒビクを除いたブックキャスル4人並んで連れ...中の会話だ。

「...うん。なんかさっき立候補してたよ？」

一番に`用事、を済ませた柏木が自分の左側をおもいきり気にしながらそそくさと手洗い場に移動した。

「体育祭は雨だな、こりゃ...。あいつが学校行事にクソマジメに参加するなんて信じられねえ...」

右足をペっぺっと空中で振って、上履きに引っかかったものを瞬間乾燥させながら兄は言う。

何をするのも曲がったオチがついてる松山兄の行動にはいちいちコメントしたくもねーけど...

「そりゃ困るぜ！俺だってリレーに出るんだぜ！？」

と、マジになってる体育バカ、弟の気持ちはよくわかる。

第一体育祭が雨だとしたらその後の後夜祭も中止ってことだ。

ってことは、あかねのマシュマロ衣装も見られねーってことだ！

「そりゃ困る！」

俺もヤツらの会話にやっここで乗った。

けど、言った後でそういやマシュマロ衣装にはいやーなオチがあったんだってことを思い出して胸のここいら辺がクーッとムカムカした。いつまでもあかねあかね言ってんじゃねーよ、俺！

「しかし、体育測定50メートル走をスキップで走るような男が何だっていきなりリレーの選手に立候補なんだ？まさか、リレーもスキップで走って目立ってやろうって魂胆じゃねーだろな？」

水道の水をバシャバシャと周りに跳ね飛ばしながら手を洗う兄は、そのしぶきが全部隣の弟に引っかかっているってことにも気づかずに真横の柏木を見ながら大声で喋る。

「...だから、真っ直ぐしろよ！」

「そこで雨が降ってるよ、太郎くん...」

あ？と間抜けな声を出して兄は弟を見、わりいわりいと軽く言いながらそのまま柏木と先に出て行った。

「ったく、バカ太郎め。雨なんか降ってたまるかよ...」

弟は兄に濡らされたシャツの袖をぱっぱと手で拭う。

どうやら昨日からのヒビクの挙動不審はまだ続いているようだ。兄が言ったように、ヤツは部活以外の学校行事ってものは、俺にはカンケーございませーん、といった具合でマジメにやったことがない男だ。運動神経は鈍いってわけじゃねーんだらうけど体育関係はさらに不真面目だ。

どーゆー心境の変化なんだか、それとも実際に何か変化があったのか、あれからヤツにツッコミを入れてねーから知らねーけどさ。

で、ここにいるもうひとりの挙動不審男は、昨日さっさと駅に消えちまった後、そのままひとりで電車乗って帰っちまいがった。後を追って行った麻耶ちゃんの話によると、

――ホームにいたジロ先輩を呼んだら、何だか凄く慌てて着いていた電車に飛び乗っちゃったんです…。

と、首を傾げてた。

しかも、俺たちの駅をすっ飛ばす急行に、だ。

で、俺たちが地元の駅に着いたとき、逆方面から戻ってきた弟とホームで会った。

――お前ひとりで何やってんの？バカじゃん？

弟の行動を罵った兄。

そこからはいつもの兄弟バトル。

俺と柏木はわけがわかんねーままヤツらと分かれたってわけだ。

「…何だよ？何じっと見てんの？」

鏡の中で弟と目が合っちゃった。

「いや？べつに…？」

「変な田村」

お前には言われたかねーやな、その台詞。

「変なのはお前。昨日はどうしちまったの？」

別にそれほどツッコんで聞こうとも、気になってしょーがねーってわけでもなかった。ただ、普通に会話の延長で当たり前のように何気なく聞いただけだった。

なのに、ヤツは弾かれたように、今ひねろうとして手をかけていた蛇口を勢いよく全開にしようがった。

「わわわっ！！何やってんだよ、バカ！！」

もう、そこら中がびしょぬれだ。

「何って…！！」

焦った弟は一瞬蛇口の閉め方を忘れちゃったようで、ただそこでおろおろしてるだけ。俺が横

から手を出して、ようやくその水難は去った。

「どうしちゃったのよ、いったい。ヒビクのリレーもはてな？ だけどお前も十分変だぜ...？」

「お、俺は別に变じゃねーよ」

どう見たって変でしょーが。

昨日からのコイツを振り返ってみると、滑稽なほどの挙動不審はあることに限定して起こってるってことに気がついた。

「麻耶ちゃん...」

女好きで図々しくてあつかましい兄に比べ、女好きには違いねえんだろーけどーってのはこれまでのコイツの行動から既にバレちまってるー不器用ゆえに硬派ぶってるこの弟は、麻耶ちゃん出現時に限って転がったりぶつかったり派手にどもったり。

ーわかりやす...。

ってか、完璧でしょ、これ。

だって、コイツ、俺の顔見つめてアホみたいに口開けて放心してるし。

「麻耶ちゃん...」

「ななななななんでもわかったのよ!？」

ー自白してるし。

「あ」

弟は間が抜けた声をひとこと発し、そのままぐんと肩を落とした。

その肩をポンと叩いてそれ以上突っ込むのはやめた。

合宿の時、脱非モテを目指して当たるとか何とか言ってたよな。その相手が麻耶ちゃんだったってわけだ。

いつの間にどんなことがあって麻耶ちゃんにほの字になっちゃったのか、さすがの田村くんも自分のことで精一杯だったもんで気づかなかったけど、合宿の時にあんなこと言ってたってことはおそらく夏休み前から温めてやがったんだな。

はっきり言って、麻耶ちゃん見るたびにけっ躓いたり転がったりどもったりしてちゃ望みは薄いんじゃないかとは思うけど、こいつはこいつなりに、たぶん初めての自発的な恋ってヤツを大真面目にしてるんだ。そのお初の相手がシンメトリーな美少女麻耶ちゃんってのはいきなり高望みなんじゃないか？ って気がしねーでもないけどさ。

でも。

俺は哀しくも告る前に見事にロストラブしちゃったけど、お前はがんばってみろよ、という言葉を含めた温かい視線を絶句して佇んでる弟に送ってやった。

「な、なによ！？ヤメテよ、その目！」

ヤケになったように言い捨てて、あちこちにぶつかりながら弟は便所を後にした。

ちなみに俺はただ、麻耶ちゃん、とひとこと言っただけだ。あとは全部、アイツが自分の行動言動で暴露したんだぜ？愛しいヤツだ。

廊下に出ると、ギクシャクしたまま歩き去る弟の後姿があっちの方に見えた。

途中で元カノジョの河本とすれ違ったってのに、ヤツはまったく見向きもせず気にも留めずツカツカと歩いていく。

河本の方から惚れられて（ってのは、小早川の話信じればどうやら違ったようだけど）付き合ったってのに、あっさり心変わりされて振られたのはつい半年ほど前だ。河本の今の彼氏はバスケット部のOBらしく、よくコーチに来てるし、放課後なんかふたりははばかりなくいちゃいちゃしてやがる。そーゆー元カノジョを弟は半年もの間見せ付けられてたわけだ。アイツはいちいち言わねーけど、きっと心ん中じゃどしゃぶりの雨が降ってたに決まってる。今になってアイツの気持ちが涙が出るほどにわかる田村くんだ。

なんか。

みよ～にしみじみしちゃった。

弟よ、マジがんばれ。

密かに応援してっから。

んで。

――俺も、失った恋は早く忘れて新たな....

「田村くん、こんなとこでさっきからぼ～っとしてどうしたの？」

「...恋でもすっかな～.....って...え？」

目線の下で俺を見上げてたのは小早川環ちゃんだった。

「...恋でも？」

小早川は俺の目を真顔でじーっと見つめてる。

「い、いや...」

こいつの顔、こんな風に見たことなかったけど、こーやって見ると可愛い顔してる。っていうか、最近妙に可愛くなってきた。いつも眉間にあった縦じわもいつの間にか消えてるしつり上がってるとばかり思ってた目もよく見りゃ丸い。瞳だって澄んでいてキレイだ。そして唇は桜色。

こいつの第一印象はたしか麗しのマシュマロ...だったな。

それがいつの間にやら辛い柿の種に変わっちゃったけど、風邪でぶっ倒れそうだった冬にはさり気なく駅まで付き添ってくれたりライブに来てくれたりバレンタインにかーちゃんの他に初めてチョコくれたのもコイツだった。

マシュマロでもねーけど柿の種でもない、今はそう...ふんわり漂うこの香りみたいな...レモンライムってとこかな。

田村くんのこと好き、ってこいつが言ったのはどしゃぶりの校外学習。あん時は何がどーだかわけわかんねーうちにいろんなことが通り過ぎて行っちゃったけど、もしも今、ほのかなレモンライムとアンモニアの香りが混ざり合うこの場所で、この桜色の唇でもう一度、田村くん好き、って言ってくれたら俺の新たな恋の相手は――。

レモンライムとアンモニアが混ざり合うこの...

アンモニア.....？

「.....いつまでこんなところでぼ~っとしてる気？トイレの前だよ？臭いよ？」

シビアな声と言葉と知覚した臭いでしゅるるん...と膨らんだものがしぼんでいった。

「大丈夫？もしかしてまた風邪引いたんじゃない？そろそろ予鈴も鳴るよ？」

小早川はシャキシャキと歯切れよく喋るとポニーテールを揺らしながら行っちゃった。

やべやべ。

芳香剤とアンモニア臭のせいで変な妄想しちまった。危うく小早川と恋に落ちるところだったぜ。

「こんなとこで突っ立ってどうしたの田村？」

小早川と入れ替わるようにして、俺の目の前にぬぼっと現れたのはヒビクだった。

そーいや話の発端はコイツだ。コイツのリレー話から始まって今の妄想まで繋がっちゃったんだから。

「ヒビク、リレー走るんだってな？」

「げっ。柏木のヤツ、もう喋っちゃったの？さっき決めたばかりだぜ？早っ...」

ヒビクはバツが悪そうに顔をしかめた。

「どーしちまったわけ？リレーっていやあ、ラストを飾る目玉種目だぜ？随分燃えてるじゃんか」

「お、俺だってたまには体育祭ってヤツをマジメに楽しんでみようと思っただけよ？別に他に理由はねーし、ほんとそれだけ」

他に理由はねーなんてことを言い訳がましく強調するあたり、ちゃんとした理由がありますって白状してるようなもんだ。

「...んじゃな！そういうことだから！」

ヒビクは逃げるようにして便所に入っちゃった。

しかしー。

たかが便所にずいぶん長居しちゃったぜ。

予鈴が鳴るまであと5分しかねーじゃん。

ようやく便所の前から立ち去れると思ったとき、

「田村、田村、田村〜！」

後ろから俺に絡み付いてきたのは空手バカの奥田だった。

「後夜祭のライブ、浅倉ヒカルちゃんも出るの？」

.....そうだった。

コイツはヒカルにほの字だったんだ。

俺は便所の前から奥田を引き離した。中にはヒビクがいる。話を聞かれたらやっぱマズイ。

「ああ、一応な...」

盆踊りな参加だけど...。

「そっかそっか！それじゃステージのヒカルちゃんを楽しみにしてるぜ〜！リレーにも出るらしいし、今年の体育祭は見ごたえがあるぜ！」

見ごたえって、それちょっと違うんじゃないか？と思ったけど、その前にちょっと引っかかること言ったよな？

「ヒカルがリレーに出るって？」

「おうよ！大久保から聞き出した。田村がほの字な群竹くんも一緒らしいぜ？」

「お、俺が群竹にほの字い...！？なんだ、それ！」

「あれ？違うの？俺はてっきりそーゆうんだと思ってた！だから色々情報聞き出してきてやったのに！」

冗談じゃねーぜ！

何で俺が群竹に...！勘違いもいいとこだぜ、気持ちわりー。

「群竹くんの情報、知りたくねーの？」

「う...」

確かに気になる。気にはなるけどここはもうあえて聞かぬ。

それよりもヒカルがリレーに出るって情報の方が今はデカイ。

だって、これでわかったぜ。ヒビクがリレーに出る理由。

体育祭は1年から3年までのクラスを縦割りにしてクラスカラーで競う。

ヒビクは2F、ヒカルは1F。同じクラスカラーだ。

その男女混合リレーだから...なのね。

ーやたら可愛い理由じゃん！なんていうかやっぱり...お子様ランチ！

松山弟といい、ヒビクといい、自発的な恋をするとこうも可愛くなっちゃうものなのね。

「俺、後夜祭でヒカルちゃんをダンスに誘っちゃおうかな～」

奥田くん。

悪いけど、多分君は出る幕無しだわ。

ヒカルはダンスはするさ。マラカスを持って、だけどな。

んで、そのパートナーは金髪の黒服王子って既に決まっちゃまってるのさ。

ヒビク。

待ってるよ。

サイコーの演出してやっからな！

俺の新たな恋はとりあえずは後回し！

ってところでちょうど予鈴が鳴った。

25 転べ！跳べ！走れ！ その1

青く澄み渡った空——と言いたいところだけどここは東京のど真ん中。晴れてたって澄み渡っちゃいねえ。

けどまあ、心配してた雨が降ることもなく、無事体育祭の当日はやって来た。

今日の田村くんは忙しい。

体育祭にはもちろん2年A組...もとい、A組のクラスカラー赤組の一戦力として、800メートル走と二人三脚と100メートルハードルに出場することになってるし、その後は衣装を取りにビリヤード場まで走らなきゃならない。んで、ヒビクとヒカルをお洒落に飾ってやってから後夜祭のステージだ。

ほとんど夜まで休む暇ねーじゃん。

でも、今年の体育祭はいつもより数倍イカレたハッスル次郎と、世にも珍しきヒビクのリレー選手っていうスペシャルアトラクションがある。これは必見に値する。

グリーンのハチマキをキュッとしめてデコ丸出しにしてる松山弟と、結んだ紫色のハチマキを首飾りのようにだらしなく首に提げてるヒビク。

「...なによ？」

「そのハチマキ、リレーの時はちゃんと頭に巻きつけろよ？」

ヒビクはバツが悪そうに、ふんっと顔を背けた。

ちょうどその目線の下に——。

「ヒビク先輩っ！！」

ヒビクと同じ紫のハチマキを、弟と同じようにしっかりとデコ丸出しに巻いたヒカルが立っていた。

「ヒ、ヒカル...ッ」

突然のヴィーナスの登場に、ヒビクはやや焦ったようだ。体が「シェ〜」の形になってやがる。こうも素直に反応するヒビクってのも飽きない。女にクールでやたらカッコつけてた今までのヤツは何処に行っちゃったんだか。

響く一ん、っておんなじようにそこに立ってたマドンナ先輩は公私認める彼女だったってのに、こいつはいつも冷静に冷めた目で見下ろしてたっけ。俺はそーゆーヒビクの態度にムカついたりハラハラしたり、とにかく見てるだけで疲れたさ。

なのに、今じゃ「シェ〜」に加えて「ほよよ〜ん」だ。鼻の下、2センチぐらい伸びてやがる。まさか、ヒビクがこんな素を隠してたとは中学からの付き合いだってのに知らなかったぜ。本人だって気づいてねーんじゃないか？

改めて。

ヒカルってすげえ。これは尊敬に値する。

「ヒビク先輩も混合リレーに出るんですってね！」

「...ま、まあな」

裏返った声でヒビクは答えた。

何故か首のハチマキを無意味にいじくり、俺の顔をチラチラと見ながら。

「あたし、トップランナーなんですよお...。混合リレーって体育祭一番の目玉なんですよね？プレッシャーに負けそうですう」

「何だよ、ヒカルらしくねーな？だいじょーぶ！俺がいるんだから！心配すんな！」

――はっ！？

今、すげーこと言ったぜ、ヒビクよお！本人まったく気づいちゃいねーみたいで、ヒカル見てただニコニコしちゃってるけどさ。

「そうですね！先輩、一緒に頑張りましょうね〜！」

「おお！」

.....どう考えたってカップル同士にしか通用しねーような会話を自然にやっちゃってるぐらいにしっかり通じ合ってるけど、こいつら、付き合ってるってわけじゃねーんだよな、まだ。

けど、まとまるのは時間の問題。早けりゃ今日にでもってとこだろ。例の演出――まだふたりは知らぬことだが――でバッチリ決めて、後夜祭じゃ全校生徒たちに全身でもって宣言しちまえ。ちきしょーめ。

「ヒカルちゃんは他に何に出るの？」

ヒカル、ヒビクと同じ紫を巻いてる柏木が言った。

「ムカデリレーと400メートル走と二人三脚で一す」

ムカデリレー？俺と一緒にだね、と柏木は嬉しそうにニコニコ笑った。その隣でヒビクが一瞬面白くなさそうにムツとした瞬間を、田村くんはしっかり見ちまった。

ええ、ええ。

ほほえましいことです。

「随分出るんじゃない？」

と、ヒカルに突っ込むと、

「うーんと...、本当はひとり3種目ぐらいってことなんですけど、あかねちゃんの代わりに二人三脚に出るんです。パフェ一個で手を打ちました！」

なるほど。

「あかね、鈍そうだもんなあ...」

戦力にはならねーだろうな、あのほにゃらん...じゃ。ウチの小早川さんといい勝負ってところか、下手すりゃ環ちゃんよか鈍いんじゃないか？

「で、あかねは何に出るんだ？」

「ムカデリレーと一緒に出ますよ？あとは100メートル走...、」

「あかね、走るのか？！」

おいおい、だいじょーぶかよ。

ベソかきながらふわんふわんほにゃんほにゃん...と長い髪をなびかせて走るあかねの姿が目に浮かんでハラハラした。俺がいるから心配すんな！なーんて言ってやりてーよ、俺も。

でも、

「...こっちは麻耶ちゃんが引き受けました。だからあかねちゃんはムカデリレーだけですよ」

と聞いて安堵。

ムカデリレーぐらいならあかねだってオッケーだろう。ヒカルと一緒にんならなおのこと安心だ。

「麗しき友情に感謝ってとこだね、あかねちゃんはさ」

と、柏木が笑った。そして、

「俺も800メートル走、代わってくれないかなあ？パフェおごるからさあ〜」

と、ヒビクに言った。

ドラム叩くのと走るのとじゃわけが違いうらしく、ここは見た目通りの運動音痴な柏木だ。

「自分で走れ！」

ヒビクはひとこと言い切って、じゃあな、と応援席の方に行っちゃった。柏木はわざと目を丸くして何か言いたそうな顔を残し、そのままヒビクの後を追っていった。ようするに、ヒカルに対しての心配すんな！と自分の扱いの差を訴えたかったんだろう。

そこへやって来たのは麻耶ちゃんだ。

「ヒカルちゃん、そろそろ400メートル走始まるよ！準備しないと！あ、田村先輩にジロ先輩！」

弟は、無駄に何度もハチマキを結びなおしながら、

「どどどど、ども...」

麻耶ちゃんを見ずにぼそっと呟いた。

「先輩は何に出るんですか？」

麻耶ちゃんは弟の方に顔を向けて言った。

けど、落ち着きなくハチマキをいじくって麻耶ちゃんを見てねえ弟にはそれがわかんなかったようでせっかくの問いかけに答えようというアクションを起こさない。そうこうしてるうちに呼び出しの放送がかかった。

まったくしょーがねえ。

「ジロ先輩は800メートルとハードルと混合リレー！しっかり応援してやってよ、麻耶ちゃん！」

俺が代わりに答えてやった。

「応援は出来ませんねえ。ジロ先輩とは敵同士だし...。とりあえず観戦はしますけど」

あらら。やっぱりシビアな子。

麻耶ちゃんはヒカルと手を取り合って入場ゲートに走って行った。

で、ここにいる弟は走り去る麻耶ちゃんを呆然と見つめながら、

「今の話、俺のことだった...の...？」

などと、間抜けなこと言ってやがる。

「麻耶ちゃんさあ、まんざらでもねー感じだぜ？しっかりしろよ！」

「なななな何言ってんの？たたたた田村、おかしーんじゃねー？」

はいはい。

おかしーですよ、俺は。

おかしーから自分のことじゃねーことにこんなにも心を砕いてるんでやんす！

――ってな感じでやたら長い前置きがあって体育祭は始まったわけである。

競技はとんとん進み、ムカデリレー。

6人一組のチームが1学年1チームずつのリレーで競い合う競技だ。

スタートラインに立ってるのは1年生チーム。

こっちから赤、グリーン、黄、青、オレンジ、紫と並んでる。

紫の中にあかねの長い髪が見えた。ヒカルの元気な声も聞こえる。麻耶ちゃんも一緒だ。そして、大久保に伊藤、いつもの仲良し組で構成されてるチームだ。ってことはアイツも...いやがる。あかねの後ろにしっかりいやがる。あかねのか細い肩に手をかけてやがる。ピッタリと体密着させてやがるっ。

――これは万死に値する。

「ねえねえ、田村くん、ちょっといい？後夜祭のことで実行委員から言われたんだけど体育祭が終わったら...、」

やたら力が入ってイカってる俺の肩をポンポンと叩いて声をかけてきたのは小早川だった。

ちょうどいい。

「おお。あっちで話そうぜ？」

小早川を引っ張って花壇の脇に移動した。

何だかんだ言っただって、見たくねえもんは見たくねえし、見てなきゃいけない義理もない。

こーゆーところでチクチクと傷がうずくあたり、俺もまだ完全に吹っ切れちゃいねーってことだ。

でも、こいつは徐々に時間をかけて癒していくしかねーだろ。だから、その妨げになるものは見ないにこしたことはないのだ。

ムカデリレーはF組の紫が優勝したようだ。

紫、何となく嫌いかも、俺――。

で、800メートル走。

トラック2周まるまる走るやたら地味で疲れるこの競技に何で俺が出るんだか自分でもわかんねえ。

ヒビクのように立候補したわけでもねえのに、気がいたら黒板に名前を書かれてた。

「柏木も...？」

「俺はじゃんけんで負けた...」

1年生から走るこの競技、俺は憂鬱顔の柏木と鼻息荒くしてる弟と同じラインに待機してる。どうやらこいつらが競争相手らしい。そして、スタートラインのF組のコースに立ってるのはアイツ、群竹だ。トラックの周りには応援ギャラリーが立ち並び、あかねがすぐそこにいる。祈るように両手を胸に当てちゃって、目は群竹しか見てねえ。

「群竹くん、ガンバレッ！」

元気な声援を送ったのはヒカル。

けど、ヤツは真っ直ぐ前を向いてるだけで、せっかくのヒカルの声援を無視してやがる。おお！とか、ああ！とか答えられねーのかねえ、愛想のないヤツめ。

が、しかしー。

「群竹くん、頑張ってるね...！」

控えめな声援を送ったあかねにはチラッと顔を向け、こそっと手を上げた。

あかねは嬉しそうにお目目キラキラさせちゃって、ふたりは目と目の会話ってヤツをかましやがって。

——こー何度も目の前で見せ付けられると面白くねえのよ？田村くんだって。

「おい、そこの...名前わかんねーけど...赤ハチマキのヤツ！」

スタートラインのA組1年生は、俺？ってな様子でキョロキョロする。

「そうそう、お前！負けるんじゃねーぞ？わかったか！」

「...あの。あの」

いかにも軟弱っぽい、柏木みたいなヤツだった。

「そして紫、お前は転べ！」

つい言っちゃった。

言っちゃったあとで、めちゃくちゃ言ってるなあと自分で思った。

当然群竹は、

「...はあ？」

と、ムツとした顔を俺に向けた。その目がやたら鋭くでややビビった。コイツが1年じゃなかったらきつとのされてるだろう、俺...

けど、

「田村先輩ひどーい！」

というヒカルの抗議に続き、

「群竹くん、赤の中傷なんかには負けるな！」

という麻耶ちゃんのゲキと、

「群竹くん、とにかく頑張ってね！」

というさらに群竹をかばったあかねの眼差しに俺もムキになっちまい、

「紫に、`だけ、は絶対負けるんじゃないぞっ！お前も、お前も、お前もだぞっ！」

待機している他の1年たちに激励を飛ばしてやった。

ヒカルたち女子三人組は俺を仇のような眼差しで睨みやがる。あかねのぷーっと膨れたほっぺと俺を睨むうるんだ目にはかなりドキッとしたし、こーゆーあかねもナイスだぜ、なんてちょびっと思ったりもしたけれど、それもこれも愛しい群竹くんのおんためなり！

――.....敵だ、敵！

あかねもヒカルも麻耶ちゃんもみんな敵だわいっ！

「よ〜い！」

パンッ！とピストルが鳴ってスタート。

――群竹くん、余裕っす...

二番手の黄色を大きく引き離して風のように駆け抜けてます。

めっちゃめっちゃカッコイイっす...

もとい！

――転べ、転べ、転びやがれ。派手に転んで後ろのヤツに靴跡でもつけてもらいやがれ！！

...ゴール前で派手に転んだのは赤ハチマキのミニ柏木くんだった。

心に悪しきものがあるとこーゆー結果を招く。

がしかし！

「絶対に負けねえっ！」

スタートラインに立ち、こっちから一番あっちの柏木を睨んでやった。

「.....？」

と、柏木は首を傾げる。

柏木に恨みはねーけど、紫色は大っ嫌いなのだ、今日から！

ついさっきまで800メートルなんてマジメに走ってられっかよ、と思ってたけど意地でも一等

賞取ってやる。

がしかし！

ピストルと同時に疾風のごとく飛び出したのはグリーン of 松山弟だった。800メートルも走ってのに弟は最初から飛ばしてやがる。

こいつのスタミナは並じゃねえ。このままゴールに飛び込む勢いだ。

普通じゃこいつにはかなわない。何たって学校一の体育バカだ。

だからといって男田村優作、ここで負けちゃいられねえ！

ほとんど全開の力を出し切って一番を走る松山弟を追った。

けど、もともと陸上体質じゃねー俺は、酸欠にはなりそうだし横っ腹はいてーしで、トラックはあと一周もあるってのに弟との間がだんだん離れちまう。

「田村くん、頑張って～！抜かして～っ！！」

切れかかってた電池を充電してくれたのは小早川の声援だった。

体勢を立て直し、ややペースが落ちてきた弟に追いついた！

がしかし！

「ジロ先輩！抜かされちゃダメ～！」

という、麻耶ちゃんの声援でヤツの電池は満タンになっちゃった。

おまけに、

「田村先輩、転べえ～だっ！」

耳を疑うようなとんでもない野次で俺は一気に脱力。

だって、叫んだのはあかねだ。

さっきの仕返しなんだろうーけどそれにしても、`転べえ～だっ、……ってのはあんまりじゃん？

転がるようにゴールインをして、実際にそのまま転がって立ち上がれねえ俺に、

「あと一歩だったのに、詰めが甘いな、田村くん！」

素敵なダメ押しをくれたのは運痴の小早川環ちゃん。

あなたは天使？悪魔？どっちですかい？

なんにしても。

紫、転べ！から始まったこのバトル、転んで欲しかった当の紫くんは涼しい顔で一等賞の旗の

下で体育座りしてやがる。

勝手に燃えて、勝手に燃え尽きた田村くんの800メートル走でした。

ちなみに柏木はケツ2。紫は最初から勝負の相手じゃなかった。

昼メシ食った後の午後の種目。

小早川と走った二人三脚は、

「もう、田村くん！足が反対だよ！」

「お前が合っていないんだろ...！」

「どっちの足出せばいいのよ～！」

「右だよ右！だから、そっちは左だろっ！！」

「ちゃんと右足出してるよ！」

「そっちは左！」

「え？右だよ？」

「これは俺の右足でしょーがっ！」

「え？わかんないよ～？あたし？田村くん？」

「自分の右足出しなさいっ！」

「もう、どっちなのよーっ！！」

ってな感じで何回つんのめったりすっころんだり引きずったりしたかわかんねー。

こんなに息の合わないペアーは他にねえってんで、当然赤組はケツ。

「もう、田村くんとは絶対に組まない！」

小早川は怒ってたけど、この結果はひとえに環ちゃんの運痴に起因する。

「お前、来年は二人三脚はやめた方がいいぜ...？」

「あたしのせいっ！？」

当然です。

相方があなたでなかったら、もっとスマートに走れたでしょう、俺も。

でも、これはこれでなかなか楽しめた種目だったし、おかげでかどうなのか、午前中の憂さも晴れて本来の冷静かつ沈着かつ温厚の田村くんに戻った。

そしてラストプログラム。

各チームの成績はどっこいどっこいで、この種目の勝利チームが優勝旗を手にする事が出来る、文字通り優勝を賭けた超大目玉の男女混合リレーだ。

「ま、ガンバレ！」

入場前のヒビクに声をかけてやると、

「はっ...！」

ヤツは照れくさそうに笑い首に提げてたハチマキを頭にクイツと持ち上げてキュッと縛りなおした。気合を入れたらしい。

スタートラインでスタンバイする1年生のトップランナーたちはみな緊張した様子で周囲に集まっている応援ギャラリーたちの声援と視線の重圧に耐えている。

さすがのヒカルも例外じゃないようで何度も深呼吸を繰り返している。

紫と、ヒカルの後ろに控えてる二番走者は気にいらねーけど、ヒカルは応援してやりてえな、と思った時、

「ヒカル～、パン食い競争だと思って走れや～！」

待機中の選手の中からヒビクが立ち上がって叫んだ。

――上手いこと言いやがる。

思わずにまにましちまった。

ヒカルの緊張をほぐすのに、これ以上の声援はねえだろう。

ヒビクめ。ちっとは大人になったじゃん。

「りょーかいっ！」

返事を返したヒカルはいつもの笑顔になっていた。

ピストルが鳴ってスタート。

ヒビク式エールがバッチリ効いたヒカルはすかさずトップインを取った。

「偉いぞ、ヒカル！！」

ヒビクは立ち上がったまま、ヒカルが走るトラックを一瞬も外さずに目で追いかけていく。

そーゆーヒビクを、俺は一瞬も外さずに見守った。

ヒカルはそのまま二番手の群竹にバトンタッチ。群竹も次の走者も、1年F組はヒカルが取ったトップを守り通した。

がしかし、走者が2年に変わってから紫を追い抜いたのは我がA組の赤だった。紫は3位まで順位を落として苦戦してる。

赤が優位なのは喜ばしいことだ。

紫の苦戦は願ったりだ。

けど、走ったのは可愛い後輩のヒカルで、走るのは親しき友のヒビクだ。

ヒカルが取ったトップ、守ってやりてえよな、とマジメに真剣にレースの様子を見守ってるヒビクにテレパシーを送ってみたけど俺の念なんか通じるわけもねえからヤツはこっちを見もしねえ。紫劣勢のままとうとうヤツはスタートラインに立った。

状況としちゃかなり苦しい。

紫は二番手のグリーンに5メートルほどの差をつけられてる。

そして、2年ランナー最後を走るグリーンは、麻耶ちゃんに応援はできませんと言われながらも何気に声をかけてもらい体育バカがさらに跳んじまって体育超バカになってる松山弟だ。隣同士で並んだヒビクと松山弟はそこで無言の視線バトル。ピリピリ感がこっちまで伝わって来るほど

にふたりはマジでこの勝負に真剣だ。

「ヒビクせんぱ〜い！挽回お願いしますよ！あ、ゴールにハムカツパンが！！」

すっとぼけたヒカルのエールがヒビクめがけて飛んだ。さっきのヒビク式エールの韻を踏んだヒカル式エールだ。

「おっ！んじゃ、あれをゲットしてヒカルにくれてやるからまかしときっ！」

――コトバのキャッチボールってヤツですな。

ゴールにはヒカルとヒビクにしか見えねえ幻のハムカツパンがぶら下がってるんだらう。バトンを手にして先に走り出たのは弟、そのすぐ後にヒビクもトラックに飛び出した。

「ヒビク先輩！！」

「風間先輩！！」

「風間くん！！」

女の子たちの甲高い声援も一緒にトラックに飛び出した。

弟はすぐに赤に追いつき、あっという間に追い抜いちまった。さすがだ。

けど、ヒビクはその弟のすぐ後ろにピッタリと張り付いている。弟だって負けちゃいねえ。ヒビクの走りを背中で見ながらの完璧な走りで隙がねえ。弟優勢のままトラック半周が過ぎ、次のコーナーが勝負ってとこだ。

完璧で隙がねえ跳んでる体育超バカを追い抜くには、それ以上に超バカがつく何かかねーとダメだろ。

けど、あるんだな、ヒビクには。

超バカがつく――。

最後のコーナーで弟を追い抜いたヒビクはそのまま幻のハムカツパンに向かって疾走する。金色の髪と紫のハチマキが風を切って泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ。

ついさっきまでとは逆の展開で、弟がヒビクのすぐ後ろをつかず離れずで追いかける。

けど、目の前にハムカツパンがぶら下がってるヒビクはもう無敵だ。

ヒビクとヒカルにしか見えねえ幻のそれ目指してそのまま一気にゴール、そしてバトンは3年ランナーにタッチだ。

「――ったく...何マジになってんだよ、風間あ」

ヒビクにトップを奪われた弟は呆気に取られてるのと悔しいのとわけわかんないのが混ざった

ような顔で言った。

「ハムカツパンゲットのため！」

ヤツはニカッと笑ってあっちの方で立ち上がってヒビクに手を振るヒカルにガッツポーズ&悩殺ウィンクでしっかりゲットしたハムカツパンをその場でヒカルに手渡して。

もうこれで決まりでしょ。

この後の演出も出る幕ねーって感じだぜ。

結局レースは3Fの第2走者が派手に転んじまったおかげでグリーンが勝利。

体育祭の優勝旗を手にしたのはB組チームだった。

◇

閉会式のあと、体育祭実行委員たちは1時間後から開始される後夜祭の準備を始めた。

これには中央委員もちっとは手を貸さなきゃならねーんだけど、さっき環ちゃんに本物のハムカツパンをプレゼントするって条件で話をつけたんで、俺はこのままばっくれてビリヤード場だ。

一時間しかねーから速攻で行って帰ってこねーと間に合わない。チャリンコ通学のヤツからチャリを借りて、薄汚れたジャージのまま昇降口を飛び出そうとしたとき、

「田村先輩！」

と、後ろからあかねが追いかけて来た。

さっきの"紫、転べ！"と"転べえ〜だっ！"があるんでちょいと気まずい感じが残ってて、

「...何？」

と、そっけない返事を返しちまった。

けど、あかねはそんなこともう忘れちゃってるかのように、いつものようにふんわり笑い、「ヒカルちゃんたちの衣装取りに行くなら私も手伝います」

と、言った。

「タロジロ先輩たちはステージを作ってるしヒカルちゃんは実行委員だし、私は何もやることないからせめて」

あかね乗っけて走るよりもひとりで行っちゃった方が早いのは確かだったけど、この思わぬツーショットを水に流しちまえるほど、俺もまだまだ大人にはなれなくて、

「...そう？じゃあ頼む。乗れよ？」

と、チャリのケツを顎で指した。

あかねは失礼しまーす、と言いながらチャリの後ろに乗った。

田村くん、いきなり複雑です。

あかねちゃん、君も罪な女だぜ？

気持ちのケリ、付くかなと思うとひょいとまた心の中に入ってくる。まるで私を忘れないで、と存在をアピールされてるみたいだ。

俺は弱いからすぐに負けちまう。

そうするとまた、いやなジェラシーとかせつなさとか憤りとかいろんな気持ちが暴発しちまう。さっきの800メートル走みたいにさ。

あれは完全に俺の群竹に対するジェラシー。

勝手に出ちまった本音だったわけだから。

「あいつ...、群竹とはうまくいってんだろ？」

背中にあかねの体温を感じながら、あいつはいつもこんな風にあかねと密着してんだろーなんて思うとまた妬ける。

「わかりません...」

あかねは呟くように言った。

「わからねーってどういうことよ？」

「なんだかあやふやで...」

――あやふやって...付き合ってるじゃねーのかよ？

気になったんでチャリを漕いだまま後ろを振り返った。

あかねはうつむいてた。

――ちょっとちょっと。勘弁してよ？

もしかしてもしかすると、こいつらって始めから何でもねーとか？

あと一歩のところで詰めが甘いって小早川に言われた言葉、今になってやたら現実的に蘇った。

もっと詰めてよかったのか？

今からでも遅くねーのか？

確認。

「.....でもさ、あいつに惚れてんだろ？」

「うん」

――確認終了...。

結局、俺にとっちゃこれだけで十分な答えっす。

ハタから見りゃらぶらぶはっぴーでも、付き合ってる奴らにはそれなりに色々あるんだろう。非モテの田村くんには逆立ちしたってわかんねーことがさ。

で、そーゆーことは当人同士で何とかするしかねえわけだ。

やっぱここに俺の出る幕はねえ。

それ以上詮索することもつつこんで訊くこともしないで、俺はただひたすらビリヤード場にチャリを走らせた。

マスターは頼んだとおりの黒服に蝶ネクタイの衣装を二着用意してくれていた。

ハンガーにかかったそれを手にとったあかねは、

「風間先輩とヒカルちゃんがこれをお揃いで着たらそれだけで絵になりそう！」

と、やや興奮したように言った。

「だろ？」

「でも、田村先輩？」

あかねは、二着を丁寧に衣装カバーにしまってから、

「この衣装のこと、ふたりは知らないんですよね？」

と、俺を見た。

「ああ。まだ言ってない。ヤツらは制服でステージやると思ってるぜ？」

「ヒカルちゃんはともかく...風間先輩着るかなあ？嫌がりそうじゃないですか？こういうキッチリした衣装は」

確かにヤツの着こなしはいつもだらしく崩れてる。

ポタンは下3個から上開けっ放しだし、ネクタイは締めたことねーし、シャツはでれーんと外に出してるし、しかもその色はオレンジだ。

けど、ヒカルと走りたくてリレーにまで出たヤツだ。

ヒカル一直線に走ってふたりだけの幻のハムカツパンをゲットして。

この揃いのステージ衣装は幻じゃねえふたりだけの限定アイテムだぜ？

「喜んで着るだろーよ？」

俺なら、そうだ。

学校中のみんなに見せびらかしてやりたい。

こいつは俺のもんだぜ、と全身で宣言してやりたい。

――誰にも手を出されねーようにさ。

「...先輩？」

「いや、何でもねー！」

バカみたいにあかねを見てた。

もうこいつは俺のものにはならねーのに。

——往生際の悪い田村くんです……。

あかねに衣装を抱えてもらい、帰りは全速力、ほとんど立ち漕ぎ。

あかねはきゃあきゃあ言いながら俺にしがみつく。

時間がねーのも確かだけど、これを狙ったのもちょい確か。

けど、俺とあかねの間には衣装の壁があり温もりも感触も感じられなかった。

27 後夜祭～突発的な心の叫び

学校に戻ると校庭では後夜祭&体育祭実行委員と中央委員がバタバタ走りながら飾り付けをやったり舞台やキャンプファイヤーの準備をしたりてんてこ舞いな状態になってた。

ヒビクたちも器材を音楽室から運んだりシールド繋いだりの作業をしてる。

俺とあかねもそこに合流して音を出すセッティングをとりあえずさっさと終わらせちまってから、

「そろそろ着替えないと！とりあえず音楽室に戻ろうぜ？」

さり気なくヒビク以下ヤツらを促した。

「おお、そうだな。学校ジャージのままのライブなんてゴメンだかな！」

ステージの準備は整ったし俺たちの仕事は終わってる。

あとは実行委員のヒカルなんだけど……、

「ヒカルちゃん飛び跳ねてて捕まらない」

ヒカルを追いかけてたあかねが走って帰ってきた。

「忙しそうで話も聞いてくれなくて！」

見るとヒカルは未だに紫色のハチマキを頭に巻いたままそれを泳がせて、校庭の端から端をダンボール運んじゃ走り用具持ちちゃ走ってる。

「ありゃ頑張りすぎだべ？本番疲れてマラカス振れねーんじゃねーの？」

と、松山兄。

ヒビクは目をヒカルの動きに合わせてあっちやったりこっちやったりさせながら、

「でもあれはたぶん止まんないぜ？一通り動き終わんないと」

と、ヒカルの性質を知り尽くしてる発言をした。

「じゃ、あれは後回しでいいよ。とりあえずヒビクだけでも作っちまわないと！」

「俺を作る？」

やべ。つい口を滑らしちまった。

ヒビクは、どーゆうことだよ？とつつこんで来る。

けど、説明してるよりやっちまった方が早い。

ヒカルを校庭に残したまま、俺たち一同はヒビクを引っ張って音楽室に戻った。

◇

「ヤダ、ヤダあ〜！！」

まるでダダッ子のように叫んだのはヒビクだ。

「何で俺だけこんな恥ずかしいカッコしなきゃなんねーの！まるでバーテンダーじゃねーかこれ！全然バンドっぽくないっ！」

ヒビクは赤い蝶ネクタイをピンと指で弾き飛ばした。

確かにシェーカー振るにはいいけどバンドっぽくはない。

「盆踊りやぐらでこれは恥ずかしすぎるぜ?!」

確かに実際組みあがった盆踊りやぐらを見ると、その上でこの衣装はかなり浮く。

「勘違いもいいとこじゃん?!って学校中の笑いものになっちまう!!」

確かに勘違いもいいとこ...かも...、と思わないでもない。

アイデア出したのも演出考えたのも俺なんだけど、今になってありゃりゃ...と思ったりはする。

思ったりはするがしかし!

もう後には引けねーよ。

「俺もお前らと同じでいいよ!頼む!そうさしてくれっ!」

ほとんど絶叫に近い叫び声を上げバタバタ暴れるヒビクを男4人で押さえつけ、

「盆踊りやぐらだからこその衣装なんだろ?!それとも着流しでも着るか?!」

「ヒカルのマラカスダンスからしてもう勘違いバンドになっちまってるんだから、この際そーゆーカッコつけたことは言わなくてよろしい!」

「肚を決めろっ!」

と、ヤツのジャージをカづくで脱がせシャツを着せパンツを履かせ...、ハタから見りゃかなり怪しいことを音楽室の真ん中で展開したわけです。

そして、とりあえず着せ替えが終わったときは全員はあはあぜいぜい。

大暴れしてたヒビクは普段の涼しげな雰囲気は何処へやらで、まるで世界一周マラソンしてきた後みてーに乱れた金髪を顔やら首やらに貼り付けた、夜叉のようになっちまってた。

「...風間先輩、大丈夫ですか...?」

肩で息をしてるヒビクを気遣い、たった今音楽準備室の方で着替えを済ませてきたあかねが言った。

—おお...っ!!

ふんわりマシュマロ衣装!

純白でヒラヒラレースがついてて袖がぼわんと膨らんでてスカートもふわっと膨らんでて...!

まるで砂糖菓子のようなあかねちゃん~。

「あかねちゃん可愛いねえ~」

柏木もボーッとあかねを見てるし松山ブラザーズは絶句してやがる。

このままお姫様になれって言ったらすぐにでもなれちゃいそうなあかねを前にして、コイツら揃いも揃って猛獣に見える。もちろん俺も例外じゃねーんだらうけど。

「あかね、お前も勘違いしてる.....!」

はあはあしながらヒビクはあかねを指差して言った。

「そ、そうですか...?風間先輩たちの衣装に合わせたつもりなんですけど...」

あかねは自分の衣装を確認しながら心細そうに言った。

「...んなことねーぜ！あかね！バッチリ！」

ここはすかさずフォローに回る。

なんてこと言いやがるんだ、ヒビクめ。

たしかに全然バンドっぽくないし盆踊りやぐらの上じゃ浮くだろーし勘違いもいいとこだけど、これは群竹クンに見てもらいたいがための衣装なんだぜ？！

.....だぜ...？

.....群竹クンに...。

.....ちきしょーめ.....。

ああ、ちきしょーめ！

――何もかも、ちきしょーめ！！

「あとは任せたぜ？ヒビクはその乱れた髪を何とかしやがれ！俺はもうひとりおんなじの作んなきゃなんねーから！」

いきなりヤケになっちまった。

「もうひとりって...まさか...」

とヒビクは窓から下の校庭を覗いた。

相変わらず紫色のハチマキがたったひとつだけ、ヒラヒラ泳いでいた。

「今夜のライブはヒビク&ヒカルのオンステージだぜ！あいつにもお前と同じ衣装着せてあの盆踊りステージでシェーカーのごとくマラカス振らせてやるっ！」

と、ここで俺はやっとネタばらし。

「マ、マジ...っ！？」

「そもそも、ヒカルに衣装着せて踊らせろって言い出したのはヒビクだからな！？あの珍妙ダンスをどーやったら効果的に見せられるか俺は寝ずに考えたんだ！！今さら文句は言わせねえっ！」

そうだともし！

おめーらのために寝ずに.....しっかり寝てたけど.....考えた演出に文句言うなど1億万年早いつてんだ！

俺なんか、違う男のためにマシュマロ衣装を着てやたらめったら可愛くなってるあかね見て喜んでんだぜ！？

だいたい、俺がギターやり始めたのは女の子にもてるから、ってのが第一の理由だったんだぜ？！バンドやってりゃどんな男だってもてるってのがフツーだろが？！

そのジョーシキに反逆して元祖永遠非モテ街道走り続け、非モテクラブの会長副会長書記たったひとりの会員兼任して、仲間の恋路の応援ばっかの田村優作は俺だっぺーの！

たかが黒服蝶ネクタイの衣装を着るぐらいで、バンドらしくねーとか勘違いとかぜいたくなこと言っぺーじゃねーよ！たわけめっ！

「とにかく、俺はヒカルを呼んで来るからそれまでにヒビクはキッチリ身支度しとけっ！」

半分マジキレ状態で言い放つと、ヒビクは、
「は、はい」
やっと観念した。

◇

「...なんですか、それ...」

ぽかーんとしてヒカルは言った。

「あかねちゃん.....ヒビク先輩.....」

ヒカルはほとんど啞然&言葉無し状態だ。

「...なんか田村がさあ...」

言い訳を始めようとしたヒビクをひと睨みして黙らせて、

「お前もこれに着替えて！」

ヒカルにはヒビクと同じ衣装をさっさと手渡し隣の音楽準備室に押し込めた。ここでまたさっきのドタバタを繰り返す時間も気力もねえ。

そんなの聞いてないよ～、と喚きながらヒカルは渋々着替え始めたようだ。

「田村、どーしちゃったの？さっきからやけに怖いんですけど...」

まだヒビクはブツブツ側にいるあかねに言いやがる。

どーしたもこーしたもねーっての。

俺ってやっぱ報われないのね...、といつもの自分のパターンにため息が出そうになったけど、

「田村先輩は風間先輩とヒカルちゃんをステージで思いっきり素敵に輝かせようって一生懸命考えたんですよ」

という、あかねのフォローに救われた。マジで。

「俺とヒカルね...」

ヒビクは俺をチラッと見てコホンとわざとらしい咳払い。

あかねのひとつことでおとなしくなっちゃったヒビクには笑っちゃうけど、とりあえず納得してもらえてなによりな田村くんです。

そしてヒカルは妙に落ち着かない様子で準備室から出てきた。

こう言っちゃなんだけど、黒服に身を包んだヒカルは柏木が言った通り女の子の子の子してねーところがかなりキマってる。

けど、これだけで終わりじゃねーんだぜ、田村くんの演出は！

「ヒカル、ここに来て座れ！」

用意しておいた場所にヒカルを座らせて、俺は自分の手にベッタリつけたジェルをヒカルの髪に撫で付けた。

「ひゃあ～～～っ！！」

ヒカルはとんでもねえ悲鳴を上げやがった。

「ひゃあ～って何、ひゃあ～って！」

「背中がぞくぞくするう～」

背中がぞくぞくう？

いったいなんて表現するんだか…。

「た、田村！変なところ触るんじゃないねーよ！耳とかうなじとか触るなっ！」

ヒビクが俺に抗議した。

「そ、そんなところ触ってねーよ！」

ヒビクは俺がヒカルの髪をいじくってるのが気にいらねーらしい。

でもまあ、確かにそうだよな。

同じことを群竹があかねにしてるの見たら、俺、嫉妬死するし…。

で、ヒビクの視線を気にしながら手で生髪触るのはやめ、櫛でヒカルの髪を全部オールバックにしちまった。

「田村先輩、あたしで遊んでないですか～？」

「んなことねーって！」

はい、遊ばしてもらってます。遊びがいがあるヒカルちゃんなんで。

けど、ヒカルのジェルベッタリのべとべとヘアー、これがまたまたキマってやがる。

ヒカルってもしかしたら美人かもしんねー。だってまるで宝塚の男役みたいになっちまったぜ？

「ちょっとちょっと完璧じゃん？」

俺は自分が作った作品を見せびらかすようにヒビクと柏木、ブラザーズに差し出して見せた。

「うん…。どこから見てもカッコイイ男の子だよ、ヒカルちゃん」

柏木はうっとりしたようにヒカルを見つめて言った。

「ええ～？あたしどんなになってるんだろー？」

みんなに言葉もなく見つめられてるヒカルがおろおろしてるんで、俺は廊下の鏡の前に連れて行った。

ついでにヒビクもその隣に立たせた。

——ナイスナイスナイス～！！

やっぱ俺のセンス最高じゃん！

思った通り、渋さの中に鮮やかさが醸し出された、このまま一枚の絵画になりそうなふたりだぜ？

「ヒビク、どうよ？」

と、ヒビクに確認した。

「んー」

ヒビクは鏡の中のヒカルを見つめて、

「まあまあ…いいじゃん？」

と、鼻の頭をかく。

勘違いだのなんだのとさんざん文句言ってたくせに、やっぱヒカルパワーは人を変える。

「ヒビク先輩とお揃いかぁ…。いいのかなぁ、あたし…」

ヒカルは鏡に映る自分とヒビクを見比べながら言った。

「ヒカルのマラカスダンスの為に田村が寝ずに考えたんだとさ」

ヒビクは「寝ずに、」を強調して言った。

「そういうこと！だからもう、ステージでは思う存分暴れてオツケーだかんっ！」

と、マラカスを投げてやると、ヒカルはそれをキャッチして笑った。

――と、ここまででさんざん体力と気力と忍耐力を使った。何で俺たちは何をやるにもスムーズに運ぶことができねーんだろ？誰が原因なんだかわかんねーけど、さんざんドタバタして怒鳴って喚いて汗かいて…ってのがいつものパターンだ。

けど、ようやく始まるぜ後夜祭！

校庭のキャンプファイヤーに火が灯された。

後夜祭はフォークダンス、カラオケ大会などの演目が行われ俺たちは今年も最後を盛り上げる役目。

去年、ずいぶん盛り上がりしてもらえたんで今年はハリウッド映画みて一なダンスパーティーを意識して、ロックからバラードからみんなに踊ってもらえるような曲の構成をしてる。センスにはまた睨まれちまうだろーけど、その時はその時！今年のライブはヒビク&ヒカルのパフォーマンスも含めたド派手なライブにしてやる。全校生徒みんな楽しんでまえっ！

そして真ん中の舞台は盆踊りやぐら。

やっぱ今年もしっかり紅白の幕が張ってある。

「あのステージにあたしも立てるんだぁ～」

ヒカルはお目目をキラキラ輝かせ紅白舞台を見つめながら出番を待っていた。今舞台の上では落研のヤツが「笑点もどき、」を披露してる。俺たちの出番はこの後だ。

「笑点にはあの舞台、合ってるけどなぁ…」

紅白舞台と笑点もどきに大喜びしてはしゃぐヒカルを尻目にしてヒビクがポツリと呟いた、その時、

「おおお～、ヒカルちゃん！すんげーキマッてるじゃん！？」

あっちの方から奥田がすっとんで来やがった。そして、

「一緒に写真撮ってよ～！」

と、ちゃっかりなお願いをする。

ヒカルの隣にスマートに立っていたヒビクが面白くなさそうに奥田を睨んだ。

そういうヒビクに気づきもしない奥田が、田村頼む、と言って真四角な強面の顔中に不気味なほどの笑みを携えて俺にカメラを寄越した時、

「あ、ヒカル、最初の曲だけどな？」

ヒビクはあっさりヒカルの腕を引いて舞台の反対側に行っちゃった。

その鮮やかなこと。ごくごく自然にナチュラルにスマートに当たり前のように。

あああ〜、ヒカルちゃ〜ん...と、奥田は情けない声を出す、これはいた仕方のないこと。ヒカルと並んだ写真を奥田が持つなんて考えただけでも許せねえヒビクだろ。

「わりいな、奥田！本番前で色々忙しいんだよ」

写真一枚ぐらいいいじゃねーか、と文句を垂れる奥田にカメラを返して俺もヒビクたちの元に走った。

――がしかし。

「あれ？ヒカルは？」

野獣から大事なお姫さまを守った王子さまは、苦虫を噛み潰したような顔をしてひとりでそこにいた。

「...ん？あそこにいる」

ヒビクが指差したキャンプファイヤーの側にヒカルはいた。ヒカルは今年の1年で一番の問題児、と噂の高い黒田ってヤツと仲良くお話してた。ちなみに去年の1年一の問題児はもちろんヒビク。今年の2年一の問題児もヒビク。

「あらら、さらわれちゃったの？」

せっかく野獣その1から引き離したって言うのに。

「ばーか...」

口では言いながらもヒビクはヒカルを自分の視界の中にしっかりと入れている。

そのうち、ヒカルの周りを大久保とか伊藤とか麻耶ちゃんが集まって囲ってしまったんで見えなくなっちゃった。

ヒビクは監視を諦めて、

「長えなあ.....」

と、舞台の笑点に視線を移して呟いた。

――1991年後夜祭。ブックキャッスルスーパーライブ。

松山兄のベースソロで始まった曲は『デンジャー・ゾーン』。何年か前に大ブレイクした映画『トップガン』のテーマソングだった。みんなが知ってる曲だから観客たちは一発目からいきなり湧き上がって大きな拍手をしてくれた。

この曲をリクエストをしたのは実はヒカルだ。

「ヒビク先輩って英語の歌も歌えるんでしょ？だったら歌って欲しい曲があるんですよね！」

と言ってヒカルがその場で、

「ハイ～イエー～ユ～ノウ～トップガ～ン♪...って歌です」

と、わけわかんねー音程で歌いだしたのは一ヶ月ほど前のこと。

何の歌かさっぱり不明だったけど、歌詞の中に『トップガン』ってあったからこれは映画『トップガン』のテーマ曲を歌ったんだろーというのはその場にいた全員に伝わった。ヒカルはたまたま『金曜ロードショー』でやった映画『トップガン』を見てトムクルーズに惚れちゃったらしい。

「も～あの曲が耳について離れなくて～！ヒビク先輩に歌って欲しかったの～！ハイ～イエー～ユ～ノウ～トップガ～ン♪」

ってな調子で珍妙な歌が止まらなくなっちゃったんでその場は止めるためにオッケーを出した。

けど、みんな知ってる曲だし洋楽のノリもたまにはいいかもしれねーってことで正式採用することにしたわけだ。何たってうちのボーカルは英語発音完璧だし、ヒビク先輩に歌って欲しいってヒカルに言われちゃ歌わねえはずがねえヒビクだし。ちなみに、ヒカルが歌った「ハイ～イエー～ユ～ノウ～トップガ～ン」はヒカルの耳だけが理解している歌詞で、ヒビクはあとでその間違いを正しく訂正してたけど。

一曲洋楽を取り入れてみたらこれがヒビクの声にバッチリハマルってことに気がついた。何で今まで洋楽をやらなかったんだってぐらいに。

で、今回のライブにはもう一曲洋楽を入れている。実はこれも田村くんの密かな演出だったりするのだが、おそらく本人たちは全然気づいちゃいねーだろ。

黒服コンビのふたりは生徒諸君たちには大ウケだった。

俺が睨んだとおり、盆踊りやぐらだろーが紅白幕がかかってようが、ふたりがセットになりゃカーネギーホールのようなぜ。

ヒビクとヒカルは互いの距離を確かめ合うようにして歌い踊って、ピッタシ呼吸が合ってるふたりに俺たち演奏組もバッチリ合わせる。そういう俺たちブックキャッスルに本城高校のみなさんもカッチリ合わせて踊ってくれる。

ライブってこれだよな！

仲間たちとのフィーリングとお客さんとのフィーリング。

みんなの呼吸がひとつになってみんなまとめて楽しめるこの瞬間が最高なわけよ。

うるさいセンセが耳を塞ぎながら睨んでたとしたってそんなの関係ないぜ！

『デンジャー・ゾーン』が終わったあとはノンストップで2曲目3曲目を演奏した。歌って踊れるノリのいい曲を持ってきてたんで、お客さんのみなさんもノンストップで盛り上がってくれてた。

で、4曲目に入る前に小休止。

ステージの上も客席も一瞬静まった。

「ヒカルッ！」

ヒビクがあっちの方で止まっているヒカルを自分の側に呼び寄せると、ヒカルはマラカスを持ったままヒビクに駆け寄る。ただそれだけのことで客席からはため息なんだか感嘆なんだかやっかみなんだかの声が漏れる。

これは俺の勝利。

ふたりはバッチリここでセットで輝いたってことだろう、と自己満足な笑みがこぼれちまった。

。けど、ここからが本人たちも知らね一演出第二弾だ。

あかねが目で俺に合図をくれた。

ピアノソロに俺のリードを被せて始まる4曲目は洋楽で『変わらぬ想い』。

これは俺が夏以来聴きまくって自分の世界に浸ってる曲——ってのはどうでもいいことで、何があっても君への想いは変わらない、君なしで生きていきたくない...ってな想いをしっとりせつなく歌うラブラブソングのバラードだ。

英語が完璧で音に妥協しないヒビクは絶対にこの曲を自分の想う相手に向けて歌うだろう。今、ヒカルを近くに呼び寄せたのだからもうヒビクの中じゃ始まっているからだ。

マジになればなるほどチャカして、自覚してるくせに中々ためめのキモチを上手いこと外に出せねえでいるお子様ランチなヒビクでも、こよなく愛してる音楽の中で嘘はつかねえはずだ。それこそヒビクとヒカルの呼吸をこのステージの上でみんなを目の前にして見せ付けてもらおうってな演出...なんだけど——。

ヒビクは横にヒカルを置き、視線だけはお客さんに向けているけれどふたりは同じリズムに身体を揺らし、同じ空気を呼吸して、この時ばかりはヒカルもマラカスダンスで飛び跳ねたりせずにヒビクと同じ場所に留まって静かなリズムを刻んでいる。

ヒビクは時々客席に向けてる視線をヒカルに向け、ヒカルはその視線に自然に応えて笑う。

もう見ていてアツアツ。

こいつら、どーして付き合ってるねえの？ってなぐらいだぜ。

こんなラブソングはねーだろ。

アイラブユー連発してるんだぜ？

...って、実はヒカルとヒビクのことばかり考えてたわけじゃない。

ヒビクの歌があまりにもあんまりなぐらいにせつなくて優しいもんだから、やっぱ自分のキモチだって前に出てきちゃうわけだ。

俺は俺で、俺からはずいぶん遠い位置にいる真っ白なあかねが弾くピアノに自分のギターを乗せながら、叶わない想いに変わらない想いを確認してたりする。あかねの想いは客席の誰かさんに向かって発信されてるとしても、俺はそこに自分の想いを被せてる。

諦めることは出来たとしても忘れられるはずなんかない。

だって、あかねはいつもここにいるんだ。

俺の視界の中に入るところにさ。

あかねが弾くピアノに俺はギターを乗せていくんだぜ？今もこれからも。

俺とあかねのフィーリングだってここにある。たとえ音楽を通してのものだけだとしても。

あかねが誰を想ってたところで変わらないだろ、それは――。

――ヒビクめ。何て歌唄いやがる。

それ、想いを込めすぎだぜ？

俺に伝わってきちゃうじゃねーのよ……。

ヤツらのために仕組んだ演出に自分のはまっちゃったぜ。

そしてステージの下ではみなさん、息もしてねー様子でヒビクとヒカルに注目しながら甘くせつないラブソングに聴き入り、ちゃっかりチークダンスなんかしてるカップルもいやがって。

「あららみんな、どーしちゃったのしんみりして！」

ヒビクは静かになっちゃった客席に向かって言った。

しんみりさせちゃったのは自分だってのに。

客席だけじゃなく、俺までしんみりさせやがって。

「最後の曲は我らブックキャスルのテーマソング…、」

ヒビクはヒカルに視線を送り、ヒカルは、

「光の城！ イェーイ！！」

ヒビクの後を受けてラストナンバーのタイトルを叫んだ。

そして曲が始まったと同時にステージに飛び込んできたのは大久保と群竹だった。

「む、群竹くん…！？」

あかねが小さく叫んだ声がギターやドラムの音を潜って俺の元に届いた。

興奮してノリまくった大久保に群竹は無理やり引っ張ってこられた風だ。自分が引っ張ってきたオトモダチをそこに置き去りにして、大久保はもうヒカルと一緒にステップを踏んでいる。どうしたらいいのかわからねー群竹は自分がいる場所が信じられねーといった様子でおろおろしてる。

なんだか少し可哀想になっちゃった。あかねがずっと心配そうに群竹を見ている。

――しょうがねえ…。助けてやっか…。

ステージを降りようとした群竹に手を差し伸べようとしたとき、ヤツの手を掴んで留まらせたのはヒカルだった。その後すかさずヒビクがヤツの肩に手を回して真ん中に連れ込んだ。

そのうちに伊藤と麻耶ちゃんも乱入してきて、ステージの上はブックキャッスルと1F賑やか組の可笑しいジョイントライブになっちゃった。

ヒビクの歌に合わせてヒカルがステップを、ヒカルに合わせて賑やか組たちが同じステップを踏む。こうなっちゃったら群竹も肚をくくったようだ。ヒビクに肩を抱かれたまま、そこで仕方なく自分の仲間たちに合わせ始めた。時々あかねに戸惑ったような照れくさそうな視線を送りながら。そして、あかねはその視線を全部受け止めて返して。

――参ったねえ…。どいつもこいつも見せつけやがって。

もういい。

群竹を好きなままのあかねを見てやるさ。

音楽だけで繋がるフィーリングを抱きしめて。

変わらない想いで――。

でも、そう決めたらなんかスッキリした。

今夜のライブ、このステージで校庭で、いったいどれだけの想いと視線が交差しただろう。

◇

「田村どーしちゃったの？」

後夜祭が終わり音楽室に器材を戻した後、机の一個を抱きしめて突っ伏して足投げ出して、の俺を見て松山弟が言った。

「疲れた」

このひとことに尽きる。

朝から動きっぱなしだった俺は、気力も体力も使い果たして燃え尽きちまった。

ライブは大成功、俺の演出もちょっと計算違いなところもあったけど大成功で、やり遂げたことと決めた覚悟への満足感に包まれて。俺がこれほどまでに頑張ったなんてこと、ヤツらは知っちゃいねーんだろーけど。

「で、この衣装はどこから借りてきたわけ？」

着替えを済ませ、黒服を衣装カバーに戻したヒビクが言った。

「ビリヤード場…」

「...ったく田村だよな」

ヒビクは衣装を俺に寄越しながら言った。

「...なによ？」

「だから...、知らねえところで色々気いまわしやがって...ってことだよ！」

ハン。

しょーがねーだろーよ。それが俺の性分なんだから。

「...まあ、センスはいまいちだったけど、結構ピカピカに輝いてやっただろ？俺たちさ！」

あはは、とヒビクは妙に間抜けな高笑いをする。

...ったく、そんな回りくどい言い方してねーでそろそろバシッと決めやがれ。もう全校生徒がお前らのアツアツぶりを見てるんだぜ？あとは本人たちだけなんだ。

「何かあだし、やみつきになりそうです～！ライブって楽しいですねえ！」

ヒカルも衣装をカバーにしまいながら言った。

「この衣装もカッコよかったし、またやりたいな！」

「んじゃ、公民館のクリスマスライブに出る？」

と、柏木。

そう言えば、12月24日のイブに俺たちは今年もまた公民館ライブに出場する。今日のライブやまだ文化祭のこともあるんでそのことをすっかり忘れていた。でも、今はそこまで考えられねえのが正直なところ。

「先輩たちと一緒にらいつでもどこでも！」

ヒカルはヒビクを見て笑った。アップレな太陽のような笑顔だった。

「これからこれを返しに行きながらビリヤードで打ち上げと行こうぜ？1年F組の賑やか組のヤツらも待ってるみてーだし、みんなで」

と、言い出したのは松山兄。

「...マジ？」

これからビリヤードかよ。

そんな元気、もう田村くんには残ってないっす....

けど、

「先輩たち上手いんですってね？見てみたい」

っていう、あかねのひとことで、

「行くぞ！」

と、立ち上がる俺ってどうよ？

昇降口で麻耶ちゃんたちが待っていた。大久保に伊藤、群竹もいる。

校庭の片付けもすっかり終わっていて学校に残ってるのは俺たちが最後ぐらいだった。そろそろ電気も消されちゃうから、俺たちは急いで校門を出た。

その時だ。

「浅倉、ちょっと...」

校門の影からヌッと出てきた人影がヒカルを呼び止めた。

俺たちは一斉に立ち止まり、そいつに注目した。

「黒田くん、どうしたの？」

ヒカルは自分呼び止めた黒田を見上げて訊いた。

黒田は俺たちをぐるりと見回してから、

「ここじゃ言えねえよ。ちょっと来てくれないか？」

有無を言わさないような勢いでヒカルの腕を引いて再び校門の中に入って行った。

「お、おい...」

ヒビクの足が一步前に出た。

けど、それよりも早く黒田とヒカルはもう見えなくなっちゃってた。

ちよいとヤバイ空気だぜ？

このままヒカルとあいつをふたりにしといて大丈夫か――？

...と、俺たちブックキャスルは顔を見合わせて無言の会話をした。

ここで待つか...、とも思ったけれど狭い歩道でこの人数が立ち止まってるのもちよいとマズイし、かと言ってこのまま先に行っちゃうわけにも行かない。

ここはヒビクひとりを待たせるか...、と思った時、

「私、ここでヒカルちゃんを待ってる」

と、言ったのはあかねだった。

「いや...」

あかねがひとりで待つよりやっぱここはヒビクだぜ。何かマジでヤバイし...

でも、

「そう？じゃあ僕たちは先に行つてようよ」

「そうだよね～。黒田がヒカルちゃんに何の用かなんて考えて待っててもしょうがないしな～」

伊藤と大久保が言いやがる。

こいつらちっとも気にしてねーのか、それとも気にしねーでもいいってことか...

「...じゃ、俺もここで待つから」

群竹が言った。妙にバツが悪そうに、でもあかねの横にピッタリと寄り添うように立って。

「群竹くん...」

あかねは群竹を一瞬見上げ、すぐにうつむいた。

「あれ？お前たちってそーゆーの？」

何を今さら...なことを間抜けに叫んだヒビク。

本当はそんなことより奥のヒカルが気になってしょーがねえくせに。

「ふ～ん、あかねがね～。それじゃ俺は失恋かあ...」

ったく、気が動転してわけわかんなくなつてやがる。

んなこと言ってる暇があったら素直にヒカルを追いかけやがれ。

もう誰もいなくなった校舎の中で男とふたりなんだぜ？襲われたらどーするんだ。

「そんな心にもないたわごと...、」

と、ヒビクを戒めようとしたとき、

「何、心にもないことを言ってるんですか、先輩！素直じゃないんですね！」

ぴしゃりと言い切ったのはあかねだった。

いつものふんわりほにゃらんなあかねらしくもない、威厳のある言い方で。

さすがのヒビクも息を飲み込んで詰まりに詰まったようだ。

「と、とにかく...、俺たちは先に行っているから、お前らはあとでヒカルを連れて来てくれよ」

言い捨てるとさっさと先を歩き出しちまった。

どうしてこう素直じゃねーかなあ、ヒビクよお。

「おい...！お前、待ってなくていいのかよ?!」

ヒビクを追いかけて立ち止まらせた。けどヤツは、

「...あかねたちがいるんだからいいだろ？子供じゃないんだし...」

と、さらに先に行く。

「...田村くん、俺、何かいやな予感がするんだけど...」

柏木が俺に囁いた。

勘のいい柏木のことだからさっきの黒田の様子に何かを感じたらしい。

「どうする？」

「...あかねと群竹が待っててくれてるし、あいつらに任せようぜ？」

校門のところであかねが校舎を見つめながらいる。群竹は校門を背もたれにして立っている。

——頼んだぜ、あかね、群竹...

・
・
・

けど、結局ビリヤード場にヒカルは来なかった。

あかねにも群竹にも何も語らずに泣きながら帰って行ったヒカルだったと聞いた時のヒビクはその場に立ち尽くしたまま声にならない声で、

「...そうか」

と、ひとこと呟いた。

ついさっき、『変わらぬ想い』を熱唱してたヒビクの甘くせつない歌声はまだ俺の耳に残ってる。

それと同時にヒカルのアップレな太陽の笑顔が浮かんできて、どうにもならない想いに駆られた。

後夜祭ライブ後の俺たちブックキャッスルは二週間後の文化祭とその翌日の公民館ライブ、そして12月のクリスマスライブの練習を同時進行でやってる。公民館もクリスマスも去年は5人での出場だったけど、今年はおかねとヒカルが加わり華やかになりそうだ。ヒカルのマラカスダンスもヒビクとセットにすりゃバッチグーなパフォーマンスになるってことが前回のステージで証明されたし、またあの衣装をマスターから借りてやろうって密かに思ってる。今んところ、あかねたちは演劇部に専念してるからライブの練習はムサイ男たちだけでやってるけど。

文化祭の方は演劇のバックミュージック担当だから歌が入るのはメインテーマのみ。演劇部との合同練習は明日からなんで、全ての曲が仕上がっちまってる今はメインテーマだけを練習してる。

けどそのメインテーマ『ライジングサン』は、公民館ライブ出場オーディションでデモテープを送った今年のメイン曲でもある。作ったヒビクはもちろんだろうが、俺もこの曲にはかなりの感情移入があるもんでついつい力が入っちゃったりするんだが...

「誰だよ、コーラス外してるやつ！」

いつになくカリカリした調子でヒビクが演奏の途中で止めやがった。

「俺じゃねーぜ？」

「俺でもねえって！」

松山ブラザーズが揃って否定した後、ヤツらみんなの視線は俺に集まる。

で、

「頼む田村！ギターだけ弾いててくれ！」

「ハモリは俺たちに任せろっ！」

「ひたすらギターに徹してる！」

.....なんて失礼なことをヤツらに突っ込まれた。

確かに俺は歌は得意じゃねえ。

ギターでリードを弾きながら歌うと歌が本来の音階を行かずにリードのメロディーになっちゃったりもする。そうなるとうちもギターもおのずと中途半端になっちゃうし、これにつられた松山弟の刻みも曖昧になっちゃう。ってことは、ボーカルのヒビクにとっちゃ非常にやりにくい演奏状態になるってわけだ。俺のコーラスが原因でみんなの呼吸が乱れるってことなんです...

「すみません...」

素直に認めはしても、この歌は今の俺の原動力みたいなもんで、音痴を自覚してはいてもついつい歌いたくなっちゃうフレーズが、

明けない夜はありえない 星なく暗く長くても

終わらない物語（ストーリー）ありえない

せつなく悲しく果てしなくとも

ピリオド打つのはMy Mind

ハッピーエンドはJust My Mind

ってとこ。

そうだそうだ、と妙に共感しちまうわけよ。

真っ暗闇の長い夜だって必ず朝になるわけだ。果てしなくせつなくくるしい物語だって必ず終わりはあるわけだ。人生においてのそのエンドマークは自分でつけるしかねえ。俺はこないだの後夜祭で完璧に自分の気持ちに区切りをつけた。いつまでもガラガラと恋に破れた情けない男の物語をやってねーで、恋に破れはしたけれど、やっぱこのまま愛しの君をずーっと俺の気がすむまで見守っていくんだと決めたんだ。だから俺のエンドマークはまだついちゃいない。今は一個の章が終わったあたりだ。だだの恋破れ男の章が終わり、これからは懐のひろーい恋破れ男の章を綴って行くってわけさ。

田村、お前は偉いぞ！

いつか必ず本当の夜明けがやってくるさ。

寒い冬だって必ずあったかい春になるんだぜ？

それまで信念貫いてみるよ。

そして、いつかお前のハッピーエンドを掴み取れっ！！

……って、昇る太陽に励まされてるみてーなんで、この歌をやると活力が沸く。

ヒビクめ、もしかして俺のためにこれ作ったんじゃないの？って言いたくなるぐらいに。

それを、

「ヒカルがその辺の隅に隠れてこっそり歌ってるのかと思ったぜ！」

とまで言われちゃったら黙るしかねーだろ。

田村くんのライジングサンはまだまだ遠いのもよって言われてるようで妙にせつなくなっちゃったけど、想いはギターにだけ込めて、コーラスの方は仕方なくブラザーズにお任せすることにした田村くんです。

「んじゃ、もう一回最初から！」

眉間に皺を寄せたヒビクの号令がかかり、再び始まった『ライジングサン』だったけど…、

「今度は誰！？」

また途中でヤツは演奏を止めた。するとブラザーズはまたまた俺に注目する。

「俺じゃねーよ！今んところは歌ってねーしっ！！」

「今のは風間くんが外れてたみたいだよ…？」

言いくそうに柏木が言った。

「だって今のところ、コーラス入らないとこでしょ？歌ってたのは風間くんだけ...」

「...あれ？そうだった...？」

ヒビクは俺たちをぐるりと見回して、

「...悪い。ちょっと休憩...」

と、音楽室を出て行っちゃった。

「最近あいつ、やけにカリカリしてるなあ？」

松山弟がヒビクの出た行った先をおもむろに指差して言った。

「アレの日なんじゃねーの？」

「いやん、たろーくんったらあ！」

「今日は二日目あたり？」

「そうそう。だからご機嫌ナナメなの！」

「多い日も安心！なの使え！」

あっちで柏木がおもむろにため息をついた。その柏木に激しく同意だ。

脳天気ブラザーズにはわからなくても、俺には何でヒビクがカリカリしてんのかなんてわかってるし、たぶん柏木も同じだろう。大事な文化祭とライブを目前にした今、そーゆー心のしこりはかなりの足かせになっちゃうし、それがわかってる本人が一番つらいに決まってる。

「いい加減にそのバカ直せよ、バカブラコンビめっ！」

まだアレの日の話で脳天気に盛り上がってるお気楽ブラザーズに言い捨てたあと、ヒビクが気になったんでヤツの後を追った。

あらら田村もアレの日かい？と、とぼけた兄の声を背後で聞き流して東階段を駆け下りていくと、昇降口の向こうの渡り廊下の真ん中で立ち話してるヒビクとヒカルが見えた。

後夜祭のあとのヒカルはいつもと全く変わらない。

会えばハツラツとしたいいつもの太陽が笑ってるような笑顔で声をかけてくる。あかねの話によると文化祭実行委員も引き受けたようで、また1年F組がやる演劇アトラクションの総監督もやってるらしく相変わらずドタバタと走り回ってるみてーだ。

けど、あの夜ヒカルを校舎の中に引っ張って行った黒田はあれからすぐに学校を辞めちまった。

んでもって後夜祭の夜、黒田に呼び出されたあとのヒカルは泣きながらひとりで帰ったとあかねは言ってたし、何でかって理由をヒカルはちっともしゃべらねえらしい。俺たちは俺たちでそのことをかなり心配してたけど、本人がああ調子で元気なもんだから今さら突っ込むことも出来ず半分は忘れちゃってる。

けど、ヒビクはそうはいかないだろう。ああやって普通にヒカルと喋ってからかって大声で笑ってるけど、胸の中じゃたまんねえ想いがぐるぐる回ってるに決まってる。

これがヤツがアレの日みたくカリカリしてる理由だ。

後夜祭の夜にヒカルに起こった出来事が気になってしょーがねえだろうし、それに自分がどう

関わっていいんだかもわかんねーから落ちつかねえんだろう。

だからさっさと言っちゃまえてんだ。

お前はもう、どう見ても出来上がってるカップルなんだぜ？

後夜祭のステージで、それはもう全校生徒アンド先生たちやポッターのおっさんにまで見せつけてるんだ。今そこで、ほれ、丁度いいあんばいに誰もいねーんだから、ひとこと、`ヒカル、俺と付き合え！、って言やあいいことだ。そしたら1秒後にはらぶらぶカップルの出来上がりだぜ？誰にさらわれることもねーしいつだって捕まえときゃいいんだ。独り占めしちまえてのヒカルを。堂々とさ。

ってなことをここで俺がやきもきしててもしよーがねえんだけど、そんなこんなうちにほらほらヒカルのお友達が集まって来ちゃったじゃん。そんでもってあれあれ、さらわれて行っちゃったじゃねーか。

ヒカルは`ヒビク先輩、またね！、なんて元気よく言って、ヤツは`おお、ってな具合でカッコつけて別れたってのがここから見ててもよくわかるぜ。

――ったく。手のかかるヤツめ。

ヒカルに置き去りにされちゃったヒビクのところに行ってやろうとした時、

「ちょっと田村くん！」

いきなり後ろから背中を叩かれて、焦ったのとビビったのが合わさってもうちょっとで前のめりにスッ転びそうになっちゃった。

「何だよ！？」

振り向いたところにいたのは小早川だった。

「訊きたいことがあるんだけどいい？」

小早川はいつもより倍ぐらいの早口で言った。

「なに？」

ちょっとこっち来て、と俺は小早川に腕を引っ張られて昇降口の隅っこに連れていかれた。引っ張られながらチラッと廊下を見たときに、ヒビクが階段の方に去っていく後姿が見えた。

「訊きたいことって何？俺、部活の途中なんだけど？」

「何よ？そこでポーッとしてたくせに」

ポーっとなんかしてません。

俺は友を心配してだなあ....

「風間さんと浅倉さんって付き合ってるの？」

そうそう。そーゆーことでやきもきしてただけです。

っていうか....

「あ?!」

ワンテンポ遅れて訊き返した。

小早川が何でそーゆーことを俺に訊く？

「前から浅倉さんのことは気になってたんだけど、こないだのステージ見たらやっぱりそうなのかなって思って。風間くんには訊きにくいから田村くんに訊いたの。ハッキリしたこと知りたいから」

「...何で？」

小早川ってもしかして...？

「何だっていいじゃないの！どっちなのか教えてよ！」

さらに早口になって小早川は怒ったように言った。

――ふーん...。そーゆーことだったわけね。

別に小早川が誰にどーだって俺にはぜんっぜん関係ないことだぜ？

けど、何？この悔しさは。わけわかりません。

「惚れ合ってるってとこですかねえ...」

嘘つく理由もねーから正直に言ってやった。

「惚れ合ってる...？」

「そ。付き合っちゃいねーけど、あのふたりはそれを越えてぞっこん惚れ合ってるってわけ」

小早川が知りたいのはヒビクの気持ちってところだろう。ヤツの気持ちがどこにあるのか、そこんところが重要なわけだ。この場合付き合ってるかどうかは二の次でしょう。心が肝心なんだから。

「そうなんだ...」

と、小早川はうつむいた。

「どうしよう...」

どうしようもくそもなく、そういうことなのよ。今のヒビクがヒカル以外の女子に目を向けることなんぞ100%ねえだろう。

ちょっと胸が痛んだけど、このままヤツを想い続けるほうがよっぽど哀れだ。あいつは興味ない女子にはやたら冷たいし、このままじゃ環ちゃんが傷つくのは必至。そう思ったんで、

「あいつの心は100%以上ヒカルのもものだぜ？」

と、トドメを刺した。

「浅倉さんの心も？」

「ああ。あいつらもう繋がっちゃってる」

はあ...、と小早川は肩を落として大きくため息をついた。

それ見てまたどこかで悔しい田村くんです。わけわかりません。

「ま、そういうことだからあいつのことは諦めた方がよさそうだぜ？」

「...えっ!？」

「まあ、すぐにはムリだと思うけどさ」

「ちょ...、ちょっと田村くんっ!？」

環ちゃんにはヒビクよりもふさわしい男がいるって。例えば俺みたいな...な？

—なっ!？俺じゃねえっての!

やべやべ。

懐広くなりすぎてるかも、俺。

見守る相手はあかねだけで精一杯だっのに。

いくら心の中の呟きだからって、ケツ叩いて笑っちゃうような冗談こいてんじゃねーよ、俺!

「じゃ、部活あるから行くぜ?あんまり力落とすなよ!」

「あ、田村くん!ちょっと!ねえたらっ!」

小早川は喚いてたけどかまわず来ちまった。やたら悔しくて。わけわかりません!

音楽室に戻ると、

「どこ行ってたんだよ、田村ア!」

と、イライラした調子のヒビクに怒られた。

「どこって...その...」

キミのあとを追いかけて。

途中でちょっとイレギュラーが発生しちゃったけど...。

「明日から合同練習が始まるんだぜ?気を引き締めてやれよ!」

それは最初からよーく心得ておりますよ、ボクは...。

「なんかみんな調子入ってねーよな?」

さっきよりもカリカリした様子のヒビクはやっぱアレの日なのかもしれねー。

ヒカルの顔、小早川の顔が俺の目の前をチラついた。

わけわかんねーこのイライラ感、生理的な部分で感じるこの憤りはなんだ?

アレの日ってのがどーゆーものなのか、何となくわかったような気がした田村くんです。

◇

みんながみんな、どこかで調子狂った演奏になっちゃった練習が終わった頃、あかねとヒカルが音楽室に顔を出した。7人がここに集まるのは二週間ぶりだ。

「こんにちわーっ!」

「おひさしぶりでーす!」

.....ああ、やっぱこの声の響きたちは素晴らしい。

とくにこんなわけわからん日にはビタミン剤のようなふたりの笑顔だぜ。

「うるせーのが来やがった！」

と、毒つきながらも松山兄はにまにましてやがる。

んで、そーゆー兄を横にどかして、

「演劇部の方はどう？」

柏木は優しーく言う。

何だかんだ言っただって、ふたりがいなきゃブックキャスルはにんにくが入ってねえ餃子みて一なもんってわけで、今じゃ必要不可欠なあかねとヒカルなのだ。ふたりが来ただけで薄暗い音楽室だってこんなに明るくなっちゃうんだから。

「もうほとんど仕上がってます。あとは明日から先輩たちの音楽と合わせてどうなるかの調整ですね！」

「そうか。楽しみだね。今月来月は大忙しだけど頑張ってるよ、ふたりとも！」

ニコニコ顔の柏木につられ、俺もにんまり...というよりはにへら~とした時だ。

「そのことなんですけど.....、」

と、今までの笑顔を沈めてあかねが口ごもった。

「あかね？どうした？」

「私、公民館のライブには出られなくなっちゃいました...」

ええっ！？と俺たち一同は叫んじまった。するとあかねはやたら小さくなって、すみません、と呟いた。

「出られねえってどういうこと？何か用事が出来たとか？」

あかねはふるふると首を振った。

「うちのお父さんが学校外でのバンド活動は絶対にダメだって...」

――はっ！？

「お、おとーさん！？」

思わず声が裏返っちまった。

でも、俺だけじゃなくブラザーズも柏木もヒビクも啞然としてあかねに注目してる。まさか、学校の音楽室でおとーさんが出てくるなんて誰も思っちゃいなかっただろう。

「あかねちゃんちのお父さんってものすごーく厳しいんですよ。部活で音楽やってるのは文句言わないらしいけど、公民館ライブなんてとんでもないってことで即却下だったらしいです」

もしかして、今時時代遅れもいいとこの....

「バンドは不良がやるものだ...ってやつ？」

あかねは申し訳なさそうにコクンと頷いた。

「ありゃりゃ...。俺たちっていつまでたっても不良って言葉が付きまとうのね...」

と、初めてあかねにここで出会った時に言われたバンドなんて不良みたいって言葉を未だに根に持つ兄が呟いた。

「本当は先輩たちとどこでもやりたいけどお父さんに逆らえなくて…。だからこれからも学校の中でのライブしか私は参加できません。クリスマスライブもダメです。ごめんなさい…」

「マジで怖いと一ちゃんなのね…」

「まあ、俺たちもか一ちゃんには逆らえねーしなあ…」

ブラザーズはぶつぶつ言ってるけど、あかねってもしかして超がつく箱入り娘ってヤツなのか？あかねんちに電話なんかしておと一さんが出たら無言で切られるか絶対に取り次いでもらえねーかきさまは誰だと怒鳴られるってやつで？

「あかねを嫁にしたいって言いに行くヤツは殴られそーだな？」

っていう兄の言葉に、そのビジョンを頭の中で描いてみた。もちろんあかねの隣にいるのは都合よく俺だ。想像図なんだから何でもありだろ？けど、殴られるのは痛いしヤダぞ。

「…参ったねえ…」

ヒビクが呟いた。

「でも、しょーがねえな。不良じゃないってことを証明するためにもおと一さんの言いつけ守んなきゃ」

「うん。風間くんの言うとおりでね。残念だけど…」

「んじゃ、あかねの分までヒカルに弾けてもらわねーとな！」

ヒカルの肩にポンと手を乗せた松山弟の言葉に、ヒビク以下俺たちみんなはそうだそうだと同意したけどそれも、

「すみません。あたしも今回は出演辞退しまーす」

と、やたらあっけらかんと言いつつ切ったヒカルの言葉にまたまた俺たち全員は、

「えええ〜っ?!」

と、叫んだ。

「あかねちゃんが出ないのに、オマケのあたしだけ出るというのも妙ですから！ほら、あたしのマラカスは盆踊りだし〜」

って言われちゃ、俺たち全員は頷くしかねえ。

後夜祭のアレはヒカルを出すっていうのが大前提になって、あのマラカスをどーにかこーにか格好つけて見せるために考えた苦し紛れの演出だったわけだから。それにヒカルの性格からしてあかねに気をつかわねえはずがない。

「そっか。それもしょーがねえな！」

「はい。しょーがないです！」

「チッ！今年も男5人のブックキャッスルかよ…」

と、半分ふてくされた兄が言うと、

「いや。ブックキャッスルはヒカルとあかねがいてこそそのものだけ。だから公民館ライブの時はユニット名を変えようぜ？」

と、提案したのはヒビクだった。

「それはいい思いつき！」

俺も速攻同意した。

今となっちゃ、5人だけのブックキャスルなんて寂しすぎるぜ。

「先輩たちにピッタリの名前があります！」

ヒカルが手を上げた。

その空気の流れを瞬間に察知したヒビクの目がヒカルを見て輝いた。

このふたりのフィーリングというかテンポは絶妙。いつものことだ。

「Shine Castle。どうですか？」

「Shine Castle…。光の城か…」

いいねえとブラザーズは珍しく意見を一致させて呟いた。

「先輩たちを初めて見たとき、やたらチカチカしてました。あたしは密かに光の軍団って命名してたんですよ！」

光の城。

俺たちのテーマ曲。

「ステージで輝く先輩たちを、あたしとあかねちゃんは客席で応援します！」

「決まり！ユニット名はShine Castleで行くぞ！」

ヒビクの決定に異議を唱えるヤツなんていない。

ヒカルが考えてくれた最高のユニット名で、公民館ライブは出場することになった俺たちShine Castleだ。

「けど、その前に文化祭！」

そういやいつの間にかカリカリもおさまって、いつものようなナチュラルな笑顔を見せてるヒビクがヒカルの肩を力強くポンと叩いた。

・
・
・

合同練習がはじまって、演劇と音楽を重ねた『みにくいあひるの子』は、自分でいうのも何だけどすごい傑作に仕上がった。何たって音楽がいい。いや、これは自分たちを褒めてるんじゃない、単純にヒビクの作った曲たちが脚本にピッタリだってことだ。

あいつ、あれで魂込めてたからな。

演劇に被せて演奏していると、あいつがどれだけこの脚本を読み込んで、台詞やシーンを頭に描いて一曲一曲を作ったかってのがよくわかる。少なくともあいつにとっちゃ楽じゃねえ仕事だったはずだ。けどやっぱヒビクの音楽に対する姿勢には自分の姿勢を正される思いだぜ。

そして、日めくりカレンダーを一枚一枚めくっていく映像が見えるかのように二週間があっという間に過ぎた。

文化祭はいよいよ明日。

最終稽古が終わったあと、俺たちは演劇部の部室に呼ばれて出来上がった衣装を試着させられた。

まるで月桂樹の冠のようなカツラと思いきり葉っぱをくっつけたシャツを着た俺たちは、互いの格好を指差して苦笑いをし合った。ヒカルが苦勞して作ったのはわかるけど、やっぱどう見

てもコメディーだ。

「森の精霊っていうよりはピーターパンみてえだなあ...」

松山兄は目の前の柏木を指差して言うが、俺らみんなそうだ。はっきり言って超だせえ...。緑の色も鮮やかなグリーンとかプリティーなきみどりっていうんじゃない、地味～な深緑だし野暮ったい。これは顔に思いっきりペイントしてもらわねえと逆に困る。俺だってわかっちゃったら超恥ずかしいもん。

けど、ヒビクは、

「最高じゃん？よく頑張ったな、ヒカル」

なーんてひとりでいい子ぶってヒカルの頭なでなでしちゃって。

「うわ～、私、いっぺんこれやってもらいたかったんですう～！」

頭の上のヒビクの手を見上げるヒカルも満面の笑顔で。

――はいはい。りょーかいです。文句は言いません。

って感じです。

その帰り道。

上は満天の星空だ。そして輝く月は鮮やかで明るい。そんな月の明かりに照らされてゆっくり歩くヒビクの顔が、さっきからどこかにやけてる。

「嬉しそうだったな、ヒカル」

「ええ？」

にやけたままヒビクは俺を見た。いつものヒビクらしくないやたら素直なその顔が妙に愛しくて、

「あれもヒビクに惚れてるぜ？」

と、カマをかけてやったら、なんだよそれ、と鼻をぼりぼりやりながらバツ悪そうにうつむきやがった。

「お前のお宝ってヒカルだろ？」

もういいかげんに観念しなさい。

「...ああ、そう。バレちゃったな...」

やった。

とうとう白状しやがった。

バレちゃったなも何も、最初からバレバレでした。

なんだかやたら長かったけど、やっぱりこの優しい月明かりのおかげでか、ヤツの心もずいぶん透き通ってるように感じる。

「ここまで来たら一気にお宝ゲットしなさい！」

「そうしたいけど...」

ヒビクはそう言ったまま星空を見上げた。素直になってる分どこか思いつめたようにも見えた。さっきまでのにやけ顔はもうどこかに消えて、今はずいぶん遠いところに想いを馳せているよ

うに遠い遠い空をいつまでも見上げているヒビクだ。

「どしたの？」

「田村にはお宝はねえのかよ？」

ヒビクが突然俺に話を振ったんでかなり焦っちゃった。けど、

「.....まあ、ないこともない...な」

と、答えた。

「そっか。田村にもあるのか...」

「でも俺のお宝は人様のものになっちゃったけどな...」

「マジ？お前、それでいいわけ？」

「だってしょーがねえじゃん？やっぱ彼女の気持ち優先にしねーと...」

ここまで来るまでにはさんざんの逡巡も葛藤もあったけど、それはもういいさ。今はこんなに穏やかなんだから。

「彼女の気持ちか...。独り占めしてーと思わないわけ？」

「そりゃ思ったときもあったけど...、」

っていうか思わないはずがないだろ。好きな子はどうしたって独り占めしたいさ。けど、相手が俺を思ってねーならしたくたって出来ねえことだ。

「相手は田村の気持ち知ってるの？」

「いや？言ってねーし、言うつもりももうねーし...。陰で見守ることに徹する田村優作ってことで...」

何喋ってんだか、俺。完全にヤツの陽動作戦にはまってるぜ？

「お前、それで本当にいいわけ？」

いいんだろうか、本当にそれで...、って、関係ねーとこでまた考えちゃったじゃねーの。

今は俺のことなんかどーでもよくてヒビクの話をしてたんじゃなかったっけか？

「...それが俺の彼女に対する気持ちだから...」

「田村の気持ちか...」

何か変なヒビクだ。

ヤツは俺なんかと違って100%叶うっていうのに。

「何だよ、ヒビク？お前なんか全然問題ねーだろ！ヒカルは完璧にお前に惚れてる。俺が保証してやるぜ？」

「いや...、問題は俺...」

はあ？ヒビクに何の問題があるってんだ？

ヒカルが好き、付き合いたいと思ってるヒビクがいて、確かめたわけじゃねーけど同じ気持ち間違いなしのヒカルがいて何が問題なんだ？

「あの月は星屑たちみんなの月だよなあ...。あれを独り占めできる星屑なんてねえよなあ...」

「...ああ？」

今まで月の光に明るく照らされてたヤツの顔が、一瞬の歩く場所のタイミングで暗く翳って見えた。

「ヒビク？」

「いや、何でもねえ...」

ほんの短い時間の中に、ヤツの言い知れない明と暗を見たような気がした。

文化祭の朝、いつものように駅に行くときヒビクを除いたヤツらはすでに集まっていた。

俺たちは毎朝だいたいみんなが同じぐらいの時間に揃う。っていうのもみんながみんな朝には強くねえから遅刻ギリギリ運が悪きゃアウト、ってな時間の電車が通学の定番になってるからだ。だから誰かを待つってこともほとんどなければ待たせるってこともねーんだけど...

「ヒビクはまだ？」

電車到着までもう2分もないってのに、ヤツの姿は通りの向こうにもまだ見えない。先に行っちゃまってるとも考えられねえし昨夜のどこか変だったヒビクもちょっと気になるし、間に合わねーから先に行く、とさっさと改札を入っちゃった松山ブラザーズたちは放っておいて、とりあえず俺は待つことにした。

けど、待てど暮らせど来やしない。

電車はとっくのとうに行っちゃまって遅刻は決定。

しばらく改札の前でぼーっと待ってたけど、あんまりにも遅いんでキオスク前の公衆電話の受話器を取った。

「田村あ...？どこに電話してんの...？」

ってゆーとぼけた声と、

「はい、風間です！」

ってゆー透き通った元気な声が、後ろからと耳の中で同時に聴こえた。

「あれ、ヒビク...！ってゆーか...田村ですけど！」

「あら、田村くん！元気？」

って電話の向こうでヒビクのおふくろさん。

「行かねーの？」

って俺の後ろでヒビク。

「元気...ですけど...！あ、今、ここにいますから...！」

タイミング悪く電話しちまったぜ。

「え？どこにいるの？今日は文化祭だよな？」

っていうか、俺がおふくろさんに用事で電話かけるはずねーんだから察して欲しい...

「はい、文化祭です。よかったらおかーさんも来てください...」

何を喋ってんだか俺...

「そうお？じゃあ行っちゃおうかなあ？田村くんは何やるの？」

.....おふくろさんはまだ会話を続ける。

「俺は模擬店です...。あ、ヒビク来ましたからいいです！」

「え？響は何やるのか聞くのわすれた。田村くん知ってる？」

ーおーい、おふくろさーん.....。

「ヒビクは...、お前文化祭で何やるの？」

後ろで電信柱みたく突っ立ってるヒビクに確認すると、

「俺？なにやんだ？知らねえ...」

呆けた答えが返ってきた。

「ヒビクは不明です...」

「あれ？響は今さっき出たよ～」

.....だからそうじゃなくて！第一もうここにいるっての。

「ああそうっすか。それじゃ失礼しました！」

と、ようやく俺は電話を切った。

——かみ合わねえ.....。

はあはあしちまった。

ヒビクのおふくろさん、やたらめったら美人なんだけどちょっと天然ってのがタマにキズだ。毎日こんなふうな会話をしてるとしたらヒビクは相当疲れるだろう。たまにだってこんなにはあはあしちまうんだから。

「もしかして俺んちにかけた？」

「聞いてりゃわかるだろ！」

「何で？」

「おせーからっ！」

ヒビクは大きなあくびをかまし、昨夜なかなか眠れなかったからつい寝過ごした、と言った。言葉どおり寝てねえみてえで目は充血、お肌はザラザラでやつれてる。寝不足でやつれてるのか、あのおふくろさんで疲れてるのか、たぶんそのどっちもなんだろう。

けど、ヤツが眠れなかった理由ってのはちょっとひっかかる。

わかりやすいお子様ランチのくせして、心の中に深海を隠してるのがヒビクだし。

「大丈夫か？」

ヒビクは、ん？と俺を見て、

「たぶんな...」

と、また大きなあくびをした。

で、俺たちはもちろん遅刻。

けど、文化祭の今日はセンセたちも校門に立ってる場合じゃねえのか、生徒手帳の提出もなくすんなり昇降口まで行けてラッキーだった。遅刻するんならこーゆー一日に限る。

がしかし——。

「ちょっと田村くん！！」

教室に入るなり、飛び蹴りしてくるぐらいの勢いで俺の目の前に突進してきたのは小早川だ。
「こんな日に遅刻するってどういうつもり?!今日は準備があるからいつもより30分早く登校してよ、って昨日言ったでしょ?」

げっ。そうだった。すっかり忘れてたぜ…。

「トータルで1時間の遅刻だよ?もう準備もほとんど終わっちゃったし信じられない!」

小早川のヒステリーを片耳で聞きながら教室を見回すと、あれあれ…、もうテーブルだの花だのみそおでん用の屋台だのジューススタンドだのしっかりお揃いで…。

「すみません…」

「……で済むほど甘くはないのよ、A組は」

小早川はニヤリといやらしい微笑みをくれた。

いやな予感あり、だ。

けど、1時間の遅刻を許してくれるはずがないクラスだってのはわかってるんで、

「あたくしは何をすればよいのでしょうか…?」

と、ひたすら下手に出た。

「みんなで話し合ったんだけどね、今日一日廊下でお客さんの呼び込みやってもらうから」

「一日!?!」

そりゃねえだろ…。俺、文化祭見て回れねえじゃん…。

たかが遅刻ぐらいで、まさかそんな厳しいペナルティーを環ちゃんが本気で科すわけねーよな?と、小早川の顔を覗き込んでみたけれど、

「軽音楽部の公演は何時から?」

「3時からです…」

「じゃ、その時と他に1時間だけ自由時間をあげる」

と、来やがった。

「1時間だけ!?!」

そりゃねえだろ…!

「1時間じゃ劇とかホラーハウスとかフィーリングカップル5 VS 5とか見れねーじゃん!!」

「フィーリングカップル5 VS 5なんて行かなくていい!」

行きたいっす…。

「とにかくそういうことだから、何を見るかは自分で考えて時間を有効に使ってね?」

小早川は呼び込み隊長用の衣装……ベルサイユの薔薇みてーな羽付きの派手な帽子とベンジャミン伊東みてーなテカテカでガチャガチャの上着とバカデカイ蝶ネクタイを俺によこした。

「…こんなの、どこから調達したの…?」

「貸し衣装屋さん」

あっそう…。

「これ、着なきゃダメなわけ?素のままの田村くんの方がお客さん集まると思うんだけど…?」

「ダメ!」

小早川はその場で俺にベル薔薇帽子を被せやがった。羽がだら一んと顔の前に垂れ下がってき

てやたらカッコ悪い。

誰もがこの衣装を着るのがやだから俺に隊長押し付けた...ってとこだろう。

しかしこれ、すげーセンスだぜ？帽子がベル薔薇なら服もそうすりゃいいのに、なんだってこんなにちぐはぐなコーディネートなわけ？ただのバカだろこれじゃ。まだヒカルが作ったピーターパンな森の精の方が.....。

「あ」

「何？」

午後からも俺コスプレじゃん。

ってなわけで、呼び込み隊長のベル薔薇ベンジャミン田村くんです。

A組の廊下の前でひたすら、

「模擬店ですよ～、いらっしゃーい！そこのおに一さん、おね一さん、どうぞ寄ってって～」

と、叫んでるわけで。

1時間しかない自由時間、何に使おうかと考えながら。

文化祭ってのは1年に1度しかねえ本城高校のお祭りだぜ。何でも有りのお祭りなんだぜ？そんな日に、何が哀しくてこんなところでこんな恥ずかしいカッコしてひたすら客引きやってなきゃならねーわけよ。

こうなったのも元を正せばヒビクの寝坊のせいだ。なのに当人のヒビクときたらさっきからのんびりとふらふらしてやがる。

「田村もここまで来たか.....」

なんて、呆れた顔して俺を見やがって。

ヤツのF組はビデオ劇の上映会ってのをやっている。クラスで先にビデオ劇、ようするに映画を撮影したものを上映してるわけだけど、それにヒビクのキャストはなかったらしい。というか、そんなビデオ劇を撮影してたことすらヤツは今日まで知らなかったらしい。部活以外のことには不真面目な男だもんで、最初からあてにされてなかったのだろう。だからヤツが今朝言ってた『なにやるか知らねえ』ってのは冗談じゃなかったわけだ。

「あとでちょっと代わって！」

遅刻はヤツも同罪！

べつにクラスが違ってたって、客を呼べばいい話なんだからヒビクがこれやったって小早川も他のヤツらも文句はねーはずだ。

「いやだ。恥ずかしいコスプレは体育祭の時のアレだけでもう十分」

ヤツは ふわぁ～ とあくびを出しながら、風に吹かれるようにふらふら歩いて行っちゃまった。

恥ずかしいコスプレで悪かったな。これからピーターパンな森の精になるってこと、すっかり忘れてやがるぜ。ちきしょーめ。

「その衣装なんなの？バカじゃん...？」

言っではならない一言を投げつけやがったのは松山兄だった。本物のバカにバカ扱いされる筋合いはねーってんで応戦してやろーと構えてみたけど、ヤツの隣にいるステキなお姉さまを見て思わず息を飲み込んだ。

「このお方はどなた...？」

「カノジョ」

――はっ！？冗談だろっ！？

だって、兄にはぜんぜん似合ってねえ、石田ゆり子風の清楚な美しいお姉さまだけ？！

「...もしかして、この方が華厳の滝の君...？」

「レイクサイドの君！」

お姉さまは俺にしっかりと会釈をしてくれた。さすが女子大生。仕草が大人だ。どこかの飛び蹴り突進女子とは違う。

「いつも太郎くんがお世話になってます」

「え？はい...。お世話してます...」

と、言いながら体は妙にわなわなしちまって。

お世話は十分すぎるぐらいにしてやってるけど、お姉さまがそんなこと俺に言うぐらいの松山太郎とお姉さまなわけ？なんか違うだろ、それ。

「んじゃ、がんばれたむどん！」

兄は俺の蝶ネクタイをびよーんと伸ばして遊んでから、お姉さまの手を引いて行っちゃいやがった。パチン、と戻ってきたネクタイが痛かった。

――1時間はやっぱフィーリングカップル5 VS 5だ...。

心にこんなに寒い風が吹いたのはロストラブして以来だけ。仲間の幸せを喜んであげられない田村くんです。

一気にやる気がなくなっちゃい、

「いらっしゃーい...寄ってかんせ～.....」

と、呼び込みも適当になっちゃった。そんな時、

「大変だねえ、田村くん」

後ろから優しい声をかけてくれたのは柏木だった。

けど、こいつも隣に小春ちゃん付きだ。夏と一緒に旅行に行っちゃってからのこいつらは学校の中でも腕組んだり手を繋いだり、まったくもってけしからん。

「直弥くん」

「なに？小春ちゃん」

俺の目の前でそういう呼び方し合うんじゃない！

だもんで、

「模擬店入っていちゃいちゃやってろ！」

と、ふたりを教室の中に押し込んでやった。すかさずウェイトレスの女子がすっ飛んできてふたりをテーブルに座らせた。これぐらいいいだろ。

またまたやる気喪失。呼び込みの仕方も、

「もぎて一ん...」

と、簡素化したところにやって来たのは松山弟。

「自由時間1時間しかねーの？そりゃかわいそうだなあ！」

コイツだけはトモダチだ。

「だろ？だったらちょっと代わってよ？」

「そりゃ無理！俺、予定びっしりだし」

弟はいともあっさり言いやがった。

非モテのくせに何の予定がびっしりあるってんだよ！

「10時からサッカー一部の招待試合、11時からハンドボール部、1時から剣道部...」

弟は指を折りながら運動部の試合ばかりを上げやがる。さすが体育バカだ。

「サッカーとハンドボールの試合には飛び入りで参入するし」

「マジ？」

何なんだよ、コイツ。ほんと、大忙しじゃん。けど女の子が絡んでねーだけいい。やっぱコイツは非モテの友！

「んじゃ剣道部は別に見なくたっていいじゃん？そん時ちょびっとだけ...」

「ダメ！それ一番要なの、俺！」

弟は、強く強く拒否しやがった。

「だって剣道部の試合には飛び入り参加しねーんだろ？」

「しないけどダメ！観なきゃなんねーから！」

なんで...？と思ったけど、あっ！と思い当たったのは...

「麻耶ちゃん...か」

「ななななな何言ってんだよ、たたたたた田村！ベベベベつにまままま麻耶ちゃんがかんけーないっての...！」

「お前、その反応正直すぎだぜ？麻耶ちゃんスイッチ入りまくってる...」

「うううううるさいっ！とにかく、おめーと遊んでる暇ないわけ。頑張るな！」

弟は無駄な「な」とか「た」とか「ま」を散々撒き散らし、ゼンマイ人形のごとく行っちゃまった。いつものことながらわかりやすくいい。永遠的に実らなさそうな片想いだしコイツとは仲良くやれる。

弟があまりにも面白かったんでちっとは気分も晴れた。

まあ、しょーがねえよな。

こうなったら呼び込みも文化祭のうち、と腹くくってやるしかねーだろ。

いつまでもぶー垂れてるのは田村くんの趣味じゃないってことで。

「いらっしゃい、いらっしゃ〜い！2年A組ベル薔薇模擬店ですよ〜！わいるどであまぞねすなウエイトレスがお迎えしてまーす！寄ってってちょーだい！」

大音量で呼び込みを開始した時だ。階段を上って来たあかねとヒカルと麻耶ちゃんをあっちの方に発見、すかさず彼女たちの元に飛んで行き、

「おお！お前たち寄ってけよ！」

と、声をかけた。

3人は3人ともおんなじように目を真ん丸くして俺を見た。俺のことわかってないらしい。

――やば…。俺今、ベンジャミン田村だったんじゃない…。

あかねをはじめ可愛い後輩たちに見せられる田村先輩じゃねーだろ、やっば。大失敗…。

なんで、そーっと顔を背けてさり気なくこいつらから離れちまおうと思ったのに、俺の顔の前にでれーんと垂れ下がっていた帽子の羽をヒカルがそーっと持ち上げ、

「田村先輩！？」

と、驚きのリアクションーぴょん、と30センチほど飛び上がる漫画のような…ーをした。あかねなんか口到手を当てて放心だし、麻耶ちゃんは思いっきり顔を歪めてる。

彼女たちの中にあっちははずの田村先輩のイメージがガラスが割れるみたく崩れる音が聴こえたような気がした。

けど、こうなっちまったら開き直ってベンジャミン田村になりきるしかない。でないと、中途半端にバカさらすだけだ。

「お、お嬢さんたち、いかが？ジュースもケーキも何でもあるよ？」

と、一応ヒカルに向かって言った。あかねのことは何となくまともに見られねーし、麻耶ちゃんは怖いし、ヒカルが一番ノリがいいと思ったからだ。なのに、

「はい…。素晴らしくセンスがいい衣装ですね、それ…」

と、話題をここに持ってきやがる。

「み、みそおでんもあるよ？あと、こぶ茶とかも…」

と、さり気なく模擬店に戻してみたけど、

「似合ってますよ、先輩！この帽子の羽が顔に垂れちゃうのがちょっと情けないけど…」

…話を全然聞いちゃいない。

「全品100円！どう？今ならまだすいてるよ？」

さらに強引に戻してみる。

「いいもの見れちゃったなあ…。文化祭って面白いですね」

――全然かみ合わねえっ！！

まるでヒビクのおふくろさんだぜ、それ！

「だから、模擬店なんだけど！」

「これ、田村先輩にあげます。来てくださいね？」

ヒカルは俺になんかのチケットをよこした。そして、

「1年F組の『なにわロミオとジュリエット』で一す」

逆に営業されちゃった。

「模擬店…は？」

「すみません。時間がないんです。ヒビク先輩たちにも営業してこなきゃ」

あっそう……。

「で、ヒカルは何やんの？あかねは？麻耶ちゃんは？」

1時間はこれに使ってもいいかな、と思った。何か面白そうな劇だし何たってあかねがやるんだし。

けど、

「あたしは総監督なんで出演無しです。あかねちゃんはロミオの友人その1、麻耶ちゃんはその2」

「台詞は…？」

と、あかねに確認。

「無いです。ワンシーンの出番だけ」

あっそう…。んじゃやっぱ1時間はフィーリングカップル5 VS 5だな。

「んー、行けたら行くわ。なんたって俺、今日はベンジャミン田村やってなきゃなんねーし」

「そうですか。残念だな…」

しょぼーんと肩を落としてあかねは言った。

そう言われちゃうと…、

「わかった！行く！何とかして行く！絶対に行く！」

と、言っちゃまう優柔不断な田村くんです…。

ってなわけで、俺の1時間は1Fの『なにわロミオとジュリエット』になっちゃった。

けど――。

これがまた、腹がよじれるぐらいに笑わせてくれた劇だった。

ロミオとジュリエットが男女役入れ替わり、にぎやか組の伊藤ジュリエットは、剣道胴着の衣装におてもやんなメイクにスポーツ刈りなままのヘアースタイル。それがお目目パチパチやりな

がら、

「おお口～ミオは一ん、あんたはどーしてロミオはんでんねん？」

と、変ななにわ弁でやるもんだから。このコスプレはベル薔薇ベンジャミン田村どころじゃないぜ？

しかも、この脚本構成演出が全部ヒカルだってんだからぶったまげだ。俺たちが普段展開してるおちゃらけドタバタコメディーどころの騒ぎじゃない。ヒカルの脳みそ、どうにかなってるだろ。見てみてーと、マジで思った。

「あいつ、演劇部で大根役者やってるより演出家に回ったんがいいんじゃないの...？」

腹かかえて笑い転げてるヒビクに言うと、

「だから、俺たち今日は森の精になるんじゃない...」

と返って来て、確かにそうだ...と思い直した。

これから俺たちがやる『みにくいあひるの子』の大掛かりな演出はヒカルのアイデアが採用されてる。

「あいつの発想はいつも奇想天外だけど、その場その場の的をちゃんと射ているよ。人を喜ばせたり楽しませたり感動させたり、生れながらのエンターティナーなのかもしれないな！」

「エンターティナーねえ...」

っていうか、生きてるだけでそれだなヒカルは。

特別な何かがあるわけじゃないけれど、そこにいてだけで明るくて楽しい思いをさせてくれる女の子。ヒビクはヒカルのそんなところに惚れてるんだらう。ヤツもエンターティナーだから。

「まだまだ笑わせてくれるだろうな、ヒカルはさ。先が楽しみなやつだぜ」

ヒビクは、

「先が楽しみなみんなのヒカル...か...」

と、呟いて充血している目を人差し指でサッとこすった。

「お前、ほんと大丈夫？」

かなり眠そうだ。午後からは俺たちのコスプレ...、じゃなくて音楽劇の本番があるってのに。

「たぶん...」

ヒビクは頼りなさそうに言って笑った。

31 文化祭～コスプレと森の精 2

午後になって……。

「あの一、環ちゃん…？俺、そろそろ『みにくいあひるの子』の本番があるんだけど…」

我がA組模擬店フロアを、ウェイトレス隊長として頑張ってる最中の小早川にそーっと声をかけた。

「じゃ、行ってきていいよ」

小早川は普通に優しく応えてくれた。やっとベンジャミンから解放だぜ！

……ってのは甘く、さっさとテカテカな上着を脱ごうとしてる俺に、

「あ、そのまま公民館に行ってくれる？ついでにこの看板持って！」

と、渡されたのは、『2-A ハートフルティーパーティー』とポップしてある派手なプラカードだった。

一瞬わけがわからなくてぼんやりしてたら、

「外にいるお客さんに宣伝して来て！まだケーキもクッキーもいっぱい残ってるのよ」

「ああっ！？」

——マジかよっ！？

公民館は学校の隣に建ってるけど、校門からぐるーっと学校周りを3分の2周ぐらい周んないとならない。

その約800mの道のりを、ベンジャミン田村なまま、変なプラカード持って——『ハートフルティーパーティー』なんて洒落た名前がついてたなんて今まで知らなかったぜ！——宣伝しながら歩いて来たってのか？この俺に！？

「そう」

あっさりと言いやがる…。

「それはちょっと勘弁……」

ってゆう希望が通用したら、最初からベンジャミン田村にはなってねーってことだ。

小早川は言うことだけ言ったらもう俺のことなんぞ無視してさっさとウェイトレス隊長に戻っちまった。

いらっしやいませ～、なんて可愛い裏声使って他校から来るお客さんたちをもてなしちゃって。

「なーにが、ハートフルティーパーティーだったの。デンジャラスアマゾネスの方がよーっぽど客呼べそうだぜ…」

田村、あんまり側を歩くなよ、と、ヒビクたちに冷たくと言われ、先を歩くヤツらたちから3メ

ートルほど離れた後ろを孤独にトボトボ行きながら、ベル薔薇ベンジャミン田村くんは行き交う人々に、デンジャラス・アマゾネスの宣伝をしながら公民館までを練り歩いた。

「なあに、あれ？」

「最近の若いもんはわけわからん格好をするんだなあ？」

「あのお兄ちゃん、面白いよ？」「見るんじゃないっ！」

って、ご近所さんたちに後ろ指刺されながら。

「どーせ小早川さん見ちゃいないんだから、クソマジメにやんなくたっていいじゃん...」

松山弟がぼそっと呟いたのはもう公民館の玄関前に到着した時だった。

「あ」

もっと早く言って欲しかった...

で、公民館に着くと、黄色いあひるの子に変身済みのヒカルとあかねが入り口まですっ飛んできた。

「あれー、めんこいあひるちゃんだあねえ。ヒカルなんかほとんど地じゃん？」

ってゆー松山兄の軽口は見事に無視され、

「遅いです、先輩たち！着替えてもらわなきゃなんないから急いでください！」

と、ふたりはすかさず俺たちの手を引いて控え室に引っ張って行く。

控え室では、こっちももう既に着替えが終わってる2年女子の鳥海たちが俺たちの衣装を並べて待機していた。

俺はあかね、ヒビクはヒカル、柏木は鳥海...、って一応の担当者が決まってるらしく、俺たちはそれぞれの相方に衣装を手渡されて、衝立の向こうに押しやられた。

「着替えが終わったら顔作りますから～」

ヒカルがあっち側で叫んでる。

「どんな顔に作られちゃうんだろう...」

と、柏木が心底ビビった顔をしながら言った。

演出家は、ステキなおてもやんメイクを伊藤くんに施したヒカルだ。

「逆に俺だってわかんないぐらいの顔を作ってもらわねえと困るぜ」

「田村くんはそれでいいかもしれないけれど、俺は恥ずかしいのはちょっとねえ...」

柏木は深緑な森の精用のピッタリフィットのジャージなタイツを履いた状態で、サラリと前髪をかきあげながら言った。

田村くんはそれでいいかもって、あんまりじゃん？俺だって好き好んで恥ずかしくしてるわけじゃねーのに。

「けど柏木、結構似合ってるぜ？そのバレリーナタイツ。やっぱ『あんなバレリーナ』を愛読してるだけあるんじゃない？」

「冗談はやめてよ、太郎くん！」

ピタッと張り付くタイトなパンツに余裕を持たせるためなのか、柏木は激しく屈伸運動を繰り返しながら叫んだ。

「そんなことやると膝が飛び出ちまって余計みっともなくなるんじゃないの？」

松山弟が言うとおりの、薄いジャージで縫われてるパンツタイトはみるみるうちにヨレヨレになっていく。

「おめーら、格好とか衣装とかそんなことばっか気にしてるけど、俺たちの今日の仕事わかってんの？」

今までひとり無言で着替えていたヒビクが言った。声にどこか凄みを感じて全員がヤツに注目した。

「低俗なことで騒いでんじゃないよ。衣装なんて何だっていいだろが」

——低俗と来たかいっ！

1ヶ月前の後夜祭、衣装で大騒ぎしてたのどこの誰だったか！

ヒビクはまた無言に戻り、1枚1枚縫い付けられている葉っぱたちを大事にいたわるようにしながらシャツのボタンをかけていく。

「何とんがってんだよ、風間あ」

松山兄がいつもの調子で言うと、ヒビクは別にとんがっちゃいねーよ、とつっけんどんに言い返した。

それがかなり尖がってるように聴こえた。

でも、今日の日のためにヤツは心血注いで曲作りをやって来たわけだし、合宿までしてここまで来たわけだから、ヤツが言う通り衣装がどーのもで騒いでる場合じゃねえってのは確かなことだ。

ってことに、柏木も松山兄弟たちも考え至ったらしい。もう、文句を言うのはやめ、もくもくと着替えて森の精に変身した。

「ヒビク先輩、目がずいぶんくぼんでますよ？体調悪いんじゃないですか？」

ヒカルがヒビクの顔にこげ茶色の塗料を塗りたくりながら言った。

俺たちは控え室に並べられた5個のパイプ椅子に並んで座らされ、それぞれの相方に顔を作られてる。

チラッと隣のヒビクを見ると、ヤツはじっと塗られながら、

「そうかあ？別に普通だぜ...？」

と、小声でとぼけた返事を返してた。

ヤツが昨夜寝てねえって理由、今日が本番だからなのかそれともヒカルが原因なのか...

そのどっちだとしても、ヒカルには言えねえやな。

「田村先輩、こっち向いてください」

あかねに言われてナナメ横に向けてた顔を真っ直ぐ戻すと、目の前、それもすんごい近くにあかねの顔があった。

「ちょっとじっとしててくださいね。目の際描いてるから...」

「...お、おお」

あかねの大きな瞳が俺の目をじーっと見つめている。しかも、ちゅーっと唇を尖がらせば触れるぐらいの距離にあかねの唇がある。それが、

「こんなふうに描いちゃっていいのかなあ...。あ。なんかはみ出しちゃった...。あれ？上手く描けないなあ...」

なんてもごもご動いてるんで、もお、俺ってばどうしてたらいいんだか、全身がムズムズそわそわデレデレしちゃって、息することもできねーし下半身も妙に落ち着かなくなっちゃって。

群竹だってこんな間近にあかねを見たことねーだろ。

こんなにすべすべでほわほわで絹ごし豆腐みてーな白い肌だって知らねーだろ。

これは役得ってヤツですか？

「ちょっと、先輩。動かないでください」

んなこと言ったって、自然に始まっちゃった貧乏ゆすりが止まんねーんだもん。

「どんどん変な顔になっちゃう...！」

もー、どーにでもしちゃってください。

その顔で一生過ごしたっていいぐらいだぜ。

「先輩、これ止めて！」

とうとうあかねにぶるぶる動いてた両太ももを押さえつけられちゃった。

「うによ...っ」

みっともねー声が出ちゃったと同時に膝が大笑い。

たぶん俺、しばらく立ち上がれねー.....。

俺たちはこげ茶な顔に葉っぱだの星マークだのをペイントされた森の精に仕上げられた。

ひとりを見ちゃ笑えるこの変装も5人集まれば圧巻！

「案外いいじゃん、これ」

と、松山兄が俺たちを見回しながら言うぐらいな舞台セットだ。改めてヒカルのひらめきの鋭さに感心する。

「そーでしょ〜？さっき、そっちの裏でさんざん文句言ってた先輩たちの声、聴こえてましたけどねえ」

ヒカルは俺たちひとりひとりのメイクをチェックしながら、田村先輩のここの星、ちょっとはみだしちゃってるね...と俺の目じりを指差して笑った。

なんか。

ここまででずいぶん大騒ぎしちゃったけど、これからがメインディッシュだ。俺たちはこの日を迎えるために、夏休み前から必死に準備してきたわけだ。

今、まだ幕が開いてねえ舞台にあがってみて、いつものライブの時とは全然違う緊張感に包まれた。

この幕の向こう側でお客さんたちの、期待を込めてこっちを見つめてる視線と息遣いがここまで伝わってくるようだ。

「フーッ…」

と、ヒビクが大きく息を吐いた。

午前中までのヤツはふらふらのほにゃほにゃの骨抜き状態だったけど、今ここにいるヤツの目は幕の向こう一点を見つめて鋭い光を放ってる。

さっきから大騒ぎしてた俺たちの中でもひとりだけやたら静かだったし、ヤツの頭の中じゃもう、これから始まるコラボレーションのことで埋め尽くされていたんだろう。いつでもどこでもバカ丸出しの松山兄とか、密かに麻耶ちゃんの姿を幕の隙間から確認して勝手に緊張してる松山弟とか、顔のペイントが崩れてないかと何度も俺に聞いてくるナルシストの柏木とか、あかねに触ってもらったこの顔、一生洗わねえぜ、と心の中で呟いてる俺とかとはレベルが違うっていうの？ここぞって時にカチッと切り替わるスイッチを持ってるのがヒビクで、それは俺たちとは根本的な魂の違いなんだと俺は理解している。そして、そーゆーヤツを感じるたびに、俺はいつも姿勢を正されたりするわけだ。

いよいよ幕が開くってんで、俺たちは自分のポジションについた。

こんもりと盛り上がった木のセットの裏側が今日の俺たちの居場所で、柏木のドラムを真ん中にして左から兄、弟、ヒビク、俺と並んでる。たぶん客席から動かない俺たちを見たら、ただのセットに見えるだろう。

あひる役のヒカルとあかねが2年女子たちと一緒に舞台の真ん中でうずくまっている。この格好がこいつらのスタンバイで幕が開くと同時にここからアクションに入る。

すぐ目の先にいるあかねがうずくまったままの格好で俺をチラリと振り返った。

あかねのことだからきっと心臓が口から飛び出して来るぐれーに緊張してるんだろうけど、それを見せないように頑張ってるってことがよくわかった。あかねは俺に向かってやや引きつった微笑みをくれた。俺は拳を握った右手を上げ、頑張ろう、のポーズを送り返すと、あかねはコクッと頷いてまた顔をあっちに向けた。

開演ブザーが鳴り幕が開く――。

舞台は一箇所だけにスポットライトがあたり、あとは真っ暗だ。

そのスポットが当たってるところから、あひるの子どもがひとり（1羽？）ずつ産まれるってのがオープニング。

3番目にスポットが当たったあかねが第一声の台詞と共に産まれた時、いきなり春から夏にかけ

てのことがフラッシュバックした。

初めてあかねが苦しい胸のうちを音楽室で俺に語ってくれたのはもう半年も前のことだ。

なまむぎなまごめなまたまご～、な発声にほにゃらん...と萎えちまってからふたりだけでナイショのしりとり特訓をした3日間、その頃はもうあかねに惚れまくっちゃってた俺は常に告白のチャンスを狙いそのことばかりで頭の中は構成されちまって、失敗に失敗を重ねながら夏の合宿で玉砕して――。

あの時まではただ単に砂糖菓子のようなふんわりとした可愛いあかねちゃんに惚れていた。こんな可愛い子が毎日傍にしてくれたらいいなあ、あのしなやかな手を握りたいなあ、手を繋いで歩きたいなあ.....って、恋に恋する乙女みたいな感覚だったんじゃないかって思う。頼りなくて儂くて、誰かが守ってやらねーと壊れちまいそうで、その誰かに俺がなってやるんだと勝手に決めていた。

けど、あかねは俺が告白する前に群竹に告白しちまった。

『このやろう～っ！よくもやったなあ～っ！！』

腹の底から出てる声。

あの頃、言われた方が萎えちまうぐらいだった『このやろう』は、今じゃ立派な『このやろう』だ。

この半年であかねはずいぶん強くなったし、ますますいい女になったぜ？

そーゆーあかねを後ろから見てて妙にじーんと来ちまって。

この顔、絶対洗わねーってマジで思うぐらい俺は今でもあかねにメロメロだ。けど、あの頃とはメロメロの意味が違ってる。

何がどう違うのか、言葉じゃ上手く言えねーけど、俺の傍にいてくれなくても、手を繋ぐことは出来なくても、いつも俺があかねの傍にいてやりてえって思う、そういう感じ。

のんびり屋の天然で頼りなさそうだけど、本当のところではいつも熱く燃えている。

目の前にある一個一個のことを、あかねなりに確かなものに変えている。

欲しいと思う何かに自分から歩み寄り、それを掴もうと一生懸命になっている。

ここって時には信じられねえぐらいな勇気を奮い立たせる女の子。

そういうあかねを知ってるのって、もしかしたら俺だけかもしれねーな...

一幕目が終わり、裏方では舞台の背景色が変わる。

そして、すぐに二幕目。

ゆっくりと幕が開くと同時にテーマ曲『ライジングサン』の演奏だ。

主人公の『みにくいあひるの子』が精神的な脱皮をするこの舞台一番の見せ場を、二幕が開く

と同時にいきなりやっちゃう、しかも台詞はいっさい無しの、完全に演技と演奏で場面を見せるという冒険的でド派手な構成だけど、俺たちの演奏、そしてヒビクのボーカル、それからもちろん演技もそれぞれの仕事を十分やりこなしたのだろう。『ライジングサン』が終わった時、客席から大きな拍手と歓声が沸いた。

舞台の前面では演技が続いてるけれど、俺たちはここでアイコンタクト。そしてコッソリとガッツポーズだ。

何たってこの曲は夏の合宿でヒビクの脱皮と共に出来上がったブックキャスルの大事な一曲だし、その初披露目でこんだけの拍手もらっちゃ気分はハイだ。みんなじっとなんかしてらんねえ。

けど、すぐに次の演奏があるんでそこはみんな気持ちの切り替えも早い。芝居の進行に合わせたBGMを場面場面にさり気なく挿し込んでいく。

俺たちはこーやって舞台のセットの裏側で、妙な森の精に化けて演奏をしているだけだけど、観ているお客さんはここまでが演技、ここからは演奏、なんて分けて観てるわけじゃない。演劇と演奏をセットにして観てくれているはずだ。そして拍手はこのコラボレーションに贈ってくれている。

普段のライブとはまた違う重みのある拍手——この手ごたえはたまらねーな。

——たまらねーよな、ヒビク…。

爽やかに、どこか寂しげな微笑みをヒカルの背中に向けているヒビクを見ると、ヤツもこっちを見てニカッと笑いやがった。

やがて芝居はエンディングを迎え、主人公は白鳥の姿になって飛び立っていった。

童話『みにくいあひるの子』をモチーフにして創作された『本城高校演劇部&軽音楽部バージョンみにくいあひるの子』は、観客たちが大拍手をくれる中で幕を閉じ、演劇部女子たちは幕が下りたと同時に中央に集まって抱き合った。

「めっちゃ気分いいなあ！」

「大成功だね！」

「やったな、俺たち！」

と、松山兄弟と柏木はその場で肩を抱き合う青春ごっこに走り、ヒビクと俺はヒカルやあかねが集まってる舞台中央に駆け寄った。

おいおい泣いてる鳥海たち2年女子を目の前にして、そしてやや呆然としたように立ち尽くしているあかねを目の前にして、それからやっぱりどこか放心状態なヒビクを目の前にして俺もちょっと泣けちゃったりしたんだけど、

「先輩、しっかりしてください！カーテンコールですよ！」

っていうヒカルの爽やかな号令に涙は奥に引っ込んだ。もちろんこれは俺にじゃなく、鳥海た

ちに飛ばした激励だったんだけど。

カーテンコールで再び幕が開き、俺たちも舞台の前に出た。

客席のお客さん、立ち上がって拍手してくれてる。

「風間く～ん！」

って最前列で手を振ってる女子の一团に目をやると....

「げっ！小早川っ！！」

手を振る大島たちと一緒にウェイトレス隊長やってるはずの環ちゃんがいた。条件反射でかなんなのか、とっさに隣にいる松山弟の影に隠れてみたけど、環ちゃんの視線は真っ直ぐ俺に向けられてる。

「田村く～ん、ステキッ！キマってるよ～！」

なんて、大島がチャカしやがる。

これは後で何を言われるかわかんねーな...、とため息が出たとき、

「ヒカルッ！」

ヒビクがマラカスを投げた。

ヒカルは飛んできたマラカスを両手で器用にキャッチしてきょとんとしてたけど、すぐにヒビクの意図がわかったらしい。俺たちもヤツのアクションの意味を察知して再び楽器を持ち、舞台の袖に隠れてたグランドピアノを舞台に引っ張り出した。そこへあかねが飛んでくる。

そして始まったのはもちろん『ライジングサン』だ。

柏木は劇中よりちょっと走り気味のリズムを刻んだ。

ヒビクはステージの上を文字通り走りながら歌い、そしてヒカルがその横にピッタリついてステップを踏む。こーゆー時、ステージを行ったり来たりするヒカルのステップは効果的だ。しかも、ヒビクとは目と目を合わせたまま、後夜祭の時とは比べ物にならないぐらいに自然な輝きを発散させちゃって。こいつらはいつでもどこでも何をやってもナチュラルコラボだ。

そうになると、俺もって気にもなる。

曲は俺のテーマソングーと、ヒビクにはナイショで勝手に決めてるー『ライジングサン』だぜ？ここらでちょっと、田村くんの見せ場を入れたっていいだろ？

ワンコーラス目が終わったあと、いつもはやらないリードソロをアドリブで入れちまった。けど、こーゆーイレギュラーにもちゃんと合わせてくれるのが我らがブックキャスルだ。

おお...！と客席から歓声が起こった。

このギター、ここにいるお客さんみんなに捧げちゃいます。

...と思ったけど。

俺のアドリブギターに途中からあかねがこれまたアドリブな伴奏を入れてきた。もともとの曲にピアノパートはないわけだから、あかねは最初からアドリブで俺たちについて来てたわけだけど、俺のソロになってみんなが沈黙したこの時に自発的に入って来てくれたのが俺にとってはミソなわけ。あかねの顔が見える位置に移動して、俺たちは互いの顔を見ながら、俺が弾いた後を受けてあかねが弾いてまた俺が弾くっていう掛け合いをしながら長い間奏をセッションした。

――...やっぱ俺のギターはあかねに捧げるべ。

もういい加減にすれば？ってな感じで柏木がドラムを入れてきた。そして演奏はふたたび『ライジングサン』のツーコーラス目に突入。

ちきしょーめ。永遠にふたりでやってたかったのに。

けど、このセッションはきつとずっと忘れない――。

「演劇部軽音楽部合同制作『みにくいあひるの子』でした！ありがとうございました！」

鳥海部長が客席に向かって叫びカーテンコールの幕も下りた。

「お疲れ！終わったな！」

ヒビクの肩をポンと叩くと、

「ああ、終わった...」

ヤツはぼそっと呟いて、そのままステージにダーッと転がった。

その上に松山兄が飛び乗り、ヒビクが、う...っとうめいたと同時に今度は弟、柏木、んで俺が重なった。

「お、重いっ...！死ぬー...っ」

一番下でヒビクがうめく。

「ああ〜。先輩たちいいなあ。青春ごっこしてえ...」

しゃがんだヒカルが床に転がって団子になってる俺たちを見下ろしながら笑う。その横であかねもクスクス笑ってる。

「先輩たち、顔が台無し...」

あかねに指差されて互いの顔を見合わせると、俺たちみんなの顔はペイントが崩れてぐちゃぐちゃになってとんでもねえことになっていた。

これも青春の1ページ。

.....ってことで！

1 2月に入って外は木枯らし一。

文化祭も終わっちゃったし来週からは期末だし寒いし....、

「ぽけら〜ん、としちゃってどうしたの？」

...と、環ちゃんに言われちまうぐらいにぽけら〜んとしちまってる、おまけに、

「だぁ〜〜っくしょんっ！！」

と、風邪菌にも好かれちまってる田村くんです。

「もう....。またあ.....」

「あ...？」

ふと顔を上げたところに小早川のうんざりした顔があった。

「はい、ティッシュ！鼻かみなさいよ！」

小早川はポケットティッシュを俺によこした。

「さんきゅ...」

さっそく一枚取り出してズスーッとかむと出るわ出るわ鼻水が。思わず開いて見ちまった。

「きたない！開くな！」

「あ...」

環ちゃんがいることもすっかり忘れてるぐらいに、やっぱぽけら〜んとしてるぜ、俺。

「沢渡先生が保健室に来いって言ってたよ？」

「俺？」

沢渡先生が俺に何の用だろ？保健委員でもねーし、保健室なんて今まであんまり出入りしたことねーのに。

「ついでに熱でも測ってくれば？田村くんってよく風邪をひくよねえ...」

確かに俺は風邪菌にだけは春夏秋冬季節を選ばずモテまくる。次はあたし〜、ダメよあたし〜、いやんあたしよお〜！って風邪菌ちゃんが俺を巡って競い合う声が聴こえるぐらいに。そんでもって懐の広い田村くんは、みんなまとめて受け止めてやるぜ！ってな具合で....

.....

.....ああ、ヤバイ。やっぱ熱があるのかも。

保健室の前まで来るとヒビクがいた。

「お前も沢渡に呼び出されたの？」

「田村も？」

ヒビクとセットでお呼び出しなんてなんだろ？職員室ってなら話はわかるんだけど....、と首を

傾げながらドアを開けると....

「なんだよ、沢渡いねえじゃん...。自分から呼びつけといて」

中は空っぽ。スッキリと片付いたセンスのデスクがやたらと目に付いた。

「しばらく待ってようぜ？そのうち戻って来るだろ」

ヒビクはカーテンが閉まったベッドスペースの脇の長椅子に座って長い足を組んだ。そして、らしくもなくため息なんかついて、落ち着かない様子でそわそわと貧乏ゆすりも始まった。

「何、ため息なんかついてんの？」

「...冬だし」

そりゃ冬だ。

けど、関係あんのか？

「お前だって鼻すすってるじゃん」

「冬だし...」

俺は間違いなく冬だ。春でも夏でも秋でもいつでも冬だ。

沢渡センスが戻ってくるまで熱でも測ってよう...、と、デスクの上にあった体温計を拝借して左わきの下に挟んだ。

「どしたの？」

「風邪ひいたみてー」

「よく風邪ひくなあ、お前」

年がら年中冬なもんで...

けど、ヒビクは違うんじゃないの？

文化祭の後、軽音楽部と演劇部、それと1年F組のいつものにぎやかメンバーはそのまんまビリヤード場に流れて体育祭の時にお流れになっちゃった打ち上げビリヤード大会をやった。あの大成功のあとだったからみんなハイになっちゃってそりゃもう、大変な騒ぎだったさ。

そのうち一番騒いでそうなヒカルが静かになっちゃって、気がついたらスヤスヤと眠っちゃってた。

入学以来、ずーっと文化祭のあの日まで、休むまもなく次から次へと行事の実行委員やら盆踊りなマラカスやら大根な演劇やらスーパー演出家などを務めてきたヒカルだったから、大仕事がひと段落して安心したんだろう。そりゃもう、可愛い寝顔だった。

なんでみんなヒカルヒカルって頼るんだろう？と、その寝顔を見て思った。

俺たちにしてみりゃただの音痴な後輩だ。ヒビク先輩、田村先輩、とありのままをぶつけてくる可愛い後輩なのに、いつでもどこでもヒカルはみんなに頼りにされて、一個しかねえ体を精神

的には何分割にもしてあっちやりのこっこの面倒みーのって飛び跳ねてる。もともとの性格ってのもあるんだろうけど、頼られるだけじゃ疲れちゃうんじゃないか？誰かに頼りてえと思うことはねーんだろうか。こんなうるせーところでも、ぐっすり眠っちゃうぐらいなんだから、くたくたなんじゃないかな、本当は、って。

そのヒカルのそばに立ち、じーっと寝顔を見つめてたヒビクだ。

この世で一番愛しいものを見つめるような顔してさ。まあ、実際そうだったんだろーけど。

で、ヒビクにヒカル番をまかせて俺は、まだ騒ぎ足りねえと文句を垂れる大久保とか松山兄とかを無理やり引き連れて先にビリヤード場を出た。後夜祭にたくらんだ演出の総仕上げとも言うべき、ヤツにヒカルとふたりになってゆっくり想いを伝え合うチャンスを与えてやったつもりだ。

あのシチュエーションで決めなきゃオトコじゃないだろ。

だから、ヒビクは絶対に決めただろうと確信してたんで、今の今まで何も心配もしてなかったんだけど...

「あ...」

「なんだよ？」

「...いや...」

まさか、ヒカルに拒否されたとか？

そーゆー結果になるかもしれねえってことは全然頭になかったけど、ヒカルの気持ちを直接確認したことなんてねえわけだ。ただ、ふたりを見て勝手にOKでしょ、と思い込んでただけで。

ちよいと訊きづらいけれど...

「...お前、あの後お宝はゲットしたんだろ？」

と、確認しちまった。

ヤツは貧乏ゆすりをピタリ、と止めて、

「...やめた。ゲットはしない」

と、呟いた。

ずいぶん穏やかな声だった。

「やめた...？」

って、どーゆーことよ？

「俺が独り占め出来るあいつじゃないってことがわかったし...」

何言ってるの、こいつ。妙に控え目じゃないかよ。

「お前らしくもない。惚れてんなら何も気にすることねえだろ。独り占めしちまえばいいじゃないか」

「...したいさ、もちろん。でも、それをやったら俺はきっと、自分の嫌なところを思いっきりさらけ出しちゃう」

嫌なところ....

そりゃ色々あるだろう。

だいたい独り占めしたいって気持ち自体がまずそれ、嫌なところだろ？

例えば、一個しかねえだいふくを、これは俺のだいふくだー！誰にも食わせん！！と喚いてるヒビクは超いやしいし、隠れて食う姿はめっちゃかっこ悪いしみっともねえし、こっそり戸棚に閉まいこんで毎日眺めてたりしたら不気味だ。

けど、惚れてる女の子を野獣や猛獣たちに見せねえため、当然触らせねえため、そーやってしまいでしまったって気持ちは誰にでもあるナチュラルな……、

「あ…」

たった今、気がついた。

相手はだいふくじゃねえ。あの、ヒカルだ…。

「何となくわかるだろ？」

「わかった」

ヒカルを独り占めするためには、どんだけのエネルギーがいることだろう。しまい込んでしまうことなんてまず出来ないだろうし、それ以前におとなしくしまわれても無いだろう。それをこっちの想いが強けりゃ強いほど、それこそだいふくを隠しちまうぐらいのみっともねえ姿をさらすことになっちゃう。ただでさえ暴走魔なんだから、恋の火がついちまった心はどうなっちゃうかわかんねえよな。

俺ならきっと、なりふりかまわずさらしちまうんだらうけど、カッコつけしいのヒビクにそりゃ出来ねえだろう。

ってことは、どっちにしたって苦しいわけだ。

「独り占めしたいけど出来ないジレンマに悶々としてさ、大切なものを傷つけるのはやだから…、しまっておくことにしたってわけ」

やっぱ、傷つけちまうのかな、ヒカルを。

そんなこと、今まで考えなかったけど、あのヒカルが傷つく姿なんて想像もしたくない。

「決めちまったの？」

「ああ。決めた」

こいつはずっと、己のキモチと向き合ってたってのか。それで出した答えだったのか。

そりゃ、眠れなくもなるだろう。

ため息も出るだろう。

けど、ヤツはニカッと笑いやがった。もう、完璧に肚を決めちまったようだ。自分のことよくわかってるって言やあそうだけど、これから先、せつないぞ？目の前にその人がいるのに、手を伸ばせないってのはさ。ただ、自分のステディという形があるかないかの違いだけで、独り占めしたいけど出来ないジレンマに悶々とするのはおんなじだぜ？

ピピピ、と体温計が鳴った。

「熱あった？」

「…微妙…。37度3分」

「あれれ、ヤバイんじゃないの？これから上がっちゃうかもよ？」

と、ヤツは俺の手から体温計を取った。

——みっともなくたって、嫌なところさらけだしたっていいじゃん。それがお前なんだっ
たら...

そう言おうと思ったけどやめた。

「まあ...、急ぐことはないかもしれないな」

焦って手に入れなくたって、大事に出来るものはあるってこと、今の俺は知っている。

「そ。お前と同じ」

「俺？」

「人様のものになっちゃったお宝を、じーっと見守り続けるお前を真似してみることにした」

「う...っ」

「仲良くしよーぜ？おんなじ愛のカタチを抱きしめて！」

ヒビクはいつもの悩殺ウィンクを飛ばしやがった。...ったく、よくそんなクサイ台詞が吐ける
ぜコイツ。

「いいの、それで？」

「ああ。今はそれで」

今は...か。

「っていうか、沢渡来ねーじゃん？」

と、ヒビクが立ち上がったのと、

「あ～、ごめんごめん、ふたりとも！」

沢渡センセが飛び込んできたのが同時だった。

「ひでえよ、センセ。休み時間がパーだ」

でもま、同じ愛のカタチにせつなくもだえるキモチを、ヒビクと分かち合えた（のか？）から
無駄な時間じゃなかったか...

「ごめん～！今日は何だかバタバタしててさ！」

「で、用は何？」

「昨日提出してもらった健康調査票に記入漏れがあったのよ」

「なんだ、そんなことかよ...」

「大事なことよ？生徒たちの健康状態を把握するのは私の責任なんだから！でも今ここは病人が
寝ているから職員室に来てくれる？」

「え？！誰かいたのか？！」

ヒビクと同時に後ろのベッドスペースを振り返ると、サッとカーテンが揺れる気配がした。

——マジかよお...。おもいきり聞かれちゃったじゃん。俺たちの愛のカタチ...

「たむ...、」

「あ——っ！センセ！」

ここで名前を言わないでちょーだいっ！！超恥ずかしいから！！

「何よ？！びっくりするじゃないの！病人がいるのよ？」

「だから、とっとと行こうぜ、職員室！」

沢渡センセの背中を押して、俺たちはさっさと保健室を出た。

◇

昼休みが終わるころには、小早川からもらったティッシュもなくなっちまって、けど鼻水とくしゃみの出は時間が経つごとにひどくなっちまって、

「だあああ〜っくしょんっ！！」

と、豪快な一発を出した時、机の上にドン！と置かれたのはまるまる一個のトイレットペーパーだった。

「げっ！なんだよ、これ！」

「あたしだってそう何個もポケットティッシュ持ち歩いてないから、女子トイレから持ってきてあげた。それ一個抱えてれば放課後まではもつでしょ？」

素直にありがとう、と言えなかったのは、ペーパーが3分の2ぐらいに減ってたのと、先っちょが逆三角（▼）に折りたたんであったからだ。

躊躇してる俺の目の前で、小早川はロールをくるくる巻き取り、はい、と丸まった紙をよこした。

「早くかみなさいよ」

「.....」

何となく匂いを確認してから、ズズーッとやった。とりあえず、環ちゃんのキモチはありがたかったから。

「熱、測ってきた？」

「37度3分...」

今はもうちょっと上がってるかも...

「ちょっと、大丈夫なの？」

「ああ。慣れてるから...」

「去年も今頃風邪ひいてなかった？またライブがあるんでしょ？」

「おお...」

公民館のクリスマスライブが期末の後すぐにある。確か去年のライブの時も風邪を引いちゃってた。

やっぱ俺は年がら年中鼻水垂らしてるような気がする...

「文化祭の時のアレ、結構よかったし、また女の子ファンが増えるかもねえ」

「マジ？よかった？」

「うん。顔のペイントが」

あっそ…。

「水沢あかねちゃんのピアノもよかったよ」

「そりゃ、何たってウチの名ピアニストですから！」

そうだね、と小早川は笑った。

あん時のあかねとのソロセッションは、あの後もいろんなヤツに褒められた。やっぱ、俺の愛のカタチがお客さんの胸に響いたってことだろう。

「今年はライブ見に行けないけど頑張ってる」

「あれ？来ねーの！？」

くしゅん！とまたくしゃみが出た。小早川がトイレットペーパーを俺の方にスッと滑らせる。もう、くるくる巻いてくれねえらしい。

「だってクリスマスイブじゃない？あたしだって暇じゃないもん…」

「…は？」

暇じゃないって、どーゆーことよ？

ってか、そーゆーことか…。

「あっそう…」

なんだべ。

コイツ、こないだヒビクがどーのって言ってたのに。

でもまあ、あん時ヒビクを諦めさせたのは俺なんだけど…。

ってゆーか、小早川のクリスマスの予定なんて俺には何もカンケーねーんだけど。

「ぐしゃんっ！！」

自分でくるくる巻いて鼻をかむ。

小早川はじっと俺のこと見てやがる。

「…なんだよ？」

「風邪、早く治しなね？来週は期末だしね！」

「…お、おお」

何だかんだ言いながらも心配してくれる小早川。文化祭の時だって自分の仕事抜け出して本番観に来てくれたし、ライブっていやあ激励してくれるし、トイレットペーパー持ってきてくれるし…。

「さんきゅ」

予鈴が鳴って、次の授業は選択英語。

友情のトイレットペーパーを抱え、俺は教室を移動した。

「た、田村ちょっと…！」

移動した教室に入るなり、前から松山弟がすっ飛んで来て俺の手を引っ張った。

「なんだよ？」

「いーから、ちょっと！」

弟は俺を窓際の一番後ろの席に着かせ、自分もその前に座った。

くしゃん！とまたくしゃみが出て、弟の顔におもいきり引っ掛けちゃまったってのに弟は気にも留めず、俺の頭を抱え込んでナイショ話の態勢を作った。なんか言いたいことがあるらしい。

「ああああああのさ…」

ってゆう、無駄な「あ」をたくさん聞いて、これは麻耶ちゃん関係の話だとピンと来た。

「麻耶ちゃんがどうかしたか？」

「ななななんでわかるの！？」

「俺だから…」

「…そうそう、それ！田村だから訊くの！誰にも喋るなよ？」

そう言って弟はひそひそぼそぼそやたらどもりながら、一昨日の放課後の出来事を話しはじめた。

例によってテスト前の補習を兄弟仲良く受けて、学校を出たのはいつもよりずいぶん遅かったらしい。

牛乳屋に寄ると、部活帰りの剣道部がたむろしてて、そこに麻耶ちゃんもいたらしい。

連中たちは道とか店の中とかに固まってワイワイやってるってのに、麻耶ちゃんはそいつらから離れるようにしてひとりで暗闇のベンチに座ってたらしい。

兄が軽く声をかけると、麻耶ちゃんびっくりしたように飛び上がり、いつもなら何かを言うてくるのに一昨日はそのまま何も言わねーで顔を背けられちゃったそうだ。

アレの日か？なんて不謹慎なことをぬかした兄を蹴飛ばして、そこでいつものような兄弟喧嘩が始まり、いきり立った兄は剣道部連中の輪の中に混ざっちゃった。で、弟は何となく麻耶ちゃんの側に立ったままもじもじしてたらしい。この辺は見ていたように想像がつく。

そのうち麻耶ちゃんの方から声をかけてくれて、弟はベンチの麻耶ちゃんの隣に座れたんだそうだ。念願だったから舞い上がっちゃまってわけわかんなくなっちゃったらしいけど、ここからはその時の会話だ。

――ジロ先輩、今日はずいぶん遅いんですね？部活だったんですか？

――いいいいやあ。おお俺は補習で。（あちゃ！部活って言ったときゃよかったぜ！）

――補習？うちの学校、そんなのやってるんですか？

――……ババババカなヤツ限定の行事だから、ままだ麻耶ちゃんは知らねーかも…。（情けねえ…）

――ああ…。そうですね。知りませんでした。

――う…。（超みっともねーじゃん…）

――もうすぐ期末テストですもんねえ…。

――そ。テスト前は俺たちには恒例の行事なの、これ…。（こんなにバカを悔やんだことねーかも…）

――頑張ってくださいね！補習もテストも！

――おっ！？（まままま麻耶ちゃんが俺を励ましてくれた?!）

麻耶ちゃんはここでニッコリ笑ったそうだ。今まであんまり見たことない笑顔だったらしい。で、その笑顔に心もほぐれ、会話も進んだそうだ。そのつづき。

――麻耶ちゃんは毎日こんな遅くまで部活やってんの？

――...いえ。明日試合なんでOBの先輩に指導を受けてました。

――明日、試合かい！そりゃ、ガンバレ！

――...はい。

――なんか、元気ねえ？

――いいえ？そんなことはないですよ？

――ちょっと待ってて？

――はい？

気分よくなった弟は、ここでコーンスープを買いに立ち上がったらしい。けど、財布の中には130円しか入ってなかった。しょーがねえから麻耶ちゃんのみだけ買って渡したそうだ。

――いいんですか...？

――どうぞどうぞ、遠慮なく！明日の試合ガンバレよ？

――はい！ありがとうございます！

.....ってのが、牛乳屋での出来事だったそうだ。

「やったじゃん！麻耶ちゃんと仲良くなれて！はっくしょんっ！！」

「それが、これだけじゃねーんだよ.....！」

弟はさらに俺の頭を自分に近づけて囁きながら叫んだ。授業はとっくに始まっている。

「さっきの昼休み、麻耶ちゃんが俺のところに来た...」

「...ああ！？あ～～っくしょん！！」

田村あ、風邪かあ？とセンセがこっちを見て言った。大丈夫です、と答え、環ちゃんのトイレ
ットペーパーで鼻をかむ。

「麻耶ちゃんが来たって...どーゆーことよ？」

鼻の通りもよくなって、また小さく体を丸めて弟の話の続きを聞いた。

「昨日の試合、全勝しましたって...」

「それだけ...？」

「それだけ」

麻耶ちゃんはそれだけを言って帰っちゃったらしい。

「...これって、どーゆー意味...？俺、わかんねーし...」

弟が俺に訊きたかったのはこのことだったらしい。昼休みに麻耶ちゃんが弟のところに試合の結果を報告に行った理由.....。

はっきり言って、俺もわかんねーし。

頭がボーッとしちまって考えられねえってのもあるけど、そうじゃなくても意味不明。

「...俺にじゃなくて麻耶ちゃんに訊けば...？」

その方が早いだろ。

「それが出来たらおめーになんか話してねーし...！」

そりゃそうだ。

「うーんと、それはなあ...？」

「うんうん！」

っていうか、なんで俺が麻耶ちゃんのキモチ考えなきゃなんねーの！

熱があるってのに。

鼻水垂れてるってのに。

ズズーッともう一回くるくる巻き紙で鼻をかむ。

「それは...きつと、麻耶ちゃんの愛のカタチだな」

「あああああ愛.....っ!？」

松山～、どーしたー？とセンセ。

「ああ～、あいいい～、アイ、マイ、ミー、マイン！」

と、バカ丸出しのごまかしをした弟に白いチョークが飛んできた。けど、弟は懲りずにまた後ろの俺を振り返る。

「.....愛って...愛のカタチって...マジ？そういうことなの...？試合の結果の報告が...？」

「そーゆー愛のカタチもあるんだろ。麻耶ちゃんだし...」

なんにしたって麻耶ちゃんが弟に好意を持ってるとのは確かだろ？

じゃなきゃ、わざわざひとりで2年の教室なんかに試合の結果報告だけしに来やしねーだろーし

。

「しししし信じられねえ...っ」

俺だって信じられねえよ？あんな美人な子がこんなバカを、なんてさ。

けど、人なんて何を基準にして惚れたり惚れられたりするかわかんねーんだから。

「お前、合宿の時非モテクラブ入会拒否したんだし、告っちまえば？」

「こここ、告る...っ!？」

松山あ～?!と、再びセンセ。

「ここここ...こーく...コカ・コーラああ!!」

だめだこりゃ...。

麻耶ちゃんの愛のカタチはやっぱ俺の妄想だな....。

「お前ら、さっきからうるせーぞ?!松山、黒板はこっちだ!いい加減にしろ!」

とうとうセンセもぶちきれて、俺たちは厳重監視の下に置かれちゃったんで弟の話もここで打

ち切り。

俺はひっきりなしに鼻水が垂れ、トイレットペーパーはこの一時間で半分以上なくなっちゃまった。

で、5時間目が終わった時にはほとんど意識朦朧状態。ザラザラのトイレットペーパーでかみすぎた鼻はヒリヒリ痛てーし、弟が、どーやって告りゃいいんだ？とか、やっぱ告れねえ...とかごによごによ言ってたけど、なんも頭の中に入ってこなかった。

6時間目は体育。しかもマラソン。この木枯らしの中、こんな状態でマラソンなんかしたら死ぬ...

放課後の部活はライブの練習をするんで出ねえとなんないから、そのまま今日二回目の保健室に直行。

「あら、田村くん、どうしたの？顔も鼻もずいぶん赤いけど？」

「1時間寝させて...」

沢渡センセは俺の額に手を当てて、

「帰った方がいいみたいよ？ずいぶん熱があるみたい」

と、言ってくれたけど、

「ちょっと寝れば持ち直す自信有り...」

さっさとカーテンの向こうのベッドに潜り込んだ。

枕元に環ちゃんのトイレットペーパーを置いて、毛布を被っておやすみなさい。

よく知ってるような、ふんわり甘いフローラルの匂いが心地よかった。

――保健室のベッドって、こんな匂いがするんだ。

スーッと全身に染み込んでくる、くすぐったくて足元から萎えちまうような感触。

優しい匂いは愛に包まれてるようで、ああ、気持ちいい...

死んだように眠って、田村帰るぞ？のヒビクの声で目が覚めた時は6時間目もHRも部活もとっくに終わってた。

33 Shine Castle

「田村先輩、風邪大丈夫ですか？」

女神のような優しい声をかけてくれたのはもちろんあかねだ。

「心配してやることなんかねえって！風邪菌にだけはもてまくってしょーがねえんだから免疫はしっかり出来てるし！」

と、悪党な暴言を吐いたのは松山兄。今までだったら「風邪菌にももてねー非モテがほざいてんじゃねー！、と切り返せたのに、こんなヤツでも彼女持ち。しかも石田ゆりこな女子大生。風邪菌にしかもてない田村くんが言い返せる言葉がねえってのが悔しい。

期末前に引いちゃった風邪が長引いて、俺はついこの間まで鼻は垂れるし声は出ねーしのマスクマンになってた。

そんな調子だったから期末は3年になれねーかも...と思うぐらいの最悪な結果、ライブの練習もボロボロだった。

ヒビクや柏木たちが衣装やライブ構成のことで色々話し合っていたけれど、そういうことにも集中できなかった俺は、去年同様に気持ちがついてかないまま流されてこの日を迎えちゃったって感じだ。

そうです。

今日は公民館でのクリスマスライブ。

リハーサルのと、本番前の楽屋にあかねとヒカルが激励に来てくれた。クリスマスライブだからってんで、クリスマスケーキを持って来てくれちゃって。

「新たな免疫作って完治しました...。心配かけて悪かったな！」

「よかった。先輩たちのライブを見るの初めてだから楽しみにしてたんです」

あかねはいつものようにふんわりと笑った。

今日の俺たちは『Shine Castle』。本当ならあかねとヒカルも一緒に出るはずだけど、前出の事情でそれはかなわず、ふたりは客席で聴いてくれる。

でも、クリスマスライブだったのにあかねは群竹とラブリンデートじゃねーのかよ、と思った。あの小早川さんだって今日はそういった事情で来られねーって言ってたぐらいなのにさ。

まあ、あかねのことだから俺たちに義理立ててこっちの予定を優先してくれたのかもしれねーな。

たぶんそうだ。

本番のクリスマスは明日なんだし。

どっちにしても俺には何の関係もねー話だけど....。

「さっき、廊下にサンタクロースがいっぱいいましたよ？」

みんなで食べてくださいってよこしたクリスマスケーキを、しっかり自分たちの分まで切り分けて、おまけに先にいただきますしちゃってるヒカルが言った。

サンタクロースの衣装を着てライブをやるバンドが何組かあるんで、ヒカルが見たのはそいつ

らだろう。

「先輩たちもあんなの着てやるんですか？」

「冗談じゃねーぜ！みんながやることはやんない主義なの！」

松山兄が偉そうに言いきったけど、去年、クリスマスなんだから演出もそれっぽく、ド派手なサンタになるーぜ、と一番張り切ってたことなんかすっかり忘れてやがる。

「じゃ、どんな衣装着るんですか？結構楽しみにしてきたんですよ！先輩たちのことだから思いっきり派手な演出考えてるんでしょ？」

「まあな。出場バンドの中じゃたぶん、一番ド派手だと思うぜ？」

そう答えたのはヒビクだった。

ヤツはヒカルが切り分けてくれたケーキを手づかみで口の中にあーんと放り込んだ。

「うわっ...ホントですか？先輩たちコスプレ大好きですもんねえ。文化祭で田村先輩が着てた羽付きの帽子とか被っちゃったり？」

もう、あのベル薔薇ベンジャミンは記憶の中から抹消してください...

「ま、それは見てのお楽しみ！」

ヒビクはいつものようにニカッと笑う。けど口元にはコミカルにクリームがへばりついている。あ、とヒカルがそれを目で指し、うん、とヒビクは指で払った。目と目で行われたふたりの何でもないようなやりとりは、何でもないからこそリズムカルだし絶妙な呼吸とフィーリングだったのに、こいつらは...

まあ、そのことはもういいんだけど、やっぱもったいねえ気がしちまう。やろうと思えばこいつらは、このライブのあとにアツアツのクリスマスイブを過ごすことだって出来るはずなのに。

「そそ、そう言えば、今日は、ままま麻耶ちゃんはいいい一緒じゃねーの...？」

と、弟がさり気なく、けど俺にだけはバレバレな訊き方をした。さっきからひとりでそわそわしてた弟だったが、これを確認したかったんだな。

「誘ったんですけど、用事があるからって断られちゃったんですよ」

「.....用事」

やたら間を空けて弟はぼそっと呟き、そのまま肩をガックリと落としちまった。クリスマスイブの用事っていったら、やっぱそういうことなのか、とそりゃ落ち込むわな。

「次郎？だいじょーぶか...？」

さり気なく弟の肩を叩く。けど、弟はずんどこ。全身が棒線になっちまってる。

「試合だろう、試合...。絶対そうだ...」

弟は自分を無理やり納得させるように呟いた。ほとんどうわごとのようだ。気持ちがやたらわかる俺としちゃ放ってはおけない。

「元気出せ。非モテはおめーだけじゃねえから」

「...それ、フォローのつもり？」

「あたりめーじゃんかー」

「そうか...。さんきゅー...。けど、俺は非モテじゃねーぞ...。勝手に決めんなよ...」

こないだ麻耶ちゃんが試合の結果報告しに来てくれた、あれは麻耶ちゃんの愛のカタチだって

おめ一言ったじゃん...、と弟は小声で文句を垂れた。

「あん時は鼻水とくしゃみで頭がもーろーとしてたし...」

「じゃ、あれは嘘だって一の？」

「嘘ってわけじゃねーけど.....」

「どっちなのかハッキリしろよ...！」

っていうか、何で慰めてやってる俺が責められるのよ？ってなことを弟とひそひそごちゃごちゃやってる時に、

「先輩たちってもしかして凄い人気バンドなんですか？この部屋の外に女の子たちがいっぱいいましたけど...」

あかねがそんなことを言ってたんで、みんなはそっちに反応して俺と弟の怪しい会話を気にするヤツはいなかったようだ。

「あたしたちがここに入る時、視線が凄く痛かった...。ね？ヒカルちゃん？」

不思議なこともあるもんで、地元じゃ俺らも結構な有名人らしい。でもそれは...

「うん。ナオヤくんがどーのとか響くんがこーのとか...」

あの扉の向こうに集まってる女の子たち...、そのほとんど全部がKINGからナオヤを追っかけてきてた柏木のファンと、去年のライブからヒビクを追っかけだした女の子ばかり。俺や松山ブラザーズには全然関係ねえ子たちなのだ。

が。

「.....たむどんがどーのこーのって喋ってましたけど...？」

——ほいっ！？たむどん？！

「たむどんって田村先輩のことですよ？」

「そうそう！まぎれもなく俺のことよ？」

思わず俺も、弟を放り出してこっちの会話に混ざった。

「なんだか芸能人の追っかけみたいな騒ぎでしたよ？ね？」

「うん...。驚いちゃった」

ほお～。そーですかあ～。

「とーぜん、太郎くんステキ！な女の子も溢れてただろ？」

「...タロ先輩とジロ先輩の名前は聞かなかったかも...」

申し訳なさそうにヒカルが言うと、

「それはそれは～ご愁傷さまだねえ？」

ヒビクが面白そうにチャカした。

「そこ！田村あ、ニヤケるんじゃねえっ！」

兄は俺を指差して喚き、

「よかったねえ。非モテじゃなくて……」

弟はくら一い声で呟きやがる。

「二、ニヤケてなんかねーよ…？」

でも、ヒビク、柏木ってゆーウチの二大スターに混じってたむどんがいるってのは嬉しい。やっぱ無意識にニヤケちゃいます。

「ハン！パートの差だね！ボーカルはバンドの華、ドラムもズンチャカ目立つしリードもキューィィ〜ンってソロの見せ場がある。けど、ベースとサイドはボンボンジャカジャカやってるだけで地味な仕事だべ？女の子たちは派手なとこしか見てないってわけだ！」

と、兄はずいぶんご都合な分析をしたけど、

「それもそうかぁ…」

と、納得しちまうヒカルもどうかと思った。

「それでなのかな…」

楽屋の隅っこで柏木と仲良くケーキを食べてた小春ちゃんがぽつっと言った。

今度はみんなが小春ちゃんに注目だ。

「さっき、ここに来るまでの間に、突然背中を押されたりすれ違った知らない女の子たちに髪の毛引っ張られたりつねられたり…。気のせいかと思ってたんだけど…」

「そりゃ、ひでえっ！！」

兄が喚き、

「マジ？」

ヒビクが驚き、

「小春ちゃん、本当なの？」

柏木が心配そうに言った。

「うん。ほら…」

小春ちゃんが見せた腕につねられた跡が微かに残ってた。

――ってというか、小春ちゃん！！

そこまでされてて気のせいで済ましてる君っていったい何っ！？

「柏木先輩は一緒じゃなかったんですか？」

あかねが言った。

「俺、リハーサルがあるから先に来てたから」

「小春先輩が柏木先輩の彼女だってあの人たちは知ってるんですか？」

「別に隠してないからわかってる子はわかってるかもね…」

大事な彼女をこんなふう to 苛められちゃ柏木もたまんねーだろう。もしも俺なら、と……チラリとあかねを見て……考えるだけ損だからやめた。

「隠してないなんて、そんな中途半端じゃダメです！ちゃんと柏木先輩の口からあの人たちに言

ってあげてください！この人は僕の彼女だって！」

突然キレたように大声で叫んだあかねに俺たちは目を丸くした。

「あかね...？」

いきなりどうしちゃったのか、あかねは目まで潤ませちまって。

「でも、俺は別にスターじゃないしさ。ただの高校生なんだからいちいちそんなこと言うのもね...。俺と小春ちゃんは普通に付き合ってるだけだし、外にいる子たちには何の関係もないことだろ？」

確かにそうだ。いくら柏木が人気者だったってプロダクションとかマネージャーとかがある芸能人じゃねーんだからいちいち宣言することじゃない。ナオヤファンの子たちは勝手に騒いでるだけだ。

「でも、柏木先輩がひとこと言ってくれたら、小春先輩だって安心できると思います！」

らしくもなく、あかねは柏木に食ってかかった。その勢いには柏木も困惑しているようだ。

「知らない人に妬まれて痛い思いして、小春先輩が可哀想です...！だからもっと...、柏木先輩...、」

「ありがとう、あかねちゃん。でも、直弥くんが言ってくれても、こういうことってたぶん変わらないと思うんだ...」

続くあかねの言葉を遮るようにして小春ちゃんは微笑を浮かべながら言った。

女の嫉妬はどこまでも底がねえからなあ...と、兄がわかったような口をきく。

「だって...」

「普通の高校生だけど、普通よりはちょっともてる人を彼氏にしちゃったのは私だし。別に大丈夫だよ？私も注意するから」

「.....無理っ」

兄、弟、俺、ヒビクの声が揃っちゃった。

小春ちゃんにそんな注意力があるとは思えない。あれ？あれ？と言ってる間に足引っ掛けられてスッ転びそうだ。そんでもって永遠に気のせいかな？なんて言ってそうだ。

「無理...かな？」

「無理！」

もう一度みんなして声が揃った。

「やっぱ柏木がステージでひとこと言ってやれば？俺の女に手を出すんじゃねーよ！ってさあ」

「芸能人だってそんなこと言わないよ...」

兄の言葉に柏木は異を唱えた。

「じゃあ、小春先輩はあたしが守ります」

「ヒカルちゃんが？」

「小春先輩、今日はあたしから離れないでくださいね？」

小春ちゃんは、うん、と頷いて笑った。

「...しかし、すげーことになっちゃったなあ...？」

信じられねえ世界だ、と素で思った。嫉妬に駆られてそーゆーことする子はほんの一部の熱烈

凶暴ギャルたちなんだろうけど、それにしてもだ。そう言えば、いつか俺もナオヤファンの女の子たちにおもむろに睨まれたことがあったっけ。

柏木も罪なオトコだぜ。

ふと、あかねを見ると、どこか哀しそうな、怒ってるような顔で柏木を見てた。

◇

出番が近づいたんでヒカルたちは客席に行き、俺たちはステージ衣装に着替えた。

今年の衣装は後夜祭で着た白無地の普段着とジーンズだ。他のバンドに比べたら一番地味な俺たちだろうが、これは、去年ド派手なライブを経験したあとに、来年のクリスマスは普段どおりのナチュラルな軽音楽部ライブをやろうとみんなで決めたスタイルだ。

「出場バンドの中で一番ド派手、ねえ...」

さっき、ヒビクはヒカルにそう言った。

ヒビクは、オレンジ色のトレーナーから白シャツに着替えながら、

「ド派手だろう？白さと香りのニュービーズ～な真っ白衣装だぜ？これ以上のド派手はないね！」

と、ニヤリと笑いやがった。

「真っ白なキャンバスを染めるのは俺たちの中身ってわけね」

「クサイこと言うねえ...。でも、その通り」

ド派手になるか地味なまま終わるか、それは俺たちがやる音楽次第ってことだ。

これはひとつの勝負。けど、負ける気はしねえ。いつもと変わらない呼吸が合った俺たちで生きてる音楽を演奏する、音楽室のままの俺たちをやるってことで、サンタよりもトナカイよりも、どんなキラキラなラメよりもド派手に輝く自信は有り、だ。

「でも、ヒカルにわかるかなあ？あとで怒られるんじゃないの？アイツはきっと、ベル薔薇とかロミジュリとか、そういう派手さを想像してると思うぜ？」

「いや。ヒカルにはわかるさ」

ヤツはニヤッとまた笑う。

地味だけど地味じゃない——。

内側から輝くカッコよさを去年、まだ俺たちがド派手な外側に憧れてた頃からひとりで訴えてたのは柏木だった。

ナルシストのくせにナチュラルにこだわる男が柏木直弥ってヤツだ。だから、さっきの小春ちゃんのこと仰々しく騒ぎたくねーんだろう。好きな女の子と普通に付き合ってるだけって自然さにこだわってるわけだ。

けど、あかねが言ってたこともわかる。

柏木直弥は俺たちとは違い、ナオヤっていう昔からのアナザーフェイスを持っている。中学の時は学校までファンの子たちが押しかけて学校から派手なバンド活動するな、とまで言われたぐ

らいだっていうし、普通にこだわる方が難しいのかもしれねえ。

現実に被害を受けてるのは小春ちゃんだ。あかねが言うように痛い思いをしてるのは彼女だ。天然のおかげで本人はさほど気にしてねーみたいだけど、それでもやっぱ柏木は、どうにかして熱烈凶暴なファンの子たちから自分の彼女を守るべきだろう。芸能人とか普通の高校生とかそんなことは関係なく、とにかく大事な人が傷つかないように何としても…。

「なあ、柏木」

丁度着替えが終わり、スティックを手にした柏木は、

「ん？なに？」

と、涼しげな顔で俺を見た。

「小春ちゃんのことだけどさ」

「ああ…。ヒカルちゃんがいてくれて助かったよ。まったくひどいことする子がいるよなあ」

柏木はそう言って、松山ブラザーズたちと一足先に楽屋を出て行っちゃった。外で、ナオヤくん！と叫ぶ女の子の声がした。

「なんか腑に落ちねえって顔してるぜ？」

ヒビクが横から俺の顔を覗き込んで言った。

そういうわけじゃねーんだけど、やっぱどこかで何かが引っかかっているような気がするのも確かだった。

◇

一番地味で一番ド派手に盛り上がったライブが終わり、ステージ横のドアから楽屋に続く廊下に出ると、あっちの方のロビーにいるあかねたちが見えた。

気持ちはもうロビーのあかねたちの元に行ってるのに、体は何かの遮られて前に進まない……って思ったら、あっという間に俺たち5人を女の子たちが囲んでた。あっちでもこっちでも、同じようにしてバンドの周りにそのファンの子たちが囲んだかたまりが出来ている。けど、ここが一番膨らんでるみてーだ。熱気と甲高い声と混ざり合った女の子たちの色々な匂いで頭がくらくらしてきた。

こういう渦中に俺がいてもいいのだから、と、人ごとのように思っちゃうあたり、やっぱ俺には非モテの哀歌（エレジー）が染み付いちまっているのだろう。

モテたいがためにはじめたギターで、今その夢が叶い、クリスマスプレゼントの包みを手渡されたり写真を撮ってくれとせがまれたり、信じられねえぐらいにモテまくってる田村くんです。

これが、去年までの俺だったら舞い上がって調子こいていい気分浸ってたに違いないのに、今はロビーで待ってくれてるあかねたちが気になってしょうがない。

それに、柏木。

お前はこんなとこでモテてる場合じゃねーだろ。

「小春ちゃんのところに行ってやれよ」

一番もみくちゃんにされてる柏木の袖をクイツと引っ張って耳元で言ってやった。柏木は首を伸

ばして女の子たちの隙間から小春ちゃんがいる位置を確かめた。ロビーの方でも3人が背伸びしてこっちを見守っていた。いくら天然の小春ちゃんでも、さすがにこの輪の中には来られねえだろう。

「とりあえず小春ちゃんを連れて楽屋に戻ってろよ」

「ああ...。そうだな。そうするよ」

柏木はやっと気づいたように、女の子たちの間を縫って小春ちゃんの元に走って行った。ナオヤファンの子たちが芋づる式に後を追いかけてきたけど、その通り道を体を張ってさり気なく遮ったのは松山ブラザーズだ。女の子たちが一瞬その足を止めた際に、柏木は小春ちゃんの手を素早く取って、ロビーの反対側にあるドアから楽屋へ繋がってる、関係者以外立ち入り禁止の廊下に消えちまった。

ナオヤくん、なんで～？！

って女の子たちは騒ぎ出したけど、何でもかんでも柏木の彼女は最初から小春ちゃんなんだから、君たちが文句垂れるのはお門違いってヤツだ。

まあ、とりあえず小春ちゃんはこれでひと安心。

けど、次はあかねたちだ。

あかねとヒカルはじっとこっちを見てるけど、小春ちゃん衛兵隊の任務が解けたからか、これ以上待っててもしょうがねえと判断したからか、やがてふたりは回れ右して玄関の方に歩き出しちまった。

俺とヒビク、

「タロジロ、あとは頼む！」

同時に同じことを言って同じようにふたりを追いかけた。それから互いの顔を見合わせて苦笑いだ。

考えてることは同じー。

「おーい！ヒカル、あかね！」

公民館の玄関を出て、外門のどこまで行っちゃってるあかねとヒカルを呼び止めた。

ふたりはピタリと足を止めて振り返った。12月の外はもう真っ暗で、門の脇に植えられてる樹に装飾されてるイルミネーションがチカチカと瞬いていた。

「送っていくよ」

「送るよ」

同じことをヒビクと同時に言って、また俺たちは苦笑い。

けど、ふたりはきょとんとして、

「送ってくれるんですか...？うち、ここから遠いですよ？」

「うちも...」

なんてとぼけたことを言う。

「だから送ってくんだろーが...。こんなに暗くなっちゃったしさ」

「俺があかねを送るから、ヒビクはヒカルを届けろ」

了解、とヒビクは笑った。

「いいんですか...？」

ヒカルがホールを振り返りながら言った。

「タロジロたちがいるし、柏木も残ってるし後のことは大丈夫」

「それもそうですけど、あの人たち.....」

あかねが窓ガラスの向こう側でこっちをじっと見ている女の子たちをこっそり指差した。

「小春ちゃんがされたみたいなことをしてきたら、俺の女だ文句あるかって言ってやる。な、田村？」

「おお！」

胸張って言っちゃいますよ、田村くんは。

一時しのぎの方便でも、そうやってしまっていいものなら。

「俺の女...ですかあ...。すごいなあ、それ」

と、あかねとヒカルは顔を見合わせて笑ってる。

――お願い、言わせて。コイツハオレノオンナだって。

・
・
・

.....幸いというか、残念というか、何の問題もなく駅までやって来て、ヒビクと俺はここでホームを分かれてヒカルとあかねを送ることになった。ヤツらは上りのホームに行き、俺とあかねは下りに向かう。

「先輩すみません。送ってもらえるなんて思ってなかった...」

白い息を吐きながらあかねは言った。

「クリスマスイブだったのに、デートよりライブを優先してくれたせめてものお礼！」

嘘じゃねーけど本当でもない、微妙なキモチが言葉に出た。デートよりライブを優先してくれたってことには素直に感謝だ。けど、お礼のつもりで送ってるわけじゃない。俺があかねを送りたいから送ってる。けど、そんなこと言えねーし。

「デートなんて...最初から予定ないです...」

「あれ？そうなの？ま、クリスマスは明日だしな」

「明日も...ないですよ？」

思わず立ち止まっちゃった。

「あ...そう...」

まあ...、クリスマスだからってデートしなきゃいけないってわけじゃねーけど、冬休みのクリスマスってのはカップルにとっちゃ素敵なイベントデーじゃねーのか？

何となく言葉を出しづらくてそのままじっとしてたら、あかねの方からまた歩き出した。

「群竹くん、そういうことにあんまり興味ないみたいで...」

まあ、そういう男もいるんだろうけど...

「お前らつきあってんだろ？」

また訊いちまった。

「つきあってるのかなあ...」

つきあってるのかなあって...、毎日のあの下校時は何さ？

いや、待てよ？もしかしたら...

「群竹って、あかね以外の女の子をチャリのケツに乗せたりする？」

誰にでもそーゆーことをするヤツってのはいる。

「しません。あたしだけです...」

「あかね以外の女の子と一緒に帰ったりする？」

「しません...」

「そーゆーの、限定お付き合いっていうんじゃねーの？」

「普通はそうなのかもしれないけれど、あたしたちはわからないんです。群竹くんからは一度もつきあおうって言葉聞いた事ないんです。あたしも言ってないし...」

はあ...?!

それで毎日のあのラブラブぶりなんですか？

「みんなはあたしと群竹くんはつきあってるって思ってる。クラスの中では公認みたくなってるんですけど...」

ってゆーか、俺たちの間でもそうだぜ？

ってゆうか、つきあってるって思ってる、ってどういうことよ？もしかしてお前らは...

「.....つきあってねーの？」

「何も言ってくれないんです。群竹くん...」

あかねはしょぼんとうつむいた。

「でも、帰りに昇降口で待っていると駅まで送ってくれる。待ってなければきつと、先に帰っちゃうと思います」

「電話とかはしねーの？」

「したことない」

「じゃあ、休みの日に遊びに行くってことは？」

「ないです」

「はあ〜.....」

——よく我慢できるな、群竹.....。

電車が来た。

ちょうどふたり分の座席が空いてたんで隣同士に座った。あかねの腕が俺の腕に密着し、長い髪が俺の肩に触れた。

こんな状況で、つい、まじっとあかねの顔を見つめちまった。

毎日あかねがこんなふうに乗っていて、そんでもってチャリの後ろに乗ってこんなふうに触れ合ってた俺だったらその先を考える。

群竹って我慢強い男なのね？

その前に、何のために我慢するんだよ。

「田村先輩...、どう思います？」

俺の顔を見上げてあかねは言った。

「どう思いますってのは...？」

「群竹くん、あたしのこと好きなのかな...」

「う.....？」

そんな、迷子の子犬みて一な顔をして訊かないでください、あかねちゃん。

...って答えに詰まっちゃったけど、膝の上で微かに震えてるあかねの指先を見て、こいつが大真面目に訊いてきたってことを知った。

「群竹くんのことを好きな子、他のクラスにもたくさんいるんです。あたし、その人たちから陰で色々言われてるの知ってるんですけど、群竹くんにとってのあたしは何なのだろうって...、そういう陰口が耳に入ってくるたびに思うんです」

ああ...

だからさっき、あんなにむきになって柏木に...

——中途半端じゃダメです！ちゃんと柏木先輩の口からあの人たちに言ってあげてください！この人は僕の彼女だって！

あれは、群竹にそう宣言してもらって一と思ってる、あかねの心の叫びだったんだ。

「群竹くんは自分のことも思ってることも言わない人っていうのは最初から知っているし、それでもいいって思ってたんです。そういう群竹くんをわかってあげたいって思ってます...。でも...、もしかしたら私は自分の気持ちを押し付けてるだけなのかなって思う時があって...」

「そうじゃねーよ」

あかねは顔を上げて俺を見た。

「アイツなりにあかねのこと、ちゃんと思ってるはずだぜ？じゃなきゃチャリには乗せねーだろう」

そういうヤツだからこそ、限定のあかねはヤツにとって特別だってことだ。その特別扱いがわかるから周りはやっかむわけだ。

わかってねえのはあかねだけ。

でもそれは、群竹にマジで惚れてるからこそ、いろんなことが不安になっちまうんだよな。

——惚れてるからこそ…。

「心配すんじゃないねーよ。アイツは一度だって他の子に目をやってねーだろ？」

あかねはワンテンポ飲み込んでから、うん、と頷いた。

「まったく、なんで俺が群竹をかばってるんだか…、と思わないわけじゃないけどしょうがねえ。」

「それが不器用なアイツの愛のカタチだ」

「あ、愛の…?!」

あかねは真っ赤になってうつむいた。

ちきしょー、ちきしょー、ちきしょーめ。

こんなあかねに惚れられてるってのに、もったいねえことしてんじゃないねーよ、群竹め！

「群竹はいちいち言わねえだけ。お前は群竹の彼女。安心してろ？」

ってゆーか、群竹くん、いっぺんシメていいっすか？

群竹だけじゃない。柏木もだ。

ただ、守ってやる。

その気持ちだけでいいじゃんか。

大事な彼女、傷つけんじゃないねーよ。

大事な彼女、傷つけられてんじゃないねーよ。

ステージの上で宣言できねえのなら、普通にこだわるんなら、普通にずっと傍についててやれよ。

言葉に出して言えねえのなら、ただ傍にいてやれよ。

俺だったら、何も考えずにそうするのに——。

電車が着いて、クリスマス一色の街中をあかねんちまでふたりで歩いた。

「『Shine Castle』、凄い人気でしたね。先輩たちすごくかっこよかったですよ？学校での先輩たちと全然違って見えた」

「そう？俺としちゃ、あかねとヒカルがいる『ブックキャッスル』の方がじっくり来るんだけどな」

『Shine Castle』は眩しすぎる。

いつか目指そう光の城を

右も左も闇の中でも
微かな輝きひとつを頼りにしながら
そこに繋がる道を歩こう――

「あかねの光の城はどこにある？」

「.....どこなのかなあ。先輩は？」

空に星がひとつ輝いていた。

「あそこかなあ？」

と、その星を指差すと、あかねは遠いですねえ、と笑った。

「先輩。今年はいろいろお世話になりました。先輩のおかげであたし、勇気も根性もついたと思います」

「そうお？俺のおかげ？」

「うん。先輩には頼ってばかりで本当にすみません」

「...はっ！何言ってるの！」

もう、そこはあかねの家だった。

「送ってくれてありがとうございました！」

あかねはペコリと頭を下げて門の中に入る。

こんなふうに女の子を家まで送ったことなんかねーから、ちと緊張しちゃった。

「そんじゃ、また新学期にな」

「はい...」

門を挟んで手を振る別れにいつまでも浸っていたい気持ちはあったけど、あえてさっさと回れ右をした。

そしてもう一度星空を見上げた。

遠いぜ、俺の光の城。

だけど、俺は頼りになるひとつの微かな輝きになりたい。

コイツの。

あかねの。

卒業式のその日まで――。

背中で、あかねが見送ってくれている視線を感じながらも、振り向く代わりに空に輝く光の城を見上げたまま、イブの夜を歩き出す。

くう〜っ、青春ドラマじゃ泣けるシーンだろ、ここ。

田村くん、カッコイイじゃんかあ〜っ！

「あ、田村先輩、前.....っ！」

「前？」

ゴチンッ！！

電信柱に激突。

遠くにあった光の城が目の前で飛び散った。

34 この世の終わり、な日

1992年の年が明けて早1ヶ月。

巷は真冬の真っ最中。

そんでもって俺たちは、

「お前ら、もうすぐ3年になるんだぞ？いつまでもバカやってると卒業出来ねーぞ？わかってっか？」

権田の長い説教を食らってる真っ最中――。

ばっくれビリヤードしちゃいましょ、っていう松山兄の誘いに乗った俺たちだったけど、校門の前で運悪くポッターに遭遇しちゃった5時間目。

相変わらずの巨漢をわざわざ揺さぶり、お仕置きグッズを振りかざして追っかけてくるポッターを振り切って、俺とヒビクとブラザーズは間一髪で通りの向こう側に逃げ切ったってのに、ニブチンの柏木が捕まりやがった。

これが松山兄だったらそのままオトリにしちまったけど、ナヨな柏木をひとり置いてくわけにもいかず、今日の勝負は潔く全員で負けてやったのだ。

1年の時から春夏秋冬4期に一度ぐらいの割合で繰り広げられてるポッターとの勝負だけど、初めての黒星だった。

「田村、風間、覚悟はいいかぁ！？」

ポッターにしてみれば俺たちをとっ捕まえるのは悲願だったろうから、そりゃもう凄い勢いでお仕置きされちゃった。

バシッ！パシッ！と、道とか校庭とかを掃いてる箒で容赦なくケツを打ち付けられ、ズボン
は真っ白、中身は真っ赤だ。

これだけでも十分なペナルティーだったのに、放課後の部活中、天井のスピーカーから聞こえてきたのは権田の声。

――2A田村、2B松山次郎、2E松山太郎、2F風間に柏木、今すぐに職員室の権田の所に来い！

ご丁寧に校内放送使って全校生徒に響き渡るお呼び出しだ。

「先輩たち、どんな悪いことしたんですかぁ...？」

あかねとヒカルが白い眼差しで俺たちを見たのは言うまでもない。

で、楽しい部活を抜け出して出頭した俺たち5人は、今ここでこうして権田の前に横一列に並ば

されてるってわけだ。

「今年1年間、田村は25回、松山太郎26回、次郎も同じく26回、柏木15回、風間23回の遅刻！単純に計算して2週間にいっぺんはまともに来てないってことだよなあ？何で高校生やってんだ、お前ら？」

どうでもいいけど、何でそんな細かい数を暗記してるんだ、このセンス。

「義務教育じゃないんだから、来たくなきゃ来なくたっていいんだぞ？授業だって受けたくなきゃ受けなくたっていいし、けどそれじゃ授業料払って高校に来る意味ないよなあ？」

「柏木くんは図書室でよく女の子と仲良くしてるけど、学校ってところを勘違いしてねーか？」

「松山たちは何度補習やってやってもちっとも身になってないねえ？そのワリには追試じゃふたり同じ結果でクリアして。お前らふたり、補習で勉強じゃない別のことを一生懸命研究してんじやねーのか？」

5時間目のばっくれ未遂で説教されてたのが、いつの間にか年間を通した生活態度をひっぱり出され、この上ないイヤミを言われてかれこれ50分が経過する。

「しょーもねえことばかりに夢中になると頭の中腐っちゃうぞ！お前らは進路のこと、ちゃんと考えてるのか？」

あんまし考えちゃいねーけど、ここで、否と答えたらさらに説教が1時間延長になるから、「しっかり考えてますよ！」

...と、答えた声が5人揃ってた。

「58分...。最高記録だぜ」

職員室から出たところで弟が腕時計を確認して言った。

「今日はやたら機嫌悪かったなあ、権田。イヤミバシバシ。途中で何回キレそうになったか！」

まあ、ヤツがいつもよりも増して不機嫌だったのは今日という日にちのせいだったのはわかってる。何にしても1時間近くも説教食らってる間に当然外はもう真っ暗だ。

「今日は部活にならなかったなあ」

「誰のせいだろーねえ.....」

音楽室に戻ってみても中は明かりが消えてて、当然あかねもヒカルもいやしない。

みんなの視線を受けて柏木はひとことごめん、と言った後に、

「図書室で小春ちゃんが待ってるから、俺、行くね」

と、あっさり行っちゃまいがった。

「サブイ……」

木枯らしが吹く2月の牛乳屋で、財布の中を確認してあまりの寒さに固まっちゃった。

「100円玉一個しか入ってない…」

これじゃ、110円の缶コーヒーも買えない。こんなに寒いのに、あったかい飲み物ひとつ飲めない。

大きく開いた財布の中でポツンと一個だけある100円玉を見つめながら寂しくなっちゃった、マジで。

「10円足りねえだけだろ？この世の終わりみてえな顔すんじゃねーよ」

と、ヒビクが俺の財布の中に10円玉をポンと入れてくれたけど、チャリンと鳴った100円玉と10円玉を見てさらに情けなくなった。

ところで、ここ最近の俺たちは3月の初めに行われる三送会でのライブに加え、あの『みにくいあひるの子』をお向かいさんの墨川中学で公演するっていう素敵なイベントが舞い込んで、こんな年度末の時期に忙しく部活動をやってる。

本城高校はこれでも進学校なんで、3年は部活には参加しないってのが校風みたくなっている。運動部なんかはそうもいかないから夏まで残留してやってる3年はいるけれど、文化部の部活動は2年まで。だから俺たちも、このふたつのイベントを最後に引退ってことになる。

これまたひじょ～にサブイ。

俺たちから部活を取ったら何が残るってんだ？

権田にはああ言ったけど、3年になったところで俺たちの中の誰ひとりとして何かが変わるとか、又は何かを変えようとか考えてるヤツなんていないって一のに。

受験とか進路とか、そんなことをマジメに考えなきゃならねー一日が俺たちにもやってくるんだろーか。全然実感わかねーし、周りがそうゆうモードになった時に自分のポジションがなくなっちゃうんじゃないかって思う。

そんな近い未来を考えて、こここのところ寂しいモードにはまり込んでる田村くんでありんす。

けど、こんなことはまだまだへのカッパだ。

今日の俺がやたらめったら寂しいのは……。

「だから田村、暗いって！権田の説教をまともに聞いてたってわけでもねーだろに！」

財布の中を見つめたまんま、ずーんと沈んでる俺の肩をヒビクは叩いた。

「説教なんて全然堪えちゃいねーよ…。ケツは痛えけど…」

痛いところをスリスリさすりながらそーっとベンチに座った。冷たい感触が赤くなってるであ

ろうその部分をピリッと刺激した。

「はう……」

「ほれほれ、ため息なんかつくんじゃねーよ？何が飲みたいの？言ってみ？俺が買ってきてやっから」

「あまーいホットココア…」

「了解」

ヒビクは俺の手から財布をもぎ取った。

「あっ…、それ使っちゃうの？」

「当たり前。お前が飲むんだから」

シビアーに言い放つヒビクももちろんサブイ。

何もかも寒くて寂しいけど、何が一番この世の終わりかって……、

――今日って日が2月14日で、田村くんは義理と名のつくチョコさえも貰えなかったことだ！
もちろん、あかねに！

ヒカルが俺たちみんなに、手作りをしたっていう義理チョコを配ってくれるのをあかねはただニコニコしながら見てただけだった。

あかねからはないわけ？と、凶々しい松山兄がツッコミを入れた時、

「みんなにあげちゃうと本命がくすんじゃうでしょー？あかねちゃん分までこのあたしが手作りしましたから！」

ってサラリと答えたヒカルの言葉が痛かったこと、痛かったこと…。

田村先輩にだけはこっそりと…って密かに期待してたのに、あかねちゃんったらやっぱり本命一筋。

あかねにしてみれば俺も松山ブラザーズたちとおんなじ程度の扱いだったってことだ。

――寒くて死にそう……。

その直後だ。

権田からの素敵なお呼び出しがあったのは。

暗くもなるでしょーが。ためいきも出るでしょーが。ケツはヒリヒリしたまんまだし、この世の終わりもいいとこって感じだぜ。

ほらよ、とヒビクがホットココアを俺の顔に押し付けた。

「俺が奢ってやったぞ、それ」

ヒビクは110円が入ったままの財布を返してよこした。

「考えてみれば去年の今日は田村クンから愛のチョコレート貰ったしな。今年は俺からの愛のホットチョコレートだ」

「...さんきゅ」

「元気だせって！何があったかは知らねーけどさ？」

「...別に何もねーし」

ええ。

何も無いんです...

ヒビクはいいさ。

何たってヒカルちゃんの手作りチョコレートをもらったんだ。それがたとえ義理と名のつくものであって、俺たちみんなに配られたものであったとしても俺にはわかる。

ヒカルはヒビクを想いつつ、このちょっといびつなカタチをしたハートチョコを作ったに違いない。俺たちに渡されたのはもちろんオマケだ。いちいち比べて見ちゃいねーけど、ヒビクに渡ったハートは間違いなくイビツじゃねーだろ。

それをヤツが心得てるかどうかは知らねーけど、何にしたって去年の4分の1ガーナチョコよりは何百倍も価値のあるものを手にしたはずだぜ。

「小早川さんからは来たんだろ？」

ヒビクはヒカルがよこしたチョコ入りの可愛い袋を俺の目の前でぶらぶらさせた。

そう言えば、今年は小早川からも何もない。

「.....今年の環ちゃんは俺に義理チョコくれてる場合じゃねーんだろ...」

どこかに本命いるみてーだし。

「あらら...。環ちゃんも顔に似合わず忙しいのねえ。もしかしてそれで暗いってわけ？」

「まさか。お前に言われるまでそんなこと忘れてたし...」

あっそう、とヒビクは袋からつまんで出したヒカルのハートをひとつ、口の中に放り込んでニヤけた笑いをする。

「もったいねえなあ。後でしみじみ味わって食えよ...」

こんな牛乳屋のこ汚いベンチで食うもんじゃねーだろ、それは。

「そーゆーチマチマした暗い趣味ないの、俺」

うまそうにニコニコしちゃって、やたらめったら明るいヒビク。

あかねからも無し。

環ちゃんからも無し。

みんな俺に義理はねーってことだ、ちきしょーめ。

あったのは権田の58分の説教だ。あいつがやたら不機嫌だったのも今日が2月14日からだろ。

非モテクラブ会長の椅子は、非モテ歴29年の権田に譲ってやろう。

あまりにもベタすぎて言いたかねえけど、バレンタインデーなんていう、世の中の男子たちを

幸と不幸にくっきりハッキリ分けちまう日は廃止にするべきだ。

ぴゅ〜っと木枯らしが吹いて足元のゴミくずを運んでいった。

その、ゴミくずの行き先を何となく目で追った場所で松山弟がこれまたずーんと沈んでた。

――嗚呼、心の友よ...!

すかさず類友のもとに移動した。

「次郎、この世の終わりみて一な顔してんぞ？」

あ？と弟は覇気のない顔を向けた。

その横では兄が、今やって来たサッカー部の連中と大笑いしながら大声で喋ってる。

おんなじ顔、おんなじビジュアルのコントラストを見てる感じだ。

「今年になってから麻耶ちゃんが妙につれない...。今日って日がせつない...」

はう...、とさっきの俺みたいなため息を吐いた弟の肩は、しょぼーんとしぼんだ。

「だからこっちから打って出りゃいいじゃん。ぐずぐずしてると誰かに盗られちまうぞ？」

サッカー部の部長が麻耶ちゃんにほの字で告ったとか告らねーとかって噂も聞く。

中身はどうであれ、あれだけの美少女を本城高校の健康的な男子たちが放っておくはずはねえんだ。

「どーやって告りゃいいのよ？やり方わかんねーし...」

「やり方なんかねーだろ。単純に好きなのよ、って伝えりゃいいでしょ。ついでに付き合っちゃようだいまで言えりゃあ上等」

ところがこれが中々言い出せないってのは経験済み。

チャンスは巡ってきても、それを掴んで生かすことに失敗しまくった結果が今のこの現実につながってる。

こうなっちゃ、もう遅い。

義理チョコのひとつももらえねえんだから。

群竹くん、あたしのこと好きなのかな？なんて俺にとっちゃ、`そんなの知るかよ、なことを真顔で訊かれちまうんだから。

「勇気がねえヤツはバレンタインってイベントに夢求めてウハウハ浮かれてりゃいいんだ。男なら、好きな子には自ら当たってくぐらいの根性出せっての」

「おめーはどうなんだよ？そんな単純にはいかねーよ...」

そんなことは十分承知してます。

けど、複雑に考えればいってもんでもねえし、第一単純を絵に描いたぐらいの体育バカのコイツに複雑って感覚は最初からねえだろう。

「今日、チョコどころか麻耶ちゃんの顔も見れなかったし...」

弟はヒカルからもらった包みをイジイジと触りながら呟いた。

「やっぱ麻耶ちゃんも本命一筋なのかねえ〜」

「...な.....っ」

ぼろっと言っちゃったあとに慌てて弟を見ると、さらにずんどこまで行っちゃった弟は、アスファルトも貫きそうなぐらいのため息を吐いた。

「ま、麻耶ちゃんの本命は部活でしょ！なんたって次の部長だって話だし、義理チョコ配ってる場合じゃねーんだよ、きっと」

これは外れちゃいねえ推測だと我ながら思った。周りがどうであれ、麻耶ちゃん本人は剣道一筋で男っ気はまるでなし、だ。

がしかし。

「.....やっぱ、義理か...」

あちゃ！

「麻耶ちゃんの愛のカタチを信じてた俺がバカだったってことなのね.....」

さらに墮ちる弟。

そうゆう、この世の終わりの横で、この世はパラダイス！な兄が騒いでる。

いつでもどこでもお祭り男は、ポッターにケツはたかれようが権田の説教食らおうがバレンタインに彼女とデートできなからうが全然....

あれ？そう言えば....

「太郎、お前フラレたの？」

今日はバレンタインデーですよ、奥さん。

彼女持ちの柏木が小春ちゃんと仲良く消えちまったのはお約束でしょ。

辺りはこんなに暗くなっちゃってるけど、兄は彼女とそのお約束はねーのか？

「バカ言っちゃいけねーよ？この俺がフラレるわけねえっしょ?!」

今までサッカー部と喋ってた兄がすかさず反論してきた。

「その自信はどこから来るんだろうねえ？おめーの脳みそ見せてみる？」

弟のツッコミを、兄はふんっと余裕でかわした。

ヤツの女子大生な彼女はなんかの試験の真っ最中らしく、今日のお約束はそれが終わってからの後日ってことで話がついてるらしい。

「だから俺はおめーら非モテの通夜組とは違うの！」

自信満々に言い放つ兄に、

「世の中どこか間違ってるぜ...」

と、呟いた弟。

おんなじ顔してるってのに、どこで何がどう違ってるんだか、兄の彼女持ちっていう現実も含めて世の中不思議なことばかりなり。

不思議といえば、あのネクラな群竹をひたすら愛するあかねとか、あのネクラな群竹に熱を上

げてる女の子とか、あのネクラな群竹が女の子たちに愛されてるってのもこの世の最大の不思議なり…。

—一通夜組ねえ。

言ってくれるじゃんか、松山兄。

けど、

田村暗いって言ったヒビクは、そんな俺に優しくホットココア買って来てくれたし、ネクラのアイツは愛されまくってるし、暗けりゃ得なことあんのかも。

俺もこのままネクラになっちまおうかなあ。

ネクラで陰りのある男、田村優作ってのもなかなかオツじゃあございやせんか？

……なんて呑気、もとい、陰気なことを考えてるうちに日はさっさと暮れた。

今までの高校生活の中で一番つまんねー1日だったぜ、1992年2月14日。

いつもなら腹抱えて笑えるはずのバカ殿見てたってシラけちまって、もうメシ食って風呂入ってとっとと寝ちまうべ…って思ってた頃、とんでもねえ事件が松山ブラザーズに起こっていろいろなどとはもちろん知るはずもなかったから、

「た、た、た田村っ！うううう奪われちまったああ！！」

と、翌朝の駅で松山弟が泣きそうな顔してすっ飛んできた時は、やっぱ麻耶ちゃん、誰かに盗られちまったのか、と思ったけどそれは俺の考え違い。

ことはある意味それ以上で、

「ま…ま…、ま、まママ、まママママ…まママママじっ！？」

俺はいつもの弟以上の無駄な「ま」を連発。

コソコソしてるわりにアクションがド派手な俺たちふたりを怪しまねえ方がおかしい。

視線を感じて振り向いたとこで兄がじーっとこっちを見てた。

「たたた、田村あ...！ちよっちよっ...、ちよっとお...！！」

駅の階段を昇りきったところで、泣きそうな顔をしてすっ飛んできた松山弟に手首をつかまれ、そのまま券売機の隅っこに連れてかれた。

「なな、何？どしたの?!」

引っ張られながらいつもの待ち合わせ場所（改札の横のゴミ箱の前）を見ると、まだヒビクや柏木たちは来てないようで兄の姿も見えない。

「痛てえよ！そんなに強く引っ張るんじゃねえって！」

体育バカの馬鹿力に俺の貧弱な腕は絞られたタオルみたいになっちまってる。

なんにしたって、弟のこの慌てように、フツーでない何かがあったってことは察しがつく。

弟は、周りを妙に気にしてはあはあしながら、

「う、うう、ううう奪われちまったあ...っ！」

と、抑えた声で、けどイッパイイッパイな状態で叫んだ。

「何を？」

「おおお、俺の...っ！」

そう言った後、弟はううっ...、と絶句。

憔悴、と言ってもいいぐらいのその様子に、一番に考え付いたのは麻耶ちゃんのことだ。

「だから言ったじゃんか。さっさと告っちまえて...」

やり方がわかんねーとか言ってる場合じゃねえんだよ。

やりながら学習するって手もあっただろーに。

「そそ、そうじゃねえって！麻耶ちゃんのことじゃなくって...俺の...！」

弟はぶるんぶるんと首と手を一緒に左右に振りながら言った。

「奪われたって、麻耶ちゃんじゃねーの？」

うんうん、と弟は今度は縦に激しく首を振る。

「じゃあ何なの？はっきり言えよ」

いつの間にか集まっていたヒビクたちが改札のそこから、お前ら行くぞー、と声をかけてきた。

弟はビクッと肩を震わせ、そーっと後ろを振り返ってヤツらを確認し、ちっちゃく縮こまりながら、

「ちゅ...、ちゅちゅちゅちゅー...」

口を尖がらせてワケわかんねえ言葉を発した。

「ちゅちゅって何?!」

そろそろ電車も来る頃だ。

乗り遅れたらまた遅刻で、昨日の今日な俺たちは権田にどんだけのイヤミを言われるかわかんねえ。

ちゅちゅだかちゃちゃだかわかんねえ話にいつまでも付き合っちゃいらんねえ。

「学校行ったら聞くよ。とりあえず行こうぜ？」

「ちゅーを...奪われちまったの...！」

「だから...それは学校で...、」

あ？

ちゅー？

「ちゅーだよ、チュウ!き、き、きす!キッス!俺の...初ちゅー!!」

は？

ちゅーって、キッスで、あの？

ぎゅーっとしてちゅーっとする、あのこと...？

「あの一、その一、うるわしくないお前の唇を奪われたってことですかい...？」

「はい!いえす!ドンピシャのピッタシカンカン!」

ま、ま、ま....、

「ま...ま....、ま、まママ、まママママ...まママママじっ!？」

ぶっ飛んだ。

朝から刺激が強すぎて頭がくらくらした。

「だだだだ、誰に、ううう奪われちまったの...！」

ちゅーを奪うぐらい、弟にそんだけ熱入れてる女子がいたってことなのか?!

唯一の心の友だと思ってたのに!

「そ、それが……」

弟が言いかけたとき、背中に視線を感じて振り返ると、すぐ後ろで兄が無言でこっちを見つめてた。

その向こうではヒビクと柏木もコソコソやってる俺たちに注目してやがる。

けど、こーなっちまったら学校どころじゃねえ。

弟の話最後まで聞かなきゃ俺がおさまんねえ。

だから、

「痛てえっ！！！」

弟の腹を膝で蹴り上げた。

「だ、だいじょーぶか、次郎！」

「は、は、腹が…！」

手加減したつもりだったけど、ケリがまともに入っちゃったらしく、弟は鞆を投げ出してうずくまってる。

すまぬ。

でも、ヤツらに怪しまれずにこの場をやり過ごす手を、とっさにこれしか思いつかなかった。

「急にコイツ腹イタ起こしたみてーだからお前ら先に行ってて！」

ヤツらはあっさり承諾してひとりひとり改札を潜ってった。

兄はしばらく目を細めて弟を見てたが、

「正露丸飲め、ばーか」

と、ひとこと言ってヒビクたちの後を追って行った。

◇

「ひでーじゃんかよ、田村あ」

駅前のマック。

二階の席に座るなり、腹をさすりながら弟は文句を垂れた。

文句言われてもしょーがねえことしちまったのは間違いねえんだけど、そんなことよりも今は

話の続きだ。

「で、誰に奪われたの！早く先を話しなさい！」

弟は、おお...そうだった...、とまたいきなり沈み込み呟くように言った。

「涼子...さん」

—え...？

涼子...ちゃん？

「...って...」

中学の時の同級生。

たんぽぽみたいな女の子。

田村くんが初めて恋をした女の子。

あの、涼子ちゃんなのか...？

マジかよ。

田村くん、ダブルパンチだぜ...。

そりゃ、今はあかね命、な田村くんだけど、初恋の人ってのは別腹にいつまでもキレイなまま存在し続けるってもんだろ。

それが、こんな体育バカの非モテな松山弟の初ちゅーを奪い取っただなんて...

「.....そんな話、信じられるか！」

つい、席を立ち上がって叫び上がった。

朝のひと時をモーニングセットや新聞と共に過ごしてたサラリーマンやOLさんたちが、いっせいに俺に注目した。

「俺だって信じられねーぜ...。俺の初ちゅーを...」

何故か初ちゅーにこだわってる弟が語った昨夜のその出来事ってのはこうだ。

昨夜、弟が風呂からあがってバカ殿見ようとしていたとき、玄関のチャイムが鳴ったそうさ。
手が離せないっていうか一ちゃんに代わって対応に出ると、真っ暗な中に女の子がポツンと立

ってたらしい。

最初は誰だかわからなかったらしい。

けど、松山くん、と呼ばれた声が、中学の時の同級生に似ていたことと、顔や雰囲気もそう言えれば似てる、と思い至り、

「涼子ちゃん、どうした...?」

と、返事したらしい。

すると、涼子ちゃんはいきなり弟の腕を引いて、暗闇の中にひっぱり出したんだそうだ。

.....俺がバカ殿にさえもしらけてふて寝してた頃、コイツは涼子ちゃんに...

涼子ちゃんも、何だって今頃になってこんな体育バカに...

ああ...でも...、去年プールで会った時に連れてた彼氏もやたらゴツイ男だったよな。

.....なんてことを、弟の話聞きながら頭の端っこで考えてた田村くんっす。

ちきしょーめ。

――で、話の続き。

腕を引かれ、風呂上りのジャージのまま寒空の下に連れ出され、人気の無い月明かりの夜道で涼子ちゃんはやったそうだ。

「驚かそうと思って黙って来ちゃった。驚いた?」

そりゃもう、驚きまくってた弟は、

「...っていうか、何で?どうかしたの?」

頭の中はハテナマークだらけだったらしい。

涼子ちゃんとは中学を卒業して以来だし、いきなりこんな夜にこんなふうに入れ出されて驚いた?も何も、コメントのしょうがございません、ってのが正直なところだろう。

涼子ちゃんは弟の両手を取って、その中にリボンをかけた包みをそっと乗せ、そんでもって...

、

「おお、俺のか、か、か肩に手を乗っけて、こここーやって...」

と、弟は俺の肩に手を乗っけてムサイ顔を近づけ、昨夜自分がされたことを再現しやがった。

それが、涼子ちゃんからの次郎の初ちゅー強奪行為だったらしい。

「.....」

この辺に関してコメントなんかしたくねーから、とっとと話を先に進めさせた。

いきなりのことでただただ呆然としてる弟に、涼子ちゃんは、

「太郎くん、好きだよ。これからも一緒にいよーね」

と、もう一回、今度はほっぺにちゅーだと。

もう、勝手にやってくださいって感じだぜ。

何だって、あのうるわしの涼子ちゃんが太郎くんなんかを好きなんかね？

中学の頃、田村くんがどんなに好き好きビーム出したってちっとも見向きもしてくれなかったのに。

ってというか、中学の時田村くんのが好きだったんだよ、ってプールで言ってくれたあの台詞は嘘だったの？

.....ってというか、今、なんかどこか間違ったこと言わなかったか？

弟が言ったのか、俺が言ったのか？

「涼子ちゃんは誰が好きだって...？」

「...だから、太郎」

——はっ？！

「.....お前は誰？」

今、ここで俺と喋ってるのは太郎の方だったのか！？

麻耶ちゃんに惚れてるのは次郎？太郎？

女子大生と付き合ってるのは太郎？次郎？

「だぁぁっ！ワケわかんなくなっちゃった！」

俺の頭の中、大混乱中。

「俺は次郎！ちゃんと見分けるよ！」

弟はおもむろにムツとした顔をした。

髪型変えればもうわかんないぐらいおんなじ顔してるってのに、ブラザーズは互いに間違えられることを一番嫌う。

「で、涼子ちゃんが好きな相手は太郎で、涼子ちゃんからのキスのプレゼントを貰ったのは次郎...」

ってことは...

「お前、単純に、間違えられたってこと...?!」

「...そ。マチガイで初キスを奪われちゃったのよ、俺...!」

またここでも初キスにこだわる弟。

けど、そんなことよりも根本からしておかしかねえか、この話!

「ますますわかんねえ!」

「あつま悪いな、田村あ!だから、涼子さんは、太郎の彼女の涼子さん。おめーの知ってる中学の時の同級生の涼子ちゃんじゃねえの!」

「はあ?!」

待て、待て、待て!

整理する。

涼子ちゃんイコール石田ゆり子な女子大生。

彼女がバレンタインの夜、突然松山家にやって来た。

応対に出たのは次郎。

「松山くん」って呼びかけに対して、次郎は「涼子ちゃん」と答えた。こん時は次郎も中学の時の同級生の涼子ちゃんだと思っていた。

偶然にも涼子ちゃんと同じ名前の石田ゆり子な涼子さんは、疑いもせずに次郎を太郎だと思い込んで引っ張り出した。

そして、太郎を驚かせようと、「黙って来ちゃった」と言った。

中学卒業以来の涼子ちゃん（と思ってる）にいきなり引っ張り出されて放心状態な次郎を、涼子さんはただ単に太郎が「驚いてる」と思った。

で、チョコレートのプレゼントに好きだよキスだ。

バレンタインに彼氏を驚かそうと、黙ってやって来ていきなり連れ出してプレゼントにキス、っていう話の流れとしちゃ不自然はない。

相手を間違っちゃいなければ!

けど、この話のおかしなところは、

「お前、何で気づかないの?!」

涼子ちゃんと涼子さんとは雰囲気は似てても別人だろ。

いくら何でもわかるだろ!

たろじろみたく双子じゃねーんだから!

「外は暗かったし、風呂上りでコンタクト外してたから顔がぼやけてて...」

「お前、近眼?」

「ド近眼。コンタクトがねーと何にも見えねえ...」

不幸の因ここに有り...

キスのあと、あまりにも反応の悪い弟に涼子さんもさすがに別人だと気がついたようだ。

「弟くんの方だったのね...。間違えちゃった...」

と、恥ずかしそうに言ったあと、

「このことは太郎くんにはナイショにしてね...」

と、一旦は弟に手渡したチョコをとりかえし、昨夜はそのまま帰っちゃったらしい。

「漫画だな...」

ありえねえだろ、これほどのスットコドッコイ。

弟はもちろんのこと、涼子さんだってキスの前にどこか変だなーと気づかねえのかよ?

彼女も弟とおんなじド近眼でコンタクト外してたってのか?

「そうらしい...。わざと外してきたって言ってた」

ゲリラキッス、やっぱまともに顔が見えちゃうのは恥ずかしかったらしい。

そこまでの決意を、人間違いでハズしちまって、弟よりも涼子さんの方が傷ついてやしねーんだらうか。

自業自得っていやあそれまでだけど、見分けられねえほど似すぎてるブラザーズにまったく問題がねえってわけじゃない。

「俺の初キスは...まままま麻耶ちゃんに捧げたかった.....」

弟はしょぼーんとうつむいた。

ヤツはヤツなりに、その瞬間のシチュエーションを夢一杯に想像してたんだそうだ。

それはそれで、とてつもなく危ない。いや、せつない。

「こんなことで奪われちゃうなんて、キズモノになっちゃった...」

「乙女じゃあるまいし、アホなこと言ってんじゃねーよ！」

そりゃあ、弟の気持ちがわからねえわけじゃない。

俺だって初キスは愛しのあかねに...

——生捧げられねえだろうけどよ、俺は。

告り方もわかんねーって言うてるヤツが初キスを捧げたいなんて飛躍したことぬかしてんじやねえ。

そんなことよりも俺が心配なのは...

「太郎にバレたら殺されるぞ？」

事故です。イレギュラーです。仕方の無いことだったんです——。

ってゆう言い訳をまともに受け入れられるほどヤツは大人じゃねえだろ。

もしもバレたら兄弟の間で修羅場が起こることは必至だし、涼子さんに対してもどーゆー反応するか想像がつく。

「そんな時、ヤツは何してたの？」

「風呂入ってた」

「じゃ、あいつは気づいちゃいねーんだな？」

「たぶん...。涼子さんはヤツに会わないで帰っちゃったから彼女が来たことは知らねえはずだけど、何かピピッと感じてるかもしれねえ。そーゆーことって俺たちの間じゃよくあるし」

なるほど。

双子の習性で通じ合うものってのがあるらしい。

「そういやあ、さっきのヤツの目はどこか鋭くお前を貫いてた...」

「やっぱ田村もそう思った...？」

「思った」

「お、俺、どーすりゃいいの...？お、俺だって被害者なんだぜ？俺、なーんもしてねーんだぜ？

！ただ呼び出されて引っ張られて間違えられてちゅー奪われちゃっただけなんだぜ？！」

またまた弟は泣きそうな顔で訴えた。

「もう、ちゅーって言うな...」

お前の口からじゃ気色悪いぜ、その言葉。

「.....涼子さんが隠し通すって保証はねえけど、たとえどんなことがあってもおめーは死ぬ気で

シラをきれ！絶対に本当のことを言っちゃダメ！」

「嘘がつけない体質なんだよなあ、俺…」

「じゃあ体質改善しろ！いいか？マジで言うんじゃねーぞ？ナチュラルでいろ！」

人マチガイで奪われちゃった純情男の初キッスよりも、何故か人マチガイで奪っちゃった涼子さんのキモチの方を考えちゃう田村くん。

なんかのテストで逢えないはずの2月14日に、実は太郎にナイショで計画してたバレンタインデーキッスを、あろうことか双子の弟の方にくれちゃって、結局チョコも渡さず太郎にも会わずに帰って行ったっていう涼子さん。

哀れすぎる――。

どんなにか自己嫌悪に陥ってるだろうか。

「何で俺が……」

と、弟は昨日に引き続き、この世の終わりみて一な顔で呟いた。

◇

放課後の部活。

兄と目を合わせようとしねえ弟の態度はちっともナチュラルじゃない。そこにまたヒビクが、「おめーら、喧嘩でもしたの？」

と、余計なツッコミを入れるもんだから、俺はハラハラしっぱなしでギターもまともに弾いてられねえ。

「別にしてねーけど、今朝からなんか変なんだよコイツ」

と、兄は弟をじっと睨む。

やべやべ。

やっぱコイツ、なんか感じ取ってるらしい。

弟はササッとまた兄から顔をそらした。

そーゆー態度が変だって言われちゃうんだって。

「お前、俺になんか隠してねえ？」

ほら、おいでなすった！

「か、か、隠してることなんかねえ！なんにもねえ！」

兄に目を向けないまま、やたら焦って言う弟に、

「隠していますって白状しちまってるぞ、それ」

と、またヒビクが余計なことを言う。

心臓に悪くてしょーがねえぞ、コイツら！

「あああ、あのさ次郎！腹イタはもう平気なん？！あ、朝のあれは辛かったらろー？変にもなるよなあ？！」

「おお…。まだちょっと痛む…」

弟は俺がケリを入れた場所をすりすりさすりながら言った。

実際、本当にまだ痛むらしい。

「俺、踏んだり蹴られたり…」

と、弟は`蹴られたり、を強調しながら呟いた。

「あ！」

いきなり兄が叫んだ。

「おめー、俺の知らねえとこでこっそりチョコもらったな？！」

おもむろにギクリ、と背筋を伸ばす弟と何故か俺。

「田村、知ってんだろ？！おめーら今朝からなんかコソコソやってやがるし、ふたりで何かたくらんでねーか！？」

「おおお、おれは何もししし知らねえって！コイツが腹が痛てーって言うから、つつつつつき添ってやってただけ！」

嘘がつけない体質ってのは俺も同じ…。

「隠してんじゃねえ！正直に白状しやがれ！」

と、兄は弟に詰め寄った。

弟は最初、あーとかうーとか苦しそうに唸ってたけど、そのうち、何で自分が追い詰められなきゃならねーの？ってことに気づいちゃったらしい。

プチッと血管が切れる音がここまで聴こえた。

「……うるせーなあ…。隠しごとのひとつやふたつで喚いてんじゃねーよ、ボケナス」

ドスの効いた低い声で唸った後、

「…ああ、もらったさ。いけねーか？おめーが風呂入ってる間に訪ねてきた女の子がいたの！」

開き直った弟はとうとう爆弾を落としやがった。

「誰！？」

おいおい。

まさか、バカ正直に言うんじゃないか？

っていうか、ここまで言っちゃ、コイツにはバカ正直なことしか言えねえだろ。

これがほらふき太郎なら平気で大法螺ふくだろうけど、見かけはそっくりな双子でもそこんとは正反対なブラザーズだ。

次に来る言葉と展開を予想して、俺は無意識に縮こまった。

が。

「おめーの知らねえ子だよ！ファンの女の子！その子がチョコ持ってきたの、おめーにじゃなくてオ・レ・に！」

――あ？！

「ま、マジ！？」

兄だけじゃなく、ヒビクも柏木も弟の言葉に反応した。

「お、おお…。まじ……」

弟にしちゃナイスなホラだったけど、みんなに突っ込まれた正直者は良心の呵責にさいなまれちまったのか勢いはなくなっちゃった。

けど、

「てめー！俺に黙ってこそこそチョコなんか食ってるから腹こわすんだ！クソになってももったいねえからって出し惜しみして腹にためてたんだろ、ばかめ！」

ってゆう、兄の脳天気な暴言にぶちぎれたのか、はたまたいつものテンポを取り戻したのか、弟は、

「腹にたまってるクソならフツーだろ！てめーみてーに脳みその代わりに頭にクソつめてるのは違うんだからよ！」

と、フツー言い返した。

「なんだっておめーにいちいち報告しなきゃならねーの？俺が貰ったチョコを俺がひとりで食うのは当たり前だろーが！」

「なんだと、この野郎！」

「だいたい、てめーがめんどくさがって先に風呂に入らねーから悪いんだ！」

「かんけーあんのかよ！」

「バカがいつまでもバカ殿見てっから、風呂が冷めちゃうだろってかーちゃんに怒鳴られたのは俺なんだぜ?!」

「しょーがねえだろ! あはん、なとこだったんだし！」

「何が、あはん、だボケ! てめーのおかげでどれだけの周りが苦勞してっか、クソみそじゃ考えらねーよな?!」

弟の言葉に含まれた真実を理解してるのは俺だけだろう。

いつもの展開になっちまった兄弟をいつまでも観察しててもしょーがねえってんで、いつものようにヒビクたちも自分らのやるべきことに戻り、柏木はドラムを叩きヒビクは歌い、勝手に練習を再開した。

こっちではブラザーズがまだ揚げ足の取り合いをやっている。

——ご苦勞さんです、松山次郎。

太郎が素直に先に風呂入ってりゃ、涼子さんに應對したのは自然に太郎だったんだろーから、記念すべき初キスを人間違いで奪われちゃうこともなかったし、涼子さんも傷つかずにすんだし、弟はこの世の終わり、な日をさらに悪化させることもなくフツーに終えて全てが丸く収まってたわけだ。

けど、こーなっちまったらしょうがねえ。

どこまでもそのホラ吹き通せ。

いつか、真実を笑って話せる日もくるってもんさ。

いつも通りのようで、実は壮絶すぎる兄弟バトルはそのままにして、俺もヒビクたちの練習に加わった。

窓の向こうで2月の空が、灰色にくもった薄い雲をのんびりと流していた。

3月一一。

終業式の今日、俺たち軽音楽部と演劇部はお向かいさんの墨川中学の三送会で、文化祭の時にやった『みにくいあひるの子』を公演した。文化祭の時、ヒカルがこっそりと近隣の学校関係全てに招待状を送っていたのがこの依頼を受けるキッカケになり、最初俺たちは汗水流して作った合同作品を披露できる場が出来たってことで単純に大喜びしてた。

けど、これがそんな単純なものじゃなかった。

中学生ってのは、どうでもいつまんねえことを材料にして、イジメをお遊び感覚でやったりするヤツがいる。

お向かいさんでもそーゆーことが日常的にあったようで、俺たちもここ最近の間にイジメたりイジメられたりっていうガキの現場に行き合ったりもした。

ってゆーか、今までもあったんだろうけどいちいち注意して見ちゃいなかったってのが正直なところだ。

けど、自分らが公演に行く中学で、しかも演目はイジメもテーマの一つになってる『みにくいあひるの子』ってなると、自然と目がそこらを歩いている中坊に行っちまって、そーやって見てるとあるわあるわ...、ちっこいヤツを取り囲んでその容姿をバカにして喜んでたり、小学生でもやらねーようなくだらねえ、けど陰湿なイジメ。

「人間の価値は見てくれで決まるもんじゃないんだぜ？おめーら、中学生にもなってそんなことも知らねーの？」

ヒビクにしちゃ珍しく、他人、しかもたまたま行き合っただけの全然知らねえ中坊の揉め事に口を出した。

ヒビクの突然の暴走に、柏木はポカーンとした顔して驚いていたけれど、目の前の中坊たちに過去の自分やその頃周囲にいたヤツらの影を見てるってことは、中学の時のヒビクを知ってる俺や松山兄弟にはわかった。

今じゃこんなハチャメチャなヒビクだけど、中学の時は鮮やかすぎる天然の金髪とか、得体のわからねえ外国人のオヤジさんのこととかを題材に好き勝手なこと言われ、そういう境遇からヒビクって人間自身までも理不尽に蔑むヤツらもいて、友達とか学校とかそれ以外の周りとか、いろんなヤツらを相手に自分の誇りを守るために、ヒビクはたったひとりで闘ってた。中3になって同じクラスになるまで笑った顔なんか見たことなかったし、いつも険しく尖がってたヒビクを柏木は知らない。

「最近の中坊ってのは可愛くねえなあ？！」

幕が開く前の体育館の舞台上から客席で行儀悪く騒いでいる墨中のガキどもを見て、松山兄が大声で叫んだ。

自分らの送別会をやらしてもらおうってのに、ヤツらはちっとも観劇しようって態度じゃなかった。

「けど、俺らだって中学の時はコイツらと変わんなかったんじゃねーの？」

と、弟。

「まあ、確かに可愛くはなかったよなあ？俺たちも」

と、ヒビク。

「けど、くだらねえイジメはしなかったぜ？」

ヒビクを見ると、ヤツは、そうだな、と呟いてニヤツと笑った。

この場違いなニヤツ、に妙な胸騒ぎを覚えた田村くんでした。

いやーな予感がしたと言ってもいい。

で、その予感の的の中で、ヤツは劇のエンディングの途中、幕が下ろされようとする直前に、いきなり客席のガキどもにむかって叫んだ。

「お前らあっ！！」

その後は、権田も真っ青！なぐらいの説教だ。

ヒビクのヤツ、イジメをするヤツは人の痛みを知らないアホで、そーゆーアホは自分が同じ目に遭わなきゃそれに気づかぬ一大マヌケなんだから、お前らの隣にいるそのアホでマヌケなスカタンたちをとことん軽蔑してやれ、などとぬかし、ヒビクの迫力と眼力に圧倒されちまったガキたちがこれまた素直にヤツの言葉に従いやがって、イジメの仕掛け人たちがつるし上げられるような形になっちまった。

そのあとの極めつけは、イジメはいじめる奴が100%悪い、オマケもオツリも割引もねえと吼え、傍観者、イジめるヤツ、イジメられるヤツ、イジメねえヤツ、自分をどの立場に置くかはてめーらでよく考えやがれ、と結んでニンマリだ。

これには中学の先生たちは大激怒。暴走するヒビクを押さえ込もうと舞台下から何人もが飛んできたし、鳥海やヒカルたちは、まだ演技が終わりきってないうちの暴動勃発だったんでおろおろもしいところ。舞台上はとんでもねえ騒ぎになっちまった。

先生たちはヒビクをとり囲み、こんなことをしてもらうために君たちを呼んだんじゃないんだ、と人差し指をピンツと張った右手を上下に動かしながら嚴重抗議だ。

ヒビクは、センセたちは『みにくいあひるの子』って話の内容知らなかったんすかー？などと、とぼけてかわしやがって。

やれやれ...って思ったけど、ヤツが叫びたかった気持ちはわかるし、それをセンセっていう大

人が理解してくれるものでもねえってゆーのは、自分らの中学時代にさんざん経験してきたことだったんで、俺は俺なりに精一杯ヤツのフォローだ。

けど、ヒビクは自分が巻き起こした暴動に終始ニヤニヤしゃがって、この状態を余裕で楽しんでるようにも見えた。

センセたちには最悪な印象で終わった本城高校演劇部&軽音楽部合同公演だったけど、中坊のお子様たちには最後のアレがかなりウケたらしい。ヒビクを慕って校門で待ってるヤツらがいた。いつかのチビっこい少年と、その少年をイジメてたヤツらだ。

すると今度はヒビクのヤツ、来年本城にやって来るっていうそいつらに、まとめて軽音楽部に入れ、と命令しやがった。

来年度の軽音楽部は俺たちが抜けちまったらあかねひとりになっちまう。ヒカルは鳥海たちが抜けた後の演劇部を守らなければならねえからだ。

部員確保には毎年苦勞するじみ～な軽音楽部なんで、ヒビクのヤツ、こいつらの弱みにつけこんで先輩の権限を大いにふるったってところだ。

有無を言わさないその迫力と決め付けに、これもイジメじゃないのか...?と呟いてたヤツがいたけど、これには頷けないこともない。かなり強引じゃねーか、と思ったし、この悪ガキどもをあかねがひとりで面倒見ていくってのもかなり心配だ。

案の定、あかねは「うへえ... (ありがた迷惑かも...)」ってな顔で俺を見た。

けど、ヒビクは自分の命令に文句なく従い、頷いてるガキたちを見て完全自己満足に浸ってた。

「出た出た...、ヒビクの暴走...」

「ヒビク先輩って暴走魔だったんですね...」

一旦走り出したら止まらないのがヒビクの暴走で、時にはそれがヤツにしか通用しないむちゃくちゃな論理の上で行われる。

ってゆーか、過去の事例を見るとほとんどがそうだ。ここいら辺は松山兄と同類だって指摘してやると、ヤツはいつも冗談じゃねえぜ、と鼻で笑うんだけど。

本城に戻ると、終業式だった今日はもう誰も残っちゃいなく、俺たちも荷物を手早く片付けてさっさと帰り支度をした。

そして、音楽室を出る時にふと中を振り返った。

今日が俺たち5人の最後の部活動だったわけだ。

来年はヒカルもいなくなるし、7人のメンバーが音楽室に揃うことはきつともう、ない。

そう思ったとき、強烈な寂しさってやつに襲われちゃった。

この場所には、俺たちの今までの高校生活のほとんど全てって言っていいぐらいのものがつまってるから。

おんなじことを、きっとヒビクも考えてたんじゃねーかと思う。

ヤツも音楽室の中をぐるーっと見回してた。

「あっと言う間に駆け抜けて来ちゃったって感じだね」

柏木が言った。

ほんと、そう。

たった2年間の軽音楽部の活動はあっという間だった。

あと1年高校生活はあるってのに、なんだかこれで卒業しちゃうような感じだ。

これ以上感傷に浸っていると涙腺もヤバそうなので、

「行こうぜ！」

と、ヒビクの肩を叩いた。

あかねとヒカルが昇降口で待っている。

これからみんなといつものようにビリヤードで打ち上げでもすっか、と思ってたけど....、

「あたしたち、これから麻耶ちゃんや伊藤くんたちと進級パーティーなんです」

.....ってことらしい。

「おおお俺もそっち行きてえ...」

弟がぼそっと呟いた。

明日から春休み。

今度あかねたちに会うときは、俺たちは3年、こいつらは2年。

今までとはやっぱ違った雰囲気になるんだろうか。

「ヒビク先輩」

ヒカルがヒビクの袖口を引っ張った。

「先輩、いろいろとありがとうございました。また来年度もよろしくお願いします」

「お、おお...」

さっきまでの暴走魔が嘘みたく、ヒカルのしおらしい言葉にヒビクは照れたように鼻の頭をポリポリとやりながら答えた。

「おいおい、何だよヒカル、ヒビクにだけかあ？」

そんなヒビクを見てこっちが恥ずかしくなっちゃったもんだから、野暮なツッコミをしちま

った。

当然ヒカルは、

「ち、違いますよ！皆さんにです！」

と、真っ赤になって言い訳だ。

それを、柏木や松山ブラザーズたちが、そおかなあ〜？とか、愛がこもった言葉に聴こえたぜ〜、とか言いながら、チャウチャウのように鼻を膨らませてるヒカルをからかって遊んでる。

1年前の頃、こんなヒカルをからかって大喜びしてたのはヒビクだ。

あの時のヒビクは、それまで俺たちでさえも見たことがねえぐらいの無邪気なはしゃぎようだったぜ。

――ほら、また鼻が膨らんだ！おっ、今度はほっぺたも膨らんだ！風船みたいだねえ？

この1年でいつの間にかこうゆうヒビクが当たり前になり、今じゃ見慣れちまったけど――。

あっと言う間に駆け抜けて来た時間だったけど、その中に詰まってるものは計り知れないぐらい密度が濃い。

ヒビクにとっても、もちろん俺にとっても。

そんなことを思いながら、チャウチャウ化してるヒカルをぼんやり見つめてた時、耳を疑うような一言が投げ込まれた。

「ヒカル、明日、俺とデートしようぜ！」

言ったのはヒビクだ。

ヤツは大真面目な顔でヒカルを見てた。

「デ、デートおお？風間とヒカルがあ〜?!」

俺たちは顔を見合わせてボーゼン。

「明日10時に迎えに行く。寝坊すんなよ！」

ええっ?!とか、あの!としか答えられないヒカルのちゃんとした返事も聞かないまま、ヒビクはじゃあな、と手を上げて歩き出しちまった。俺たちもその後が続く。

しばらくして振り返ったとき、ぼんやりと佇んでヒビクの背を見送ってるヒカルと、そのヒカルの肩に手をかけて一緒にこっちを見つめてるあかねがまだそこにいた。

◇

駅前の、いつものビリヤード場。

5人だけでのお疲れさん会だ。

「今年にあんま出ねえなあと思ってたけど、最後にドカンとやってくれたねえ」

玉を付いてるヒビクの後ろに突っ立って、松山兄が呟いた。

「何が？」

ポカンと顔を兄に向けて言い返すヒビクに、暴走に決まってるんだろ、と答えたのは弟だった。

「別に、暴走したつもりはねーんだけど？」

普通に答えてヒビクはまた玉を付く。今ヤツは柏木とゲーム中だ。

「墨中でのアレとか、悪ガキのスカウトとか、ヒカルの日デートとか、あれは暴走じゃねえってんだあ？」

「全然？フツーだし」

「墨中のアレはいいとして、じゃあヒカルのソレってのは何？おめーら、そーゆーことだったわけ？」

兄のツッコミにヒビクはふふん、と鼻を鳴らして、

「お前と華蔵の滝の君の関係みたいのとは違うけどな！」

と、笑った。

「お、俺だってそーゆー関係じゃねーし！」

「ふーん、そう。でも、ちゅーぐらいはしてんだろ？」

俺の横にいた弟が反射的にギョッと背筋を伸ばしてそのまま凍結しちまった。

「し、してねーっての！」

固まった弟の肩が、今度はずーーんと沈む。

そーゆー弟もなかなか面白かったけど、

「ヒカル、言葉も出てなかったじゃん。デート誘うにしてもいきなりすぎたんじゃねーの？」

みんなの知らねえところでひとり心臓が口から飛び出しそうになっちまってる弟のために、話題を華蔵の滝の君からヒビクとヒカルに戻してやった。

「やっぱ、そう思う...？」

思う！と4人声が揃った。

やっぱ暴走でしょ、これも。

「デートしようぜって返事も聞かねえうちにそのまま来ちまうんだから、ヒカルぼーぜんと突っ立ってたぜ？」

「だって、ちゃんと迎えに行く時間も言ったし、俺...。マズかった？」

「別にいいんじゃない？おめーらふたりがそれで繋がってるなら」

と、兄。

ヒビクはまた鼻の頭ポリポリとやる。今になってやっと、自分がやらかした暴走に気づいたようだ。

こっちでは弟がこっそりと、……明日デートしようぜ…かぁ。あーやって気軽に告ればいいんだな…。で…あーでこーでぶつぶつ…… と、独り言を呟いてる。

「明日、ヒカルちゃんとどこに行くの？」

と、玉を付いてた柏木が言った。

これは俺も大いに気になるところだ。

「明日ねえ…」

ヒビクはファールをした柏木のあとに、鮮やかに9のタマをホールの中に入れて勝利を盗ってから、

「ジャックベリーって知ってるか…？」

と、唐突に言った。

ジャックベリーってのは確か…、

「おお、知ってる知ってる！頭が光ってるヤツだろ？」

兄が前髪をサーッと持ち上げて、デコをパンパン叩いた。

「ひ、光ってたかなあ…？」

ヒビクは目を上に上げ鼻をかく。

「太郎くんが言ってるそれは、ジャック・ニコルソンじゃない？『シャイニング』に出てた」

「そうそう！その『シャイニング』よ！光ってんだろ？な？ここがピカーッとっ！」

ほっとく。

「ピアニストだよな？ジャズの」

「そう。アメリカの。そのジャックが今来日しててさ…」

ジャックベリーって言えば、世界的に有名なジャズピアニストだ。改めて聴いたことはないけど、知ってる曲は何曲かある。

「ヒカルちゃんとジャックのコンサートにでも行くの？」

「まあ…、そんなところ」

ヒビクはニカッと笑った。

ずいぶん渋い趣味してやがる。

ヒビクがジャズピアノを聴くなんて今まで知らなかった。

まあ、でもありえない話じゃない。

けど、音痴のヒカルにジャズがわかんのか？

――ってな心配は野暮だな。

何にしても、コイツがヒカルをああやって堂々とみんなの前でデートに誘ったってのはすごい話だぜ。

たとえそれが暴走ついでの勢いだったとしても。

・
・
・

「うまいことやれよな」

駅までの道を歩きながらヤツに言ってやった。

「...そんなんじゃねーんだけどな...」

「あとでちゃんと聞かせろよ？」

「だから、そんなんじゃねーんだって、マジで...」

とか言いながらもヒビクは笑ってる。

嬉しそうに。

「終わっちゃったなあ」

ひとつの輝かしい時代――。

「でもまあ、俺たちの明日はこれからだってあるさ...ってな！」

ヒビクはそう言ってニカッと笑った。

「...だなあ！」

――俺の明日も、きっと...あるっ...さ！

「3年になったって俺は俺らしく暴れてやるぞお」

「頼むからおめーは少し落ち着いとけ！」

「それ、100%無理なんじゃない...？」

「おお、無理無理」

「マジ？3年になってもこれなんかよお...」

数歩後ろを歩いてくるブラザーズと柏木がごちゃごちゃ言い合ってる。

もう、西の空がほんのりと紅くなっていた。

そよぐ風は柔らかな春の匂いだ。

3週間後、再びこの道をコイツらと歩く時も、同じ風が吹いてりゃいいな、と思った。

— 高校 2 年編終了 —

朝、パラパラって音で目が覚めたら外は案の定雨一一。

一一ったく、またかよ、このクソ雨男がっ！

けど壁を挟んだ隣の部屋をにらみつけたところで曇った空が晴れるわけでもない。

「ありゃ、また雨か。んじゃ今日も普段どおりの授業ってわけね...」

ヤツは朝メシをかつ食らいながら呑気に言いやがった。

球技大会が雨のせいで流れて3日目だ。

「お前さ、自分が雨男だってことわかってないわけ？」

梅雨明け宣言は4日前に出た。本当なら球技大会はその翌日の3日前に行われるはずだったのに、その3日前から降り続いているこの雨は、雨男の太郎が降らせてるに決まっている。お祭り男ってあだ名がついてるくせに、昔から遠足とか運動会とか家族旅行とか、ヤツと共に参加する行事の時はだいたい雨が降る。

「何で俺が雨男なの！お前がそーなんじゃねえの？」

「いや！俺単独の行事の時は雨なんか降ったことねえし！」

小学校の時に入った少年野球団じゃ、前の日にどしゃぶりの雨が降ってたって翌日の試合は天晴れだったぜ。太郎が入ったボーイスカウトは、キャンプっていやあ前の日がカンカン照りでも当日は雨が降ってたけどな！

「けどよく降る雨だよなあ？梅雨明け宣言出たんじゃなかったのかよ...？」

一一だから、お前が雨男だからだろ！

世の中には理屈じゃねえオカルトじみたことがたくさんある。何かって時に雨を降らす雨男とか雨女ってのもそのひとつだ。そーゆー迷惑なヤツは確かに存在する。根拠なんてねえけどさ。

けど3日ってのは長い。確か去年の球技大会も雨だった。2日順延になって3日目に決行になった。今年はさらに1日延びてる。太郎の他にも強烈な雨男雨女がいるんじゃないだろうか。

一一はあ....。

昔っから双子のバカ兄貴に食われちまって己の存在をなかなか主張できない俺が活躍できるところっていったら、体力測定とか体育祭とか球技大会とか、とにかく体育に関するところしかねーからこっそり張り切ってたってのに、このまま雨が降り続いたら予備日も後が残ってねえから球技大会中止のまま期末試験だ。その前にはまたこのバカと一緒にムカツク権田の補習も受けなき

やなんねえし、高校2年一学期は、またまた俺は影が薄いまま地味～に終わっちゃうのね…。

「タロジロ！いつまで呑気にため息ついてんの！時間見てさっさと行きなっ！」

手にあった茶碗と箸をかーちゃんがパッパッと取り上げながら怒鳴った。

「やべっ！」

「怖えっ！」

慌てて家の外に飛び出して、俺たちはいまましい雨の中を駅に急いだ。

駅の階段まで来ると、ちょうどあっちから田村と柏木、通りの向こうから風間が走ってきた。みんな雨にズボンの裾を濡らして、田村なんかは傘を差してるのにシャツまで濡らしてる

。

「冗談じゃないぜ、この雨！今日も球技大会中止じゃん！」

恨めしそうに空を見上げた田村がハンカチで濡れた制服をぬぐいながらぼやいた。

「この調子だと球技大会はこのまま流れて終わっちゃうかもね」

と、柏木。

それもこれも、バカ太郎のせいだ、と、ヤツに睨みを入れながら心の中で毒ついたとき、

「梅雨明け宣言があった次の日に雨降らしちまうんだから、田村もすげえ雨男だよな」

と、風間が笑った。

「田村くん、雨男なの？」

「そういや、田村は中学の時から行事っていやあ雨降らしてたよな？修学旅行の時も2日間雨だったし…」

俺のにらみをかわしながら田村に責任を押し付けてる太郎だけど、たった今気がついた。

中学の修学旅行、あん時も2日雨だったんだ。

1日目の雨男は太郎、2日目は…、

「お前もかよっ！」

身近に雨男がふたりもいちゃ雨も降り続くわけだ。

けど、今回は3日。

あとひとり誰？

「俺が雨男なのかあ？これ、俺のせい…？」

と、田村はまた空を見上げた。

◇

「私のせいじゃないもん...」

「絶対にあんたっ！」

学校に続く道をみんなでぞろぞろと、一段と激しくなってきた雨に濡れながら歩いていると、後ろからそんな話し声が聞こえた。

「私が雨女だって証拠でもあるの？」

「証拠なんてないけど、あんたの辛気臭さがここぞって時に雨を降らすのよ！」

「う...、それあんまりだよ.....」

かなりあんまりなこと言ってるんじゃないか？

オトモダチに向かってずいぶんキツイこと言う女の子だ。

.....と、こっそり振り返ると、赤い傘の中でしょぼんとうつむいてるのは、

「あかね...？」

「あ。ジロ先輩たち...」

傘の下で顔を上げたのは我が軽音楽部の可愛い新人部員、水沢あかねちゃんだった。

で、あかねにキツイ言葉を浴びせていたのは、たまに牛乳屋で会う芸能人みたく整った顔立ちをしてる、確か麻耶ちゃんとかって言ってたか....。

あかねと麻耶ちゃんは、小走りに俺たちに近づいてきて、

「おはようございます」

と、あいさつをしてくれた。

前を歩いていた田村と風間が立ち止まって振り返り、

「おお、あかね」

と、いつものように偉そうに先輩ぶって答えたりして。

「私が雨女だから雨が降るんだって麻耶ちゃんが苛めるから、田村先輩のどこ行っちゃおう...」

あかねは麻耶ちゃんを恨めしそうに見つめて田村の元に逃げて行った。

「あれ？あかねも雨女なの？俺と一緒にじゃん」

って、田村のヤツ、あかねを励ましたつもりみただけど、

「え？田村先輩も`雨女、なんですか？」

っていう、あかねの天然ボケに足元から萎えちまったようだ。しばらく口を開けて絶句してやがった。

あかねが雨女だっていうのはさっきの麻耶ちゃんとの会話を聞いた限り、半分は濡れ衣って気がしないでもない。けど、麻耶ちゃんが俺と同じように球技大会に張り切ってるんだとしたら、この降り続く雨を誰かのせいになすり付けて八つ当たりしたいって気持ちもわかる。3人目の雨

女はあかねってことで俺もなすり付けちまおう。

「今日で3日目ですよ。朝見た天気予報じゃ明日も雨マークがついてた」

麻耶ちゃんは誰に向かって話すわけでもなく、真っ直ぐ前を見据えながら呟いた。

「...そう...なの？」

「あたし、球技大会とか体育祭とか部活の大会とかが楽しみで学校来てるのに...っ」

はっ...

この子もしかして俺と同種の間人か？

「このまま流れて期末なんていったら絶対に不完全燃焼...」

「...そうだよなあ...」

と、大いに同調するけど、麻耶ちゃんは決して俺に向かって話をしてるわけじゃなく、顔をあげて前を向いたまま、まるで独り言のように喋ってるだけだ。

何か不思議な子だ。

ほんと、芸能人のよう。

ここにいるけどここにいない人って感じ。

ま、俺の存在感が薄いだけかもしれねえけど。

けど、そんなことよりも明日も雨なんじゃ、球技大会は完全にお流れじゃん。

「つまんねえの...」

つい言葉に出ちまった。

すると、

「先輩は何の種目に出るんですか？」

麻耶ちゃんが言った。

「...俺のこと？」

完全に麻耶ちゃんのアウトオブザ眼中にいたと思ってたからちょっとばかり驚いて聞き返すと

「は？」

麻耶ちゃんは俺を眼の中に入れて、`何言ってるんですか？、みたいな顔をした。

「お、俺は...ハ、ハンドボールだけど...」

いきなりそわそわ落ち着かねえ...！

麻耶ちゃんに見つめられて、さっきまでのフツッだった自分のやり方がわかんなくなっちゃまった。

「あたしもハンドボールなんです」

麻耶ちゃんは白い歯を見せてキリリと笑う。

「...そ、そう...な、なの...ね？」

——そうなのね、ってどうなのよ！？

何、わけわかんない日本語喋ってるんだってば、俺！

しかも、どもってるし！

考えてみれば、これほどの美人な子を目の前にして喋ったことなんて今までの人生の中で初めてのことだぜ。

——ってというか、今の状況、これ何！？田村と風間があかねを真ん中に挟んで5メートルぐらい先を行き、そのすぐ後ろを柏木と太郎がつつきあいながら行き、3メートルほど間があいて俺と麻耶ちゃんが並んで歩いている...、ようするにツーショットになってるぜ？！

やべーやべー。

こーゆーシチュエーションには慣れてないから超苦手。気がつかないやよかったぜ。

「このまま流れちゃうなんて悔しいですよ？先輩、何とかならないんですか？」

麻耶ちゃんは怒ったように言った。

俺だって何とかしてやりてえよ？けど、雨のヤツ、ますます激しく降ってきやがった。

「ムリみたいだねえ...」

ああ、何も出来ない俺が情けない。

.....ってか、そーじゃないだろ。球技大会が中止になるってのがつまんねえだけだろ、俺は！

いつの間にか麻耶ちゃんのヒーローにでもなろうとしてる自分に腹抱えて笑いたくなくなった。

「あかねのせいだ〜！」

麻耶ちゃんは5メートル先のあかねに向かって叫んだ。

あかねが振り向いて、

「あたしじゃないもーん！」

べそかきながら言った瞬間、雨の強さが増した。

「.....やっば、あかねなんじゃん...？」

風間と田村が声を揃えて呟いた。

◇

午後からは雷まで鳴り始める始末。

さっきセンセが言ってた話によると台風が西のそっちまでやって来てて明日は日本に上陸するかもなんだと。

雨男雨女が3人も揃っちゃ台風まで呼んじゃうってわけね。強烈だわ、ほんと。

こうなっちゃったら球技大会は台風が消えるかそれるかしない限り99%中止だろう。

3日前から球技大会仕様になってた俺の体は、ここで一旦溜まったエネルギーを放出しねえと収まりがつきそうになかった。このままの状態じゃギターなんか弾いてらんねえぜ。

で、放課後、バスケでもやらせてもらおうかと体育館に行ってみたら、元彼女の河本美紀が、今の彼氏のOBといちゃいちゃ話してるところを見ちまって胸くそ悪くなった。

——あんな男のどこがいいんだべ？

.....バスケで発散するのはすごすごと諦めて、中二階に行くと剣道部がいた。

剣道ってのはやったことないけどストレス発散にはいいかもしれねえ。部長やってる立松は同じクラスだし、

「ちょっと俺にその竹刀振らしてみ？」

と、声をかけると、

「防具つけてやってみる？」

なんてありがたい言葉をかけてくれたんで、さっそく防具を借りてつけてみた。

「これやってれば剣が当たっても痛くねえんだろ？」

って言ってる側から立松は俺の面に竹刀を思いっきり当てやがった。

「いてえっ！」

「防具つけてたって打たれれば痛いさ。どう？俺と勝負してみる？」

勝負してみる？って言われていやだとは言えねえよな？

けど、痛いのはごめんだ。

ってことは打たれなきゃいいわけだ。

「受けて立つっ！」

「先輩、やめたほうがいいですよ、立松先輩強いですから！」

女の子が止める声がして振り向いてみたけど、面だらけのヤツらの中の誰が発した言葉だったのかわからなかった。

——立松、強いんかよ...？

でも、もう後には引けない。やるしかない。

負ける気がしねえっ！！ちょっとビビってるだけで...っ！

「おりゃあああ〜っ！！」

勢いよく踏み込んで、球技大会仕様になって有り余ってるエネルギーを剣先に集中させ、一気に攻め込んだ。

一面っ……と見せかけて、
「…胴っ！！」

入ったっ！？
もしかして俺の勝ち？
ありゃ、強い立松くんに楽勝しちゃったじゃん！

「何なの、お前…？」

面を取りながら立松が呆けた顔をして言った。他の連中も面をつけたまま呆然としてるのがわかる。

「先輩、凄い…！！」

たぶん、さっきの女の子だ。手を叩いてくれている。

はっ！気分爽快！

「存在感は薄いけど運動センスはピカイチなのよん！おっほっほっ！」

剣道部部長に勝っちゃったんで気分よくなった俺は、ようやく軽音楽部に出る気になった。

◇

「おせぞ、次郎！どこに行ってやがった」

音楽室に入った途端、太郎が喚いた。

「お前のおかげで球技大会できそうもねえから、ちょっと体動かして来たんじゃない！」

「俺のおかげってどういうことよ！？俺のおかげって！」

「雨男の太郎のおかげってことだろ！」

「太郎が雨男って！？俺のせいじゃねーの?!」

すっとなきような声をあげたのは田村だ。

バカ正直な田村のことだから、降り続いている雨は自分のせいだって責任感じてたんだろう。

「私が雨女じゃなかったんですね!？」

続いてあかねだ。

「田村やあかねのせいだけじゃねえってこと！太郎も見事な雨男だったのよ」

で、ここからはバカ太郎が喚き出し、いつもの展開になる。

「たかが球技大会で大騒ぎしやがって、この体育バカがっ！」

「うるせーっ！お前なんか体育もつかねえただのバカだろっ！」

やれやれ、といったため息が周りから聞こえた。

ほんと、この兄貴と一緒に俺までバカをさらすはめになっちまう。体育会系の硬派って言わ

れてた頃もあったってのにさ。

こんな様子をもしも麻耶ちゃんが見てたらなんて言うだろう。きっと、今朝あかねに吐いてた以上のシビアな言葉が飛んできそうだ。

「ちょっと先輩たち？さっきから話を聞いててわからないことがあるんですけどいいですか？」

俺と太郎の間を割って入ってきたのはヒカルだった。

「雨男とか雨女とか明日も球技大会が中止ってどういうことですか？」

ヒカルはまじめな顔をして首をかしげてやがる。3日前からのことを順を追って話してやると

、
「それってずいぶんネガティブな考えですよねぇ～」

と、呆れた口調で言った。

「ネガティブも何も、台風なんだからしょーがねーだろよ」

「そんなの、てるてる坊主を作れば解決ですよ！」

——てるてる坊主だぁ？！

「てるてる坊主で天候が決まるんなら気象庁のヤツらも楽だろーぜ？」

「そーゆーネガティブな気持ちがいけないんです。もっとポジティブに行きましょう？」

ヒカルはカバンの中からルーズリーフを取り出すと、みんなに紙を配りながらてるてる坊主を作れと言う。

白い紙を持ったまま半ば呆気にとられてた風間が、

「案外晴れるかもしれないぜ？」

と、ニヤニヤしながら早速てるてる坊主を作り始めた。

「こんなんでもう？」

「なんか...いびつですねえ。ヒビク先輩、てるてる坊主作ったことないんですかぁ？」

ヒカルは風間が作ったてるてる坊主を笑い、いびつな頭になっこりマークの顔を書いた。

田村やあかねも風間が作った手順で同じように作り始めたんで、俺も真似しながらやってみた。

出来上がった7つのてるてる坊主たちに、ニコニコお目目やあっかんべーやいろんな顔を書いて、そいつらを音楽室の窓の外に並べてつるしてみると、

「アッパレって感じだなあ...」

という風間の言葉どおり、外は大雨だったのに何かこう、心の中がポジティブになったっていうの？明日がたとえどしゃぶりだったとしても笑って許せちゃうような気になってるのが不思議だった。

「この子たちが明日はきっと晴れにしてくれますよ！」

っていう笑顔のヒカルも、このてるてる坊主たちと一緒につるしたいぐらいだ、って思ったら

、「お前もここにぶら下がってるよ？そうすりゃ完璧！」

と、ぬかした風間の背中がバシンッと叩かれた音が、激しく窓を打つ雨音よりも大きく音楽室に響いた。

そして今日――。

体育バカな俺はしっかり活躍してます。

A組C組と対戦、速攻速攻で攻めに攻めてもちろん勝ち進み、今の時点で得点王は確実。

そして決勝戦。

「ジロ先輩、がんばってください～いっ！！」

聞きなれない黄色い声援に顔を向けると、そこで俺を応援してくれていたのはなんと！！

「まままま麻耶ちゃん！？」

なんで麻耶ちゃんが俺に声援を！？

声援だけじゃなく、手まで振ってくれちゃってるしい！

しかも、ニコニコ笑ってくれちゃってるしいっ！！

声援に応じて手を振り返すと麻耶ちゃんは恥ずかしそうにうつむいた。

どどど、どうして！？

わけわかんねえけど、今現在この時、麻耶ちゃんのインオブザ眼中になってるってことだよな、俺が！

昨日はあんなにアッサリしてた麻耶ちゃんが、何で今日は「ジロ先輩、名指しで手を振ってくれてんのかわかんねえけど、この展開って今日だからこそだよな？もしも4日前に球技大会が予定通り行われていたら、昨日ツーショットで麻耶ちゃんと話すこともなかったんだからさ。

って―ことは、雨男雨女さまさまじゃない。

そして今日って日を無事に迎えさせてくれた、7つのてるてる坊主たちも！

――もしかして俺もやっと、体育以外で活躍する場が出来たのかぁ？

降り続いてた雨がウソのような、今日の空は台風一過の青空。

そしてそこにはこの青空と同じように澄み切ったキミの笑顔が...って、あれ？麻耶ちゃんもう

いねーし....。

.....どうせなら決勝戦最後まで見てくれりゃいいのに、やっぱりアッサリしてる人なのね。

まあいいさ。

何かが始まる予感がするぜ？

何だかいい感じじゃねーの？

——ふと、ナナメ上を見上げると、音楽室の窓にぶら下げた7つのてるてる坊主たちが、いろんな顔をして笑ってやがった。

了

—うるさい小早川。

—怖い小早川。

—無敵の小早川。

……ってというのは、どうしてだか高校生になってからあたしについた代名詞だ。

うるさいって言ったのは松山ブラザーズ。

怖いって言ったのは田村くん。

無敵って呼んだのは風間くん。

1年生の時にあいつらバカボーイズと同じクラスになってしまったばかりに、あたしの高校生活は素敵なねずみ色になってしまった。

学校の中でも派手さと鮮やかさで目立つあいつらが、揃いも揃ってうるさい怖い無敵を連発してくれちゃったもんだから、クラスのみならず他のクラスの人たちまでもがそれに引っ張られ、あたしを`無敵の小早川環、と呼ぶようになって1年半。

確かにあたしは優しくないし、性格もキツイほう。

けど、無敵ってわけでもないから、あいつらにそう言われるたびにかなり傷ついた。ちょっと見てただけで睨んでるって言われ、ちょっと意見しただけで怖いって恐れられて、まるで化け物扱い。だから尚更、あいつらには口うるさくなってしまった。時々自分でも小姑みただって思ったぐらいだけど、バカボーイズの顔を見たり声を聞くと文句が言いたくなるのは、身についてしまった条件反射だから仕方ない。

2年生のクラス替えで約一名を除いたあいつらとは離れられたけど、`無敵戦隊小早川環、という代名詞はそのまま持ち上がって、悲しいかなその約一名と共に前期の中央委員に選ばれてしまったのよね。

それもこれも全て！

—あいつらバカボーイズのせいだ。

あいつらにさえ出会ってなければ中央委員なんて面倒な仕事を押し付けられる無敵な小早川環じゃなかっただろうし、あたしだって素敵な恋のひとつでも楽しんでいる明るい高校生活を送っていたかもしれない。

…とは、ちょっと前まで思っていたことだけど、今は身近に4人もいたバカボーイズがひとりに減ってくれただけでもありがたいと思わなきゃバチが当たると考えられるぐらいに成長できた。

みんなは未だにあたしをうるさいとか怖いとかって煙たがっているみたいだけれど、だからこそあたしはフツーでいたい。もう、必要以上にイライラしたり傷ついたりするのは疲れたわ。無

敵戦隊小早川環は戦うことを廃業します。

――ってというか、最初から戦ってるつもりなんてこれっぽっちもなかったんだけど...!

これを考え出すとにわとりが先かたまごが先かになるからもうどうでもいい。

とにかく穏やかに、出来れば楽しく、あとの高校生活をやっていこう。まだあたしの高校生活は半分あるんだもん!

・
・
・

と、1年半かけてやっと爽やかに心を入れ替えたところの環ちゃんだけど、中央委員の我が相棒は新学期からため息ばかりだ。

相棒――って呼ぶのにはちょっと抵抗もあるけれど、とにかく、あたしと一緒に中央委員を押し付けられた `約一名、田村くんがこんなにも意気消沈しているというのも珍しい。

体育祭文化祭が近いから今年もきっと去年と同様発表会を催すであろう軽音楽部、もとい、ブックキャスル――このユニット名は密かに笑えるんだけど――は、夏休みの間も毎日のように練習していたようだし、何かそういうことで疲れが出ているのかもしれないけれど、それにしても田村くんらしくない沈み方だ。

新学期が始まって二週間が経ったっていうのに、そして今日は青空の下で山登りな校外学習だというのに、今日も田村くんは朝からずっとどんよりしたままだ。

たとえバカでも、いつも明るく元気な人が暗いとその様子が妙に浮く。それが長いと側にいるこちらまで気持ちが沈む。どうしちゃったのか気になるけれど、訊いたところでたぶんあたしに出来ることは何もないから詮索はしていない。

「...じゃ、あたしはみんなと行くよ?」

いよいよ登山開始の時、あたしは田村くんを振り返って言った。

「おお。山頂でな」

心ここにあらずといった感じでも、とりあえず中央委員としての仕事はやってくれた田村くんはそう言って手を上げてくれた。

あたしたちが大変だったのは、今日の日のための準備に奔走していたここまでのことで、あとは山頂に着いたみんなをまとめる仕事があるだけ。ここからはグループに分かれた生徒たちそれぞれが自分たちで決めたコースを時間内に山頂まで登っていけばいいことだ。

あたしのグループはもみじがキレイっていうコースを選び、田村くんもクラスの男子とグループを組んで清流沿いに行くコースを選んでみた。けど、登山口でもう一度振り返ると、風間くんたちバカボーイズと合流した田村くんが見えたから、きっと班を無視して彼らと一緒に行くのだ

ろう。中央委員のくせにそれでいいのか、という野暮は言わない。そういうことを無駄にツッコミすぎてきたおかげで、それが全部あたしの疲労に跳ね返ってきただけの今までだったから、ちゃんと教訓にして身に染み込ませている。

青空の下で曇り空な田村くんのは気になるけれど、これ以上心配していても仕方ない。あたしはあたしでもみじを楽しむことにした。

――がしかし。

9月の半ばじゃもみじなんてあるわけもなく、ただうねうねゴツゴツと険しい道が延々と続く山道には辟易した。

体力の乏しいあたしは、登って30分で既に息切れ状態。

班のみんなは先を急ぎたいらしく、お喋りもしないでサクサクと登っていく。そして、ちょっと行ってははあはあしているあたしを振り返って、一応そこで足を止めて待っていている。

環ちゃん、遅い。

言葉には出さなくても、心の中でそう言ってるのが聞こえるようだ。

2年生になって同じクラスになった、それほど仲がいいわけでもない班のみんなに迷惑をかけちゃってる自分が悔しい。これが雪乃や桂子ちゃんだったら、

ほらほら環のどんくさ！早くしないと置いてくよっ！って、あっけらかんと言ってくれるだろう。それに対してあたしは、待っててよ！ケチッ！って気兼ねなく言えるんだけど――。

「先に行っちゃっていいよ？あたしはゆっくり登っていくから」

「そう？じゃあ、環ちゃんはゆっくりおいで」

……う？そうなの？

やっぱりあたしがお荷物だったのね…。

でも、そうとわかればかえって気を使わなくていいわ。

「…じゃあ、山頂でね」

みんなは先に行き、あたしもトボトボと山登りを再開した。

すぐにみんなの背中は見えなくなって、後ろを振り返っても、のんびりと景色を楽しみながら登山をしているおじさんおばさんばかりで、もう本城高校生は登ってこない。

青空の下、緑が茂る9月の山の景色はとっても魅力的なんだろうけど、山頂についたらみんなをまとめなきゃいけない中央委員が一番遅くちゃ洒落にもならないから、景色なんて見てる余裕はない。校外学習の目的っていったい何なんだろう…と、ちょっぴりやりきれない気分になりながら、あたしはひたすら山頂を目指して登った。

ドドピカッゴロゴロッ！！

突然の、空が割れるほどの雷に足がすくんだ。

見上げた空は青空だ。でも、遠くの方からは真っ黒な雲がこっちに向かって近づいてくる。

「こりゃスコールが来るぞ...！」

後ろから登ってきていた人たちが次々とあたしを追い越して行った。山の天気は変わりやすいついて聞いていたけれど、まさかこんな青空が？

とにかく、あたしも先を急ぐことにした。

◇

最初のドドピカッ！から5分ほどで大粒の雫が落ちてきた。

まだまだ山頂は遠いようだからあたしは先に進むことを諦めて、ここで雨宿りをすることに決めた。これがスコールなら一時的に降るだけでしょう。だったらかえって動かないほうがあたし自身のため...

大きな枝が茂った木の下に避難するとすぐに嵐になった。

雷はあっちこっちで大暴れ。濁流が上のほうから轟々と流れてくる。

枝と葉っぱに守られているからここにいれば濡れになることはないと思うけれど、雷って木に落ちることもあるよね？濁流に飲み込まれちゃうってこともあるよね？そう思ったら、あたしの足はガクガクと震え出した。雲の流れは速かったからこのスコールもすぐにどっかに行っちゃうはずだって明るく考えようとしても、真っ暗になっちゃったこの場所と暴れる雷と降りしきる強い雨の中にたったひとりである現実から意識を別のところに逃避させることが難しい。

ついさっき、先を行ってしまった班のみんなの背中が目に浮かんできてせつなくなった。

何であたし、こんなところに一人でいなきゃならないんだろう。ここまでの準備、けっこう大変だったし、あたしはかなり頑張ったと思うのに神様はとっても意地悪だ。考えてみれば、こんな風に貧乏くじを引くようになってしまったのも高校に入ってからだ。

「あたしは無敵なんかじゃないぞおおおっ！雷は嫌いだしひとりぼっちも嫌いなんだぞおっ！」

空の上にいるであろう神様だか雷様だかにむかって大声で叫んでやった。どうせ誰もいないんだし、いたとしたって嵐の音で声なんて消されちゃう。気を紛らわすのに大声を出すのはちょうどいい。足はガクガク震えたままだし、お腹もすいてるから力が入らないけれど、

「神様の意地悪！天気のパカ！高尾山なんて大嫌い！」

心細さに負けないように、思いつくままの言葉を叫んだ。

けど、出てくる言葉は八つ当たりの文句ばかりで叫びながらだんだん自分が惨めになって来た

もう、叫ぶのもじたばたするのもやめてこのまま嵐が去るのを静かに待つことにする…。

……小早川っ！

どこかで名前を呼ばれた気がしてハッとしたけれど、こんな時にこんなところで誰があたしを呼ぶというのだろう。心細さのせいで幻聴が聞こえたみたいだ。しかも、田村くんの声に聞こえたなんてあたしもかなりおめでたい。田村くんとはコースも違うんだし。

——田村くんは雨が降り出す前に山頂につけたのかな…。

田村くんもけっこう貧乏くじを引くタイプだから、このどしゃぶりに当たっちゃったかもしれない。

1年の時のHR合宿では、知らない女の子のために湖にまで飛び込んだけどあれにもしっかりオチがついてたし、学校を抜け出そうとしてポッターにみつきり、風間くんたちのダシになってひとりだけとつかまってたこともあったし、バカボーイズたちがよくやってくだらない賭けや競争ではいつもアイスとかジュースのおごり役に当たっちゃってたし、牛乳屋のおばちゃんの長話につかまっちゃうのもいつも田村くん。

ついてねえ！って喚いてたけど、田村くんの貧乏くじの引き方はあたしとは違う。ついてねえ、の言葉の下には毒なんてひとつもない。

貧乏くじを引きながらいつも青空。

それが田村くんって人だ。

なのに——。

一瞬のスコールだったらまたすぐに晴れるからいいけれど、雲がかかったままだやるせない。田村くんの青空に雲をかけている、あのため息のモトは何なのだろう…。物？事？それとも人——？

きゅっと心が鳴って、胸の奥でポツカリと穴が空いた。

こういうこと、1年のときからけっこうあった。

この、きゅっと、一緒に浮かび上がるポツカリとが合図になってあたしは無敵の小早川に変身してた気がする。

「…田村くん——っ」

あれれ？

声を出して名前を呼んだらいきなり涙がこぼれた。

いったいなんなの、これ？

わけがわからないけれど、いいや。このまま泣いちゃおう。

これも気を紛らわせるアクションのひとつだ。どうせ誰も見てないんだもん…。

零れてくるものは自然に任せた。

目から出てくる涙もここで降ってる雨も水に変わりはない。

第一なんで泣いてるのか自分でもわかんない。

轟々と降り続く雨は頭の上の葉っぱを鳴らし、その隙間から零れてあたしのウィンドブレーカーにパラパラとあたる。

枝は時々溜まった水の重みでなのか激しくしなって枝の先の地面に真っ白な水の霧を落とす。

そういう自然の現象を、ただ見て聞きながら、あたしはずいぶんの間、感情がわからない涙を流してた。

そんなとき、突然に。

——うるさい小早川。

——怖い小早川。

——無敵の小早川。

あまのじゃくな小早川環——。

うるさく言うのもおっかなく睨んじゃうのも無敵になっちゃうのもあまのじゃくだから。

高校に入って田村くんと出逢ったからあたしはあまのじゃくになっちゃったんだ。

ぽろぽろ零れてくるこの涙は悔し涙だ。

——だって、田村くんはあたしのこと好きじゃないんだもん。

なのに、あたしだけこんなに——。

今、突然降ってきた答えはあたしにとっての青天の霹靂だった。

きゅっと同時に浮かび上がる感情は疎外感だ。

あたしは、うるさくて怖くて無敵だから。

そういうあたしにうんざりしている田村くんだから。

だからあたしは……、

.....小早川〜っ！！

また田村くんの声の幻聴だ。

もしかしたらこのまま会えないからなのかな？

きっと今、一番会いたい人が田村くんだからだ。

雨は全然止まないし、雷も濁流もさっきよりひどくなってきた。

あたし、このままスコールに流されちゃうか雷に打たれるかするのかも.....。

ぞわっ...と身体が震えて、足元を勢いよく流れていく泥水から視線をふと目の前に向けたとき、そこにいるはずもない人の影が見えた。

「...田村くん？のわけないか...」

降る雨と跳ね上がる水しぶきの中にその人は立っている。

あたしが着てるのと同じエンジ色の学校ジャージを着て、ひよろっとした長身はどう見ても田村くんに見える。

幻聴の次は幻覚か？と、何度も目をこすったけれど、その人はそこから動かないし消えもしない。どしゃぶりに打たれ、轟く雷に時々耳を押さえながらすぐ目の前にいる。

田村くん...なのかな？

だとしたら、何でここにいるの？

コースは違ったはずだけど...？

「小早川〜っ！！」

すぐ目の前にいる田村くんが、大音量で叫んだ声は幻聴なんかじゃなかった。

「田村くん！」

あたしはすぐさま返事を返した。

田村くんは一瞬、雷が鳴った時のようにピクンッと肩を震わせてからこっちを見た。そして、すぐにあたしを見つけて駆け寄ってきた。

「小早川？」

怪しいものでも見るようにして田村くんは茂みの下にいるあたしを覗き込んだ。田村くんの髪からは雨の雫が滴り、ジャージは湖にでも飛び込んだかのようにびしょ濡れだ。

「ずっとここにいたのか？」

「うん」

あたしはというと、雨が降り出す前にウィンドブレーカーを着てここに潜り込んだから足以外はそれほど濡れてはいない。

「そっか...」

田村くんはそう言うと力が抜けたように、濁流の地面にドッカーリと座り込んでしまった。

そっと肩に触ってみたけどちゃんと感触があったから、これは本物の田村くん間違いなし。

「大丈夫...？」

びしょ濡れの田村くんを見たのはこれで二回目だ。

湖に飛び込んだあの時は腹が立って腹が立って仕方がなかったけれど.....

「これ、使って？」

自分のリュックの中から濡れていないタオルを出して田村くんの頭の上に乗せてあげたら、田村くんは何か言いたげな顔であたしを見上げた。

「...なに？」

「いや...」

頭の上のタオルを手にとって、田村くんは濡れた自分を適当にぬぐう。

「それじゃダメだよ、風邪引いちゃう。体操着ぬいで絞らなきゃ」

「...あ、ああ...」

「あたしが絞ってあげるから、田村くんは身体をちゃんとふきな？」

「お、おお...」

どこか歯切れが悪い田村くんが気になったけど、今はそんなことよりも滴ってる水を払わなきゃ本当に風邪を引いちゃう。田村くんってこう見えてよく風邪引く人で、あたしは今まで何度もくしゃみを飛ばされてる。

たっぷりと水を含みきったジャージを絞りながら、

——やっぱり田村くんも貧乏くじ引いちゃったんだ。しかもあたしよりひどい貧乏くじ。このジャージ、雨が上がったとしてもきっと乾かないだろう。帰りのバスはきっとシートもぐしょぬれになるな。バス会社の人、いやだろうな——。

なんてことを思ってた。

「田村くんのウィンドブレーカー役に立たなかったんだね」

「これは柏木に借りたんだ。俺は持ってこなかったから」

「そうなんだ。でも、柏木くんは...？」

何で一緒じゃないんだろう？

田村くんにウィンドブレーカー貸して、自分は先に登っちゃったとか？

でも、あのバカボーイズならそれもありえるかも。

これ貸してやるから田村はゆっくり登って来いよ、なんて、置いてきぼり食らっちゃったのかな。

「あいつらは上で待ってる...」

ほら、やっぱり。

「あたしもみんなに先に行ってもらっちゃった」

ジャージを田村くんに返し、次に髪を拭いたタオルをぎゅっと絞りながら、神様もそんなに意地悪じゃないかも...って思った。

でも、

「あ、あのさ、小早川。自分のことは自分でできっからもういいよ」

と、田村くんにタオルを持つ手を掴まれた。田村くんの手はあたしが手伝うのを拒む強さがあった。

——うるさい小早川。

——怖い小早川。

あたしに与えられた代名詞を思い出し、いきなり現実に戻された。

いつも感じるきゅっと疎外感。

こんなおせっかいは田村くんにとっては迷惑...だね。

「あ...、うん。わかった」

あたしはすぐさま手を引いたけど、心の中でシャボン玉がぱちんと弾けたような気がした。

雨は止まない。

辺りはまだ薄暗くて、とても午後1時過ぎには思えない。

本当なら今頃は山頂でお弁当を食べてる時間だけど、他のみんなは濡れずにいるのだろうか。

「雨、やまないねえ...」

ため息が漏れた。

田村くんに掴まれた腕がじんじんしている。そんなに強く掴まれたわけでもないのに、その痛みは腕から心臓に伝わってくる。

また、涙が込み上げてきた。

さっきと同じ悔し涙...だろう。

でもこれはもう慣れっこになってしまってる感情だ。

なのに、さっきよりも胸が痛いのは何でかな。

「何で班のヤツら先に行かせたりしたんだよ？」

ずっと黙ってた田村くんが突然言ったから、あたしは喉につかえていた涙のカタマリをゴクリと飲み込んだ。

「何でって...」

そんなの今はどうでもいいことなのに。

「...あたし登るの遅いし、みんな早く山頂に行きたいみたいだったから」

ただ、それだけだよ。

「あいつらがそう言ったのか？早く山頂に行きてえんだけどって、お前に言ったのか？」

田村くんの言い方は怒ってるみたいだった。

あたしはわけがわからなくてちょっと戸惑った。

「言っていないよ？でも、一緒にいればわかるもん」

環ちゃん遅いよって言葉がみんなの背中から聞こえたし、実際あたしは遅かったし。

「先に行ってもらって正解。あたしと一緒にいたら今頃みんながここにいるハメになってたもん」

もしそうなら、あたしはもっと居心地が悪かったから、本当にこれでよかったと思っ
てた。

でも、

「いーじゃねーか、それで。ひとりでいるよりみんなの方がいいじゃねーの」

と、田村くんはまた怒ったように言った。

何でこんなことで怒ってるんだらう？

「やだよ。みんなに迷惑かけたくないもん」

あたしのせいでみんながここに取り残されてたら、あたしの代名詞がまた増えちゃう。

田村くんは何かを言いたげにあたしをじっと見た。

そう言えば、さっきからずっと田村くんはこんな顔をしている。何か言いたそうで、言葉を探
しているみたいで。

「...何が言いたいの？」

いやその...、と田村くんは口ごもる。

とっても歯切れが悪い。

そんな田村くんの様子にあたしはまたきゅとなった。

田村くんはどうしてここにいるんだらう？

コースも違ったはずなのに、柏木くんのウィンドブレーカーを借りてたったひとりですぶ濡れ
になってそこであたしの名前を――、

あれ...？

何であたしを呼んでたんだらう？

「んじゃ、俺がお前を探してここに来たのも迷惑かけたって思ってんの？だから俺のことばっか
気にしてんの？」

田村くんの言葉はあたしの全身を貫いた。

探しに来たって...？

あたしのことを――？

「迷惑かけたって別にいいじゃん。俺なんかいつもお前に迷惑かけてるし」

ちょっと、待って。

そんなことよりも、田村くんはあたしを探しに来てくれたの？

柏木くんたちに置いてかれちゃったわけじゃないの？

何がなんだかわからなくなっちゃったけど、田村くんはあたしの名を呼んでいた。

最初は幻聴だと思ったあの、小早川～っ！っていう叫び声は、あたしを探してくれていた声だった。

「うん…。迷惑かけられてるよ。ずっと…」

1年のときからずっと、迷惑のかけられっぱなしだよ。

田村くんのせいで先生とか委員会の先輩とかに何度怒られたか知れないし、何度フォローしてあげたかわかんない。

でも…、

「――でも、イヤじゃないよ？田村くんに迷惑かけられるのイヤじゃない」

あたしは…、

「田村くんのこと好きだから、いくら迷惑かけられてもイヤじゃないんだ」

でも、田村くんは……、

こんなにずぶ濡れになったのはあたしのせい？

だから、田村くんはさっきから歯切れが悪く、怒ってるの？

恐る恐る田村くんの顔を見ると、ハトが豆鉄砲を食らった、って表現するような顔をしていた

。

目を真ん丸くして口をぽかんと開けて。

「…何、その顔？あたし、変なこと言った？」

たった今自分が言った言葉の残響を聞こうと耳を澄まして――、

――きゃあっ！！

変なこと…言った！言っちゃったよ！！

すごい変なこと言っちゃったよ！どうしようっ？！

焦って慌てて次に繋げられる言葉を捜した。

あたしは田村くんが好きだから――って、好きなのか！？――この次に繋がる言葉、言葉、言葉は…？！

気がつくと、雨はいつの間にか止んでいた。

雲が晴れ、空は再び青空が広がりつつある。

「雨止んだね。よかったあ……」

――ってなことで誤魔化してる場合でもない。

とにかくパニックになりかかっている自分を必死に沈め、冷静を装って、

「で、でもね。みんなはあたしのこと好きじゃないから」

と、繋げた。

これは嘘じゃない。

「委員会のみんなも、クラスのみんなもあたしのこと、小早川怖い、って煙たがってる。だから迷惑はかけたくないの。悔しいもん」

これも嘘じゃない。

みんなにも、そして田村くんにも疎まれてるからこそ、あたしは自立していきたい。誰にも迷惑なんてかけたくない。

――そう、いつも思っている。

……うまく、繋がったかな…？

そーっと田村くんの顔を見た。田村くんは、

「頼りにされねえのは哀しいぜ？」

と、呟いた。

「…え？」

いまいち話がかみ合っていない気がするけれど、それは当たり前だ。

あたしと田村くんでは気持ちの居場所が違う――これはあたしもさっき気がついたばかりだけど――から。

でも、とりあえず暴走した言葉のフォローにはなったみたいで、田村くんの豆鉄砲顔は治っていた。

「委員会は12人、クラスは40人、2年生は250人もいるんだぜ？そいつらみんながお前のこと煙たがってるかよ？」

たぶん、田村くんやバカボーイズはもちろんのこと、4分の3の人たちはそうでしょう。それほど、無敵の小早川などなどのレッテルは重いだよ。

――ってというか、それって田村くんたちバカボーイズのせいなんですけど…、という突っ込みは飲み込んだ。

「…俺はおっかない小早川じゃねーと調子出ないの」

やっぱり…話が全然かみ合っていないよ。

おっかないあたしじゃないと田村くんの調子が出ないってことと、頼りにされないのは哀しいってことのどこに繋がりがあるんだろう？

「このところの物憂げな小早川さんじゃかえって変な気分だぜ」

——はあ?! 何言ってるの?! もう、めちゃくちゃ!

「物憂げ? あたしが?」

あたしのどこが物憂げなわけ!? さっぱり飲み込めません。

「他のヤツらにどーとは言わねえけど、俺に気を使うなよ。俺は小早川に迷惑かけられたってちっともイヤじゃねーぜ?」

素直に聞いてとっても嬉しい言葉だった。

だけど....

「田村くんに気なんか全然使ってないよ? 何でそんなこと言うの?」

ほんと、話の行方がわからない。

田村くんはどうしてこんな話をし出したのだろう?

「何でって...、このところの自分を考えてみ? 文句は言わねえし仕事俺にふりもしねえし変だったぜ?」

「そうだったかな? 自覚ないんだけど...」

ほんとに自覚はなかった。

あたしは何も変わってないし、物憂げにならなきゃいけない理由もない。

田村くんに仕事を振らなかつたつもりもないし、実際に田村くんはいろいろやってくれていた。それが段取りよく行ったかって言ったら必ずしもそうじゃなかったけれど、でもそれは田村くんが——。

——あ。

あたしが物憂げだったとしたら理由は....

「田村くんこそ、新学期から変だったよ? ボーッとして元気なくて。全然田村くんらしくなかった。あたしだってこれでもちょっとは心配してたんだから」

これだけ。

曇った田村くんを見ているのは辛かった。何も出来ない自分が悲しいと思ってた。はやく青空に戻って欲しいって、そればかりはずっと考えてた。

「あたしが変だったんじゃなくて田村くんが変だったんだよ」

「あ...?」

思い当たるふしはあるみたいで、田村くんはそれっきり黙っちゃった。

沈黙とかみ合わない会話の中から伝わってきたものがひとつある。

田村くんの曇り空があたしに伝染してあたしも曇ってた(ように田村くんには見えた)んだね。

あたしと田村くんは同じ想いをしているってこと。

でも、想いを向けている先は違うってこと——。

また、きゅっとした。

何ともいえないきゅだった。

「...何にしても、」

と、田村くんは自分の沈黙を破った。

「ちっとぐらいの迷惑はかけて生きるもんだって思ってていいんじゃないの？相手がどう思うかなんてことは先回りしねえでいいよ。だいたい誰にも迷惑かけないで生きてるヤツなんかいないぜ？」

濡れた髪の間から覗く田村くんの目はいつもと同じ、優しい目をしていたから、あたしは素直に言葉を受け止めた。

先回り。

これはあたしの性分かもしれない。

あまのじゃくになってしまうのも、ようは自分の想いに気づきたくなく、気づかれたくもないってことが先回りしてしまう結果なのかもしれない。気づいて気づかれて疎外感を味わいたくないから。ずっと、近くにいたいから――。

迷惑はかけて生きるもんだっていう、開き直った考え方があたしには出来るかどうかわからないけれど、少なくとも田村くんがこのままのあたしを受け入れてくれているということだけは、さっき言ってくれたことからもわかった。あたしは先回りして勝手に田村くんの気持ちを決めてしまっていたみたいだ。田村くんだけじゃなく、ほかのみんなのことも、彼らの答えを決めていたのはあたしの方だ。

でも、言わせてもらえばやっぱりこういうあたしになっちゃったっていうのも、バカボーイズの....

――やめた。

人のせいにしたって何も始まらない。

小早川環の責任は小早川環にしかないのだから。

「...わかったよ」

田村くんがあたしの為に言ってくれた言葉。

素直に受け入れることにした。



学校に戻り、バスを降りてから田村くんを探した。

あたしのために、どしゃぶりの中を駆け回ってくれたことにひとことのお礼もお詫びも言っていなかったことにさっき気がついたからだ。

迷惑だけかけてそのまんまにしておくなんてあたしはとんでもないヤツだ。

さっき田村くんは風間くんたちと校舎の中に入って行ったのが見えた。

しばらく昇降口で待っていたけれど、なかなか出てこないから様子を見に行こうとしたとき、廊下の向こうから1年生の男女が並んで歩いて来た。

女の子は田村くんと同じ軽音楽部の子で、田村くんはあかねちゃんとかって呼んでた。

男の子の方は空手部の群竹颯土くん。

切れ長の目と1年生らしからぬ凛々しい姿に、2年生女子の間で、今年入学した1年生ではナンバーワンの人気を誇ってる子だ。

仲良く並んでるってことはこのふたり、そーゆーことなんですか。

でも、中々お似合いだよ。

お幸せに！

なーんてことを心の中で勝手に呟いていると、1年生の紺色ジャージに着替えた田村くんたちが戻ってきた。

エンジ色ジャージが濡れちゃったから、きっとそこら辺にいた1年生に頼み込んで借りてきたか奪ってきたか…。どっちにしても田村くんたちにジャージを貸した1年生に間接的に迷惑をかけたのはあたしだ。

下駄箱にいる田村くんに駆け寄ろうとしたとき、あかねちゃんが先に声をかけてしまったのであたしは一步出遅れた。

ふんわりと笑うあかねちゃんを見つめる田村くんの目は果てしなく優しい。

いえ、ここからじゃはっきりとは見えないけれど、伝わってくる空気の中にあたしが知らない、初めて会う田村くんが見えた。まるで、あかねちゃんを抱きしめて包み込んでいるような空気がある下駄箱の前に漂っている。

あの子なんだね、田村くん――。

新学期から田村くんが沈んでいたわけが今わかった。

それでも、あんなにも優しく真っ直ぐにあかねちゃんを見つめられるんだね。

それが、田村くんって人なんだね……。

田村くんの心の中を一通り覗いてしまったような罪悪感と、自分の行き場のない想いがクロス

してどうにもならないほどにせつなくなかった。

昇降口から校門の外に移動して田村くんが出てくるのを待っていると、先に出てきたのはあかねちゃんと群竹くんだった。ふたりはあたしに軽く会釈をしてから二人乗りして夕闇の中に消えて行った。

あの後姿を、田村くんはどんな気持ちで見つめているのだろう――。

「帰らねーの？」

と、あたしに声をかけてくれたのはいつもの田村くんだった。その目の中にはいつもの優しさが宿っている。

風間くんや他のみんなを見てる時の、いつもと変わらない田村くんの目だ。

きゅっと心が鳴った。

今日はこれ、何度あったかな。

「あたし...すっかり忘れちゃってて。田村くんにお礼言ってなかったから待ってた」

そう言うと、田村くんはニヤッと笑って、

「そっか。わざわざどーも！」

と、言った。

――ありがとう。

そう、心から言いたって思っていたのに、さっきのきゅっが合図になってしまったのか、口から出てきたのは、

「おかげで助かった。ありがとね！」

と、音速のように早口になった言葉だった。

「ああ？聞き取れなかったんですけど？」

当然田村くんは耳に手を当て聞き返してきた。その隣では風間くんと柏木くんが腕組をして立ったまま、

「やっぱ小早川だぜ...」

とかなんとか言っている。

「...まだ耳の中に雨水入ってるんじゃないの？おんなじことは言わないよ」

田村くんはまたハト豆な顔であたしを見て、やれやれ...と言った様子で首を振った。

はい。

これが小早川環です。

「は...っ」

と、田村くんは呆れたように笑い、

「なによ？」

と、あたしは睨む。

「いや、別に！」

そう言って笑った田村くんの顔に青空が見えた。

あかねちゃんの後姿を田村くんがどんな気持ちで見送っていたかなんてあたしがいちばんよく知っている。

あたしが気づいたあたしの気持ちに行き着く場所はきつとないんだろう。

自覚しちゃった分、今まで以上に苦しい `きゅっ、`があるかもしれない。

でも、だからこそあまのじゃくなあたしは少し変われるような気もする。

「駅まで行こうぜ？ひとりなんだろ？」

と、田村くん。

「ううん？牛乳屋で雪乃たちが待っていてくれる」

「そっか。じゃあなっ！」

田村くんは風間くんや柏木くんたちと駅のほうに歩き出した。

その後姿を見送ってあたしは思った。

青空でも曇っていても、あたしは田村くんが――。

――こんな、恋があってもいいよね...？

了

田村くんのうるわしきスクールデイズ 2

<http://p.booklog.jp/book/78263>

著者：笹竹颯夜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/souya610/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78263>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78263>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ